昭和五年十月十三日印刷
昭和五年十月十五日發行

上製　新井石禪全集　第六卷

著作權者　祥雲晩成

編纂者　山田靈林

發行者　飯野政晴
東京府北豐島郡中新井一九三四番地

印刷者　加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地

印刷所　加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本　山田製本所）

【へ】

【ほ】

【ま】

【み】

【ひ】

【ふ】

【な】

【に】

【ね】

【は】

【ち】

【つ】

【て】

【と】

【し】

【さ】

【う】

【え】

【お】

【か】

新井石禪全集
禪學要義篇 索 引

【あ】

【い】

らに菩提の淨土を莊嚴せられんこと、これが我等の一大事でございます。

れ亦た一分の行持である。

東京神田の松屋呉服店の家の掟は斯ういふのです、「油斷大敵、今日一日の事、(一) 今日一日三つの御恩を忘れず不足言ふまじき事、(二) 今日一日決して腹を立つまじき事、(三) 今日一日虚言を言はず無理なることを爲すまじき事、(四) 今日一日人の惡しきを言はず我が善きを言ふまじき事、(五) 今日一日の存命を歡び家業を大切に勉むべき事。右は唯今日一日の愼みにて候、我意我慢愚癡我まゝぞ地獄なれ堪忍すれば今日も極樂」是れ等は却々親切なる行持と申すものです。自から我が宗門の御戒法の一分を顯はして居る。かういふ世間的道德を俗諦門とし、出世間的安心の敎を眞諦門としてありまするが、我が曹洞宗では眞俗一體修證不二と云うて、俗諦の門に成佛の理を存し、眞諦の中に道德の法を具へて居るのであります。

後醍醐天皇御製の偈に『二十年來苦辛の人、春を迎へて換へず舊風烟、著衣喫飯恁麼にし去る、大地何ぞ曾て一塵あらん』とありますが、衣服を着たり御飯を喫べたりする上に煩惱妄想の塵一點だも留めざれば、其の儘佛祖の行持である。かうでなければ、佛法は死物となつてしまひます。

我等お互は幸に佛の御法に値ひ奉り、殊に我が曹洞宗嫡傳の敎に預りしは實に生々世々の大因緣でありまするに依て、此の大因緣を自ら喜び自ら敬うて、苟にも迷信邪見の横道に走らず、單刀直入、急いで懺悔受戒の境界と爲り、利生報恩の行持を全うして、此の世ながらに佛果の妙樂を享け、此の身なが

中に雜行雜修なきことを知らないのである。此等は却て淨土門の價値を落すことになりはせまいかと思はれます。

眞俗一體修證不二

一切功德莊嚴王經には、四通りの惡魔が說てある。一には怠りの心、二には信心を忘るゝこと、三には佛法聽聞を等閑にすること、四には心の定まらぬこと、此の四が大惡魔ぢやとあります。又た、華嚴經には『善法欲を斷ずるは是れ菩薩の魔事なり』で、善法を行はんとする志なきは佛道の惡魔ともある。故に我等は此の樣な惡魔に取り付かれぬ樣、暫時も油斷なく報恩の行持を營なまねばなりません。

守田寶丹翁は治兵衞と稱して有名なる佛教信者である。十箇條の掟を定めて家庭の憲法としてあるさうです。それは斯ういふ掟である。『(一)仇は恩で報ずべし、(二)人のあしきはまづ我が惡しきと思へ、(三)禍福は皆わが行ひより來ると知るべし、(四)後悔あるときは之れにかはるの善を行ふべし、(五)艱難より來る所の安樂ならざれば甘んずること勿れ、(六)天然の樂を樂み自ら求めて樂むこと勿れ、(七)己れ正直にして人を疑ふこと勿れ、(八)人に欺かるゝとも人を欺くこと勿れ、(九)心は活潑にして常に鬱すること勿れ、(十)全家の和合を以て富貴の基となす。人生禍福皆品行にあり。誠實勉强する事懼るゝ勿れ、既往の非挽回するに今日の良心を以てす、自治積善、私欲を去り、是非を決斷す心朗鏡の如し』と是

佛することが出來ると云ふより名けたものです。我が曹洞宗の法門も亦た、信心決定さへすれば如何なる無知暗昧の者でも、必ず受戒入位の身となれるに依て、此の點からはやはり易行と云ふも妨げは無い。しかし信心決定の上は、未來永劫を期して大菩提心を起さねばならぬ。此の大菩提心は決して難行では無い、寧ろ非常の喜びと樂みになるのである。釋尊の娑婆往來八千返も御誓願の上から云へば皆な樂みの御仕業で、所謂、他受用法樂である。苦い艱いと思ふ樣では出來る譯のものでは無い。藥山禪師は大布を以て衣と爲し、御自分で髮を剃り食を具へられ、數百人の門人ありしも手傳させず、百味の飲食があつても顧みられなんだとある。天台大師は三十年間、唯だ一衲衣を披せられ、善導大師は戒法を護持して寸毫も犯さず、四十餘年、別に寢處を設けず、毎日、托鉢して食を乞はれたとある。法然上人が、淨土門を開きし爲め天台座主等の彈劾に依り、土佐に流されたまひし時『邊土の利益を思へば朝恩なり』と云うて御歡びなされた。親鸞上人も同時に越後の國府に流されたが『源空若し流刑に處せられたまはずば我れ亦た配所に赴かんや、我れ若し配所に赴かずば何に由てか邊鄙の群類を化せん』と仰せられた。法然上人や親鸞上人の誓願から見れば、粉骨碎身の御辛勞も皆な是れ易行にして、此の上も無い樂みなのである。行も願も用らぬと云ふは、當時の學者智者の空論や理窟佛法を誡められたので、一向專心、聞法歡喜これ絶對の行願なのである。それを、今日に至つても尙ほ、行も願も用らぬ、雜行雜修は可かぬなどと云うて、戒法をも顧みず、誓願をも輕んずるは、唯だ雜行雜修の中は一向專念なきことを知つて、一向專念の

は日月、鼻は山、出入の息は風、眉は芝、聲は雷、口は海、歯は石、髪毛は草木、泪は雨、蚤虱は猪猿ぢやと云うてあるが、そんなに無理やりに牽強んでも人間の身心は宇宙の權化、天地の分身であります。『風は息虚空は心日は眼浦山かけて我が身なりけり』である。然るに廣い世界を態々狹くして自分と云ふものだけを見て、我見を起し、我慢を募り、私欲を張り、私情を逞うするは、自ら天地を狹めて其の身を小さくするのであります。我見私情が募れば募るほど世界も段々狹くなつて、終には『世の中は四尺五寸になりにけり五尺の身おき處なし』と云ふ樣に身の置き處も無くなります。夫故、至心懺悔の力に依て我見私欲の穢を拂ひ、宇宙の大精神たる佛性常住の孝順心慈悲心に一致投合して、衆生利益の大誓願を發し四恩報謝の行持を勵むのが卽ち宇宙と其の德を同うし、天地と其の行を一にするものである。こゝに安心の腰を据ゑさへすれば、一時の影法師たる生死の事などへは少しも心を動かさずして、十方の世界を自身の領分とし、一切の衆生を自身の同胞兄弟とし、未來永劫を期して大菩提心を運用するのであります。其の運用を以て此の上もない樂しみ此の上もない喜びとなす樣にならねばなりませぬ。

大石義雄が忠義の志を遂げて後、死に臨んで『あらたのし思ひははるゝ身はすつる浮世の月にかゝる雲なし』と詠で、自ら其の志を樂んで居る。吉田松陰は獄中にて『身はたとひ武藏の野邊に朽るとも留め置かまし日本魂』と詠で、不滅の靈に安心を定めて居るです。然るに彼の易行と申す法門の如きは、動もすれば大變な取違をするものがある。易行と云ふは、如何なる下根劣智の者でも信心決定すれば必ず成

卽心是れ佛となつた時は華嚴經に『如來の淨土或は如來の寶冠に在り、或は耳璫に在り或は瓔珞に在り或は衣紋に在り或は毛孔に在り是の如きの毛孔既に世界を容る』とある樣に、我等が眼の緣も、耳の朶も、手の先も足の裏も、佛の御住處ならざるは無いです。併しながら、我等が今迄の樣に惜い欲い、憎い愛いで持切て見る物聞く物に使はれて居つた凡夫量見を捉へて、これが佛樣ぢやと云ふのではない。若し無茶苦茶に三毒五欲の煩惱を以て卽心是佛ぢやなどと言ふたならば、木の葉を小判と誤るよりも甚しい大間違です。故に『卽心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし』と御注意下されてあるのだ。佛樣と云ふは佛性常住の孝順心慈悲心の開發した菩提心のことであります。此の菩提心が現はれさへすれば、始めて戒品具足の身となつて眞實の行持の德を得るのであります、此の人こそは正しく佛恩報謝の出來た人であるぞとの御敎訓であります。

他受用法樂

抑も宇宙なるものは、方角から云うても、時間から云うても、際限りの無いものであります。我等が互に此の際限りの無い宇宙の間に生れて宇宙の德を具へて居る身の上である。假令、人生は無常にして命は電光石火の如しとは申しながら、そは因緣の上に現はれたる一時の影法師に過ぎぬ我等の一心は、宇宙と共に際限りも無く廣大で、且つ長久である。或人が、人間の頭は天にして圓く足は地に象りて方なり、兩眼

居られます。釋尊は同居土の教主であるとか、應身佛であるとか云ふ樣な名相に拘泥しては迚も佛を拜むことは出來ぬ。同居無邊際である。一佛一切佛である。般若經に釋尊は『能く一佛に於て念々相續せば卽ち是の念中に能く過去未來現在の諸佛を見ん』と仰せられてあるではありませんか。眞宗の蓮如上人は『諸佛菩薩と申こと、それは彌陀如來の分身なれば、十方諸佛のためには本師本佛なるがゆへに、阿彌陀一佛に歸したてまつればすなはち諸佛菩薩に歸するいはれのあるがゆへに、阿彌陀一體のうちに諸佛菩薩はみなこと〴〵くこもれるなり』と云うてゐられる。此の觀念が無ければ御念佛も一種の我見となつてしまひまする。

戒品具足の身

然らば釋迦牟尼佛は卽今何れの處に在すであらう。涅槃經には『我れ實に閻浮提界を出でず』此の娑婆世界を離れぬぞと宣ひ、法華經には『常に靈鷲山及び諸の住處に在す』と仰せられてあるからといつて、天竺の方を眺めて居る樣ではなりませぬ。我等が無始刧來の罪障を懺悔して佛の御戒法を相續した時、其の一念の信仰心が取りも直さず釋迦牟尼佛の御座所である。我等が生死卽涅槃と明らめの出來た一念が直ぐ佛の御淨土である。我等が衆生を濟度せんとの大誓願を發した時、四の御恩を報謝せんとの至誠心の現はれた時が直ぐ佛の蓮華臺である。之を釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なりと仰せられたのであります。サア

のことは、歸依三寶の處に於て一通り御話し致せし如く、大解脱の御境界を得られた御方のことである。大解脱と云ふは我智・我見・我慢・我愛を離れ、佛性常住の孝順心・慈悲心に成り切て、出入去來、起居動靜の其の儘が三歸戒・三聚淨戒・十重禁戒の戒法の御光を輝かさるゝ、大智慧大慈悲大光明大神通の御境界のことです。三世十方に數も限りも無い佛樣があらうとも、御境界には毛筋程も變りは無い。釋迦牟尼佛は此の御境界を得て成佛あそばされたのである。過去の佛も、現在の佛も、未來の佛も、共に佛に成りたまふ時は皆な釋迦牟尼佛の御境界を得らるゝのである。釋迦牟尼佛の御境界は三世諸佛の御本體であるから、三世の諸佛は皆な釋迦牟尼佛の御分身だ。故に法華經の壽量品に釋尊は『諸の善男子如來所演の經典は皆な衆生を度脱せんが爲めの故に、或は己身を說き或は他身を說き或は己身を示し或は他身を示し或は己事を示し或は他事を示し、諸の言說する所は皆實にして虛ならず』と仰せられて、或は西方の淨土を說き、或は彌陀の本願を示すも、皆な釋迦牟尼佛の分身作用である。斯く申せばとて何も彼も一處ごたにするのではありません。佛性常住の孝順心慈悲心の外には佛も無ければ祖師も無いのです。十方諸佛の中に於て妄りに勝劣を論じ、取捨を致さんとするのは、佛身を悟らぬより出たる一種の誤謬である。我が宗にて釋尊を御本尊として拜み奉るも、阿彌陀樣や大日如來を捨てゝ釋尊を取ると云ふ樣な狹くるしい量見ではない。釋迦牟尼佛は法界の教主なりとして拜むのです。既に法界の教主であるから東西南北、四維上下を通じて唯一釋迦牟尼佛である。阿彌陀樣も、大日如來も、一釋迦牟尼佛の中に籠つて

樣を殺すも活すも唯だ我等の行持の如何にあるのです。如何ほど高尙なる理を究め、快活なる辯論を翻へすとも、道に順うて實行することが無ければ、決して佛法とは云はれぬ。承陽大師は『佛家には敎の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず、たゞし修行の眞僞をしるべし』と御示し下されて、必ず眞實の行で無ければならぬ。眞實と云ふは、上四恩に報じ下衆生を資くる功德の存することである。耳元や口先にばかりある佛法が何の役に立ちませう。眼も、耳も、手も、足も、身も、心も、そつくり佛法に成り切て了はねばならぬ。そこを常濟大師は『設ひ見聞となり聲色となるとも自の光明藏なり、眼根より光明を放て色相莊嚴を作し來り耳根より光明を放て音聲の佛事を聞き得たり、手裏に光明を放て自を轉じ他を轉ず脚下に光明を放て進步退步』と仰せられたのであります。之を諸佛の大道通達の時節と云ふのです。

一佛一切佛

佛樣と云へば、直ぐ阿彌陀樣とか、大日樣とか西方とか、中央とか云うて、御名前や方角に迷ひ込みたがるから、修證義最終の結文たる第三十一節に於て『謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり是れ即心是佛なり、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし正に佛恩を報ずるにてあらん』と御示し下されたのである。佛樣

よりは今日、今日よりは明日と、増々善を積み、樂を加へ、光明の世界に進み、菩提の道を莊嚴する。斯くありてこそ、生きて生き效があるのみならず、一日でも、一時間でも、一秒時でも、一刹那でも、皆な盡く善根の山を築き、功德の海を湛へる好因緣となるのであります。故に大法句經には『人壽百歲なるも樂つて戒を持せざれば一日も淨心、戒を守るに如かず、人壽百歲なるも怠り多くして忍ばざるは一日も喜びを含で瞋らざるには如かず、人壽百歲なるも怠惰にして勤めざれば一日も身心を策勵するには如かず』とあります、論語にも『朝に道を聞て夕に死すとも可なり』とありて、人間の貴き所以は長命の爲めでもなく、財産・權力の爲めでもない。唯だ道を持ち、道を行ひ、道を敷き、道を施すので貴といのです。苟も此の行持が具はつたならば、我が身ながらも其の儘の佛の身、我が心ながらも其の儘の佛の心であるから、自ら深く之を愛し、自ら厚く之を敬はねばならぬ。縱ひ在家であらうと、縱ひ卑賤の身であらうと、此の行持がありさへすれば、そつくり佛樣や祖師方の御德が現成したのである。三世諸佛の大なる悟りの道とても此の行持の上にチヤンと通達して顯はれまする。して見れば、我等お互が佛の御教に順うたる一日の行持こそ、實に三世の諸佛を作り出す根本の種子である。種子どころか、それがそつくり諸佛の行持で、佛樣の御姿であります。常濟大師は『唯諸人の精進と不精進とに依て諸佛頭出頭沒せるのみなり、今日も頻りに辨道し子細に通徹せば釋尊直に出世なり唯汝等自己不明に依て釋尊昔日入滅す、汝等已に佛子たり何ぞ佛を殺すべけんや故に急に辨道して速かに慈父と相見すべし』と御示し下されて、佛

き道を持ち、毅然として其の道に依て行動する時は、火に入ても燒けず、水に入ても溺れず、色を見ても色に迷はず、聲を聞ても聲に惑はされず、玄沙禪師の所謂『大丈夫天に先つて心の祖と爲れ』で、奴隷根情を抑へ付けて、己自ら天地萬物の主宰者と爲り、物の爲めに使はれたがる心を師範とせず、却て其の心の師匠とならねばならぬ。こゝを佛遺敎經には『此の心を縱にすれば人の善事を喪ふ、之を一處に制すれば事として辨せずと云ふこと無し』と御誡め下されたのである。其の時こそは『濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光りとぞなる』と云ふ承陽大師の御歌の如く、心の水清く澄み渉り、佛性の月長へに影を宿せる身には、朝から晩まで大波小波の大活動ありとも、盡く孝順心慈悲心の光を飜して一點の穢だも無い樣になります。

大道通達の時節

そこで次の御文には『此一日の身命は貴ぶべき身命なり貴ぶべき形體なり此行持あらん身心自らも愛すべし自らも敬ふべし、我等が行持に依て諸佛の行持現成し諸佛の大道通達するなり然あれば即ち一日の行持是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり』と仰せ下されてある。報恩の行持ある一日は、佛性常住の孝順心慈悲心の働で、取りも直さず佛の御戒法の御姿である。無量壽經には『善人は善を行ひて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ひて苦より苦に入り冥より冥に入る』とあるが如く、昨日

楞嚴經には『凡夫は物に轉ぜられ佛は能く物を轉ず』と仰せられてある。六祖大師は『心迷へば法華に轉ぜられ心悟れば法華を轉ず』と御示し下されてある。實に我等凡夫の悲しさには、花を見れば花に使はれ、月を見れば月に使はれ、或は金錢の前にピヨコ〳〵頭を低げて目も昏み、或は名譽の前に無茶苦茶に膝を屈して魂を奪はれ、美しき姿を見ては義理も人情も打忘れて迷ひ込んだり、少し氣に入らぬ相手に向へば平生のタシナミも愼しみも忘れて、腹を立て喧嘩口論を致したり、甘い物を食べては胃も腸も散々に傷められ、酒を飲んでは反對に飲まれて了ふと云ふ樣に、色・聲・香・味・觸・法の六塵から常に奴隸の取扱を受けて居ります。書物を讀めば其の書物の爲めに却て偏執の見に陷いる者もあり、學問が出來れば其の學問が鼻の先にブラ〳〵して、それが爲めに手の付られぬ厄介物となるもあり、財産が出來ると其の財産の爲めに一層罪を造らせられるもあれば、高位高官に登つた爲めに我慢憍慢の病を招くのもある。碁將棊に夢中になり、花骨牌に逆上り、芝居・相撲に使はれ、三味線・太鼓に使はれ、着物に使はれ、金側時計に使はれ、植木鉢に使はれ、書畫に使はれ、甚しきに至ては、猫や犬や金魚や鯉に使はれる連中もあります。何んと淺ましきことではありませんか。趙州禪師は『汝等は十二時に使はる、老僧は十二時を使得す』と云はれてあるが、これも同じ意味です。朝起ては五欲六塵の奴隸となつて罪を作らせられ、日が暮れたと云つては、煩惱妄念の眷屬となつて種々の迷を起させられて居るは、即ち時間の奴婢となつて居るのであります。安心立命の大功德は此處に現はれて來ねば役に立たぬ。身口意三業の上に正し

『天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、而して浮生夢の如し』である。如何ほど善き巧なる方便があらうとも、一旦過ぎ去つた日は再び取り返しの付くものではない。『けふといふ其のけふの日に働いてけふの仕事を明日に延すな』である。『時のある時に時を得よ』とは我等の忘れてならぬ語である。『光陰は無上の寳なり之を無益に費すは是れまた無上の奢なり』である。寒いと云ふてはゴロ〳〵、暑いと云ふてはブラブラ、偶ま本氣になつて働らくかと思へば、惜い欲い、憎い愛いの妄念に使はれて居る操人形が多い。人間は決して長命が目的ではない、箇樣な日送りをして貴き生涯を空しく過す樣では、設ひ百歳の壽命を持つたにもせよ、何の役にも立たぬ。徒らに罪を重ね咎を累ねて地獄の鬼の手數を殖すだけの能しか無いです。生き效の無い生き方では實に恨めしい月日、悲しい形骸と云はねばなりませぬ。

縱や今迄の生涯は『聲色の奴婢』と申して、眼に色を見ては心を亂し、耳に聲を聞ては迷を起し、見る物、聞く物に縛られて全ツきり色や聲の奴婢、奉公人同樣になつて使はれ通しに使はれて居つたにもせよ、一旦、佛祖の御教を聞いて、懺悔滅罪の慈門に入り、受戒入位の大因緣を結び、利生報恩の行持を行ひ得ることが出來さへすれば、此の因緣こそ生々世々の善根、萬劫不滅の功德であるに依て『一生の百歳』と云ふ此の世一生の身心だけに行持の寶を得たるのみにあらずして『百歳の他生』たる未來永劫の身心をも一時に濟度し得ることが出來て、此の世からなる蓮の臺、此の身ながらの法の園、朝な夕なに菩提の花を眺め、造次顚沛にも佛性の月を樂しむ境界となりまする。

佛様を御供養するにも、御花を上げたり、香を焼たり、三文五文の御賽錢、十返二十返の御念佛で、もう宜いはとは云はれぬ。唯だ當に日々の行持こそ其の報謝の正しき道である。一年三百六十日、寐ても寤ても佛の御教を奉じ、祖師の御教訓に隨ひ、國法に則とり、人倫の道を守り、暫時も怠らず、勤めて行うてこそ、始て眞實の御恩報謝が出來るのであります。故に、日々の生命を等閑に致してはなりませぬ。私意私情を以て自分勝手に此の身を費うてはなりませぬ。一寸の光陰をも徒らに過すこと無く、佛の御教に任せ人の人たる眞の道を守りて、勤め行うて參らねばなりませぬ。

轉じて轉ぜられず

『勉强は幸福の母なり』、『天は萬物を人に與へずして働きに與ふ』とは千古の格言です。『道近しと雖も行かざれば到らず、事小なりと雖も爲さゞれば成らず』とは荀子の金言で、『何人も睡りて聖者と爲る者なし』とはカーライルの名言である。殊に第三十一節には『光陰は矢よりも迅かなり身命は露よりも脆し何れの善巧方便ありてか過にし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲しむべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも其の中一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず百歳の他生をも度取すべきなり』と御誡め下されて、光陰の過ことは矢よりも迅く、我等の命の脆きことは草の葉の露よりも果敢ないのです。

衆生利益の慈悲心に富める人は自から報恩の行持を全うすることの出來るものです。發願利生も行持報恩も一菩提心の妙用なることは、之を以て能く御合點下されたいものであります。

報謝の道如何

御恩を報ずるは實に人道の一大事なることを繰りかへし、御話に及びましたが、其の御恩を報ずるには、どうすれば宜いかと申すに、修證義第二十九節には『其の報謝は餘外の法は中るべからず唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず私しに費さゞらんと行持するなり』と明かに報恩謝德の正しき道を御示し下されてあります。孝經にも『親に事ふる者は上に居て驕らず下と爲て亂れず醜に在りて爭はず、上に居て驕るものは則ち亡ぶ、下と爲て亂るときは則ち刑せらる、醜に在りて爭ふときは則ち兵せらる、三の者除かざれば日に三牲の養ひを用ふと雖も猶ほ不幸と爲す』とありて、上に居る者に驕慢の行があつたり、下に在る者が禮儀法度を亂したり、醜と云うて、同類に對して爭を好む樣な振舞があつては、毎日〱牛・羊・豕の三牲卽ち大牢と稱する上等の御馳走を以て親を養うても孝行者とは言はれぬぞと云うてある。佛樣は勿論のこと、國王・父母・衆生に對するにも、唯だ甘い物を差上るとか、御世辭を倂べるとか云ふ樣なことでは、眞實の御恩報じとは申されぬ。親や先祖の御追善を爲るにもせよ、御經を讀んだり、御馳走を振舞うたりして、それで追善が十分だとは申されぬ。

禮は、御祖先の御遙拜式です。　即ち一月の元旦、陛下は伊勢の宗廟を始め加茂等の天神、大三輪等の地祇、其の他歴代の山陵を御遙拜あそばさるゝのが四方拜です。故に我が國は報恩を以て國體の基礎、政治の主腦として居るのであります。御勅語を四恩に當箝めて見ますれば『克く忠に』と云ひ『常に國憲を重じ國法に遵ひ一旦緩急あれば義勇公に奉ず』とあるは國王の恩に報ずる法であります。『父母に孝に』とあるは父母の恩に報ずること、『兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ』、『博愛衆に及ぼし進で公益を廣め世務を開き』とあるは衆生の恩に報ずることになります。『恭儉己を持し』と云ひ『學を修め業を習ひ以て智能を啓發し德器を成就し』とあるは皆な行持に屬しまする。だが、行持と報恩とは一つことになるのであるから、行持がやがて報恩であります。また、報恩の内でも、互に圓融互換して居るので、國王の恩に報ずるのがやがて孝とも爲り、公德とも爲り、親に孝行するのがやがて忠とも爲り、慈悲とも爲るので、所謂、忠孝一體、萬行一心であります。心地觀經には『世間の凡夫慧眼なく恩處に迷ひ妙果を失す五濁世 諸の衆生深恩を悟らずして恒に恩に背く、我れ爲めに四恩を開示し人をして正見菩提道に入らしむ』と御示し下されて、恩を知り恩を報ずるは、啻に人倫道德の一大事たるのみならず、佛果菩提に進むべき正しき道であります。況てや孝經にも『親を愛する者は敢て人を惡まず、親を敬する者は敢て人を慢らず』と云うてある通り、恩人を愛する人は必ず他人に向ても親切なものです。恩人を敬ふ程の人は決して他人をも輕蔑はせぬものです。故に恩を報ずるの志ある者でなければ、衆生利益の大誓願を發すことは出來ぬ。

て遣はされたと云ふ最とも哀れな御話がございます。

報恩謝德の洪範

昔から禽獸が主人の恩を忘れずして、種々の美談を後世に傳へたのは澤山あります。然るに身人間と生れながら、親に背き主に逆らひ恩を怨にする者が世の中に少なからぬと云ふは、悲みても尚ほ餘りあることでございます。我が國は建國の始より忠孝の二道を以て道德の大本としてある。忠孝は卽ち君と親とに對する報恩の行持であります。神武天皇が中國の賊を御征伐の時『朕は日の神の後胤なり、日に向て戰ふは不祥なり』と宣うて太陽を背にして賊を平らげたまうた。大和橿原の宮に御卽位あそばされて、御殿を御造營の砌の詔勅に『上は乾靈の國を授くるの德に答へ、下は皇孫の正を養ひたまふの心を弘め、然る後六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ふて宇を爲さんこと亦た可ならずや』と宣ひ、また、天下に詔して『我が皇祖の靈は天より降り照して朕が躬を助け給へり、今諸の虜ども已に平ぎて海內穩になりつれば、天神を郊祀して大孝を伸ぶべし』と仰せられ、鳥見の山中に靈の時を立てゝ、皇祖をお祭りになつて仁政を敷きたまうたのである。また、明治天皇陛下の明治二十三年十月三十日の御勅語には『我臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは此れ我が國體の精華にして敎育の淵源亦實に此に存す』と御諭し下されてある。是れ皆な報恩の行持であります。九重の宮中に於ける、一ヶ年の最初の御儀

りました。氏は非常に親切な人であつて、常に其の馬を愛すること骨肉の如くであつたさうです。明治三十七年二月、日露開戰と云ふことになりましたので、氏も現役として從軍し、彼の齊光號に跨て各處に轉戰致しました。十月十五日、有名なる沙河の大會戰の折、氏は軍旗保護の任務を帶びて師團長の傍に在りましたが、午後二時頃、敵より打出したる一發の彈丸、氏の頭上に中て破裂した。氏はアツと云ふ聲もろともに馬より眞逆まに落ちて、それなりけりに壯烈なる最後を遂げた。彼の馬は鐵砲の響に驚きしが、奮然跳り上り、約半町餘りも砲烟の中を割て敵前に駈け行きましたが、背には我が大切なる主人の在らざるを悟りしものと見え、狂氣の如くに取て返し舊の處に來て見れば、主人は既に哀れを死體に留めて横つて居る。馬は直ちに進み寄り、氏の軍服を咥へて頻りに起さんと努めたるも、主人は最早、蟬脫の殼、馬は悲しき聲を揚げ、猶も死骸を搖振て、霰の如く彈丸の中に立て嘶て居る樣は、餘所の見る目も哀れであつたと申すことです。軍旗の下に在りたる一兵卒は、見るに見兼ねて駈け來り、氏の屍を收容して手厚く後方の村落に葬りました。處が、彼の馬は其の日より氏の墓の傍に立て離れず、糧も食まず、水も飮まざること六晝夜、只泣に泣通して居つたさうだが、次第に肉も落ち氣力も衰へ、丁度、氏の戰死の一七日目の夕方、氏の墓前に斃死を致しました。之を見聞する者、一人として哀を催さぬは無かつたと申すことです。身は畜生たりと雖も主人を慕ふの切なる、人間も及ばぬ程であるから、其の馬の死骸を氏の墓の傍に埋めまして、或將校が筆を執て『嗚呼忠勇なる齊光號』と記せる墓標を建て

の印よく報謝あり、畜類なほ恩を報ず人類爭でか恩を知らざらん』と御示しあそばされたのであります。心地觀經にも『恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり』とありて、御恩の有り難いことを知りて其の御恩に報ゆるは、取りも直さず諸佛大聖の道である。一句の經、一席の法も能く未來永劫の福田となる。況てや正法眼藏と云ふ三世諸佛の御本懷たる受戒入位の大法を相傳し奉りて、卽坐に成佛得道の大安心を決定することの出來ると云ふは、何んと廣大なる御恩德ではありませんか。發願利生の處で御話に及びました通り、彼の楊寶が病み煩うて居る雀を助けて遣りしに、四の玉環を御禮として持ち來り、貴君の御子孫が三公の位に登らるゝことは此の環の數の如くならんと申したが、後に至つて果して其の言の通りであつた。また、晉の孔愉が、命の危い龜を救うて遣りしに、他日、餘不亭の知事となりし時、其の印形の上に龜の形を現はして御恩報謝の志を示した。箇樣に畜生ですら恩を報ずるでは無いか、苟も萬物の靈長たる人間として、御恩を忘れる樣では申譯の無いことであるぞとの、返す〳〵の御教訓です。こゝでは佛樣の御恩を主として御示しあそばされまして、國王と父母と衆生との三つ御恩を報ずることは行持の方に備さに具はつて居るのでありますから、つまり四恩齊しく報ずるの御教になるのでございます。

嗚呼忠勇齊光號

九州の某師團ではその騎兵上等兵吉井政男と云へる人に、乘用として齊光號と名くる馬を御下げにな

と一人も師と爲すべき人は無い位のものです。若し其の善き所を擇ぶ樣にすれば、見る物、聞く物が盡く我が善知識となるものである。孔子も論語述而の篇に『三人行けば必ず我が師あり、其の善き者を擇んで之れに從ふ』と云ひ、里仁の篇には『賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては內に自ら省る』と云うてある。又た無量壽經には『當に熟々思ひ計りて衆の惡を遠離し其の善き者を擇び勤めて之を行ふべし』と示されてあります、歌に『よしあしき人を鏡に見る時は人こそ人の鏡なりけり』、『立向ふ人の姿は鏡なり己が心をうつしてや見ん』とあるも、卽ち此の意を詠んだのです。藤原成道は人が少しでも善事を行ふを見ると淚を流して感歎したと云ふことである。此の心得を以て人に接しますれば、何事も皆な身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにする御手本とならざるものは無いです。況てや我が佛の御敎の如きは、千佛萬祖方が我等衆生を濟度せんとの御誓願を以て、三祇百大劫の御難行、娑婆往來八千返の御辛勞、功を積み德を累ぬるも露ばかりも我が身の爲めを圖りたまはず、敎を敷き法を施して衆生の爲めに慈愍の淚を洒ぎたまはぬ日とても無い。或は惡人を以て正機ぞと仰せられ、或は衆生に代て苦惱を受けんと宣ふ。『難波江やさながら濁る水にだも蘆間を分けて宿る月影』にもまされる佛の御光と申さねばならぬ。こゝを第二十八節に至つて『今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし一法の恩尙ほ報謝すべし況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尙ほ恩を忘れず三府の環よく報謝あり、窮龜尙ほ恩を忘れず餘不

佛に逢ひ奉ることが難い、佛に逢ひ奉りても法を聞くことが難い、法を聞ても菩提心を發すことが難いと說てある。然るに我等お互は、萬物の靈長たる人間の身を受けたるのみならず、大日本帝國と云ふ大乘佛教相應の御國、殊に聖代の御代に生れ合せ、疊の上で安々佛の御法を聽聞し奉り、此の身此の儘菩提心の光を放つ境界になつたと云ふは、實にや盲龜の浮木、優曇華の花咲くよりも喜ばしき身の上でありまする。

三寶に對する報謝

夫故、次の御文には『見ずや佛の言まはく無上菩提を演說する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ非を嫌ふこと莫れ行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫かれ』とありまして、若し佛の正法を說き聞かして下さる人に遇ふた時は、よしんば其の人の身分が賤しからうと、平生の身持が好くなからうと、容貌が御疎末であらうと、そんなことには少しも貪着せず、唯々般若と云うて佛樣のお悟を尊び重んじ、一心不亂に其の人の說く所の御法を聽聞して禮拜恭敬し奉り、更に厭だとか、怠屈だとか云ふ心を起すなよとの御誡めです。我等は兎角に、人を取て法を取らず、形を採て心を採らず、表面を貴んで裏面を等閑にし、位を重んじて德を輕んずる風があつてならぬ。これは非常に損なことです、缺點を拾つた日には、天下の中殆

ては智慧を磨き、貧窮下賤に對しては布施を行ふと云ふ樣な鹽梅に、我れ知らず六度の行願を全うして菩提の道を莊嚴することが出來る。『つらきをも憂きをも忍ぶ心こそ心の道の誠なりけり』である。故に三世の諸佛諸菩薩は、多くは此の世界に於て發心あそばされて居る。若し此の世界が餘りに樂であつたり安心であつたりしたならば、樂に執着し安心に油斷して眞の道を行ふことがならぬ。幸にして、我等は此の娑婆國土に生れ、殊に釋迦牟尼佛を拜み奉りて其の御敎に預るとは、正しく眞の菩提心を發すべき時節が到來したものと云はねばならぬ。喜びの上の喜び幸の上の幸ではありませんか。そこで、第二十七節には『靜かに憶ふべし、正法世に流布せさらん時は身命を正法の爲めに抛捨せんことを願ふとも値ふべからず正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし』と御示し下されてある。假令如何ほど結構なる人間の身を受けましても、若し佛の正法が世の中に流布て居らなんだなら、よしや法の爲めには身も命も惜まぬと云ふ程の志があらうとも、諺に言ふ『無い袖は振られぬ』で、如何共することが出來ぬ。雪山童子は半偈を聞かんが爲めに命を捨てゝ鬼に施し、支那の二祖大師は雪夜に臂を斷て達磨に參ぜられた。常啼菩薩は法勇菩薩に就て法を聞かれた時、骨を敲て筆と爲し血を絞て墨と爲して御經を書かれたことが大般若經の常啼菩薩品に出て居る。釋尊が因地に於て燃燈佛を供養せられた時、髮の毛を斬て道路の泥を掩はれたと云ふことが大寶積經に出て居る。涅槃經には六難とて、人間の身を受くることが難い、人間に生れても中國と云うて文明の御國に生るゝことが難い、中國に生れても六根具足することが難い、六根具足しても

易へても報謝し盡すことが出來ぬ程である。斯る大恩に報じ奉るには、尋常一樣の事では到底報じられぬ。唯だ日々の正しき行持こそ眞實の報恩になるぞと云ふので、行持報恩と申したのであります。

娑婆に釋尊に見ゆ

併し、此の行持報恩とても亦た菩提心の働でありますから、修證義の第二十六節には『此の發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり今是の如くの因縁あり願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや』と仰せられたのである。卽ち、此の菩提心なるものが國王・父母・三寶等に對しては孝順報恩の念と爲り、一切衆生に向ては慈悲利生の念となるのです。南閻浮とは、佛敎の世界說では、須彌山と云ふ山を以て世界の中心とし、其の山の南に當る閻浮提と云ふ國が、我等の住んで居る此の世界であるから、南閻浮の人身と仰せられたのです。娑婆と云ふも此の世界の異名で、娑婆は梵語、此に忍土と譯す、卽ち堪忍世界と云ふことです。此の世界は生れてから死ぬるまで、寒暑をも忍び、飢渴をも凌ぎ、私欲を制し、妄念を耐へる等、凡て堪忍の力に依て人の人たる道を全うして居るのであるから、娑婆と名けたものです。此の世界には苦みもあり、悲みもあり、罪もあり、垢もあるが、其の苦みや、悲みや、罪や、垢が却て我等を菩提に導き、我等をして諸善萬德を積しむるの因縁となります。順境に臨では私情を制し、逆境に臨では忿怒を忍び、艱難に逢うは增々精進し、障礙に逢うは彌々禪定の臍を堅め、理に對し

掛らねば着ることも食ることもならぬものです。米屋も、薪屋も、呉服屋も、仕立屋も、大工や左官も、恩人ならぬは無い。金が有るから、田地があるからと云うて、人の世話にはならぬ、人の厄介にはならぬなどと威張るは大間違です。故に我等は社會に對し、一般人類に對し、博愛的觀念を以て其の恩に報ずるは、必然の義務であります。殊に佛の御教に依りますれば、人間計りでは無く、三界六道の衆生も皆な我が恩人であります。幾度か生じ幾度か死する間に於て、或は人間と爲り或は畜生と爲り、親と爲り、子と爲り、夫と爲り、妻と爲り、因緣纒綿して相離るゝことは無いです。そこで梵網戒經には『一切の男子は是れ我が父なり、一切の女人は是れ我が母なり、我れ生々之れに從て生を受けざるは無し、故に六道の衆生は皆な是れ我が父母なり』と御示し下されてある。爐邊に眠れる猫、庭面に鳴く鷄、廐に繋げる馬、門前に戯むれる犬までも、我が前世の親兄弟でありしやも知れぬ。こゝを承陽大師は『六の道遠近迷ふともがらは我が父ぞかし我が母ぞかし』と御詠じあそばされた。行基菩薩も『ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』と詠じてある。して見れば、鳥畜類に至る迄も相當の恩惠を施すことを忘れてはなりませぬ。四には三寶の御恩です。佛恩の廣大なることは今更言ふ迄も無いが、佛ありと雖も法なくんば佛道に入ることは出來ぬ。法ありと雖も僧なくんば法を顯はすことが出來ぬ。僧は法に依て生じ法は佛に依て出づ。佛の御慈悲は、我等お互をして卽座に佛位に證入し、當處に罪障を消滅して、永久不滅の大安心を得せしめ三界生死の苦を離れしめたまふ。其の御恩の深大無邊なることは、生を易へ身を

ります。

報恩とは恩を報ずるといふことです。凡そ我等の此の世に生るゝや、赤裸にして寸絲を掛けず空手にして一粒を握らずで、糸一筋・米一粒だも持ては來ぬ。赤裸で生れ空手で來たのだ。それが飢えもせず、凍へもせず、次第に生長して一人前の人と爲たのは、盡く他の恩分に依るのである。我等の一身は申すに及ばず、衣服・財産・家屋・田宅も皆な御恩の賜である。して見れば此の御恩に報ずるは正しく人間の人間たる道であつて、人の禽獸に異なるは唯だ之れあるが爲めです。故に、大論には『恩を知るは大悲の本、善業を開くの初門、人の愛敬する所、名譽遠く聞え死して天に生ずることを得、終に佛道を成ず、恩を知らざる者は畜生より甚だし』と云うてあります。

四恩とは何か

心地觀經には四恩と云ふて四通りの恩を說き示されてある。一には國王の御恩、即ち天皇陛下の大恩です。此の中には皇祖、皇宗の御恩も含まれてあるです。二には父母の御恩、此の中には先祖代々の御恩も含まれてある。三には衆生恩と云うて一切衆生は皆な我が恩人である。元來、人は社會的動物とか申して、決して孤立の出來ぬものです。多數の人が集つて一の社會を組織し、相依り相扶けて始て生存することが出來る。一枚の着物でも、一椀の御飯でも、決して五人や十人の力では得られぬ。幾百千人の手が

行持報恩

恩を知るは大悲の本

これから修證義の四大原則の、最後の行持報恩の一則を御話し致します。前席に於て申し上げた通り佛の御仕事、菩薩の行願と云ふも、つまり佛性常住の孝順心慈悲心の現はれたので之を妙修と云ふのです。其の中、慈悲心の作用が發願利生で、孝順心の作用が只今の行持報恩であります。尤も、上を敬ふのが孝順、下を憐れむのが慈悲であるから、唯だ一片至誠の心が、其の相手次第に兩面に現はれるので、畢竟一菩提心の妙用です。

先づ行持と云ふは、行は『おこなひ』持は『たもつ』と訓む。『おこなひ』とは我等が身と口と意とに働を現はすこと、『たもつ』とは住持三寶の中の持の意で、一定の正しき道を守り持つことである。行があつても持つ所の道が無ければ、其の行は煩惱惡業の垢となります。道を持ても行が無ければ寶の持ち腐りと爲る、夫故、正しき道を持て、晝夜無間斷に身口意の三業を働かして、其の道を行ふのが行持であ

川社頭に其の英靈を留むるのみならず、今尙ほ日本國民の腦裡に輝き彌つて居る。征露の軍に從ひし我が忠勇なる幾十萬の將卒が、奮然陣頭に臨んだ時は、名譽も無く、利益も無く、迷も無く悟も無く、唯だ忠君愛國の至誠ばかりである。此の忠君愛國てふ大菩提心のみの時は、其の大菩提心は日本全國を蓋うて、國民は一人として此の恩分を被らぬものは無いのです。我等〳〵お互も幸に受戒入位と云へる大安心の牀に坐し、大菩提心の光を放ち、衆生利益の行願を身口意三業の上に現はす時は、其の大慈悲心は三世の諸佛十方恒沙の菩薩と一體無差別と爲り、自己の大誓願中に一切衆生を攝し盡して居るのであります。これが發願利生の神通妙用でございます。

私を捨てゝ佛樣の御心の通りになつたならば、此の身も此の心も最早や自分一箇の物では無い、國の寶、世の寶である。一切衆生の大導師、宇宙の大光明である。天上天下唯我獨尊とは此の事です。故に自分が自分の誓願を禮拜し、自身が自身の菩提心を恭敬して、此の大誓願を傷つけぬ樣、此の菩提心を汚さぬ樣に致さねばなりませぬ。

國家國民の大誓願

明治天皇並に皇后兩陛下が、國民を赤子の如く思召さるゝ御慈慮の深くましますことは、申し上ぐる迄も無きことながら、多くの國民が拜承して居る『冬ふかみねやの衾を重ねても思ふは民の夜寒なりけり』と云へる天皇陛下の御製、『綾錦とりかさねても思ふかな寒さおほはん袖も無き身を』と云へる皇后陛下の御製の如きは、實に有り難くも亦た恐れ多きことではありませんか。御身は九重雲深き宮中に在しても、其の大御心は業に既に賤が伏屋の隅々に迄も行き渡りて、如何なる匹夫匹婦なりとも此の罔極の天恩を被むらぬ者はありますまい。明治二十三年の新年御題、社頭祈世には『とこしへに民やすかれといのるなる我が世を守れ伊勢の大神』と御詠じあそばされた天皇陛下の御製を拜し奉れば、現扶桑國の民草は申すに及ばず、未來萬億年の後の國民までも此の御恩澤に浴し奉らぬものはありますまい。また、古今人臣の上から見ましても楠公父子が國家の爲めに心血を絞つて忠義を勵みたる七生報國の大誓願は、獨り湊

今日の時世に處して佛教の眞理を全世界に流布せんと欲する者は、殊に此の同事の妙行を圓轉自在ならしめねばなりませぬ。

自ら菩提心を敬へ

右の四箇條は菩提心を運用する上の方法でありますから、前の十六條戒を衆生濟度の上に應用するには、無論、此の四箇條を離るゝことは出來ぬ。十六條戒の一々に四枚の般若ありとすれば、六十四枚の般若が現はれて來ねばならぬ。此の事は能々念に念を入れて心得置かねばなりませぬ。故に、第二十五節には『大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし卒爾にすること勿れ』と仰せ下されてある。次の御文に『濟度攝受に一切衆生皆化を被むらん功德を禮拜恭敬すべし』とある、實に有り難き御示しである。我等お互が、一度此の菩提心を發して未來際を期して一切の衆生を濟度し、一衆生たりとも、餘さず、漏さず、盡く攝受と引受て、利益せんとの大誓願を立てゝ、發菩提心の卷に『おほよそ菩提心は、いかゞして一切衆生をして菩提心をおこさしめ佛道に引導せましとひまなく三業をいとなむなり』とある樣に、身にも、口にも、意にも、衆生濟度の仕事をのみ營み、寐ても寤ても之を忘るゝことがなければ、其の大誓願の功德こそ實に甚深廣大であるに依て、一切衆生は知らず識らず其の潤を被むるのである。我等お互は斯かる貴き大誓願を發したる其の大誓願を自ら疎略にしては成りませぬ。已れを忘れ

悪い者が酒を貰ひに來た場合には、其の根機を見て、徐ろに恕め諭して、呑ませぬ樣にするのが却て布施の精神に叶ふのである。愛語の如きも、場合に依ては嚴格に叱り付けるのが寧ろ愛語の本意に適することもあります。此の同事と云ふ作用が無ければ、布施も、愛語も、利行も、其の應用を誤つて何の役にも立たぬ樣になります。釋尊の千百億化身、觀音大士の三十三身、地藏菩薩の四十八身等は皆な同事方便の神通光明であります。故に他人を導き誘うて自分の大安心に歸入せしめ、また、自分の大安心を運用して他人の上に活動を現はすこそ正しく同事行の妙用である。自分だの他人だのと申すも、其の時〳〵の名前の附け方が變るだけで、畢竟は自他平等である。故に、自分の功德も他人の功德も兩つながら無窮で、窮まり盡くると云ふことは無い。大海は固より百川を擇ばぬ。利根川の水でも、細溪川の水でも、濁つた水でも、清だ水でも、決して擇り嫌ひはせぬ。盡く引入れて而して自分の方の水と同化させて了ふ。四河海に入て復た本名なしで、一度大海に流れ込めば大河の水も、小河の水も、清水も、濁水も等しく一大海の味になつて仕舞ふ。是れが海の同事行である。水は海に聚まり海は水を聚むる、水も海も畢竟、一體平等で、自他の區別は無いです。我等も亦た是の如く、敵でも、味方でも、文明人でも、野蠻人でも、貴顯紳士でも、車夫馬丁でも、少しも擇り嫌ひをせず、其の相手に相應した交際を爲し、人を見て法を說き病に應じて藥を施こす、是れが自をして他に同ぜしむるのである。それから、次第〳〵に自分の大安心に引込で、都盧一平等に、受戒入位、即心是佛の樂みを受けしむるのが、他をして自に同ぜしむるのである。

車や電車の機關手が多くの客人を載せて目的地に向つて進む樣なもので、自分の行くのは目的ではないけれど、乘客の到着する時は自分も到着して居るではありませんか。利行は一法なりです。利行の大功德海には自他の隔ては少しも無い。自他法界平等利益、我と大地の有情と同時に成道でございます。

同事

第四の同事は、第二十四節に『同事といふは不違なり、自にも不違なり佗にも不違なり譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し、佗をして自に同ぜしめて後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし、自他は時に隨うて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり』と御示し下されてあります。同事は事を同うすると云ふ語だが、解り易く申せば、時代に相應し、根機に相應し、境遇に相應すると云ふ意味になる。夫故に不違なりと仰せられたです。不違と云ふはたがはずと云ふので、時世にも違はず、根機にも違はず、また、自分の本領にも違はず、自分の誓願にも違はず、自分にも佗人にも相應することです。言ひ換へれば、自分の大誓願、大安心と一切衆生との間をほど好く調和するの作用である。譬へて見れば、人間世界に出現して人間を濟度したまふ釋迦如來樣はやはり人間と同じ樣な生れ方育ち方をしてござる樣なものである。學者には學者相當、子供には子供相當、其の人と、其の時と、其の處とに隨つて、千變萬化に菩提心を働かせて衆生を利益せねばなりませぬ。例せば布施の如きも、酒甁の

るのを見て、子供心にも不便と思ひ家に連れ歸りまして、百日餘りも箱に入れて養なつて居ると、段々傷も治り極めて達者になつたので之を放して遣つた。すると其の夜、黄色の衣裳を着た童子が楊寶の枕元に來つて『私は此の間中、長々御介抱を戴いた雀であります、貴君の大恩は却々報ずることは出來ませぬが、これは聊か御恩報じの印であります』と云うて白い玉の環を四つ渡し、貴君の御子孫が三公の位に登らること、此の環の數の如くならん』と云うて立去りました。後に至つて、果して楊寶の子の楊震、楊震の子の楊秉、楊秉の子の楊賜、楊賜の子の楊彪と四代とも三公の位に登りました。之に就て或人が、龜や雀などが人間の運命を左右することが出來るものかと笑はれたが、實に尤のことです。だが、孔愉や揚寶の出世したのは、敢て龜や雀の力とは言はぬが、其の人が斯かる仁者であつたればこそ立身も致したものであります。今は唯だ、畜生に向ても自然に慈悲心の現はるゝこと、畜生にも尚ほ恩に感ずる性情あることを知らしむる爲めの御語であります。困窮した龜や病患ふた雀を見た時の如き、之を助けて遣て後から御恩返しをして貰はふなどゝ云ふ心のあらうはずは無い。唯々衆生の苦しむ樣を見ては、ジッとして居られぬと云ふ利行の心に催されて之を助けたのであります。是れ即ち佛性常住の孝順心慈悲心の活動である。然るに、愚かなる人は他人ばかりを利益することを先にしては、自分の利益は全然省かれて獨り貧乏をせねばならぬと謂ふであらうが、決して左樣な譯のものでは無いです。『おれが』と云ふ私情私欲を打捨てゝ宇宙の大意志に冥合し、菩提心に成り切つて仕舞へば、自他平等に大利益を被むるのである。汽

第三の利行は、第二十三節に『利行といふは貴賤の衆生に於て利益の善巧を廻らすなり、窮龜を見、病雀を見しとき彼が報謝を求めず唯單に利行に催ふさるゝなり、愚人謂はくは利他を先とせば自らが利省かれぬべしと爾には非るなり、利行は一法なり普ねく自他を利するなり』と仰せられてあります。利行とは、利益ある行と云ふので、貴い賤いに拘はらず、所謂衆生に對して利益ある行を爲すことです。窮龜のことは、晋書に在る因縁である。晋の世に、名は孔愉字は敬康と云ふ人があつた。或日、餘不亭と申す處に行きまして、圖らずも大な龜を擔ひて往く人を見た。能々聞けば殺して食ふ積りとのこと、孔愉は不便に思ひ、金を出して讓つて貰ひ、水に放して遣りました。龜はサモ嬉し相に、左の方へ首を枉げて四度も振廻つて孔愉を見たと云ふことです。其の後、孔愉が餘不亭の知事となつた時、龜の鈕を附けた印形を金で鑄さしたが、其の龜の首が左へ曲つて出來たに依て、之を鑄直させのこと都合四度に及んだが、どうしても首が左に曲つて出來る。そこで先年龜を助けた時、龜の振廻つて見た姿がちやうどこれに違ひ無い。さすれば龜が其の時の恩を報ぜんとて我が身を護るならんとて、其の儘、印形を用ゐたと云ふことであります。又た、病雀のことは續齊諧記に在る因縁です。支那の楊寶と云ふ人が九歳の時、華院山と云ふ處で二羽の雀が鴟梟と云ふ鳥に搏たれて、半死半生になり樹の下に倒れて、多くの蟻に苦しめられて居

虚僞の語、無益の語などは、喜んで居る人に腹を立せたり、仲の好い人を不仲にしたり、味方をも敵にしたり、明らめて居る人をも迷はしたりするもので、其の害毒は實に恐るべきものであります。賢愚經には年少な坊さんが、高德なる羅漢の渠水を飛び超えるのを見て、獼猴の樣だと云うて嘲つた爲めに、五百世の間、獼猴に生れたと云ふことが說てある。また、聲の惡い沙門に向つて狗の吠る樣だと云つて笑つた爲めに、狗に生れたと云ふ因緣も說てある。十善戒の中には妄語とて、うそを言ふこと、綺語とてだはことを言ふこと、惡口とて惡る口を言ふこと、兩舌とて二枚舌を使ひ、なかごとを言ふことを戒られてあるが此等は皆な愛語の反對でありますから、愛語をさへ堅く守れば此等の過失は獨手に無くなるものです。世の中には面白半分に、人の惡口を言ふたり、人の失敗話を爲たり、何でも無い事を口穢なく罵つたりする人もあるものですが、能々愼んで貰ひたいものであります。承陽大師は『示庫院文』と云うてお寺の臺所の者に御示し下された中に、粥のことを『御粥』と申せよ、齋のことを『御齋』と申せよ、米を搗けと云ふことを『よね白め參らせよ』と申せ、汁を煮よと云ふことを『御汁のものし參らせよ』と申せなどと御親切に敎訓せられてあります。精神に敬ひと親切とが無いと言語は自然疎暴になるものです。一事一物に敬ひと親切が無ければ萬事萬物にも敬ひと親切が無くなります。敬ひなく親切なき人が何うして高尙優美なる品性を養ふことが出來ませうぞ。故に我等お互は朝な夕なに用心して此の愛語の行を守りたいものであります。

樂しくす、面はずして愛語を聞くは肝に銘じ、魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり」と委しく御示し下されてあります。愛語は慈愛の語で、極柔かな、極やさしい、極親切なる語と云ふ程の意味です。衆生に對して慈愛の心が深くありさへすれば、其の人の語は自から顧愛と云うて、親切にやさしくなるものです。衆生を慈念すること恰も母親が赤子を愛育ずる様な心持になれば、返辭一ッ、挨拶一ッの中にも無限の愛情が籠るものです。徳の有る人に向ては少しも嫉み妬みの心なく、眞實心を以て之を讃めて益其の徳を勵ますが宜い。徳の無い人を見たからとて、憎み恨みの心も無く、怒り罵ることもせずに、中心からしてア、氣の毒なものじや、何卒、誠の徳を具へさせて上げたいものじやと思うて、親切に諭すが宜い。箇様に致して行けば、今までは怨敵となつて居つ者も、自から悪心を飜して此方に降伏し、昨日の敵も今日の味方と爲るものです。君子と云ふは、此處では廣く世の中の人々を指した詞です。親子・兄弟・妻子・眷屬は申すに及ばず、世の中の多くの人々をも和睦させて、一家の和合は勿論、一村一郡一國の平和を守るも皆な愛語の徳が根本である、人前でやさしい語は使へば、之を聞く人は自然と其の喜びが顔色にも露はれ、心にも言ふに言はれぬ樂しみを生ずるものです。蔭にて親切の語を使へば、猶更其の眞心を喜びて肝にも魂にも銘ずる程の感動を起すものです。愛語は實に廻天と云うて、天然に定まつた事柄をも引廻す程の力がある。當然怒るべき人をも恕め、實際苦んで居る人をも樂ましめ、悲しむ人をも喜ばしめ、迷ふ人をも明らめしむる勢力のあるものです。之に反して、亂暴な語、無慈悲な語、

で阿難尊者を御連れになつて、婆羅門城に入て托鉢せられたことがある。婆羅門派の者は申し合せて、佛に供養することは成らぬと決めたので、釋尊は空つぽうの應量器(鉢)を持て御返りになりました。其の時、町端に住んで居た極貧乏な老婆が、如何にもして佛を供養し奉らんとの志切なれども、供養すべき物が無い。少かに漿水と云うて米の炊汁同樣の物を瓦の器に盛て佛に供養した。釋尊は其の切なる志を嘉したまひて、汝は此の功德に依て十五劫の中三惡道に墮せず、後には辟支佛に成るべしとの記莂を御授けあそばされたと云ふ因緣が大論の中に出て居る。また、阿育王が菴摩羅と云ふ果物の實を半分だけ鷄寺と申す御寺に供養した。大衆は其の志に感じて、其の果を粉にして一ツマミ宛一同に分配して供養を受けたが、これぞ阿育王が最後の大善根でありしと云ふ因緣が阿育王經に出て居ります。是れ即ち長者の萬燈、貧の一燈です。故に、眞實、至誠の心、慈愛の心で無ければ布施の功德を成就することは出來ませぬ。

愛語

第二に愛語と云ふは、第二十二節に『愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、德あるは讚むべし、德なきは憐むべし、怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、向ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を

布施を行ふことが出來たと自ら其の行を喜ぶ心、捨とは物を捨てた時の樣に、少しも其の報を求めぬことである。優婆塞戒經には、施しを爲ても、高慢したり、施しを受けた者を罵つたり、施した物が倍にもなつて返るのを當にしたりする者は、最勝の功德は得られぬぞとの御誡めがあります。唯々、此の方の力を須ち與へて布施の功德を成就するを、自分の仕事として樂む樣でなければなりませぬ。斯樣な心懸を持ちさへすれば『舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり治生產業固より布施に非ざること無し』で、舟なき渡場に舟を置き、橋なき河に橋を架けて、通行の人に便宜を與ふるも廣大なる布施の行である、加之、治生產業で自分の生活上の營業までがそつくり布施の功德と爲る。百姓が田畑を耕しながらも、米なり麥なり大根なり牛蒡なり、これがやがて父母の食物とも爲り、妻子の養育品ともなり、御上の御年貢とも爲り、佛樣や御先祖の供物とも爲るので、取りも直さず家の寶、國の寶を作るのであると思うて働けば、鍬を入るゝも、田の草を取るも、皆な崇高なる布施波羅密である。商人が物品を販賣するにも、御客の爲めを計り、家の爲め、國の爲めを思うて、正直律義に勉强すれば商賣の其の儘が立派なる布施行である。檀度とあるは、檀は梵語で布施のこと、度はわたると訓で、波羅密の譯語で、人を救ふと云ふことになるのであるから、檀度の二字で布施の行と云ふ程の意味であります。承陽大師は典座敎訓の中で『漿水の一鉢も十劫に供じて自から老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果も也た一寺に捨して能く育王最後の大善根を萠す、記莂を授かり大果を感ず、佛の緣と雖ども多虛は少實に如かず』と御示し下されてある。是れは釋尊が曾

弓箭等の危險物や、人の心を惑はす樣な音樂や、女色や、此等五つの物は施してはならぬと誡めてある。夫故、功德の實なることを能々認めた上で、眞心を以て之を施す時は、水一杯、お茶一服でも一回の挨拶一席の演說でも廣大なる善根を成じまする。故に次の御示しには『然あれば卽ち一句一偈の法をも布施すべし此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし此世他世の善根を兆す』とありて、經文の一句一偈の法を授けても、錢一文、草一本の財を與へても、それが爲めに苦痛を助かり、艱難を凌ぎ、永久の良緣を結びなば、此の世ばかりか來世までも朽ちざる程の善根の種を殖え付くることゝなります。『法も財なるべし財も法なるべし』で、心が治まれば自から身も修まり、身が立てば自から心も定まる譯だに依て、法を施すのがやがて財を與ふる樣なもので、財を施すのがやがて法を施すことゝなる。食物に飢え寒氣に凍へる者を助くるが如き、一時の救濟が正しく其の人の一生を扶ける譯合である。心得違の者を教訓して改悟せしむれば、一時の法施が其の人の一身を立つる基ともなります。金を施すことが出來んでも、金錢を作る方法を教へれば金を施したも同然です。佛法を聞かせる力が無くとも、相當の善智識の處に案內してやれば自分が聞かせたも同樣の功德があります。財と法との二つは裏と表の樣なもので決して別なものではない。それから次に『但彼が報謝を貪らず自らが力を頒つなり』と云ふ御文が特に大切であります。施を爲る時は其の布施と云へる善行を自ら喜んで、決して報謝と云うて先方の報酬や謝禮を宛にしてはならぬ。夫故、布施のことを喜捨とも申します。喜とは布施を致した時、アヽ今日は御蔭を以て幸にも

神であるから、承陽大師は次の御文に『布施といふは貪らざるなり』と仰せ下された。これは優婆塞戒經に『無貪の心之を名けて施と爲す』とある佛の御語に依ての御示しです。飢渴に苦しむ者には飮食物を施こし、金錢に乏しき者には金錢を惠み、衣服に窮する者には衣服を與ふるの類は財施であるし、道理を知らぬ者には道理を說き示し、學問の無い者には學問を敎へ、佛法を心得ぬ者には佛法を聞かせるの類は法施である。財施は重に衆生の肉體に安樂を與へ、法施は重に精神の缺目を補うてやるのです。萬一、施すべき力が無かつたならば、ドウぞして施したいものだ、救ひたいものだと深く同情愛愍の念を起すが宜い。また、他人の施を爲るのを見たならば、恰も自分が布施の善根を爲した如くに、心の底から之を贊成して喜びの念を起さねばならぬ。斯くする時は、其の人は事實の上では施を致さんでも、精神の上では旣に施を爲て居るのです。故に經には『若し貧窮の人あり財の布施すべき無きも他の施を修するを見し時而かも隨喜の心を生ぜば隨喜の福報は施と等しうして異なること無し』隨喜の福は布施の功德と同等だとの御敎がある。此處を次の文には『我物に非れども布施を障へざる道理あり』と仰せられたのであります。是れに就て最も心得べきことは、次の『其物の輕きを嫌はず其功の實なるべきなり』とある御示しです。其の品物の輕重大小には拘はらぬ、施しに依て生ずる結果が、眞實の功德になるかどうかと云ふことを考へねばならぬ。蕩樂者に金を惠んだり、胃病患者に食物を强ひたり、酒癖の惡い者に酒を振舞たりするの類は、施が却て非常な怨となる。法苑珠林には、道理の無い金銀や、酒及び毒藥や、殺生の道具や、

佛の御戒法を相續して佛樣の御仲間入の出來た者は眞の佛弟子眞の菩薩である。其の菩薩の大誓願は、唯だ衆生利益の一點張です。修證義の第二十一節には『衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施二者愛語三者利行四者同事是れ卽ち薩埵の行願なり』とありまして、布施と愛語と利行と同事との四箇條が正しく菩薩の行願であります。般若は梵語で、智慧と譯します。智慧とは佛のお悟のことです。佛のお悟と云うても別なことではない、修證の中の本證の現はれたのです。其の本證のお悟が衆生濟度の妙修となつて光を放つのであるから、衆生利益の行願と云ふのが取りも直さずお悟の御姿であります。夫故、此の四箇條を指して四枚のお悟があるぞと仰せられたので、證悟が直樣修行、修行がそつくり證悟、水と波との如く、形と影との如く、決して相離れぬ修證一如の宗旨である。薩埵は梵語の菩提薩埵を略したので、菩薩のことです。行願とは、行はおこなひ、願は誓願です。大慈大悲の誓願に依て衆生利益の行が現はれ、其の行に依つて誓願を遂ぐるのであるから、行と願とはやはり車の兩輪の樣に暫時も相離るゝことの出來ぬものでございます。

布施

其の四箇條の第一は布施であります。布施とは、布はしく、施はほどこしで、廣く衆生に對して財と法とを惠み與ふることであります。慳貪無慈悲の心を離れて溢るゝばかりの慈悲心の起るのが布施の根本精

を贈られた。筆には書かれず、口にも唱へられぬ佛とは孝順心慈悲心のことである。時に上人は『なにと吹く風とは更に知らねどもあはれもよふす秋の暮かな』と返歌せられました。天眞にして妙なる宇宙の大意志は、火は熱し風は動搖、水は潤ひ地は堅固、眼は色耳は音聲、鼻は香舌は鹹酢、松は直く棘は曲り、鶴は長く鴨は短かしと露はれて居る。古歌に所謂『みる毎に皆なその儘の姿かな柳は綠花は紅』皆な盡く菩提心の姿です。上人が或時、義教公の處に赴かれ、憐むべき囚人を御覽なされ、之を赦免せられたしと請はれたが義教公には御聽入が無かつた。其の時、上人は『慈悲の目に惡くしと思ふ者ぞなき咎ある身こそなほあはれなれ』と云ふ歌を詠ぜられたれば、義教公は大に感激せられて、遂に其の囚人を赦されたと云ふことです。

尤も、斯く申せばとて、佛の慈悲は決して良民も罪人もゴツチヤ交ぜにするものではございませぬ。平等の中に差別ありて秩序整然寸毫も亂れませぬが、其の平等も差別も盡く菩提心の上より自然に現はるゝ妙用であつて、心の欲する所に從つて矩を踰えぬと云ふが發願利生の妙功德であります。此の發願利生の妙用に就ては、修證義の中に四枚の般若と云ふ貴とい御敎がありまして、我等佛敎信者、殊に曹洞宗信者としては是非共心得置かねばならぬ大切の法門であります。

四枚の般若

ひまなく道をおもひ修しなば、その天德の己れに入り來ること火のかはけるにつくが如し、色欲は求め得て反て己れをそこなひやぶる、天德は無量劫にも盡きず、妙の妙なるもの也』とありますが、其の天德とは卽ち慈悲心孝順心のことです。卽ち、宇宙の意志に冥合したる菩提心であるから、孝順とか慈悲とか言ふのも、暫く人生の上に比較して假りに名けたもので、畢竟は妙のまた妙なるものであります。

柳綠花紅

昔、了菴門下の麒麟兒と稱せられし大綱明宗禪師は、初は淨土門の人であつた。相州酒匂に於て盛んに說法して居られた時、有名なる慧春比丘尼が座に在つて、說法の後に相見して、『貴僧は聰明な御方ぢやが、惜い哉自己の安心が出來て居らぬ、願くは最乘寺の了菴禪師に參ぜられよ』と云うて勸告された。そこで明宗禪師は早速、了菴禪師の處に至つて曹洞の宗旨を聞かれたが、さつぱり解らぬ。或日、海濱を通行の折、大勢の子童が『向ふも見えねば此方も見えぬ聞くは磯打つ波ばかり』と謠ふのを聞て、忽念として悟を開かれたと云ふことです。彼も無く、此も無く、佛も無く、凡夫も無い、本來平等の大海に自から孝順心慈悲心の波濤が飜へると云ふ田地に至らねば、佛法の御利益は露はれませぬ。

また、後龜山天皇の皇子帥の宮樣が出家なされて有名なる眞阿上人と云ふ御方になられた。京都の誓願寺に居られた頃、足利義敎公が『口に唱へ卒屠婆に書きし彌陀は見ゆ書かず唱へぬ彌陀を敎へよ』と云ふ歌

ぬ。若し波の音を以て法の皷とも聞く人ならば『波の皷きこえぬ山の奥もなほ面白かりし松風の琴』で、松風の聲も天の音樂にも勝さる調のあるものです。實にや『炮烙と同じ浮世の人心氣を煎るもありはうずるもあり』である。衆生は萬物に使はれ、萬物に束縛されて、自ら煩惱惡魔の世界と見る。菩薩は萬物を使ひ、天地の間に逍遙自適して、盡く菩提の因緣と觀ずる。苦樂も善惡も皆な我れに在りて存するのである。之を華嚴經には『譬へば衆の繢像は畫師の作る所なるが如し是の如き一切の刹土は心の畫師の成す所なり』とありて、我等の心は恰も畫師の樣なもので、三界六道十界三千も心の筆先一つの細工であります。故に、心は瞋恚と邪婬とに相應すれば地獄の果報を招き、心が慳貪なれば餓鬼の業と成り、心が愚癡なれば畜生の業と成り、心が我慢高貢なれば修羅の業と成る。心が五戒に相應すれば人間界を作り、十善に相應すれば天上界を作り、人空を悟れば聲聞、因緣の性空なりと證れば緣覺、六度を行へば菩薩、平等大慈悲に住すれば佛と爲ると萬善同歸集にも說てある。だに依て、心が菩提に相應すれば作す事爲る事が盡く菩提の行願と爲ることは自然の道理であります。佛樣や菩薩方は發心の初めより唯々衆生利益を以て目的となされ、娑婆往來八千返の御艱難も、佛樣の方から云へば、それが最上の樂なのである。夫故、修證義の次の御文には『設ひ佛と成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して自らは終に佛に成らず但し衆生を度し衆生を利益するもあり』と仰せられたのであります。彼の菅原道眞公の御語に『世の人色欲を好めるやうに心の

の臆病者で致方が無かつたが、信玄は使ひ道ありとて之を扶持せられ、信州戸石の合戰の時、彼の臆病者を、勝れたる逸物の馬の鞍鎧にくゝりつけ、大勢にて馬の尻を敲いて敵の陣中に追込だ。大藏はビツクリ驚天、ブル〱ワナ〱震ひ上つて夢中になつて念佛ばかり唱へて居た。馬も其の臆病に呆れたと見え、直樣元の陣處へ引返して來た。信玄はそれでも別段に叱りもせず、今度は家中の隱目附に命じ『若し內證事を知りつゝ申上ざれば嚴科に處すべし』と申渡された。大藏は大に恐れて馬鹿正直に何も敷も上申したので大さう役に立つたと云ふ話がある。此等は名君が人を棄てずに利用した御話でありますが、我等の菩提心とても亦た是の如くで、如何なる境遇に處しても、何の樣な惡人に出遇うても、決して之を恨みず、之を憎まず、益々之を憐れみ之を愛すれば、惡人も善人に化し、穢土も淨土と變じ、苦痛困難も安寧幸福と爲るものです。承陽大師が『この發心よりのち大地を擧すればみな黄金となり大海をかけばたちまちに甘露となる』と仰せられ、常濟大師が『五道の轉輪自ら大乘の飜軸なり四生の受業まさに是れ自己の活計』と仰せられたるのは正しく此の消息を示されたものです。凡そ我等の身でも、心でも、天地でも、萬物でも、其の人の觀念と境界とに依りて、苦ともなり、樂ともなり、惡業の因緣ともなり、菩提の行願ともなるものです。『世の人のしやうじをはるもはらるゝも偏へに法のときぐわいなり』である。法の運用次第で生死とも涅槃ともなる。『波の音きかじが爲めの山籠り苦は色かへる松風の音』とある歌の如く、波の音を邪魔にして山の中に入れば、松風の音も亦た一つの邪魔に爲つて心を安んずることが出來

強食の蠻狀を呈する畜生道、我慢競爭の修羅道、仁義忠孝の人間界、十善安樂の天上界、社會の狀態は此の世からなる六道の巷である。此の六道の巷を歴廻つて居る我等の身の上が、若し菩提心が堅固なれば盡く菩提の行願を成就すべき好因緣となりまする。次に御文には『然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし』とありて、今の今までは、逆緣に逢うては心を苦しめ、困難に逢うては世を恨み、我が身を悲んで居つたであらうが、幸にも佛樣の御陰に依りて菩提心の明らめが付たならば、一時も早く甚深廣大の誓願を發して、逆緣に逢うたならば益々衆生利益の念を勵まし、困難に逢うたならば彌々大慈大悲の心を運らし、一切時一切處に於て、善根功德の寶を積み、孝順心慈悲心の光明を輝かさんとの心懸を持たねばなりませぬ。

三界六道も心の筆

太閤秀吉公の寵臣たりし越後の堀秀治は、如何なる人をも棄てずに盡く採用して、其の能を見て善く使はれた人です。臣下の中に泣面の男があつた。楠公の泣男に之を掛けた程で、始終、淚を流し眉を皺めて、一見ゾツとする樣な陰氣な顏付でありました。何んぼ何んでも餘りに緣起の惡い顏貌ゆゑ、之を放たれよと諫むる人もあつたが、秀治は笑ひながら『決して無用と思はるゝな、葬式や法事の使者などには無類の重寶者よ』と云うて、生涯扶持を與へられたと云ふことです。武田信玄の家來大藏左衛門と云ふは大

との念を起し、善人に向うた時は益々善を行ひ道を修するの志を長じ、苦を受けた時は忍辱精進の行を勵み、樂に遇うた時は禪定智慧の功を磨き、國に向ては國を愛し、人に向ては人を愛し、鳥獸に向ては鳥獸を憐れみ、草木に向ては草木を憐れむと云ふ樣に、萬事萬物に對して任運自然に孝順心慈悲心の働を現はす時は、萬法皆な菩提心を增上すべき因緣となります。氣に入らぬ事があればこそ、其の御蔭で堪忍と云ふ美しき德を養ふことも出來、無常の世の中であればこそ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開き、業障を消滅して佛樣の御仲間入りも出來るのです。こゝを承陽大師は發菩提心の卷に『もし一刹那この菩提心を起すより萬法みな增上緣となる、おほよそ發心得道みな刹那生滅するによるものなり、もし刹那生滅せずば前刹那の惡さるべからず、前刹那の惡いまださらざれば後刹那の善いま現生すべからず。この刹那の量は唯だ如來ひとりあきらかに知らせたまふ』と御示しあそばされてある。箇樣に菩提心を應用して參りさへすれば、苦も樂も、善も惡も、盡く道に進み德を明らかにして三聚淨戒・十重禁戒の御戒法の御光りを現はす所の因緣となります。故に第二十節には『若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり』と仰せられたのであります。六趣と云ふは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道、四生と云ふは生物の生れ方に胎生と卵生と濕生と化生との四通があるので斯う云ふのです。併し、是れは未來の事とばかり思うてはなりませぬ。此の世の中でも、火の車に乘つて居る者もあれば、劍の山を踏んで居る者もある。飢渴に苦しむ餓鬼道、橫道を踏んだり弱肉

宇宙の意志に冥合して、眞箇の菩提心、卽ち佛心を發しまする。之を己れを忘れよ己れを捨てよと云ふのであります。承陽大師が『佛法をならふと云ふは自己をならふなり自己をならふと云ふは自己を忘るるなり』と御示し下されたのも、肇論に『聖人に己れ無し己れならざる所なし』とあるも卽ち此の事であります。三世の諸佛、十方の菩薩が、己れを捨てゝ衆生濟度の誓を御發しあそばされたのも、決して特々拵へた御誓願と云ふではない、つまり宇宙の意志に冥合して、佛性常住の孝順心慈悲心が現はれた姿で、之を菩提心と申すのであります。其の姿は何んな有樣であるかと云ふに、三聚淨戒、十重禁戒が取りも直さず菩提心の狀態です。此の御姿こそ眞・善・美圓滿なる莊嚴の妙相で、此の御姿を昧ますのが卽ち惡心惡業とも煩惱妄想とも申すのである。瓔珞本業經に『理に順じて心を起すを善と爲す』とあるは此の戒法に隨順することで『理に違うて心を起すを惡と名く』とあるは此の戒法に背くことであります。此の戒法は宇宙の大意志、佛性常住の孝順心慈悲心の御姿であるから、善と惡との標準は此の戒法を以て定むるのが萬古不變の大法であると、能々確信せられたいものであります。

萬法皆增上緣

サア一度此の菩提心が現はれますれば、何處に行ても、何事を致しても、順境に居やうと、逆境に在らうと、少しも此の心の作用を妨ぐる物は無いです。惡人に向うた時は益々惡を止め、且つ惡人を導かん

ば、やはり神とか天帝とか云ふ漠然としたものを設けてお茶を濁すと云ふ鹽梅で、何れにしても我等一個人と社會國家と云ふ樣な團體との上に幾分の隔が付くとか、人生と宇宙との間に多少の境界が付くとかして、どうも面白くないです。我が佛の御敎では、宇宙萬象は本より一體平等にして、宇宙萬象の其の儘が佛性常住の孝順心慈悲心の塊り物である。社會も、國家も、一家族も、一個人も盡く平等にして差別は無い。草一本、樹一本、水一滴、塵一介でも孝順心慈悲心の姿ならざるは無い。一個人の道德も社會國家の道德も同一の原理で、一人の善行も萬人の善行も、圓融して相離れぬ。自分の利益と他人の利益とは、元來、同なじ孝順心慈悲心の賜であつて、自分と他人の間に劃然たる境を付ることは出來ぬ。てうど日月の萬物を照すが如く、他を照すと同時に自身をも照して居る。また、水の物を潤ほす樣に、他を潤ほすと同時に自身も潤うて居る。任運に起つて來る孝順心慈悲心の作用を、求めずして自から他を利益し、願はずして自から自身をも利益するのです。然るに凡夫の悲しさには、動もすれば、反對に他人に迷惑を掛けたり、自身に損害を招いたりするのは何故であるかと云ふに、それは本來平等の中に於て、故らに自分と他人との隔を付けて、我、卽ち『おれが』と云ふ塊物を拵へ、それに執着するからである。貪欲も、瞋恚も、愚癡も、其の他所有煩惱惡業は唯だ此の『おれが』と云ふ惡戲者の仕業ならぬは無い。釋尊は『一切衆生皆な如來の智慧德相を具す唯だ妄想執着に依て而も證得せず』と御誡め下されてあるが、妄想執着と云ふのは卽ち我のことです。此の我を離れ、妄想執着を脫しさへすれば、自から

と仰せられたは此處です。此の大誓願は決して教育や遺傳の力で造作たものではない。佛性常住の妙德と申して、我等の本來具へて居る心の作用である。言ひ換れば則ち宇宙の大意志です。此の世界の成立ぬ前、此の身の生れぬ前からチャンと具有して居るのです。教育の力や遺傳の力なぞは其の大意志の發現する手續の一部に過ぎませぬ。

孝順心慈悲心

世界の倫理學上では、善惡の標準を定むるに就て種々なる學說があつて、或は人間行爲の原因たる動機を本として論ずるもあり、或は人間の行爲が社會公衆に對して利益が有るか無いか、又は、個人に對して利益が有るか無いかと云ふを立脚點とする結果論者もあり、また、進んでは人間の目的以上に宇宙の目的なるものがある、我等は必然、此の宇宙の目的に服從せねばならぬと主張する宇宙主義もあり、又は國君の命令や政府の法律等を以て標準を定め樣とする他律的國家主義もあり、或は宇宙は理性の發現したものである、國家とか社會とか云ふは此の理性の精神の進化したものである、故に、個人の屬して居る團體に行渡つた一般精神こそ我等の精神の現はれた所であるから、之れに服從せねばならぬと云ふ自律的國家主義もあつて、千態萬狀でありますが、何れも一長一短で、其の根本原理が確實で無い樣に思はれる。人間の目的以外に宇宙の目的があると云ふ說の如きも、其の宇宙の目的とは何ぞやと段々詮鑿して行け

利生も、行持報恩も、皆な孝順心と慈悲心の働きで、三聚淨戒、十重禁戒の實行された姿と云ふことになるのであります。修證義の第四章發願利生の初めの十八節には『菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし』と發願の有樣を御示し下されてある。此の中、菩提心とあるは、菩提は梵語で、道と譯してある。道とは佛の道を指すのであるから、菩提心とは佛の道の現はれた心と云ふ程の意味です。解り易く云へば、佛の心と云ふことである。佛樣の心とは、大慈大悲のことであるから、母親が自身の艱難を厭はずに我が子を愛育する樣に、自分と云ふものを先に立てずに、人の爲め世の中の爲めにと思うて、慈悲心を運んで行くのが眞の菩提心である。此の菩提心には、男だの、女だの、老人だの、子供だのと云ふ區別は入らぬ。誰でも彼でも大慈大悲の誓願の起つた者が即ち大菩薩であるから、十九節には『其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ此れ佛道極妙の法則なり』と仰せ下されてあります。縱ひ如何ほど陋しい者であらうと愚者であらうと誓願の心には變りは無い。生々世々を盡して一切衆生を救はんと志せば、一切衆生がそつくり我が誓願の領分內である。未來際を期して國家を利益し、世界を救濟せんと志せば、國家も、世界も、盡く我が誓願の領分內である。釋尊の『今此三界は皆な是れ吾が有なり其の中の衆生は悉く是れ我が子なり』

發願利生

佛性常住の妙德

是れより修證義の四大原則の第三に當る、發願利生の一則を演べる考でありります。前席で委しく申し上げた通り、佛祖正傳の御戒法を御相續した時に、我等の本より具へて居る所の佛性の御光り、即ち本證がそつくり現はれて、此の身此の儘三世諸佛の御仲間入が出來るので、丁度、赤ン坊が生るゝと直ぐ人間一人前の戸籍帳に載つて、それから人間の道を學び人間の仕事を致す樣に、我等お互も既に佛樣の戸籍帳に載つた身の上であるから、これより後は佛樣の御心を働かして佛樣の仕事を致さねばならぬ。之を妙修と申すのであります。佛樣の御心と云ふのは孝順心と慈悲心との外には無い。御戒法の上で云へば、惡を止め、善を行なひ、衆生を濟度すると云ふ三聚淨戒である。今發願利生と云ふのも、大誓願を發して衆生を利益することで、取りも直さず慈悲心の現はれで、三聚淨戒の中では攝衆生戒の修行になる。次の行持報恩は、日々の行持、即ち勤め向を以て御恩を報するのであるから、それは孝順心の方で、三聚淨戒の中では攝律儀戒と攝善法戒の二つに當る。併し、是れも一應の割り當であるから、全體から見れば發願

して見ますれば、我等お互は唯々佛法値遇の因縁を喜んで、受戒入位と云へる最勝無上の法門に於て、萬劫不磨の大安心を決定なさるゝが一大事でございます。

悲心とが現はれて、自から諸くの惡を離れ、自から衆くの善を行ひ、自から一切の衆生を利益せらるゝことである。大空に輝いて居る月は鏡の様な淸らかなる光りを放つて世の中の暗を照し、玉の如き影を萬水に浮べて居る。鏡の様なは善の行はれた相、暗を照すは惡を離れた相、影を浮べるは衆生利益の相である。『大空はくまなく晴れて塵の世を心のまゝに照す月影』天邊の明月も亦た佛樣の仕事を致て居るではありませんか。東海に聳えて居る富士山は、芙蓉の水を出たる如く八面玲瓏の姿を露はして居る。如何なる風にも動かされず、如何なる雲にも侵されぬ。千古萬古幾多の旅人を樂しめ、幾多の文人墨客を喜ばして居る。八面玲瓏の姿は善の行はれてる姿、風にも雲にも侵されぬは惡を離れた德、幾多の人を樂しましめるが衆生利益の妙用です。富士山も亦た純然たる佛樣ではありませんか。春來れば百花爛熳、秋來れば萬山紅葉、谷の戸出づる鶯は法華經の妙理を山木に囀り、深雪の松は不變眞如の妙相を常盤の色に傳ふ。天地法界盡く孝順心、慈悲心の御姿ならぬは無い。玉を綴れる梅が枝の花には露程も三毒の煩惱は無い。琴を調ぶる溪川の流には泡沫ほども人我の執見は無い。自然の働、天眞の佛事です。之を無爲無作の功德と申すのである。然るに我等お互は、少し許りの善を行うてもハヤ名譽と云ふ樣な野心が起る。聊かの利益を與へても直ぐ報酬と云ふ樣な望が出る。夫故、作す事爲る事が有爲有作で、皆な煩惱の垢を帶びて居る。情けないことではないか、御月樣や、富士山や、鶯や、松の木に對しても耻かしいことではありませんか。

ば、一日も身心を策勵せんには如かず』と御誡め下されてあります。如何ほど財産があらうと、學問が出來やうと、高位高官に進まうと、假の浮世に假の命、一息切れゝば身に着く物は一つも無い、生々世々の寶といふは御戒法を相傳して之を行ふ上にあるのだ。之を行ふことは、信仰の力に依らねば、其の目的を達することは容易に出來ぬ。信仰一度現はるれば、其の力に依て、一年三百六十日、此の身も此の心も御戒法を離れぬ樣になります。之を十七節には『群生の長へに此の中に使用する各々の知覺に方面露はれず』と仰せられてある。方面と云ふは我等凡夫の相のことです。知覺と云ふは心のことです。我等お互の心がそつくり御戒法の德となつて現はるれば、今までの凡夫の相が藏れて此の身此の儘が佛樣であるぞとの御示しです。

萬劫不磨の大安心

サア、かういふ境界から世の中を見渡せば、人間は申すに及ばず、草でも、木でも、山でも、河でも、盡く御戒法の姿、佛樣の御姿で、所謂『溪聲便是廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや』である。之を次の御文には『此時十方法界の土地草木、牆壁瓦礫皆な佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟りを顯はす、是を無爲の功德とす是を無作の功德とす』と御示し下されたのであります。佛事と云ふは佛樣の仕事です。佛樣の仕事と云ふは孝順心と慈

へ、そんな事なら三歳の小兒も尙ほ之を諳んじて居るでは無いか』、禪師はすかさず『三歳の小兒も之を諳んずと雖も八十の老翁も之を行ふこと難し』と一鍼を與へられた。口先の議論や、理屈の佛法では、三寶感應の德は得られぬ。實地に惡を離れ、實際に善を行ひ、戒法具足の身となつてこそ、始めて佛法の功德も現はれるのであります。白樂天は之れより禪師に歸依して、遂に古今に稀れなる程の大信仰者となられました。

天竺の耆域の傳にも之れと同じ樣な話しがある。耆域は天竺の高僧で、晉の世に支那へ來て佛法を弘めた人である。後に天竺に歸る時、法行と云ふ沙門が、我等の爲めに何卒一言の敎訓を遺したまへと願うた。そこで耆域は『口を守り意を攝めて身犯すこと莫れ、是の如くの行者は世を度ることを得ん』と云ふ御經の偈文を示した。是れは口を守り愼しみて罪を作らぬ樣にせよ、意を攝めて邪見を起すなよ、身を修めて法を犯すなよ、箇樣に身口意三業を淨らかにして道を行ふ者は、此の世の苦しみを離れて菩提の岸に度り着くことが出來るぞと云ふ御敎訓である。ところが法行は『願くば上人、未だ聞かざる所を授けよ、斯の偈の義の如きは八歳の童子も亦た已に諳誦す、道人に望む所に非ず』と云うた、只今の敎の如きは誰でも知て居りますから、珍らしい御話を聞かして戴きたいと乞うたのです。其の時、耆域は大に笑つて『八歳誦すと雖も百歳も行なはず、諳誦何の益ぞ、人皆な得道の者を敬ふことを知るも、之を行うて自ら道を得ることを知らず』と云うて悲しまれたと申すことです。法句經には『人壽百歳なるも怠惰にして勤めずん

いふことです。其の日も相變らず鳥の巣をきめて居つたので、白樂天は直ちに其の木の下に行て見ると、好い心持に坐睡をして居る。木の叉の上の坐睡、隨分險呑に見える。白樂天は思はず聲を擧げて『危い哉〳〵』と連呼した。禪師は聲に驚かされて、目を開いて見られると立派な官人、ジロリと御覽になつて、同じく『危い哉〳〵』と言はれた。白樂天は進み寄り『予は大地を踏んで立て居る、危きこと更に無し、何としてか危しと仰せらるゝや』、禪師は直ちに『薪火相交はる、識情停まらず、危ふからざるを得んや』と答へられた。薪火は薪と火です。相交はるですから火と薪が一處になつて居る。これは無常の有樣を言はれたものです。山ほど積んで在る薪も一塊の火に觸るれば忽ち燃て烟となる。我等の身の上も是の如く、無常の火の諸〳〵の世間を燒くこと猛火よりも甚しいではないか。一時の間も油斷は出來ぬ。『あすありと思ふ心にだまされて今日も空しく過しぬるかな』ではなりませぬ。識情は心意のこと、此の心と云ふものは朝から晩まで、惜い欲い、惡い愛いと、五欲六塵の境を飛び廻りて少しも停ることは無い、斯かる淺ましき心を以て無常憑み難き世に在るのは、何んと危いことではあるまいかとの御挨拶である。白樂天は此の和尙却々口が達者だわいと思うたから、語を轉じて『如何なるか是れ佛法の大意』と問うた。釋尊御一代五十年、三百餘會の說法、三千餘卷の經文、實に廣大無邊と承はる、其の大意を御示し下されとの問である。すると禪師は、毘尼母經や涅槃經にある彼の七佛通誡の偈の二句を擧げて『諸〳〵の惡を作すこと莫れ、衆〳〵の善は行ひ奉れ』と答へられた。白樂天はカラ〳〵と打笑ひ『ナニ惡を作すな善を行な、

ませう。人間は人間に生れてから人間の仕事を習ふのである。匐へば立て、立てば歩む、一秒時一秒時、一日一日に成長して、後には親にも勝るほどの者にも爲るのです。我等も其の通りで、御戒法を相傳して『衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る』と云ふ時が、ヲギヤーと産ぶ聲を擧げたのである。産ぶ聲と共に立派な佛樣の御仲間入である。智慧も狹い、德も薄い、神通も無い、光明も無い、けれども三世諸佛の戸籍帳には既に千佛の一數です。佛樣になつてから佛樣の仕事を習ふのだ。これが卽ち本證妙修の法門である。サア佛樣の御仲間入を致した上は、佛法僧三寶と云ふ慈悲深き母親の御世話を戴かねばならぬから、立つにも、坐るにも、寢るにも、起るにも、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧の唱名が絶えぬ樣にすべきは當然である。その代りには一秒時〳〵に成長發達して、何時の間にやら、三十二相、八十種好光明無量、壽命無量、萬德具足、悲智圓滿の佛樣になることが出來るのでございます。

知るは易く行ふは難し

支那の唐の世に名高き白樂天と云ふ學者があつて、非常なる佛教の篤信家でありました。此の人がまだ佛教を信じなかつた頃の御話ですが、或る日、道林禪師と云ふ名僧の在ることを聞て、試驗してやる位の氣込で尋ねて行かれた。此の禪師は暇さへあれば裏手の大木の木の叉に上つて坐禪して居る。丁度、鳥が巢をかけて居る樣だと云ふので、世の人々が渾名を付けて鳥窠禪師と申しました。卽ち鳥の窠和尙さんと

ぞ、汝等は我が子に相違ないぞよとの御語です。扨て是の如く我等御戒法相續の身は、今日以後は佛様になつたのだと能々信ずることが出來さへすれば、其の信仰の手元に、十六條の御戒法の徳は自然と缺目なく具足することが出來るぞとの有り難き御教訓であります。なぜかと申しますれば、我こそは佛様に成り了つた身の上だと信ずることの深き時は、此の信仰の力に依て世の中の一切の苦しみにも勝ち、一切の煩惱をも忍ぶやうになるものです。金の爲めに働く者は骨折を骨折と思はぬものです。それは金と云ふ一つの樂しみがある爲めに骨折に打勝つたのである。况てや我れは佛に成つたのだと徹底信ずる人ならば、其の喜びは如何ばかりでありませう。此の大安心の喜びの力は、如何なる艱難にも妄念にも打勝つことの出來るものです。此の一念の大信心、これが御戒法の源、此の身此のまゝの佛果菩提といふ宗門安心の神髓であります。『イヤ〳〵どう致しまして我等の様な凡夫が御仲間入など出來ますものか』などと自ら後退りをなされてはなりませぬ。こゝが即ち信心です。毛筋ほどでも疑の心や自分量見を出してはならぬ場合であります。譬へて見れば、丁度、生れたばかりの赤ン坊の様なものです。オギヤーと云うて母の胎内を出た時は全くの無意識であるから、東も知らず、西も知らず、親をも知らず、我が身をも知らぬけれども、其の身は既に帝國臣民たる一員で、戸籍簿に登録されて仕舞へば、最早、立派な人間の御仲間入である。其の機能の點から云へば、手も働けず、足も働けず、寢るも起るも母親の御世話に預からねばならぬが、人間の頭數から申せば、大政治家にも、大事業家にも、少しも變らぬ金看板の人間であり

三業清淨戒と稱したいと思ひます。

汝は是れ當成の佛

修證義十六節には『受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰れの智人か欣求せざらん』と仰せられてある。阿耨多羅三藐三菩提と云ふは、梵語で、譯すれば無上正道、卽ち此の上も無い正しき佛の道と云ふことになる。此の御文は我等お互が一度御戒法を受け奉る時は、金剛不壞と申して、生々世々を盡して朽ちることも無く壞れることも無い、大磐石の樣な佛の道と佛の御果報とを成就するぞよとの御示しです。唯だ〱己れを忘れ、我れを忘れて、有り難いことだ、喜ばしいことだと深く信仰を凝らして、此の御戒法を相續なさるれば、其の時直ぐに佛樣と親子の御約束、其の場から佛樣の御仲間入りでありますぞ。梵網戒經には『汝は是れ當成の佛なり我れは是れ已成の佛なり、常に是の如きの信を作せば戒品已に具足す』とある。これが信心の大眼目であります。『汝は』とあるは御戒法を相續する我等を御指なされたのです。『當成の佛』とは當さに成るべき佛と云ふので、修證義にある吾等が當來は佛祖ならんの意味です。卽ち無始劫來より三界六道に輪廻して居つた凡夫なりしも、戒法相續の今日よりは疑も無き佛であるぞと云ふ仰です。『我れは是れ已成の佛なり』とは、我れは三祇百劫の修行の曉に此の戒法を得て已に佛に成つた身である、然れば我れは汝等の親なる

いて眠るで、寐ても寐ても佛様と御同行である。夢の間にも三寶の御傍は離れぬ様にならねばならぬ。これが不謗三寶戒となつて現はれたのであります。

三業清淨

是の如く十箇條の御戒法と申すも、畢竟、我等の孝順心、慈悲心より出でたる三大誓願即ち三聚淨戒が、衆生に對し、國家に對し、世界に對し、山川草木に對して、自然に現はれたる妙用であつて、つまり心の德の相であります。故に此の十箇條の御戒法は三聚淨戒を離れたものではないのです。また三聚淨戒は本と〳〵佛法僧の三寶に具はつて居る德でありますから、三寶の外に別にあるのではない。その佛法僧の三寶は唯だ我等が歸依の一念に現はれるのであるから、ドヽのつまりは我等の信仰の一念に十六條の御戒法はそつくり籠つて居るのです。故に御經には此の戒法を心地の戒と仰せられたのでございます。猶ほ十重禁戒を、一應、身と口と意との三業に割り當てゝ見ますれば、殺生と偸盗と邪婬と酤酒の四つは主として身で作りますから身業に當りまするし、妄語と説過と自讃毀他との三つは口が主となるから口業の方で、慳法財と瞋恚との二つは意が主であるから意業、終の謗三寶は謗の字の意味が廣くかゝつて居るから主として意業と口業とに當ります。併し此の十箇條はこんなに別々に當て篏めぬ方が宜いのです。身と口と意との三つに通じた御戒法であることは、前で演べた様な譯合でありますから、拙衲は之を

て居ります。智慧が明らかなれば見る上、聞く上に、心の狂ふことはありませぬ。伊呂波の歌に『淺き夢見し醉もせず』とあるが如く、無明長夜の夢が覺むれば、五欲六塵の境に對しましても自分の心の亂れぬのみか、人の心をも治めて參るものです。此の正しき知見が不酤酒戒となつて現はれたのであります。孝順慈悲の妙用は、人の過失あるを見れば自然に憐れみの心が起るに依て、人の惡口などを言つて自ら愉しとする樣な邪見は無い。これが不說過戒となつて現はれたのである。『吳竹のすぐなる節の杖つきていよ〳〵たどれ法の大路を』で、益々大誓願に向つて法の大路をたどり行く者が、なにしに僅かばかりの才能に誇つて高慢などが出來ませうぞ。これが不自讃毀他戒となつて現はれたのであります。大誓願の妙用から見れば、治生產業までも皆んな布施の姿である。一文なしで施しの出來ぬ時でも慈悲の心念が胸一杯に滿ちて居れば所謂『物乞ひに與ふる物の無き時は言の葉のみもなさけあたへよ』と最明寺時賴の詠じた通り、身口意三業の中何れへか慈悲の光りの放たれるものである。此の慈悲心が衆生の肉體に向つて財の施となり、衆生の精神に向つては法の施と爲る。これが不慳法財戒の相であります。また、上を敬ひ下を憐みて、常平生『世の中によしあしごとを聞く度に我が身の上を立かへりみよ』と云ふ觀念が出來たならば、自づと柔和忍辱の德が現はれて瞋恚の焰は立處に消えて仕舞ふ。これが不瞋恚戒の相であります。心外和尙は『この頃は日に〳〵遠く尋ねける近き心の近き佛を』と歎かれたが、今日こそは佛の御戒法を相傳して此の身此の儘が三世諸佛の御仲間入りと思うたならば、朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱

サア此の大誓願が湧き出して參りまするど、恰も天地自然の妙用が春夏秋冬と循環して休みなきが如く此の大誓願たる宇宙眞理の靈機が萬事萬物の上に活動して來まする。其の活動の相が卽ち十重禁戒であります。卽ち、人の生命に對しては自から不殺生戒となつて現はれる。人計りではありません、鳥獸に對しても草木に對しても現はれます。恩ある人には、孝順心の妙用で、自分の身を捨てゝも恩人の命を守護する心になる。目下の者に向へば自然に之を助けずには居られぬ樣になる。草一本、木一本でも無益に之を折り取るに忍びぬ樣になる、米一粒、水一杯でも之を疎略に出來ぬ樣になる、是れ卽ち不殺生戒の德が禽獸や草木にまで及ぼさるゝのであります。また、他の財產に對しては、自から不偸盜戒となつて現はれる。人間ばかりでなく、畜生の物でも、山の中や川の中に在る物でも、漫りに之を取り去るに忍びない樣になります。また、男や女の身分に對しては、自から不邪婬戒となつて現はれる。心も身も淸淨潔白なれば亂りに他の容や貌に迷うて人を汚す樣なことがどうして出來ませうぞ。孝順と慈悲との光りが輝いて居さへすれば、穢れた心の暗は顏出のならぬものです。天地陰陽は各々其の禮を正うして亂りに犯すことは無い。松は紅梅の色香に迷はず、竹は垂柳の裊かなるを慕はぬ。日月も、山川も、長へに其の操を守つて居る。卽ち法性自然の德である。其の德に叶うたのが不邪婬の相であります。此の大誓願が言語の上に發すれば不妄語戒となります。正直は天の道である。柳は綠、花は紅、少しでも僞虛は無い。天の道に叶うた人には妄語などと云ふ惡魔は憑附かぬはずだ。此の大誓願は自から般若の正しい智慧を具へ

ぶ、その中に慈悲の心があり〳〵と光りを放て居ります。之を本能だとも云ふであらう、無意識とも云ふであらう、その本能その無意識がやがて大能力大意識の種子であります。稚兒の生長するに從て其の光りが十方に輝き、天地間に輝き、宇宙間に輝き、遂に宇宙の大眞理、大光明と一致して行くのでなるあるが、悲しいかな、無始以來の煩惱と罪障との習慣と業果とに依て、佛性のお光りが藏れて見えぬ樣にこれが我等凡夫の身の上です。

近き佛を遠く尋ぬ

一度此處に氣が付て、あゝ恥かしきことかなと思うて、自ら救を求むるのが即ち懺悔である。懺悔の念が一度起りますれば、先覺と云うて我等より前に御覺りを開かれた佛樣や祖師方が、有り難くなり戀しくなる。その有り難くなり戀しくなつた心が取りも直さず歸依三寶となるのであります。斯く佛法僧に歸依し奉りますれば、自から三寶の御心が我等の心の中に宿り、我等の心が三寶の御心の中に入り、三寶と我等とが一つになつたのを感應と申すのです。その三寶の御心と云ふのは、諸〳〵の惡を離れ、諸〳〵の善を聚め、限り無き御慈悲の充ち滿ちたのが即ち三寶の御心です。其の御心がソツクリ我等の心の中に宿るのでありますから、我等の心の中にも天然自然に、願くは一切の惡を離れん、願はくは一切の善を行なはん、願くは一切の衆生を濟はんとの大誓願がムク〳〵と湧き出します。これ即ち三聚淨戒であります。

上から云へば苦しみを離れて樂しみを得るのが目的、事業の上から云へば一切衆生を濟度するのが目的であります。要するに一切の惡を離れて一切の善を行ふと云ふが總ての土臺になるのである。此の善と惡との二つは何を標準として定むるかと云ふに、これは道德學上の大問題で、西洋でも、東洋でも、昔しから種々雜多の學説がある。良心説、自愛説、社會主義、生々主義、宇宙主義、國家主義等殆んど數ふるに遑なき程であるが、未だに確實なる解釋が定まつたとは云はれない。併し、此等は佛教の上より見ますれば各々一面の眞理を現はしては居るが、多くは理論の一方に趨つて居るので、之を愚夫愚婦に迄も能く呑込ませて、實地に行はしむると云ふ一段になると、甚だ不完全と申さねばならぬ。佛教ではどう教へてあるかと云ふに、瓔珞本業經に『理に順じて心を起すを善とし、理に違うて心を起すを惡と名く』と仰せられてある。その理と云ふものは、基督教の樣に人生以外に求むるのでも無く、また、小さな社會の一部や、國家の一部だけを以て標準とするのでもない。此の事は既に宗旨の大綱を演べた時に一通り御話して置きましたから、此處では略しますが、要するに宇宙其の物がそつくり眞理であつて、之を解釋したのが所謂、佛性常住の孝順心慈悲心であります。宇宙の眞理などと申すと、捉まへ處の無い漠としたことの樣ですが、其の眞理は有の儘に我等の心の中に輝いて居ます。西東をも辨へぬ稚兒が母親から物を貰うた時ポツクリ頭を下げる、おイタヾキを爲る、ニツコリ笑うて喜びと感謝の意を表する。此の中に孝順の心はあり〳〵と光りを放て居ります。其の稚兒が翫具を見る、傍へ寄て嬉しがる、菓子を貰ふ、手に握て喜

罪を作るのである。故に此の戒を守る者は常に佛・法・僧の三寶を敬ひ、堅く佛樣の御教へを信じて、身・口・意の三業を淨らかにし、佛教信者たるの本分を盡す樣にするのが、實に我等の一大事であります。

これで、ザッと十重禁戒の事を演べ了りましたが、此の上は、更に十六條の御戒法全體の上に就て我等の心得べき覺悟と、又、此の身此の儘佛樣の御仲間入が出來ると云ふ宗門安心の一大事を説き明かさねばなりませぬ。

戒法は安心成佛の源

釋尊御涅槃の砌、我等衆生の爲めに御懇篤なる御遺言の教訓を賜はりましたのが、即ち佛遺教經であります。御遺言の御旨意を一口に申せば、我が涅槃の後は戒法を以て我れと思へよ、戒法の存する所に我れは歴然として居るぞよとの御訓誡であつた。其の御經の中に、『若し人能く淨戒を持すれば是れ即ち能く善法あり、若し淨戒なければ諸善功德皆な生ずることを得ず、是を以て當に知るべし戒は第一安穩功德の所住處たることを』と云ふ御示しがある。佛の御戒法を持てば一切の善根功德が自から具はる、戒法は實に安心成佛の「源」であるぞとの御教です。

全體、佛教の目的は何處に在るかと云ふに、智慧の上から云へば迷を轉じて悟を開くのが目的、果報の

して、腹を立た時の心は其の儘が地獄です。佛樣は此の世界のことを娑婆と仰せられてある。娑婆とは堪忍土と云ふことであります。寒さにも忍へ、熱さにも忍へ、順境にも忍へ、逆境にも忍へねば生きて居られぬ世の中であるぞと云ふ意味なのです。殊には佛の大安心を得て菩薩の大行を致さうと云ふ佛敎信者たる人々が、短氣を起したり、腹を立てたりしてばかり居る樣では、どうして慈悲善根が積まれませうぞ。故に此の戒を守る者は、常に堪忍の行なひを持ち、和合の德を養うて、如何なる艱難にも忍へ、如何なる逆境にも耐へ、朝な夕なの立居振舞も、寛い心、雅なる量を以て專ら柔和溫厚を旨とし、萬事萬端の上に堪忍行を守るのが最も大切であります。

第十は不謗三寶戒である。是れは佛・法・僧の三寶を謗るなよとの御戒めだが、つまり我等お互が、生々世々を誓て三寶に歸依し奉りし上は、寐ても寤ても三寶を敬ひ貴んで、苟にも失禮なる振舞をいたすなよとの御禁制です。佛樣の敎に反對なことを爲たり佛樣の敎へを疑うたり、佛敎の體面を穢す樣な行動があつたり、宗派上の爭から御經文の惡口を論じ合うたりするの類は皆な此の戒の罪人です。貪・瞋・癡三毒の煩惱に當てゝ見ますれば、第八の不慳法財戒は貪慾の御誡め、第九の不瞋恚戒は瞋恚の御誡め、此の戒は愚癡の御誡めです。佛の敎へに反對するのは愚癡の爲めに眞正の智慧を昧まされて居るからです。それが爲めに益々邪見に陷いるのです。そこで十善戒では之を不邪見戒と名けられてある。適切に申せば、此の十六條の戒法や、修證義の四大原則に背いた量見や、行爲や、言論などを爲す者は、三寶誹謗の

一服、傘一本も皆な是れ財施の大功德である。法施は教へを施すのであるが、慈悲の念で致せば、學校教員が生徒を教授することや、吏員が人民に注意を與ふることなどは申すに及ばず、途中で人に道を教へるのも、人の着物に泥の付て居るのを知らせてやるのも、皆な法施の大功德です。無畏施は無畏は畏れなしと云ふので、即ち、安心と云ふ程の意味である。依て人に安心を與ふるのが無畏施である。だが財施も法施も其の目的は安心を與ふる爲めなのであるから、此の戒では單に財と法との二つだけを擧げたものである。世の中は、お互に施し合うて生存が出來て居るだ。日の乾坤を照す、水の萬物を潤ほす如き、皆な大布施の御姿です。それに、自分さへ宜ければ、人の痛いのは三年も忍へるなど〻慳貪に搆へるのは、第一、人間たる資格をも失つて居る仕方です。故に此の戒を守る者は、平生親切の心を以て人に交はり、分限相應に財と法とを人畜に施こし、以て天地の化育を副ける樣に勤めねばなりませぬ。

第九は不瞋恚戒です。是れは腹を立てるなとの御戒めである。凡て此の世の中は幾千萬人の寄合身上の樣なものであるから、自分一人の思ふ樣になるものではない。況してや煩惱業苦のお互の身であれば、我が身でさへ思ひの儘にはならぬものです。『朝夕の飯さへこわしやわらかし思ふまゝにはならぬ世の中』、『我が身さへ我が心にもまかせぬを人を心にまかすべきやは』である。それを氣に入らぬと云うては、些細な事にまでも腹を立つて、人を憎んだり、恨んだり、嫉んだり、妬んだりすると云ふは、何たる淺ましきことでせう、慈雲律師の歌にも『慢の修羅瞋の地獄を拂ひすて〻慈悲こそもとの姿なりけれ』とありま

なからんで、自分々々もやはり、過失が多いに違ひ無い。然るに自ら省みることをせずに人の惡口を云ふなどは實に淺ましき仕業である。故に此の戒を守る者は、常に愛語と云うて親切なる語を使ひ、苟にも人を傷つけるやうな語や、徒らに人の感情を害するやうな語などは、決して口外に發せぬやうに致さねばなりませぬ。

第七は不自讚毀他戒である。是れは自分の事を讚め人の事を惡く言ふことを制せられたので、つまり高慢してはならぬぞよとの御戒めです。『人をたゞ吉野の花とながむべし我れを難波のあしといふとも』と申す歌もあるが、自ら高振らず人をも侮どらぬほど奥ゆかしい美しいものは無いです。如何ほど高位の人でも、また、學者でも財産家でも、高慢の風をしては三文の價値も無くなるものです。故に此の戒を守る者は、常に謙遜の徳を持ち、勅語に所謂恭倹己れを持すと云ふことを愼しみとせねばならぬ。、

第八は不慳法財戒である。是れは法と云うて、總て人の道德を進め人の智識を開き人に安心を與ふる所の教法と、また、財と云うて、衣食住を始めとし總て人の生命を資け養ふべき物と、此の二つを、己れの身分に應じて人に施すことを心懸けて、必ず無慈悲なる心を以て物惜しみをするなよとの御戒めです。慈愛の念を以て人畜に物を施すを布施と申すが、是は丁度其の反對であります。覺如上人の歌にも『あはれみを物に施こす心より外に佛の姿やはある』とありますが、施しをするのがやがて佛樣の御姿です。布施には財施と法施と無畏施との三通りがある。財施は物品を施すのであるが、親切な心で爲れば御茶

まし狂はせるばかりか、身體にも多くの害毒を與へるものだ。智慧を失ひ、禮儀を亂だし、時間を費やし、爭論を釀し、不經濟、不攝生、此の上も無い徒らものは酒である。夫故、酒を酤つたり又は無理强さしたりするのは人に罪を造らせる樣なものだと云ふので、梵網戒經には、酒は起罪の因緣なりと御示し下されてあります。併し、戒法には開遮持犯と云ふことがある。開は許すこと、遮は差止ることです。此の戒の如きも、能く之を心得て應用を誤らぬ樣にせねばならぬ。釋尊も、祇陀太子と云ふ方が、どうしても酒は止められぬ、併し、酒を飮んでも、身をも心をも害すること無く、却て健康を益し、行狀が善くなると云ふので特に御許しあそばされたことが未曾有經に出て居る。酒其の物には罪は無いが、其の結果が恐るべきものであるから御誡めになつたのです。故に此の戒を守る者は、禁酒が出來ればそれに超したることは無いが、若し出來ぬとすれば、孔子の所謂『亂に及ばず』、楠正成公の遺訓にある『酒は飮むとも飮まるゝな』の敎へを守り、苟にも身體を害したり、精神を亂したりせぬ樣、また、人にもさせぬ樣にするのが此の戒法の持ち方です。酒屋渡世の方などは、精々人の身を害する樣な事の無い樣に注意して行くのが大切です。廣く申せば、人の心を醉はせるものは皆な此の戒の制する所となる。花を見て狂ひ廻つたり、碁を打て夢中になつたり、芝居や相撲に上せ込んだりする類も深く愼しまねばなりませぬ。

第六は不說過戒である。是れは人に過失あるを見ても惡口を言ふなよとの御戒めです。正法念經には『甘露及び毒藥皆な人の舌の中に在り』とも仰せられて、口から作る罪は夥しいです。人、誰れか過

滅ぼし、國を亂し、親族を辱しむる種を播く様なことにも爲る。況てや自分の賤しい情慾より、妄狂をするなどは以ての外の事ではありませんか。女たる者の愼しまねばならぬは猶更のことです。故に此の戒を守る者は、常に品行を正しくして夫婦の操を持ち、家庭の和合を護り、一家の秩序を亂さぬ様にすることが肝要であります。

第四は不妄語戒である。是れは妄語を言うて人を欺すなよとの御戒めである。梵網戒經には身心の妄語と云ふ御語がある。人を欺かうと云ふ心が起れば、其の人は最早、心で妄語の罪を作つたのである。これが心の妄語である。無學の者が學者らしい顔をしたり、貧乏の癖に金持らしく見せかけたり、勉強もせんで勉強振り、不實の者が親切振りなどするは、皆な身の上の妄語である。昔、支那の藥山惟嚴禪師に、佛道の中で一番貴とい寶は何であるかと問うた者があつた。禪師は『莫諂曲』と答へられた。莫諂曲とはうそをつくなといふことです。心が邪しまに曲つて居りながら表面だけは善人らしく、親切らしくする様な不正直をするなよ、莫諂曲が人間の寶であるぞと云ふ御示しである。人の品性を卑くし、諸々の罪を造るのは妄語より甚しきはありません。故に此の戒を守る者は、常に正直の德を持ち、身口意の三業を正うして、苟にも人を欺き世を僞るが如き所業を致さぬ様愼しまねばならぬ。

第五は不酤酒戒である。是れは酒を酤つて人に罪を造らせてはならぬぞとの御戒めです。御經の中には酒の三十六失だの十五過だの十過だのと云ふ委しい御誡があつて、とかくに酒と云ふものは人の精神を昏

ります。

第二は不偸盗戒である。是れは他の財物を盗むなよとの御戒であるが、意味が大層廣いです。凡て取るべからざるを取るのが皆な偸盗であります。縦や手を着けて盗まんでも、取らうと云ふ惡心が一點でも起れば最早、此の戒の罪人です。壁を壞し垣を踰えて財を盗むは竊盗であるし、恐嚇して無理に奪ふのは強盗追剝である。奉公しながら役目を怠るは位を盗むので、日當を貰て働かぬは給金の盗みです。諂諛を言ふのは言の盗み、表面だけ善人らしく飾るのは善の盗である。商人が不當の利を貪ぼる、官吏が賄賂を取る、拾物を着服する、借りた物を還さぬなど皆な盗みである。親子夫婦の間でも、與へられぬ物を無斷に費やすが如きは、縦や紙一枚糸一筋でも盡く此の戒の罪人で、未來永劫の罪の借金となるのであります。故に此の戒を守る者は自分々々の分限を守り、義務を盡し、他人の財物は微塵ばかりも犯すこと無く、進んで他の財物を保護する様に致すのが佛の御心、菩薩の大行であります。

第三は不邪婬戒である。是れは男女の禮を愼しみ、夫婦の道を守り、雙方共に正しき操を持つて、苟めにも邪しまなる不義婬行を致すなよとの御戒である。貞女兩夫に見えずとは昔からの教へだが、女ばかりに操を守らせる道理は無い。男子も亦た操は正しくして己れの妻を守り、品行を清らかにせねばならぬ。一夫一婦は人倫の大道である。我が國などは血統相續を重ずる國柄だに依て、本妻に子の無い時は夫婦相談の上、妾を置いた事例も澤山あるが、これ迚も十二分の注意を以てせねば、却て身を亡ぼし、家を

中、八日、十四日、十五日、十八日、二十三日、二十九日、三十日だけ國内の殺生を御禁制になりました。又、推古天皇の時には、一ヶ年間殺生を禁ぜられて獵士や漁業者には禁制中の扶持料を賜はつたこともある。また今上(明治)天皇陛下に於かせられては、先年、英照皇太后陛下御崩御の砌、其の御忌の爲め御一周忌の濟ませたまふまでは、主獵官に御勅令あつて、濱の離宮及び新宿御料地内に於て雁鴨等を捕獲することを御停止あそばされたと承はつて居る。是れ皆な佛菩薩の御心と申し上げねばならぬ。殺生の上にも自から罪の輕重があつて、先づ殺す者の意志から申せば、殺生しても少しも不便なと云ふ情の無いのは罪が重い。慈愍悔悟の念の起るのは輕いのです。また、先方の相手の上で申せば、恩人を殺すのは一層罪が重い。普通の人を殺すは中等、惡人を殺すは輕い。また、人を殺すは重罪、牛馬等を殺すは中罪、昆虫を殺すは輕罪と云ふ樣な等差が付られる。また、自己の爲めに殺すは重罪、世の中の人々の爲めに殺すは輕罪である。箇樣に同じ殺生でも細かに說けば輕重淺深、千差萬別である。此等の委しい事は一々述べ盡されぬゆゑ大略にして置きます。後の九箇條も皆な之れに準じて御承知なさるが宜い。兎に角、縱ひ輕い方の罪でも決して造るまいと誓ふのが菩薩の大願であります。此の戒を前の三聚淨戒に當てゝ見れば、生物の命を殺さぬと云ふが攝律儀戒、能く此の戒を持つて慈悲の德を全うするのが攝善法戒、殺生せぬのみか、更に進んで他の生命を保護し、救助するのが攝衆生戒である。是の如く、後の九箇條にも一々此の三大誓願が具つて居るのでありますから、其の心得で戒法運用の狀態を領解で下さる樣に願ひたいのであ

大慈悲心の權化である。若し之れに反して、敵の命を殺し他の國を奪ふを目的とする戰爭であつたならば、世にこれ程の罪惡は無からうと思ふ。天皇陛下が戰爭中に御詠じあそばされた御製に『四方の海みなはらからと思ふ世になど仇波の立ち騷ぐらん』とある。僅々三十一文字の中に戰爭の御目的、仁慈の大御心が溢れて居るではありませんか。斯くてこそ仁義の御戰、不殺生の殺生と申し上ぐべきである。縱しや鳥一羽兎一疋でも、自分だけ一時の快樂を取らんが爲めに之を殺すのは決して人道の本旨ではない。銃獵などは殆んど紳士の樂み仕業の樣になつて居るが、動物の虐待を防止する會まで出來て居る今日、決して賞むべき遊びとは認められぬ。拙衲は極端なる舊思想を是認するのではない。惻隱の心が内に動て、鳥一匹でも殺し得ぬ程の慈悲心があつて、而して、事に當ては百萬の敵をも恐れぬと云ふ大勇ある人こそ拙衲等の理想とする所である。銃獵などを致さんでも、活潑な、勇壯な、紳士の遊びは幾等も他に在るであらうと思はるゝ。營業の爲め鳥や魚の命を殺すのは止むを得ざることだが、猶ほ其の心の中には、自から一片仁慈の精神を存して居らねばなりませぬ。縱や害虫を樸滅する樣な場合でも、如是畜生發菩提心の回向心を持て貰ひたいです。濱邊の漁を業とする者が、毎年位に無緣供養などの法要を修行して鱗族の爲めに回向するが如きは、決して輕んずべきことではない。若し神聖なる慈愛の上から斯かる法會を行ふとしたならば、これぞ實に文明の花であらうと思ふ。敏達天皇の御時に、聖德太子がまだ六、七歲の頃であらせられたが、深く殺生の業を悲しみたまひ其の御思召を天皇へ申し上げられたので、遂に勅令を以て一ケ月の

次が十重禁戒で十箇條あります。此の戒法は梵網戒經に委しく御示しがあつて、御經の中には、外に四十八輕戒と云ふ輕い罪を禁じられたのが四十八箇條ある。それに對して重罪を誡められたのを十重禁戒と名けたのである。併し、我が宗相傳の旨意では重い方だけを擧げて輕い方は略すと云ふ譯でなく、此の十箇條の中には四十八輕戒は申すに及ばず、其の他の一切の戒律は盡く具はつて居るものと心得て戴かねばなりませぬ。而して此の十箇條は戒相、卽ち戒法の相であります。前の三聚淨戒は誓願の目的、此の十箇條は其の目的を實行する上の相を御敎誡下されたのである。

第一は不殺生戒である。これは、人間は云ふに及ばず、凡そ世の中に生きとし生ける物の命を殺すなよとの御戒めである。佛の御心と云ふは卽ち大慈大悲である。其の御心に隨て行くのが戒法の目的です。然れば常に慈悲の心に住して衆生を憐れみ衆生を救ふこそ本意である。凡そ世の中に一番大切な寶はと云へば命に過ぎたるものは無い。禽獸蟲魚に至るまで命を惜むの情に變りは無い。其の一番大切なる命の寶を奪ふと云ふことは、無慈悲の尤も甚しきものと申さねばならぬ。戰爭なども、征露の軍の如き仁義の師なれば、平和の爲め、人道の爲め、止むを得ず御開戰になつたのだ。譬へば、惡性の腫物の出來た場合の如きもので、打捨て置けば全身の祟を爲すに依て、據なく一部分の生肉をも犧牲にして、切開治術を施さねばならぬ。東洋の平和を維持し、國家の安寧を保全する爲めに、涙を揮つて幾十萬の忠臣勇士をも犧牲にせられて、世界に祟を爲す一大腫物を切開せられたのであるから、其の形は戰爭でも、其の精神は一

滅罪と受戒入位との二つに當ります。三には法門無量誓願學で、佛法善根の行門は無量なるも誓て之を修行し學ばんとの願。これ即ち攝善法戒で行持報恩に當るのです。四には佛道無上誓願成で、佛の御證り遊されし菩提の道は此の上も無く高尙悠遠ではあるが誓て之を成就せんとの願、これは最後の目的であるから三聚淨戒で、四大原則の全部が之れに當ります。

毘尼母經等には七佛通誡の偈と云ふがある。即ち『諸〻の惡は作す莫れ、衆〻の善は奉行せよ、自ら其の意を淨うす、是れ諸佛の敎なり』と云ふ四言四句の偈文です。これは三世の諸佛が共に誡めたまふ所の御敎である。一句と二句とは攝律儀戒と攝善法戒に當ります。三句目の、自ら其の意を淨うすとあるのがイツチ大切なる御敎である。菩薩の戒法は意持戒と云うて意の上から持つ戒法です。口に妄語は言はんでも意の內で人を欺さうと云ふ量見が起れば、其の人の心は旣に鬼にも蛇にも爲つて、最早、罪の塊りを造つたのである。口で妄語を吐かぬばかりではならぬ。必ずや意で妄語を言はぬ人とならねば淸淨とは申されぬ。眞實、意が淸らかなれば身と口とは自然に淨らかになる。三業淸淨なれば自から佛性の孝順心慈悲心が現はれて參るものです。故に自ら其の意を淨うすと云ふ中には、攝衆生戒がチヤント具つて居ることは最も明らかであります。

十重禁戒

佛の御法に遇ひ奉りし身でありながら、何しに罪を重ねる樣なことが出來ようぞ、何しに空しく冥きに沈む樣なことが出來ようぞ。斯く因果の理を信じ、三世の業を明らめますれば、名譽とか利益とか云ふものは第二、第三として、己れの眞心から惡を止め、善を行ひ、衆生を濟度せんとの大誓願が起るものです。既に誓願であるから、一時に其の目的を果たすことは出來ぬ。生き易り死に易り、未來際を盡して、惡しき事は必ず致すまい、善き事は必ず行なはん、衆生は必ず利益せんと思ひ願うて、寐ても寤ても忘ることが無い樣になれば、一日よりは二日、一月よりは二月、一年よりは二年と、時々刻々に、其の目的に向つて歩を進め、次第に圓滿なる理想に近づいて來るものです。其の目的に近づくことを第一の喜びとし、第一の樂しみとして參る人ならば、其の人こそは眞の菩薩、眞の君子、又た眞の自主獨立の人と申すものであります。

四弘誓願

故に、菩薩には四弘誓願と云ふ四個の誓願がある。所有菩薩方の起さるゝ誓願ゆゑ之を通願とも云ひます。一には衆生無邊誓願度で、一切衆生は無量無邊なれども、生々世々を盡して誓て之を濟度せんとの願、これは攝衆生戒に當るので、修證義の四大原則の上では發願利生である。二には煩惱無盡誓願斷で、我等の煩惱は朝な夕なに湧き出でゝ盡ること無きも、誓て之を斷除せんとの願、これ即ち攝律儀戒で懺悔

せ濟度の行を運べよと云ふのが此の戒法であります。此の三箇條を一口に云へば、惡い事は微塵ばかりでも致すまい、善い事は少しでも餘さず行ひたい、一切の衆生は濟ひたいとの三箇の大誓願である。我等お互が、尋常の何事を爲す上にも、此の三大誓願を前に立てゝ、之を以て一切行爲の目的と爲るのが、此の三聚淨戒の眼目で、これが正しく佛心の根本、諸善萬德の源泉でございます。

處が、却々此の大誓願は起り惡いもので、大抵は社會の攻撃や、人前が怖いので、據なく惡い事をするのを我慢して居るとか、名譽の爲め又は或る目的の爲めに、餘儀なく善い事を爲るとか、義理づくで詮方なしに慈善の御交際を爲るとか云ふ方が多いです。即ち、善い事でも人が讃めてくれねば馬鹿々々しいと云つて止める、さも無ければ、法律や約束の爲めに仕方なしに爲る位なものだ。惡い事でも人が咎めさへせねばズン〱とやりたがる。故に、其の心の底を探つて見れば、惡を止める爲めに止めたでも無く、善を行ふ爲めに行ふたでも無く、人を助ける爲めに助けたでもない。差引勘定して見れば何んにも無い。後に殘つて居るのは名譽と利欲と云ふ二つの塊り物ばかりだと云ふ樣な鹽梅しきです。そんな風では、とても國民の道德を高めるとか社會の公德を進めるなぞと云ふことは、遠くして遠いと申さねばならぬ。宗敎の必要なることは此處に在るです。我等お互は因果の大法に支配せられて此の世に生れ、亦もや因果の命令に從ふて彼の世に行かねばならぬ。人生僅か五十年、身命は無常にして光陰は繫ぎ難し、暫時の惡業も永く未來の苦しみを招き、一點の煩惱も忽ち三惡道の報を受く、幸に受け難き人間に生れ、値ひ難き

條、即ち三聚淨戒と十重禁戒の事を御話しに及びます。尤も此の御戒法は一戒毎に甚深の意義と功德とが具つて居りますから、少くとも一戒一席位の割合を以て御話しせねば、却々百分の一だも說き盡すことが出來ませぬ。夫故、只今はホンの大要だけを申し上ぐるに過ぎぬ。

先づ三聚淨戒と申すは攝律儀戒と攝善法戒と攝衆生戒の三箇條であります。此の戒は本業瓔珞經等に委しき御示しがあつて、之を菩薩の根本戒とも申します。即ち此の三箇條が總ての戒法の根本土臺となるので、此の戒法を受けて此の戒法の心を具へさえすれば、正しく眞の菩薩眞の佛弟子となるのです。此の戒法を受けぬ中は未だ眞正なる佛敎信者とは云はれぬです。初の攝律儀戒とは、攝は『をさむ』と云ふ字で、風呂敷の中に物を包む樣に、澤山ある物を一纏めに收め込むと云ふこゝろ、律儀は身口意三業の上の總ての惡い事を禁じた、世間・出世間一切の法律を指したのである。其の一切の法律を一纏めにして、何んな事でも、惡いと云ふ惡い事柄は誓て爲るなよと云ふのが此の戒法であります。次の攝善法戒は、攝律儀戒の裏で、佛法の中の四諦・八正道・三學・六度の行も、坐禪・念佛・題目・加持等の務も、普通、人間として行ふべき忠孝・仁義・勤儉・博愛・敎育・技藝に至る迄、凡そ善いと云ふ善い事柄は誓て之を勤め行へよと云ふのが此の戒法であります。後の攝衆生戒は一切衆生を攝すると云ふのであるから、啻だ自分一己が惡を止め善を行ふばかりではならぬ。進んでは、人間は申すに及ばず、禽獸蟲魚に至る迄も、憐れみを加へ情を施し、彼等をして同じく惡を離れ善に歸し、相共に佛果菩提の樂しみを得せしむる樣、誓

巻物に對しても、一念の信仰を注ぐ時は、所謂、感應道交の力に依て、我が心は既に三世十方の佛樣と交通して居る、『月や我れ我れや月やのわかぬまで心もすめる秋の夜の月』です。太田道灌は箇樣に大安心が出來た人ゆゑ、後に上杉定正の糟屋の邸の浴室にて、湯衣一枚手拭一本の時、欺し討に逢はれたが、板圍越に突込んだ鎗が、道灌の横腹へヅブリと入つた。サツと迸しる血汐は泉の如くだ。豫て覺悟の道灌は鎗の柄をシツカリ握つた。亦もや前後より突出したる二本の鎗、前から來たのは片足擧げて之を避け、後のやつは身を醜して空を突かせ、神色泰然、聲爽かに『かゝる時さこそ命の惜しからめかねて無き身と思ひ知らずば』と詠んで、ニツコリ笑うて死に就たと云ふことです。

我等お互も、感應道交の當體、歸依三寶の妙功德を成就して、生死岸頭に臨んでもビクともせぬ樣な大安心を得たならば、一切の善根は、茶を飮み飯を喫する上にも聚まり來り、一切の煩惱は夢の中にも起ると云ふこと無く『池水によな〳〵影はうつれども水も濁らずも月もけがれず』と云ふ境界になり、左之右之造次顚沛にも佛性常住の孝順慈悲を實現する樣になるであらうと思ひます。三歸戒のことはこれにて大略演べましたから、これより席を改めて三聚淨戒・十重禁戒のことを御話し致しませう。

三聚淨戒

さて、十六條の御戒法の中、最初の三箇條、卽ち三歸戒の事を演べましたに依つて、今度は後の十三箇

力を禪學に入れたが、却々御悟りが出來なんだ。或る日、途中に於て一人の巡禮に逢うて『何處の者ぞ』と尋ねたところが、『京都である』と答へた。そこで道灌は『京都の景色と此處とはどうぢや』と尋ねた時、恰も何處の山寺からかボーンと云ふ鐘の音が聞えた。巡禮は『左樣であります、處かはれば品かはる、山水の風光も皆な夫々に變つた趣があります、唯だ彼の鐘の音だけは京都も此處も同じ樣に思はれます』と答へた。其の時、道灌は圖らず豁然として御悟りが開けたと申すことだ。世の中の物柄、事柄の上には變つた點と變らぬ點とがある。是れ卽ち差別、平等の理である。佛樣と我等とは元より異つては居るなれども、一度大信心を起して、我れを忘れ、己れを忘れて歸依する時は、其の間に寸分も隔ての無い樣になる。之を十四節には『此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり』と御示し下されてある。我等の感ずる信仰心と佛樣の應ずる慈悲心とが道交して、一枚になるのが感應道交である。卽ち差別の儘の平等です。譬へば、戰爭中に一枚の號外が机の上に舞込で來た。之れを見ると我が軍大勝利の吉報だ。之を物理學上から見たならば、唯だ光線が紙の上に當つて、それから其の光線の反射で文字が眼の中に映り、それが腦に傳はつたに過ぎぬから、格別、痛痒を感ずることも無ささうなものだが、そこが所謂感應です。簡單なる電報でも手の舞ひ足の踏む所を忘るゝ程の喜びを生じ、それより我が兵士が艱難せし狀況等を想像して、言ふに言はれぬ感情の起るものです。此時、机の上に在るは唯だ一枚の早刷の小紙である。自分の心は旣に戰地に在る幾十萬の將卒と交通して居るです。木佛や畫像に向うても、折本や

も少なからぬ。實に慨かはしき至りと言はねばならぬ。或は風の神や雷の神を拜み、蛇だの、猫だの、古い杉の木、縁結びと稱する銀杏などを拜み、鼠小僧の墓に掌を合せたり、比翼塚に香華を手向けたり、『助けセキコム一列スマして甘露臺』に隨喜の涙を流すもあれば、佛教は古臭い、坊さんが氣に入らぬ、西洋の宗教の方が面白からうなどと、縁日見世を冷かす樣な心持で、横道に入り込んだり、甚しきは生殖器を拜む輩もあるとか申すことです。餘りと云へば淺ましきことではありませんか。故に、十二節には『徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其の歸依に因りて衆苦を解脫すること無し』と御誡め下されてあります。苟くも東洋第一の文明國、世界有數の强國と稱する我が國民としては、宗教信仰の上に於ても他の侮を受けぬ樣にせねば濟まぬではありませんか。

感應道交の當體

有名なる太田持資入道道灌は非常の大信心者であつた。風流文雅の道にも富んで居つて其の歌なども皆な教訓的の意味が含まれてある。彼の『いそがずばぬれざらましを旅人のあとより霽るゝ野路の村雨』とか『直からぬ心をかくす我が影もいとはず照す月ぞはづかし』の類は尤も道德的趣味がある。後土御門天皇の御問に對へて『わが菴は松原つゞき海近く不二の高嶺を軒端にぞ見る』と詠みしが如きは、脫俗の風韵が見えて最と奧床しく思はるゝ。此の人は武州龍穩寺の泰叟和尙や芝青松寺の雲岡和尙等に參じて、

箇條を御制定遊ばされまして、其の第二條には『篤く三寶を敬ふべし、三寶とは佛法僧なり、即ち四生の終歸、萬國の極宗、何れの世何れの人か是法を貴ばざらん、人尤惡すくなし能く敎ゆれば之れに從ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以て枉がれるを直さん』とありまして、佛法僧の三寶は人生最終の歸着處、世界萬國に通じての本尊樣であるぞ、之を敬はざれば國家民人を治むることが出來ぬぞと仰せられてある。天智天皇の如きは江州に崇福寺を御建立の折、親から御指を切らせられて寺塔の地鎭をあそばされました。聖武天皇は、朕は三寶の奴なりとまで仰せられたとある。三寶の奴と云ふは、朕は三寶の御給使人であるぞとの御詞です。なんと畏こきことではありませんか。桓武天皇が今の京都へ都を御移しあそばされた時、傳敎大師の意見を御採用になつて、九條の袈裟に象どりて町の區劃を定め、一條毎に法華經を地中に納められたと申すことです。其の外、代々の天皇が恐れ多くも九重の貴とき御身を以て、三寶の御前へ禮拜歸依あそばされぬは無い。佛法の傳はりてより今日迄、天皇で御法體に御成りあそばされたのが三十七方ある。皇后で尼に御成りあそばされた御方は七十有餘、天皇の御子樣で入道せられた御方は二百三十餘人もあらせられる。賢臣名將の中でも藤原鎌足、吉備眞備、和氣淸麿、菅原道眞、阪上田村麿、源義家、源賴朝、平重盛、楠正成、新田義貞、藤原藤房、德川家康などと云ふ方々は稀なる大信者であられました。

然るに世の中には、斯かる神德なる信仰の本尊あることを知らず、特々、邪見の道に踏み迷うて居る者

の無い宗旨はありませぬ。又、各宗派の御本尊様とても此の三寶の外には無い。念佛とか題目とか云ふものになると、少しく樣子が變る樣ですが、大體は三寶一體の基礎に依り、或は法を主として題目を唱へ或は佛を主として念佛を唱へ、或は僧を主として觀音大士等を念じたりするもので、決して三寶を離れた敎へ方は無いのであります。

三寶と國史

凡そ信仰の一念は戒法相續の根原で、また、成佛得脫の土臺であります。指月禪師は信心を戒の源と說いて置かれた。故に華嚴經の賢首菩薩の偈には『信は道の元功德の母たり、一切諸の善法を長養す、疑網を斷除して愛流を出で、涅槃無上道を開示す』とあり、大法炬經には『信受せざるが故に修行なし、修行せざるが故に解脫を得ず』とあり、華手經には『信を得るは衆樂の因と爲す、無上の信心を發せば能く無量無數の衆生の諸の煩惱の病を滅す』ともある。此の大信心の現はれたのが懺悔滅罪となり、懺悔の功德の成就した時、自然に歸依三寶の念が現はれるはずのものです。小乘佛敎の代表國とも謂つべき暹羅などは、僧も俗も佛前に向ふ時は必ず、ブツタンサラナン、ガツチヤミ（南無歸依佛）、タンマンサラナン、ガツチヤミ（南無歸依法）、サンカンサラナン、ガツチヤミ（南無歸依僧）、と歸依三寶の文を唱ふると申すことです。今（明治三十九年）を距ること一千三百零二年、推古天皇の十二年に聖德太子が日本の憲法十七

である。宇宙間の萬物、萬象は悉皆成佛の姿である。法々位に住して居る其の儘が大解脱の姿である。天地同根、萬物一體で相互に圓融無礙なるのが和合の姿である。もつと適切に申しますれば、我等の心の本體は不生不滅萬德圓滿の佛樣である。此の佛樣の御光りを昧まさぬ樣に、平生起る煩惱の塵を拂ひ、戒法具足の境界になるのが心の上の御經文です。其の御經文を活用して、世に違はず人に背かず、發願利生、行持報恩の德を現はすのが心の上の袈裟衣です。此の三寶は元來、一心の妙德であるから一體三寶と云ふのであります。箇樣に三通の德がありますれど式文には『一歸依の時、諸の功德圓成す』とあつて、我れを忘れ、己れを忘れ、一心不亂に歸依し奉る時は、一切の功德は此の歸依の心中に悉く成就するぞとの御敎であります。其の御歸依の仕方を、十三節には『正に淨信を專らにして或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧』と仰せられてある。心には淨らかなる仰信を充たし、身では掌を合せ頭を低げ、口には三寶の御名を唱へ、三業一體になつて歸依し奉れよとの御示しです。次に歸依の旨意を明して『佛は大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す』と御敎へ下されてある。佛は三界の大導師、法は煩惱業苦の病を療治する妙藥である。僧は佛果菩提の因縁を結び合ふ勝れた御友達だに依て歸依せよとの御指圖であります。譬へて申せば、佛樣は親で、僧は兄弟で、法は財産の樣なものです。此の三拍子揃つてこそ眞の安心が出來るのである。佛敎に如何程多くの宗派がありましても、此の三寶に歸依し奉る儀式

無歸依佛等と申したものであります。而して、此の御歸依は一時のことではない、生き易り死に易り生々世々を盡して御歸依するのであるから、生を易へ身を易へても三寶を供養し、敬ひ奉らんことを願へよと御示し下されたものでございます。

三寶の功德

此の三寶には三種の功德と申して、現前三寶と住持三寶と一體三寶との三通りの德があります。現前三寶と云ふは現在世に現はれたる三寶で、卽ち歷史上の事實としての三寶である。佛は卽ち大聖釋迦牟尼如來、法は卽ち如來御一代五十年の御說法、僧は卽ち摩訶迦葉・舍利弗・目連・阿難・須菩提等一千二百五十人の常隨の御弟子等は申すに及ばず、三國傳戒の祖師方及び各宗各派の御開山も皆な現前の僧であらせられる。住持三寶とは、末世の今日では佛樣も在さず、從て面前、御說法を聽聞することも出來ぬが其の佛法の功德を末代に住持、卽ちとゞめたもつ所の三寶です。卽ち佛は本堂などに安置して在る御木像や御畫像等である。法は折本や書冊になつて居る一切藏經、僧は只今の僧侶達です。今日では此の住持の三寶を手懸りとして御歸依をせねばならぬ。一體三寶とは、宇宙間に充ち涉つて居る眞理の姿です。解り易く申せば、我等の心の上は本來具へて居る三寶です。佛樣に變らぬお互の本心本性が佛である。其の心に自から、離塵と云うて煩惱の塵を離れた德のあるのが法である。其の心に自から和合の德のあるのが僧

戒と云ふのである。次に、僧は梵語で、委くは僧伽耶と申すのを和合衆と譯してある。大勢が仲善くして居ると云ふ意味です。即ち佛弟子のことです。進んでは佛の道を學び、退ては道を傳へて衆生を導くのが佛弟子の役目である。此の役目を勤めるには、同行の者とも和合し、佛の御教にも背かぬ樣に和合し、一切衆生とも和合せねばならぬ。故に和合衆と云ふ名が付けられたのである。佛樣が在しても法が無ければ御教化は出來ぬ。法があつても僧が無ければ其の法を今日に傳へて我等を利益することが出來ぬ。法は佛の御心であつて僧は法の器械の樣なものだ。夫故、僧に御歸依をせねばならぬ。之を歸依僧の戒と云ふのであります。

歸依と云ふは、歸はとつぐともかへるとも訓む。女が嫁に行くことをとつぐと云ふ。それは、一旦、嫁入をしたならば本當の實家へ歸つた積りになつて、向ふの家を自分の家と思ひ、向ふの舅姑を實の親と思うて、心も身もそつくり夫の方に打任せると云ふ意味になる。また、依の字は人扁に衣を着けた字で、人が着物を着る樣に、夜でも晝でも、夏でも冬でも離れぬと云ふ意です。即ち、歸依すると申すは、佛・法・僧の三寶に信心を捧げた以上は、三寶を以て親とも夫とも思ひ、我が身勝手を爲ずに身も心も御任せ申し、寐ても寤ても御傍を離れぬと云ふことである。南無の字も梵語で、歸命と譯してある。歸はもとづく、命は命令御指圖と云ふ樣な意、即ち、彼方の御指圖にもとづいて毛筋程でも違背は致しませぬと御歸依の誓を立てる詞である。して見れば、南無も歸依も同じ意味で、つまり梵語と漢語とを雙べ擧げて、南

器に入れて獻上した所からほとけと稱したと云ふ說もある。契仲阿闍梨の說は、佛陀を浮屠とも云ふ、浮屠は『ほと』とも讀む『け』は木である、貴人を木に譬へ賤しい者を草に譬ふることと古事記・日本紀等に例がある。即ち梵語の『フト』に尊崇の詞『け』を加へてほとけと稱したのぢやと云うてある。また、天桂禪師の歌に『ほとけとは誰が結びけん白糸の賤がをだ卷くりかへしみよ』とあるが如く『ほとけ』は『ほどける』の意味で解脫の義である。我等は煩惱と業障の繩に縛られて自由を得ぬ。其の繩目がほどけて解脫を得られたのが佛樣ぢやと云ふ說もある。其の說は何れにもせよ、佛樣と申すは一切の煩惱を斷じ、一切の苦痛を離れ、無限の智慧と、無限の慈悲とを具有したまひ、以て宇宙の眞理を開き顯はし、一切衆生を平等に御濟度下さるゝ御方であるに依て、我等は第一に御歸依せねばならぬ。之を歸依佛の戒と云ふのである。次に、法は梵語では達磨耶と申すのを法とも軌持とも譯してある。法はのり、手本と云ふこと軌持は軌則を守り持つと云ふことです。火は熱し、風は動き、水は濕ひ、地は堅しと云ふが如きは古今に通じて變ると云ふことは無い。柳は綠、花は紅、松は直く棘は曲れり、皆な一定の軌道をチヤンと持つて居る。凡夫量見で造つたものは時に從つて變更するが、自然の妙理には變動が無い。變動が無いからのり、手本となる。佛の御說き下された道は即ち天地の公道、宇宙の眞理で、時移り人換るとも佛法には更に變動が無いから法と云ふたものです。十六條の戒法もやはり法であるから萬世不變です。我等は此の法の力に依て成佛も出來、安心も決定するのであるから、誠を傾けて御歸依をせねばならぬ。之を歸依法の

く一切の衆生を利益せんとの大誓願を立てた御方、これが眞の佛弟子である。我等も御戒法を受けて斯の如き大誓願を起せば、取りも直さず菩薩の境界である。さすれば此の御戒法を受けた者が佛様で、受けぬ者は迚も佛様の御仲間入は出來ぬ。御戒法は實に佛の御命である、佛の御心である。斯かる貴とき御戒法を相傳し奉る我等こそは、此の世に比類なき幸福者と申さねばなりませぬ。

三歸戒

十六箇條の最初の三歸戒と云ふは、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧の三箇條です。至心懺悔の手元に於て、罪障を消滅し身口意の三業が清淨潔白になつたならば、必ず先づ受け奉るべきは此の三歸戒であります。故に修證義の十一節には『次には深く佛法僧の三寶を敬ひたてまつるべし、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひたてまつらんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり』と御示し下された。佛と云ふは梵語で委くは佛陀耶と申す。支那では覺者、又は智者と飜譯してある。覺の開けた智慧の明らかな御方と云ふことである。それを日本ではほとけと申し上げる。此のことに就て昔から種々なる解釋がある。人皇二十九代欽明天皇の十三年冬十月、百濟の聖明王より始めて金銅の佛像や幡蓋や經論を獻上せられた時、其の佛像を摩で丶見るに溫か味があつた。そして之れを『ほとほりけ』があると申したのが展轉してほとけと稱するに至つたと云ふ訝しな説がある。又、其の佛像をホドキと名くる素燒の

ると云ふ佛教の掟である。定は禪定で、坐禪をして心を治め煩惱を離るゝことである。慧は智慧で、眞理を研究して智識を開くことである。此の三通りを標準として佛法を學ぶに依て三學と申したのです。して見れば、戒法と云ふものは三學の一部分に過ぎぬ樣ですが、我が宗相傳の御戒法は大に趣が異ふので、卽ち、戒・定・慧の三學を總合した上に現はれた戒法であります。故に此の戒法の中には三學共に具はつて居る、普通佛教の上から云へば、大乘にも小乘にも皆な夫々の戒法があつて、夫れは〳〵非常に廣大なものです。大乘戒の根本とも謂つべき梵網戒經には十重戒・四十八輕戒と說いて、重罪を戒められたものが十箇條、輕罪を戒められたものが四十八箇條ある。其の他の經律には五戒、八戒、十戒、二百五十戒、三百五十戒、五百戒、數限りも無い程である。此の中には出家だけの戒もあり、在家だけの戒もあり、兩方に通ずる戒もある。此等の戒律を研究するには律學と云うて一の專門學科になつて居る位である。然るに我が宗相傳の御戒法は總體で十六箇條である。卽ち三歸戒と三聚淨戒と十重禁戒との十六條である。佛樣も我等も出家も在家も等しく十六箇條で增しも減りも無いです。承陽大師は『この受戒の儀必ず佛祖正傳せり、丹霞天然藥山の高沙彌等同じく受持し來れり、比丘戒を受けざる祖師あれども此の佛祖正傳菩薩戒を受けざる祖師未だあらず』と仰せられて、釋尊直傳の法である。之を佛祖正傳菩薩の大戒と稱して居る。菩薩といふは大心の士、卽ち大きな心のある人と云ふことです。大きな心と云ふは、平等博愛の心を以て實行を永遠に期する人のことです。佛の御戒法を相傳した上は、此の世はおろか生々世々を盡して、普ね

受戒入位

禪戒の本質

此の席に於きましては、我等お互が安心成佛の基礎とする曹洞宗の大眼目たる受戒入位の法門を、御話しに及ぶ心得であります。

受戒入位とは、戒法を受けて佛の位に入ると云ふので、是れは釋尊が梵網戒經に『衆生、佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なり』と仰せられた、卽ち、我等衆生は佛の御戒法を受け奉りさへすれば、此の身此の儘三世諸佛の位に御仲間入である。我等の位が既に大覺圓成の佛と同等になるとすれば、取りも直さず佛樣の御子であつて、切ても切られぬ親子であるぞと云ふ御語を約めて、受戒入位と申したものであります。此の事は曹洞宗旨の大綱の御話しの時一通り演べて置きましたから、成るべく重複せぬ樣に致す考へであるに依て、彼此思ひ合せて御了解を願ひます。

佛敎では戒・定・慧の三學と云ふことを立てる。戒は防非止惡と申して、非道を防ぎて惡い事を止めさせ

から、佛祖正傳の御戒法は、そつくり此の身に御相續、其の時よりして、三世諸佛の御仲間入り、これぞ安心成佛の正門でございます。」

御座る方に向つて三拜九拜せられました。之を見聞する者、餘りの貴とさに一同袖を絞つたさうです。これより後は、四百餘人の弟子だち一人として法を犯す者なく能く治まつたばかりか、天下の道俗、翕然として其の德に靡いたと云ふことであります。

諸君いかゞでござります。今の世の中にも法遇法師の樣に、己れを輕んじ道を重んじ身を忘れて德を磨く方があつたならば、天下、風俗の紊亂、道德の衰頽も未だ必ずしも憂ふるに及ぶまいと思ひます。敎育家にして是の如くならば必ずや學校の風紀も整ふに相違ない。政治家にして是の如くならば國家の政令も必ずや行はれるに相違ないと思ひます。我等も眞實、懺悔の念が現はれたならば、法遇法師の如き麗しき志が自然と生れて來ねばならぬ。菅原の道眞公の如きは佛敎の大信仰者であつたが、無實の御災難にて筑紫へ左遷せられたまひし折、四國へ御立寄りなされて、或る驛長に『驛長驚くこと勿れ時の變じ改まるを、一榮一落是れ春秋』人の盛衰、花の榮枯、皆な是れ定まる因緣ぞやと御示しあそばされた。御臨終の前には『病は衰老を追うて到り、愁は謫居を趁うて來る、此の賊逃るゝに處なし、觀音念ずること一回』と云ふ偈を御作りになつた。無常の賊は常に此の身を襲うて止まぬ。此の時に當りては唯だ觀音菩薩の御慈悲を念ずるより外は無いと云ふので、皆な是れ懺悔の眞心より仰せられたのである。我等は唯だ〳〵因果因緣の道理と佛樣の御慈悲とを信じさへすれば、其の手元に自然と淸淨なる懺悔の心が現はれて來るのです。懺悔の心が現はるれば、我等の境界は恰も大淸潔法を施行した樣になる

一人の弟子が禁制の酒を飲んだ。酒と云ふものは如何ほど内所で飲でも、直様、看板に現はれて藏すことの出來ぬものだ。法遇法師は相當の警誡を加へて其の儘御許しになりました。然るに、其の事を遠方に居られる師匠の道安法師が聞き込で、一箇の包み物を贈られた。法遇法師は謹んで封を開いて見ると竹の筒が入てゐる。筒の中には荊杖と云ふ罪人を撃く竹で作つた杖の樣なものが入つて居る。そこで御考へなされた。あゝ是れは此の程、酒を飲んで無禮をした者があつたが、これと云ふも予の教へが届かぬからじやと云ふ御思召しで之を贈りたまうたのである、なにからなに迄の御親切、最と有り難きことかなと涙を流して推し戴き、直ちに椎を鳴らして合山の弟子を御集めなされ、自ら彼の竹筒の前に香を燒いて御拜をあそばし、維那と申す衆僧の頭役を呼び出して、御身は御苦勞ながら、我が師道安法師に代り、此の杖を以て予が身を撃てくれよと命ぜられた。如何に御命令とは言ひながら、門弟の身として、どうまあ杖が當てられませう、何卒御免下されと云うて御辭退したが、法遇法師の申さるゝには、こは決して御身が予を撃つに非ず、卽ち師道安法師の御折檻であるから、是非々々賴むとの御語、今は辭するにも辭せられず、總身汗を絞り、震へる手に杖を執り心の中に手を合せながら、三度法遇法師の背を撃きました。法師は泣き崩るゝばかりに涙を洒ぎ、あゝ我れ罪障深くして道德未だ具はらず、弟子を敎育するに其の掟全く行はれぬ、是れ皆な己れの業報である、我が師は大慈大悲を以て今ま此の咎を賜ひて我が身を撃ち、我れをして益々其の罪過の淺ましきことを知らしめたまふ、此の大恩何れの日か報ずべきやと云うて、師匠さんの

心を苦しめたり、疑の雲に蔽はれて眞の信仰を失うたりするの類です。是れは確固たる智慧の力に乏しき所より起る煩惱である。此の愚癡よりして貪欲や瞋恚を起すことが澤山あるから、愚癡と云ふものは煩惱の親爺で、瞋恚は其の伴頭、貪慾は其の手代の樣なものです。どうも、親爺が愚癡で、番頭が疳癪で、手代が慾張、これでは手の付けられたものではありません。承陽大師は『貪慾なからんと思はゞ先づ須らく吾我を離るべきなり、吾我を離るゝには無常を觀ずる是れ第一の用心なり』と仰せになつて、深く我が命の無常なることを觀念して、『おれが我れが』と云ふ我儘根性を打ち捨てさへすれば、自から貪慾を制することが出來る。また『直饒ひ我を殺さんとしたる人なりとも、眞實の道を聽んとて誠の心を以て問はゞ怨心をわすれて是が爲に說くべきなり』と御示し下されて、我れを殺さうとした惡人でも、誠の心を以て道を聞かうとしたならば、恨みの念を忘れて敎化せよとの御敎訓です。また『參學のともがら菩提心をさきとして佛祖の洪恩を報ずべくばすみやかに諸因諸果をあきらむべし』とも御敎へ下されて、因果の道理を明らむるのが愚癡を離れて正しき智識を開く源であります。

心の大清潔法

支那の有名なる釋の道安法師の御弟子に、法遇法師と申す方がありました。江陵の長安寺に住して專ら御經の講釋をして居られた。門下に投じて敎を受くる弟子が四百餘人もあつたと申すことです。或る時、

百里千里の遠きも滞り無く進行して、其の目的地に達することが出來る。若し少しでも之を履み外したならば、汽車其の物が毀れるばかりか、多くの人にまで損害を與へます。人間も亦た必らず守るべき二本の軌道がある。所謂、道理と人情の二つである。此の軌道を守つてこそ、自他平等に利益して、人生の道中も何の滞りも無く進歩向上して、終に其の目的を達するに至るのである。道理と人情を守りさへすれば、其の人の得た財は正義の寶で、其の人の愛する色は夫婦の大倫です。食物も名譽も之れに準じて知るが宜い。睡眠なども貪といふのが付くと『朝寐坊晝寐の好きな宵寐坊時々起きて居眠りをする』と云ふ様に、なまけ者に爲るばかりか、却て身體に大害を招くに至ります。此の貪欲は三毒の中で一番能く働く奴で、社會の罪惡も八分通りは此奴の仕業である。『十惡をならべて置てながむれば貪欲坊の丈の高さよ』である。次に瞋恚とは、短氣を起したり、腹を立てたり、人を憎んだり、恨んだり、嫉んだり、妬んだりする煩惱です。是れも道理と人情との軌道を守つて『なんのその岩をも透す桑の弓』と云ふやうに出て來れば、勇とも爲り、義とも爲り、天晴、人間の美徳であるが、大概は自分勝手と云ふ奴から來るので、之れが爲めに喧嘩・口論・人殺しなどゝ云ふ罪惡をも犯せば、家庭や社會の平和を破つたりすることが幾程あるか知れぬです。天皇赫として怒りたまひ鳳詔一下百萬の貔貅立處に動き、進んで清韓の妖氛を拂ひ、以て東洋の平和を開くなどは決して瞋恚では無い。是れ正しく大慈悲心の運用である。次に愚癡とは、物の道理に迷うたり、また、道理を知りつゝも覺悟が出來なんだり、役にも立たぬ事をクヨ〳〵思うて自ら

も、意も、三業齊しく雲を離れし月よりも清く、泥を出たる蓮よりも鮮かになるぞよとの御示しです。『しばしこそ人の心に濁るともすまでやむべき法の水かは』一時の迷に依り濁り切つた心でも、懺悔の慈門に入りさへすれば、忽ち本來清淨なる心の水が美はしく現はれて來る。『曇りなき三世の佛の影々も心の水にすまぬ日ぞなき』と云ふ身の上になるのでございます。

三毒の煩惱

然らば、本來清淨なる心の水の濁す所の、貪瞋癡三毒煩惱とは何んなものかと云ふことを、ザツと御話しせねばならぬ。初めの貪欲とは、自分の氣に入つた順境に對して、濫りに欲しがる煩惱です。之を五欲とも云うてある。五欲とは、一には金錢・衣類・土地・家屋・其の他所有財物に就て貪ぼり求むる欲。二には男女の色情に耽ける欲。三には食物の上で足ることを知らぬ欲。四には徒らに名譽を貪ぼる欲。五には睡眠を貪ぼりて寢てばかり居たがる欲である。財を求め、色を喜び、食を取り、名譽を重んじ、時に睡眠して身心を休養する、これらは人間の本性より出づるもので之を絶對的に捨てよと云ふのではない。唯だ貪と云ふ字が附くから惡いのです。貪とは、取るべからざるを取り求むべからざるを求むることで、義理にも違ひ、人情にも背いて、唯だ利己一點張りから出た私量見のことです。凡そ人間には必らず守るべき一定の道のあること、丁度、汽車に軌道がある樣なのです。二本の軌道に依ればこそ、

御文じやと申し傳へて居る。此の意味を簡單に申しますれば、我等が過去の昔より造りし所の諸々の惡しき作業は、皆な始めも知れぬ以前より起し來りし貪欲と云ふむさぼる心、瞋恚と云ふいかりはらだつ心、愚癡と云ふ物事の明らめの着かぬ心、此の三毒の仕業に由るのである、而して、此の三毒の煩惱は身と口と意との三業の作用に依て種々の罪過を生じたのであれば、現在我等の身も、果報も、位地も、境遇も、苦しみも、悲しみも、皆な煩惱と惡業の招く所で、今更誰を恨まん樣も無く、誰を咎めん樣も無い、思へば耻かしき淺ましき身の上であります、只今と云ふ只今こそ、佛の御慈悲を信じ奉り、佛の御誓願に縋り奉り、一切合切、皆な盡く懺悔仕ります、何卒々々我等を憐れみたまひて、直ちに御濟度を願ひ上げ奉りますると云ふ詞になるのであります。御文は少か七言四句であるが、懺悔の精神は露程も殘る所なく述べ盡されて居る。眞實心を以て佛に向ひ奉り、心を傾け信仰を捧げて此の御文を唱へますれば、百萬陀羅の口上よりも行屆いた完全なる懺悔が出來ます。次の御文には『此の如く懺悔すれば必らず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり』とありて、箇樣に懺悔する時は、自から佛樣の御助けが得らるゝぞよ、心念と云うて心の中でも深く懺悔して餘念を雜へるなよ、身儀と云うて身の儀式の上でも徹底懺悔の姿になり切てしまへよ、發露白佛と云ふは、口に發して言ひ露はし、蘊まず佛に申し上げると云ふことだから、一切我今皆懺悔と口に發して、無始劫來の罪障を蘊まず懺悔し奉れよ、左すれば發露懺悔の功德力に依て罪障の根本がサラリと銷殞して、身も、口

至心懺悔せよとの御勅令を下された。此の佛名會は其の後五六百年間も宮中に行はせられて在つたと申すことです。去れば太政大臣藤原良經の『一年のはかなき夢やさめぬらん三世の佛の鐘の響きに』と云ふ歌や、紀の貫之の『年の中に積みたる罪はかきくらし降る白雪と共に消えなん』と云ふ歌など澤山遺つて居ります。我が宗の授戒會と申す御戒法を相傳する法會は、前後一週間であるが、戒法相續の濟む迄はやはり南無三世諸佛と唱へて御拜をするのが第一の加行となつて居る。是れ取りも直さず佛名會であります。此の授戒會の五日目の晩には、特別に懺悔の道場を設けて、戒弟が一人々々に道場に入て、戒師の前で懺悔を致しますが、是れぞ室內直傳の法で、最も有り難い儀式ではありますが、普通から云へば、式文にも『二儀兩懺ありと雖も先佛の承受したまふ所の懺悔の文あり罪障悉く消滅す』とあつて、二儀だの、兩懺だの、種々の儀式作法があらうとも、懺悔の大精神に至つては同一なるに依て、我が宗では佛祖の御傳授に基づき、唯だ一心に懺悔の御文を唱へて、佛の御前に懺悔すれば罪障消滅疑ないぞよと敎へ下されてあります。

懺悔の御文

其の懺悔の御文は、修證義第十節にある『我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔』と云ふのである。此の御文は華嚴經の普賢行願品に出て居つて、古來より三世諸佛御正傳の

ふがある。是れは、向ふの佛樣を當てにせず、罪の本性は元來無生で實體が無い、普賢觀經に『一切の業障海は皆な妄想より生ず、若し人、懺悔せんと欲せば端坐して實相を觀ぜよ、衆罪は草露の如く慧日能く消除す』とあるが如く、罪と云ふものは妄念より起つたもの、其の妄念は本來清淨なる心の水の上にポツリと現はれた泡の如くで、これぞ妄念の實體だと云ふものは無い、即ち本來空である。罪障本と空なれば我が身も空である。懺悔する人も、懺悔すべき罪も、同じく實體は無いものだと自ら觀念して、罪障の束縛を解脫するのであります。此の他にも種々の教へがありますれど今は略して置きます。また、二た通りの懺悔と申すは、事懺と理懺とです。事懺と云ふは、事相の上に現はしたる儀式に依て懺悔するので、即ち前の作法懺や取相懺の類であります。理懺と云ふは、事相に依らず、理を觀じて懺悔するので、即ち無性懺の如きを云ふのであります。右等の外に觀音懺法、法華懺法と云ふ懺悔法がある。我が宗門では、地方に依て能く觀音懺法は行はれて居ります。是れは三世十方に在ます佛法僧の三寶を拜請して、供養禮拜して、罪障を懺悔する法式です。それから、淳和天皇の天長七年十二月に始めて宮中に行はれたと云ふ佛名會などもやはり懺悔式です。是れは諸佛集功德華經に御說き下されてある過去の千佛、現在の千佛、未來の千佛、此の三千體ある三世の諸佛の御名を唱へて御拜を爲し、一年中造つた罪を滅ぼすと云ふ法會である。佛名を唱へ禮拜すれば、身口意業を淨めて業障を消滅すると云ふことは、藥王藥上觀經等に明文があります。淳和天皇は、畏くも、天下一般に對して、朝野を論ぜず、盡く唱名禮拜して

懺悔の法則

懺悔と云ふことの大略を御話し致しましたから、只今は引續き懺悔の法則に關することゝ、懺悔の御文のことを陳べ様と思ひます。

懺悔の法則には二儀兩懺と云うて二た通りの儀式と二た通りの懺悔があります。先づ儀式の上に小乘の法と大乘の法とがある。　小乘の法は、人前懺悔と申して自分の作つた罪過を人の前で懺悔するので、丁度、子供が惡い事をした時、親の前で謝る様な工合なのです。是れは自分の知つて居る罪だけしか懺悔が出來ぬ。我等の罪障は幾億萬劫以前から造りに造つて來たのだから、現在一世の罪などは實に些細なものです。現在一世の罪障の中でも、覺えて居るものよりは覺えて居ぬ方が却て澤山あります。夫故、人間同士で懺悔するなどゝ云ふことは、倫理上に所謂過を悔い善に遷ると云ふ點から見れば結構には相違ないが、我が罪障の總てを根本的に消滅し盡して、佛果菩提を成就しやうと云ふ懺悔には成りかねます。次に大乘の儀式には色々の數へ方があります。第一に作法懺と云ふがある。是れは、七日七夜の間、始終、身と口と意との三業を淨らかにして、所謂精進潔齋して佛前に懺悔するのです。次に取相懺と云ふのがある。是れは靜に坐つて、懺悔の行をして、文殊菩薩や普賢菩薩が其の前に姿を現はして御證明下さるまで坐つて居るのです。菩薩の御姿が見えれば懺悔が成就したのだと云ふ仕方です。それから、無性懺と云

に物を施しても恩にきせるなよ、人より恩を受けたならば忘るゝなよ、人の立身出世などを羨まずに自ら務めて其の道を守れよと云ふ意味の文章である。伊八は之を見て、宿善の催ふす所か、飜然として懺悔の念を起しました。そこで、直ちに訴訟の願下をしまして家に歸り、それからと云ふものは全で生れ易つた樣な大善人と爲り、生涯、慈善事業に身を委ねた位であつた。近處に鎧潟と申す大きな潟があつて、毎年、水害を被むる村が百餘ケ村もあるので、之を憂ひて、獨力、水利を通じて水田の開墾を爲さんと企てたり、又は、天保八年の大飢饉の折、家財諸道具は申すに及ばず、衣類から帶までも賣り拂つて救助に盡力しました。酒屋を商賣としては居つたが實に道德堅固であつて、書を能くかいて雅號を墨池軒と稱した。僅か四十八歳で死にましたが、其の一代の德行は實に百代の模範とも謂つべき程でありしと云ふことです。是れ等は倫理的懺悔とでも申しませうか、普通、倫理の上から申しても、己れの非を知り、過を悔いて能く之を改むるは、實に人間の美德でありまして、かういふ人なれば彼の田中伊八の如く、日に新たに月に新たにして、益々道に進み德を輝すことは疑ありません。況てや我が佛の敎へたまふ所の懺悔は、無始劫來の罪障を根本的に消滅して、此の身此の儘が受戒入位の道に進んで佛果菩提を莊嚴し、利生報恩の德を輝かして永劫不退の樂しみを得るに依て、我等お互は深く難値難遇の念に住して、急ぎに急いで此の廣大の慈門に御入り下されたきものでございます。

も、至心懺悔の其の時は、心の地中より出づる悔悟の熱氣と佛の御慈悲の光りとが妙合して、一刹那の間にも、直樣、奇麗サッパリと消滅してしまふ。所謂『照すなる三世の佛の朝日影降る雪よりも罪や消ゆらん』である、こゝを第九節には『願くは、我れ設ひ過去の惡業多く重なりて障道の因緣ありとも、佛道に因りて得道せりし諸佛諸祖、我れを憐みて業果を解脫せしめ學道障り無からしめ云々』と御示し下されたのである。次の文には『佛祖の往昔は我等なり、吾等が當來は佛祖ならん』とありまして、佛樣や菩薩方でも、元とはやはり我等と同じ樣な罪障深き身であらせられたのだ。懺悔心の御力が堅固であらせられたに依て、今は萬德圓滿の御身と御成りあそばされたのです。我等とても同じこと、懺悔の慈門に入りさへすれば、一足飛に受戒入位の身となりて、闇路を照す炬の光りを其の身に放つことになりまする。

天保年間の頃、越後の國の（今は西蒲原郡の中になつて居る）矢島村に田中伊八と云ふ人がありました。性來非常の大酒飲で、一日に二升宛はかゝさぬと云ふので、人は酒顚童子と云ふ渾名をつけ酒顚の伊八と呼んださうです。それのみならず、却々公事ッぽい（健訟の風ある）方で隨分感心の出來ぬ人であつたらしい。或る時、同村の者と事を構へて代官所に訴を起した。其の代官所の裏手に座敷があつて、床間の上に大きな額が掛けて在つた。伊八は不圖、之を見ますと、其の額には、『人の短を道ふこと勿れ、人の長を忌むこと勿れ、人に施すも愼んで念ふこと勿れ、施を受けては忘るゝこと勿れ、世譽慕ふに足らず』と云ふ文が書いてありました。これは人の惡いことを道ふなよ、人の善きことを嫉むなよ、人

向ふでも『新年御芽出度う』と挨拶する。此方で笑へば向ふも笑ひ、此方で腹を立てると向ふでも變な顔をするものです。夫故、此方から施をして人を惠めば人も亦た親切を盡して惠んでくれる。惠み手の澤山あるのが富貴の人の子供達である。貧乏人には惠み手が無い。乞食の子にでもなると親でさへ着物一枚も滿足に惠んではくれぬ。人に頭を低げれば人にも低げられる者と爲る。威張散らかすと、人に威張られる者とならねばならぬ道理です。實にや『よしあしのうつる心の水鏡よく〳〵見れば我が姿なり』である。こゝの道理が解りさへすれば、縱ひ如何ほど苦しみがあらうと不平があらうと、人をも恨みず世をも恨みず、唯だ我が心に立返つて、煩惱業障の最も深きことを悲しみ、佛前に就て無始劫來の罪障を懺悔するが一大事ではありませんか。

鬼悔いて佛となる

經律異相の中には『前心惡を作すは雲の月を覆ふが如く、後心善を起すは炬の暗を消するが如し』と云ふ御文があります。これは、我等が以前の煩惱の爲めに惡い事を爲たのは、丁度、叢雲が起つて月の光りを覆ひ藏した樣なものである。あゝ惡かつたと懺悔して善心を起すのは炬の火が夜路の暗を消す樣なものぞとの御示しです。二十日も三十日もかゝつて山の如くに積つた雪でも、太陽の光りに逢へば、其の御光りと地中から出る熱氣とが合體して瞬く間に解けるものだ。無始劫より此來、積みに積んだる罪過で

す尊とい御話しがあります。此の御話しを能々嚙みしめて味うて戴きたいものである。宇宙の本體には迷ひの悟りのと云ふ音沙汰は無い、苦しみと聞くも樂しみと聞くも、つまる所は一心の響であります。『心こそ心まよはす心なれ心に心心ゆるすな』であるから、常に一心の動く源に用心して、地獄や鬼を造らぬ樣にせねばなりませぬ。中阿含經の中に七事不齊と云うて、人の世の中に七通りの不平均な事があるとて其の因緣を示されてある。一には壽命の上に長壽の者と短命の者とがある。長壽は慈悲があつて物の命を殺さなんだ功德で、短命は之れに反して殺生した報である。二には身體の上に就て、生來丈夫な者は衆生を嬈まさゞりし德で、弱い者は衆生を苦しめた報だとある。三には容貌の上で、相貌の美い者は堪忍の德で、醜い者は腹を立た報だとある。四には德の上で、人の敬ひを受くる者は嫉妬心の無かりし德で、人に輕蔑されるは嫉み妬みをした報だとある。五には身分の上で、尊とく生るゝ者は謙遜して人に向て高ぶらなんだ德で、卑い者は高慢した報だとある。六には財產の上で、身代の好い者は布施した德で、貧乏は吝嗇の報だとある。七には知識の上で、聰明な者は智慧ある人に近づいて勉强した德で、馬鹿な者は惡い友達を好んで怠けた報だとある。これはホンの一通り因果の有樣を呑込み易い樣に御示し下されたのではあるが、此の御示しに依て萬事を推し測つて見ることが出來ます。世の中に有りと有らゆる一切萬象は、皆な自心現の影像と申して我が心の影法師である。年始狀の樣なもので、『恭賀新年』と書いて手紙を出せば、向ふからも『恭賀新年』としてよこしてくれる。此方で『新年御芽出度う』と言へば、

それのみならず『其の利益普ねく情非情に蒙らしむ』と仰せられて、他人ばかりでなく、非情なる草木に迄も其の利益が及ぼさるゝ事となる。玆に一軒の家がありとせんに、其の家なるものは、材木や、壁土や、石や瓦を以て組織つたもので、無論、非情と云うて情識の無い物である。家の庭とても石や、植木で造つた物で、是れも非情である。サア非情の物ではあるが、其の家の主人や、家族が、若し悪人ならばどうであらう、あの家は恐い家だ、あすこの庭に足踏するのは氣味が悪いと申すでせう。主人や家族の心懸が悪ければ、家の疊や敷居から、庭の植木までが、とんだ御相伴を食はねばならぬ。之に反して、若し主人や家族の心が善心に立返りますると、もうあの家は大丈夫だ、あすこの庭に入つても安心だから、ちと遊びにでも参らうかと云ふ様な鹽梅になるではありませんか。『傀儡師首に懸けたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと』心一つの使ひ方で地獄にも極樂にもなるのでございます。

七事不齊

釋尊より十八代の祖師伽耶舍多尊者が、御師匠さんの十七祖僧伽難提尊者の御傍に御出なされた時の或る日、風が吹いて本堂の鈴をチリヽンと鳴らした。すると御師匠さんが『あれは風が鳴るのか鈴が鳴るのか』と御問ひあそばされた。なんでも無い御言の様だが非常に奥深い意味を含んで居るのです。其の時、伽耶舍多尊者は『風の鳴るにも非らず鈴の鳴るにも非らず我が心の鳴るのでございます』と御答になつたと申

其の人は最早、精神的に奇麗な身に生れ易つた樣なものです。昨日の惡人も今日は善人と爲り、昔の凡夫も今は佛であるから、罪惡の根本はサラリと消滅して、最も美しき境界に作り了つたのである。之を懺悔滅罪と申したものであります。

それであるから、修證義の第七節には『佛祖憐みの餘り廣大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を證入せしめんが爲なり、人天誰か入らざらん、彼の三時の惡業報必ず感ずべしと雖も懺悔するが如きは重きを轉じて輕受せしむ。又滅罪清淨ならしむるなり』と仰せられて、我等の罪を滅して清淨なる境界と成ることは、懺悔の一門に依るの外は無い。是れ即ち佛樣や祖師方の廣大無邊なる御慈悲の力より與へられたる御光りである。縱や三時業の報に依て、現在か未來に必ず受くべき罪がありましても、懺悔の力は能く其の罪を輕くするのみでなく、全然消滅してしまふことも出來るぞとの御教訓である。第八節には『然あれば誠心を專らにして前佛に懺悔すべし』とあつて、懺悔するには少しでも心に虚僞があつてはならぬ。誠心、即ち眞心より出た懺悔でなければ役に立たぬ。眞心より出た懺悔心は自から佛樣の御慈悲の御心と感應するから、罪障消滅は疑ないです。また、世の中の實際から見ても、一人たりとも惡い者があれば、多くの人にまで迷惑を及ぼすものだが、其の代り一人でも眞實善心に立戻る時は、多くの人に如何ほど幸福と安心とを與へるか知れませぬ。故に『淨信一現するとき自他同じく轉ぜらるゝなり』で、自分ばかりが善人に轉ずるのではなく、他人にまで自から感化を與へて善に進ましむる樣になります。

りも脆く、我が身に逼まる種々の苦しみは秋の空に漲ぎる雲の樣に晴間と云ふものは少ない。是れ皆な前々の世から造り置いた煩惱と業障との作業である。故に、思へば〳〵淺ましき身の上哉と心の底から慚愧して、それと同時に、佛樣の御慈悲の德と御誓願の力とを、少しの疑をも挿まず、深くも深く信仰し、其の御前に於て、今迄の罪過の御詫を爲て御濟度を願ふのが卽ち懺悔であります。

懺悔とは何か

懺悔と云ふ詞は、天竺の語では懺摩と申すを支那では悔過と飜譯してある。悔過とは過を悔いると云ふことです。今は天竺の原語の中の懺の字と飜譯語の中の悔の字とを合せて、懺悔と云ふ熟語を定めたのであります。一口に申せば、あゝ我等こそは無始劫來よりして無量の煩惱を起し種々の惡業を重ね、三時の業報力に依つて現在の身を受け、罪過より罪過を生み、冥きより冥きに沈むことの耻かしさよ、それが爲めに、佛にも神にも變らぬ心の寶を持ちながら、我れと我が手で六道八難の巷に彷徨うて居つたのである、將來は深く自ら愼んで、煩惱の穢を清め惡業の塵を拂ひ、誓て成佛の素懷を遂げねば成らぬ、あはれ願くは、佛祖、我れを憐れみたまひて此の罪業の衆生を御助け下されと懺悔するのであります。韓退之も『人其の過を知らざるを憂ふ、既に之を知りて改むること能はず、是れ勇なきなり』とも云ひ、易經には『善を見ては遷り過あれば改む』とあるが如く、徹底、己れの非を悔いて、慚愧の心湧き出づれば、

彼の母親が小兒を育てる時の艱難はどんなでありませう。小兒の爲めには穢い思ひもせねばならず、夜も碌々安心して眠ることも出來ぬ。其の骨折は一通りや二通りではない。加之、小兒の爲めには心を苦しめることも、罪を造ることも決して少なくはない。紀の貫之の歌にも『人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな』とあります。併しながら小兒の爲めには、如何程艱難しても、慈愛深き母親は決してそれを艱難とは思はぬ。其の艱難こそ母親の身に取りては無上の樂しみなのである。母親は小兒の爲めに艱難を以て、我が身に取りての極樂淨土の樂しみとして居るのである。市原の王は小兒の少なきを悲しんで『言とはぬ木すら妹と兄ありといふを唯だ一人子にあるがくるしき』と詠み、山上の憶良は『銀も黄金も玉も何かせん勝れる寶子に如かめやも』と歌ひ、有名なる赤染衛門は其の子の大江の擧周が和泉守の任を果して後大病に爲つた時、住吉神社の祟だと思うて『かはらんと祈る命は惜しからでさても別れん事ぞ悲しき』と詠んで、己れの命を以て我が子の身代に立たうと願うたと云ふことである。これと同じことで、成佛した上の仕事は、衆生濟度と御恩報謝の二つの外は無い。此の二つを務むるのを最上の樂しみと感ずる樣でなければ佛樣とは申されぬ。佛法信仰は箇樣なる動機より出たものだに依て、世の中に是れ程清き、美しき、神聖なる希望は無いと云うても決して過稱ではあるまいと思ふのであります。

御話しが後に戻りますが、前に述べた通り、我等お互の心は多くは煩惱の穢を以て充され、我等お互の身と口とは動もすれば罪過を造るの道具に使はれて居る。而して、人の命の無常なることは草の葉の露よ

の間にやら冥途の御迎がやつて來て、否應なしに三途の故里に御戻りである。思へば淺ましき世の有樣ではありませんか。銘々が自心の罪の深きこと、行の穢れ多きこと、此の世の最と淺ましき事が十二分に解つて、能々それを恐れ愼しみさへすれば社會の罪惡と云ふものは自然と無くなる譯です。傳染病の恐ろしいことが解らぬ中は、到底、十分なる豫防の注意は屆かぬはずのものです。其の淺ましいことを自覺して、あゝ恐ろしい恥かしやと氣の付いたのが佛法信心の動機となつたのであります。然らば成佛の曉には何をする積りかと云ふに、大慈大悲の誓願力に乘じて一切の衆生を濟度し、各自の天職を勤め行うて御國と父母と社會と佛との御恩を報ずるのが目的である。

或る人が熱心に極樂往生を願うて居るから、拙衲が、貴下は極樂へ生れて何をする積りでありますと尋ねた處が、其の人の申すには、極樂に參れば働かんでも甘い物が食べられ、家を作らんでも美しい蓮の臺に寢て居られ、遊びたい時は雲に乘て何處へでも出掛られる、年貢も取られず、借金取も來ず、見たい物が見られ、聞たい物が聞かれると云ふから、一刻も早く行きたいと思ふとの挨拶であつた。どうでせう、こんな了簡で極樂へ行かれるならば、極樂と云ふ御淨土は全でヌラクラ者や卑しん坊の集合所だ。往生淨土の目的はそんな譯のものではない。

底からの慚愧

べたい、馬鹿では困るから學問をせねばならぬ。野蠻では困るから文明に進めねばならぬ。兵備が不充分であるから之を擴張せねばならぬ。實業が發達して居らぬから之を奬勵せねばならぬ。是れ皆な現狀の不滿足から起るのであります。唯だ希望の上に於て、自分一箇の爲めにすると、天下國家の爲めにすると、欲情の爲めにすると、正義の爲めにすると、一時の爲めに圖ると永遠の爲めに圖るとの別があつて、小人とか、君子とか、惡人とか、善人とか、小さいとか、大きいとか、凡夫とか、菩薩とか云ふ名が附くのであります。いま我等お互が佛法を信仰して成佛得脫を求め樣と云ふ希望は、如何なる動機から起つたものであらうぞと申すに、一部の迷信者はそつち除けとして、是れは極めて正しい淸らかな、極めて神聖なる心から起つたものであります。何故かと云ふに、佛に作りたいと云ふのは、決して名譽を求むる爲めでもなければ利欲の爲めでもないからである。

熟々自分の境界を顧みるに、拂ひ難きは邪見の雲、起り易きは煩惱の波である。心の水は却々に澄み難く、胸の雲は容易には晴れやらず、四苦八苦の風は朝に夕に我が身を襲ひ、三毒五欲の火は寐ても寤ても我が身を焦し、殆んど一日も安心の時節が無いではありませんか。酒を飮み色に愛でゝ一時の憂を忘れ、花を眺め月を見て暫の苦しみを離れましても、朝顏の花の忽ちに萎むが如く夢の間に消えて仕舞ひ、後に殘るものは、歡樂極つて哀情多しで、其の暫時の樂しみが却て苦しみと爲ることが多いです。『いつまでか明けぬ暮れぬと營なまん身は限りあり事は盡せじ』すつたもんだと浮世の波に搖れて居る中に、いつ

懺悔滅罪

三毒五欲の火

これよりは、我が宗の安心起行の標準たる、修證義の四大原則の中に、一番最初にある懺悔滅罪の一則を御話し致します。

抑も、人と云ふものは必ず一の希望を抱いて、其の希望に向つて進んで參るものであります。若し希望の無い人であつたならば、其の人は殆んど死人も同然で、生きてゐても效なき者と言はねばならぬ。彼のナポレオンが『人に欲望あるの緊要なるは猶ほ天地間に大氣あるを要するが如し』と云うた通りです。教育家に爲りたい、政治家に爲りたい、財產家に爲りたいと云ふのも、また、公共的精神の上から、起つて國家を治めたい、天下の窮民を救ひたい、世界に福音を傳へたいと云ふのも、皆な希望の一つである。此の點から申せば宗教と云ふものも、佛に成りたい、神に成りたい、極樂に往生したい、天國に生を受けたいと願ふのであるから、人心必然の希望として現はれねばならぬことであります。凡そ希望なるものは現在の位地や境遇に滿足せぬ所から生ずるのである。貧乏で困るから金を儲けたい、腹が減てならぬから何にか食

の修行が籠つて居る、發願行持の修行の中には、本來成佛と云ふ大安心の御證りがちやんと具はつて居るのであります。して見れば四大原則と云ふも畢竟じて一個の大信心の外は無いのです。

我等お互は、幸にして斯かる有り難き御敎に遇ひ奉りしは、生々世々の好因緣、盲龜浮木にもましたる身の仕合せではありませんか。『潔よく月は心にすむものと知るこそ暗の晴るゝなりけれ』であるに依て此の好因緣を歡こび喜こんで、急いで大信心を決定し、一時も早く修證具足の境界となり、以て佛敎信徒たるの素懷を成就せられんことを切に希ふ所でござります。

す、諸を己れに施こして願はずんば亦た人に施す勿れ』とある様に、孝順心慈悲心の徳を失なはざる時は、其の道彌々明らかにして自から其の身を全うするものです。殊に舌の如きは、内は非常に强いが外は非常に柔かだから、何んな物が入て來ても寛大の量を以て之れに接して居る。氷の樣な冷たい物でも、茶碗蒸の樣な熱い物でも、砂糖でも、醬油でも、餅でも、酒でも、擇り嫌ひはせぬ。盡く舌の上に載せ、唾液を以て之を溶解し、甘い味を醸し、之を神經に傳へて喜ばせ、而して、何んな甘い物でも好な物でも自分の手元に留めては置かぬ。サツ〳〵と胃の腑に運んで全身に利益を與へて居る、舌の如きは實に是れ菩薩行の標本である。

修證は一如なり

猶ほもう一つ御心得を願はねばならぬことは、本證妙修を別々に分けて御話しを致したのも、一通り安心と起行との上に當てゝ申したので、御開山の御教示の極意から見れば、修と證との二つは決して離るゝことが出來ないのです。前の、月の姿と月の光りとの譬へで十分御解りでもあらうが、もう一つ譬へて見れば、證は蠟燭に點た火の如く修行は蠟燭の火の光りが室内を照して一切の暗を拂ふが如きものであります。又は證は水の樣なもので修行は波の樣な譯合である。故に、證の中には必ず修行があり、修行の中には必ず證がある。我は本來佛であると安心の決定した時、其の安心の中にちやんと發願利生、行持報恩

から、三界六道の間を駈け廻つて悪業の罪を重ねるのだ。一切衆生皆な佛性ありと云ふ佛の御教化に預かりて、氣が付て見れば、あゝ本證の頭は此處に在つたのだと云ふことが知れる。佛祖は心の外に法を求むるは外道であるぞと御戒め下されてあるに依て、我等お互は眞實至誠の心を以て自己を信ずるが佛法の一大事であります。

舌の菩薩行

劉向の『說苑』と云ふ書物の中にかうゆふ話が出て居る。支那の有名なる聖人老子の師匠は常從と云ふ人であつた。此の常從が死際に、枕元に會つて居る門人の中から老子を喚び出して、自分の口を大きく開いて、我が舌は存して居るかと問うた。老子は恭しく、存して居りますと答へた。重ねて齒は何うぢやと問うた。齒は缺けて多くは損んで居りますと答へた。其の時、常從は、舌の長へに存するは柔きが爲めである。齒の早く缺けるは硬きが爲めである。硬き物は他に逆うて仕事に無理があるから傷れ易い、柔かな物は佗に逆ふことなく能く其の志を守るに依て身を全うすることが出來る、汝等若し道を行はんと欲したならば、徒らに人を當てにするよりも、銘々の口中に在る舌を以て御手本とせよと教訓して死なれたさうであります。一寸面白いお話しです。成程、我見の強い者は自ら敵を求め、自ら仇を結びて、遂には其の身をも亡ぼすに至る。志を守つて能く柔順の徳を養ひ、中庸に所謂『忠恕道を違ること遠から

らずに本證妙修、圓滿具足の佛様になれるのであります。

外道の求法

昔、天竺の室羅筏城と云ふ町に演若達多と申す婦人がありました。毎朝、鏡に向つて御化粧をして居つたさうだが、或る朝いつもの通り鏡に向つた處が、どうしたものか顔が映つて見えぬ。餘程疎相かしい者であつたと見えて、早合點して、サア大變だ、いつも映つる顔が鏡の面に映らぬは、テッキリ昨夜、盗賊が入て己の頭を盗んで行つたに違ひない、頭が無くつては、笄も挿されぬ、白粉も付られぬ、こりや此の儘は捨てゝは置かれぬと云ふので、表の方へ飛出して、役所に駈け込み盗難の訴を致した。役人は呆れ返り、汝は何を云ふのぢや、其の通り頭が有るでは無いかと云ふと、演若達多は腹を立て、盗まれたものを有るなどゝ仰しやるは、貴下方もやはり泥棒の肩を持つて居らるゝに相違ない、あゝ殘念なと、亦もや表へ飛び出し、町中を駈け廻つて、誰か己の大切な頭を盗んだ者がある、頭が無くては御辭儀をするにも差支へる、返してくれや／＼と、まるで狂亂の體で手も着られぬ。其の時、一人の者が後から物をも言はず、拳骨を振り上げて演若達多の頭を撲ぐりつけた。すると、ビックリ驚顚、アヽ痛いと云うて兩手を頭に上げたが、ニッコリ笑うて、まあ／＼宜かつた、頭が此處に在つたわいと申したと云ふ話しがある。佛性常住の佛の證は誰とても具へぬ者は無い。無明煩惱の爲めに自ら迷うて、頭が無いと思ひ込む

共に無上菩提の樂しみを得樣と云ふ大誓願を起さねばなりませぬ。崇光天皇が『鈴鹿川八十瀨の浪の立ちゐにも我が身の爲めの世をば祈らず』と御詠じあそばされしが如きは、最も貴とき發願利生の大御心と申すべきである。

それから、行持報恩の方は佛性常住の孝順心の現はれた相であります。行持とは、おこなひたもつと云ふので、我等お互が日々行ふべき事を行ひ持つべき事を持つと云ふことです。教育の御勅語に『爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ』云々と御示し賜はりし御掟が正く行持の標準であります。細かに分析すれば、此の中でも出家は出家の行持があり、在家は在家の行持があり、其の人々に依て皆なそれ〴〵の正しき行持が無ければならぬ。其の行持を以て御恩に報ずると云ふが行持報恩である。佛教には四恩と云うて四の恩を示してある。一には父母の御恩、二には國王の恩と申して卽ち天皇陛下の御恩、三には衆生恩と云うて世の中に生きとし生ける者に皆な御恩があると仰せられてある。四には三寶の恩と云うて佛と法と僧との三つの御恩、以上四つの御恩に報ゆるのが人間の道です。其の報恩の致方は外には無い、日々の正しき行持が取りも直さず御恩報謝であるぞよと云ふが行持報恩であります。發願利生も、行持報恩も、皆な本證の明月より出づる所の光明であるから、眞實、大安心が決定すれば、任運自然に衆生利益の誓願とも爲り、御恩報謝の行持とも爲つて來るので、つまる所は淸らかなる大信心の上に現はれる天眞の妙用でありますから、如何なる下根劣智の人でも、一念信仰の心さへ堅固なれば、骨折

うて居つたのが、後に、長者に救ひ上げられて、汝は決して非人でも乞食でも無い、今日よりは大長者の若檀那であるぞと言はれた時の嬉しさはどんなでありましたらう。我等も亦た是の如く、凡夫外道、悪人邪見人、地獄の釜のコビリ付とまで思うて居つたのも、今は昔の夢物語〳〵、我れは其の儘の佛なりけりと解つたなら、汝は大長者の相續人であるぞと言はれた時の迷児よりも、一層深い喜びが起らねばならぬではありませんか。サア我れは其の儘の佛様ぢや、今日よりは天下晴れての證の姿ぞと安心が極つたならば、月影の隈なく物を照すが如く佛様の妙用が起らねばならぬ。其の妙用を妙修と云ふので、是れが即ち發願利生と行持報恩との二箇條です。

修行の法門

發願利生とは誓願を發して衆生を利益すると云ふことであるから、取りも直さず佛性常住の慈悲心の現はれたのである。衆生界無邊なるが故に誓願も亦た無邊でなければならぬ。一人や二人や、一國や一世界ではない、一日や二日や、一年や二年ではない、釋尊は『今ま此の三界は皆な是れ我が有なり、其の中の衆生は皆な是れ我が子なり』と仰せられて、三界六道は皆な己れが教化の領分である、其の中の衆生は盡く我が子であるとの御誓願である。我等お互も亦た全宇宙を以て領分とし、一切衆生を以て親子兄弟と爲して、七生や十生どころではない、生き易り死に易り未來際を盡して利益を與へ、慈悲を施こし、諸

心も、我等の身も、そつくり其の儘さとりの月の姿であります。十六條の御戒法と云ふも我等の具へて居るさとりの御光りの名である。其の御光を自ら昧まして居つたに依て、釋迦如來は大慈大悲の手を垂れて、それ此處に在るぞよと御指し示し下されたのが戒法の御相續だ。其の御相續を戴いて、あゝ證の月は我が身にありしか、萬德圓滿の御佛とは我が身の事でありたるかと、深くも深く信仰して心に受け收めたのが受戒入位と申すのであります。受戒入位とは『衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る』と釋尊が御示し下された梵網經の御語を約めたので、即ち、御戒法を受けて佛の位に入る此の身此の儘の成佛と云ふことです。こゝを常濟大師は『よのつね釋迦老漢汝等と倶に行住坐臥し、汝等と倶に言語伺候して一時も相離るゝことなし、一生若し彼の老漢を見ずんば諸人悉く皆不幸の人たらん』と仰せられてある。これは佛樣は決して外には在まさぬ、我等と倶に一處に寐たり起きたりしてござるぞ、それをウツカリして居ては佛樣を殺す樣なものであるぞとの御示しである。一處にござると云ふは、我等お互が其の儘の佛なるぞと云ふ意味なので、即ち本證のことである。近代の名僧と言はれた行誡上人が『夜もすがら唱ふる三世の御佛の御名はむかしの我が名ならずや』と詠ぜられたのもこゝの事だ。これが我が宗の大安心であります。サア斯樣に我等お互は、本來成佛で其の儘の證の姿なりしと明らめが付いたならば、世にこれ程喜ばしいことはありますまい。法華經にある譬の通り、大長者の一人息子が、幼き時、迷兒となつて四方に漂泊し、遂には我れは長者の相續人と云ふことをも打ち忘れ、自ら橋の下、席の上の非人ぢやと思

然らば、本證妙修の二の德がどうすれば我等お互の身の上に顯れるかと云ふに、之を修證義の中には四箇條に說いてある。是れが我が宗安心起行の四大原則であります。本證のさとりを顯はす法門としては懺悔滅罪と受戒入位との二箇條があり、妙修の實行としては發願利生と行持報恩との二箇條があります。此の事は席を改めて委しく御話しを致す積りではあるが、便宜上ザツと其の筋道の大略を申し上げて置かうと思ふ。前に申した月と雲との譬への通りで、我等は無始劫來よりして煩惱業障と云ふ雲霧の爲めに、冥きより冥きに入て永く三寶の御名をだも聞かず、三界六道の暗路を辿つて、自ら苦しみを招ぎ、自ら迷ひに沈んで居つたのですが、一度佛祖の御敎を聽聞して見れば、我等は釋迦如來にも彌陀如來にも寸分變らぬ本來の佛の身である。佛性常住の孝順心、慈悲心は宇宙の妙用であつて、我等も亦た宇宙同體の德を具へて居るのである。然るに無明煩惱の所業とは申しながら、夢にもそれを知らずして、迷ひに迷ひ、苦しみて居ることの恥かしさよと深くも既往の罪過を後悔して、佛の敎を信じ奉り心底から佛の御救ひを願ふのが卽ち懺悔である。其の信心懺悔の風の力で罪障の雲霧が跡形も無く消滅すると云ふが懺悔滅罪であります。此の懺悔滅罪は、正しく本證の上の方便行とでも申しませうか、つまり證を開く準備の法門です。罪障の雲霧が消えて了へば『影は金鏡を開いて滿ち、輪は玉壺を抱いて淸し』とも謂ひつべき本證の明月は第一義天に懸つて居る。其の證の月の本體は佛性常住の孝順心慈悲心の御姿である。其の御姿には自から十六條の御戒法の光りが輝いて居る。第一義天と云うても餘所の事ではありませぬ。我等の

ふるチリ〳〵草の露までも影をほそめて宿る月影』で、一草一木の葉末に殘る白露にも玉の樣なる影を宿し、『月は明なり銀色三千界、人は醉ふ金風十二樓』とか『里わかずながむる人の袖ごとに影も惜まぬ山の端の月』と云ふ樣に、幾百億萬の人に對して、隔ても無く漏しもせずに、淸らかなる光りを與へます。これが卽ち、本より空にすみわたる證の月が、一切萬物に對して影を分ち光りを放つ、所謂、妙修であります。普通で云ふ修證は、雲霧を拂ふのが修行で、月を見るのが證だと云ふ樣な鹽梅に取扱うて居るが、我が宗の敎へ方は、雲霧は如何樣に有らうとも、一念信心の風を以て一時にサラリと吹き拂ふことが出來るから、高祖大師の所謂『信成就の處、佛祖現成す』で、其の當體、間に髮を容れず、嬋娟として證の月が現はれます。月の姿を見認たのが證で、其の月影が『千江水あり千江の月、萬里雲なし萬里の天』と、千江萬水に影を分つて世界の暗を照すのが修行であります。一歩を進めて申しますれば、雲霧などには貪着せず、雲霧よりも一段高い處に飛び出して、直ちに月宮殿の眞只中に入る時は『雲よりも高き處に出でゝ見よしばしも月に隔てやはある』で、如何程雲霧があらうとも、少しも邪魔にはならぬ。『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』で、恰も泥の中に在りて泥に染まらぬ蓮の華の如き境界となるのであります。

證悟の法門

めに致すのであるから、證を開きさえすれば、それで修行の方は卒業濟になるのであるが、妙修と云ふは、證つて了つた上に現はれて來る修行でありますから、之を佛事とも云ふ。卽ち佛樣の仕事なのである。本來成佛と氣が付けば、其の本證の御光りが、身の上にも、口の上にも、心の上にも燦然として輝き彌り、寢るも、起きるも、盡く證の作用、佛樣の御仕事となつて參るから、丁度、日月が世界萬物を照すが如く、別に報酬を得る爲めの行でもなく、名利を求むる爲めでも靈驗を得る爲めでもない、天眞無漏の妙用である。また、天の長へに覆ひ、地の長へに載するが如くにして、世界のあらん限り、盡未來際、生々世々の修行であつて、これで事濟みお終ひと云ふことは無いから妙修と名けられたものであります。古人の歌に『雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月』とあるが、月の姿は雲に鎖さるれば、しばしは藏れて居る樣に見えても、月其の物は一分一厘も雲の爲めに傷けらるゝものではない、十重二十重に雲は圍まうとも、月は依然として、瑠璃よりも淸らかなる姿を以て中天に輝いて居ります。本來成佛と云ふ證の明月は、縱や煩惱業障の雲に鎖されて居る樣に見えても、本の證は毛筋程も增減はありませぬ。煩惱業障の浮雲はホンの一時の湧き物であつて其の實體があるのではない。淸風徐ろに來れば行衛も知れず消え失せてしまふ。我等の信心こそ正しく煩惱業障の浮雲を吹き拂ふ淸風である。信心一たび起れば、懺悔の念忽ちに現はれ、佛智不思議の力と妙合して無始劫來の雲霧は影も形も無く消滅し、本より空に有明の證の月が、皎々として宇宙の全面に輝いて居ります。サア一度有明の月が現はれさえすれば、『庭に生

一世や二世の修行では佛には成れぬ、生々世々を盡して後に始めて證が得られるのだと說くものもあつて、種々樣々でありまするが、我が曹洞宗に於きましては、別に佛祖直傳の法がありまして、修證の取扱ひ方が普通一般の說き樣とは違ふのです。どう違ふかと云ふに、丁度、他の宗門とは反對でありまして、修行してから證るのではなく、先づ最初にちやんと證を得て、それから修行すると申すのであります。尤も、淨土眞宗には平生業成と云ふ說があり、眞言宗では卽身成佛と說き、華嚴宗では初發心時便成正覺と說いてあるから、頗る似寄ては居る樣なもの〻、細かに味うて見れば、我が宗の御教はまた格別。で、之を直に本證妙修と御示し下されてある。卽ち、承陽大師は辨道話に於て『我等さいはひに一分の妙修を單傳せる初心の辨道すなはち一分の本證を無爲の地に得るなり』また『今も證上の修なるが故に初心の辨道すなはち本證の全體なり』と仰せられたのが此處です。

本證と妙修

本證とはもとよりさとると云ふので、修行してから悟るのではなく、我等はまだ此の世に生れない前からチヤンと證て居る立派な佛樣であるから、今更事新らしく證りたいと云うて修行する迄もない、本來成佛であるぞと云ふ意味になる。また、妙修とは、妙は不可思議と云ふことであるから、心にも詞にも及ばぬ程、極貴とい、極氣高い、極奥深い修行と云ふ意味になる。なぜならば、普通の修行ならば證を開く爲

しい哉、煩惱業障の雲に蔽はれて其の妙德を顯はすことが出來ぬ。其の煩惱の雲霧を拂ひ除けて皎々たる眞如の明月を眺めさせたいものだと云ふが、釋尊御化導の御本懷であります。それだに依て、八萬四千の根機に應じて八萬四千の法門を開き、衆生の病無量なるが故に佛の授けたまふ御法の良藥も亦た自から無量にして、遂に三千餘卷の經文とも爲り、之を三國に傳へ〳〵て、たうとう今日の日本佛敎の如く十三宗五十餘派にも分るゝ樣になつたのである。縱ひ如何程、法門の數が分れて居樣とも、歸する所は修行の方法と證悟の道とを御說きあそばす外に佛の御本懷は無いのです、尤も經論の中には三界六道の狀態、世界成立の因緣、其の他五蘊・十二處・十八界とか、五位・七十五法とか、百法とか、六大周遍とか云ふ重々の法相を御說き下されてはあるが、決して之を一科の學問として論究するのが大目的ではなく、唯だ〳〵佛法の修行を全うし菩提の悟を成就せんが爲めの方便資糧に過ぎぬのである。それでありますから、我が曹洞宗に於てもやはり修と證との二つを以て安心起行の根本標準と致して在るのです。

併し、茲に一つ是非心得て置かねばならぬ大切なることがあります。それは何かと申すと普通佛敎の上では修因證果と申して、先づ初めに修行の功を積んで、其の功力に依て證悟を得る、乃ち修行は原因で證は結果だと云ふが一般の定則である。而して、其の修行の致方が、宗派々々に依て說き樣が違うて居るから、或は此の世に於て直に證が開けると敎ふるもあり、或は此の世では成佛の因緣だけは定まるが、生を易へて未來に至り、佛の淨土に生れてから始めて成佛の目的が達せられると示すもあり、中には到底、

我等お互は、受け難き人間の身を受け、遇ひ難き佛法に遇ひ奉ることの出來た最勝稀有の生れ方です。我等の身の上こそ大本山の本堂にも劣らぬ立派な果報です。斯かる萬物の靈長とも稱すべき本堂を持ちながら、大切な心の本尊樣が御疎末では申譯の無いことです。承陽大師も『誰とても日かげの駒は嫌はぬを法の道うる人ぞ少なき』と云うて御慨きあそばされ、常濟大師は『みだりに古今の情に封ぜらるゝことなかれ、聲色の法にとゞこふることなかれ、夜間をも日裡をもむなしくすることなかれ』と御誡め下されてあります。さすれば露の如き無常の命を虚しく荒野の草に散らさず、急ぎて眞實の佛教を信受奉行せらるゝが肝要であります。これより愈々我が宗の修證の大要を述ぶること致しませう。

佛祖直傳の法

八萬四千の法門、三千餘卷の經文を、煎じ詰むれば修證と云ふ二字の中に盡く收まるのであります。修は『をさむ』と訓じ、修行と熟字して、佛樣の御教に從て身にも口にも心にも佛の道を修め行ふこと、又た、證とは『さとり』と訓じ、證悟と熟字して、佛の道を悟り明らめて自分の境界が佛の道とキチリと合體して一つものになることである。承陽大師は『此の法は人々分上にゆたかに具はれりと雖ども、未だ修せざるには顯はれず、證せざるには得ること無し』と仰せられて、佛樣の御悟りあそばされた菩提の道と申すも、つまり宇宙の眞理なのであるから、我も、人も、皆な本來に具へて居るのではあるが、悲

げて居つたが、師匠はデップリ肥つた體格であつたので、思はず知らず『好箇の佛殿而かも佛未だ聖ならず』と口走つた。これは、師匠さんは相變らず立派な身躰で大本山の本堂の樣だが、惜い哉、中の本尊樣が御疎末だといふ意味です。師匠は驚いて、何ぢやと云うて振向いた。すると、神贊は『佛聖ならずと雖ども且つ放光を能くす』佛樣は疎末であるがまだ生きてござるから頼もしいと云ふ程の意である。二三日を過ぎてから、師匠が窓の下で御經を看て居ると、一疋の蜂が飛で來て障子にぶつかつたが、表へ出られぬ處から、同じ處をブン〳〵〳〵無暗にぶつかつて居る。傍に居た神贊が之を見て『世界は斯の如くに廣濶たるに肯て出でず、他の故紙を鑽ること驢年にし去らん』と言ひながら『空門肯て出でず、窓に投ずるまた太だ癡なり、百年故紙を鑽る、何れの日か出頭の時』と云ふ偈を作られた。是の意は、世界は是の如くに廣い、出入はどこからでも自由自在だ、然るに小さい處に目を着けて、そこ許りに迷ひ込で居るからして、百年の間、障子の故紙をつゝついたからとても生死を離れる分は無い。一切衆生も亦た是の如くである。常住不變の大涅槃、生死其の儘の無量壽佛でありながら、因緣假和合の相に執着し五慾六塵の煩惱に頭を突込み、繩なき繩に縛られて、我と我が手で三界六道の苦しみを招きつゝあるは、ア、氣の毒千萬のことだと云ふ意味である。之を聞た師匠は非常に感歎せられまして、始めて神贊の一大事を明らめたことを知り、遂に兩人手を取つて、再び百丈禪師の下に參じ、兩人とも禪師の御弟子になられたと云ふありがたい御話しがございます。何んと趣味ある御話しではありませぬか。

が八人で夜番をして居る哩、もう少し過たら眠くなつて寝るだらうと云うて潜んで居つた、小僧奴、此の度は大きく見える眼鏡を當がつて置いた。泥棒は暫くして窺いて見て二度ビックリ、ヤア恐ろしい大入道が見世に居る哩。小僧は面白がつて其の眼鏡をアベコベに當がつた。泥棒は益々驚き此の家はなんと云ふ廣い家だらう、奥行が二三里もありさうだ、こりや堪らぬとて逃げ去たと云ふ御笑草がある。此の泥棒が、見る度毎に驚き恐れたは唯だ眼鏡の爲めであつて、小僧其の物は大きくもならず、小くもならず、増しもせず、減りもせぬ。我等も亦た宇宙觀や人生觀の上に於て、邪見の眼鏡に惑はされて虚しく惡業の衆生とならぬ様用心せねばなりませぬ。

痴蜂窓紙を鑽る

昔、支那の福州古靈の神贊禪師と云ふは有名なお方であるが、本は同じ福州の大中寺の弟子でありました。若い折、行脚に出掛て、當時傑出の大善知識百丈禪師の會下に投じて難行苦行を積み、遂に立派なるお悟りを開かれ、三四年を經て大中寺に歸られました。師匠さんは神贊に向つて、どうぢやな、何んな修行が出來たなと尋ねられしも、謙遜なる神贊は、どう致しまして、一向に未熟で御耻しうございますとのみ申して居つた。だが、師匠孝行なる神贊は、ツク〴〵師匠の様子を見るに、少しも安心の態度が無いから心潜かに氣の毒に思うて居られました。或日のこと、風呂を沸して師匠をお入れ申し、背を洗うて上

因縁を造り出す御主人公は誰れであるかと云ふに、それは我が心です。華嚴經の覺林菩薩の偈にも『心は工なる畫師の如く能く諸の世間を畫く、五蘊悉く從て生ず、法として造らざる無し』とある。『千なりや蔓一筋の心から』である。我等の心こそ實に天地萬物の主宰者造物主である。心と云へば直ぐ唯心論とか一元論とか云ひたがるが、そんな小理窟では呑込の付くものではない。我等こそは、不生不滅の大涅槃の床に坐して、天地の主宰權を掌握して居るのである。其の主宰者たる我等お互が、生死の二途に迷ひ、萬物の爲めに驅り使はれて、惜い欲い、憎い愛いなど〻騷ぎ廻り、無我夢中に生涯を送るのは全く妄想の熱に浮かされて居るからです。此の妄想熱を拂ひ除けて、金剛堅固の大安心を得るのが佛敎第三の目的であります。世の中には、佛敎の何物たるを知らずに自ら信仰を度外視する人もあり、また、佛敎中に在りながら其の目的を誤つて居る人も少なからぬのは、甚だ歎かはしいことです。故に、修證義の第六節に『當に知るべし今生の我身二つなし三つなし、徒らに邪見に墮ちて虛しく惡業を感得せん惜からざらめや』と御誡め下されてある。何卒、各々方は此の點に深く御注意なされて、眞正の大功德を得られたいものであります。

或處に眼鏡屋があつたが、或時、一人の盜賊が忍び込んだ、見世の小僧が早くも目を醒して見ると、今や戶の節穴から見世を窺かんとする鹽梅である。頓智の小僧は、早速に八つ目の眼鏡を節穴に當がつて、帳場に坐り込んで居た、泥棒はそれとも知らずコツソリ窺いて見て驚いた、此の家は餘程用心深い、小僧

であると明らめねばならぬ。抑も此の宇宙なるものは、空間と云ふ廣さの上でも、時間と云ふ長さの上でも限りが無い。尤も世界の上にも成・住・壞・空の四相とて生出た時代もあり、ジッと住まつて居る只今の様な時代もあり、壞というて、破壞してこはれる時代もあり、空というて何にも無くなつて空々寂々の時代もあつて、人間の生・老・病・死と同じ様ではあるが、其の生と見えるも滅と見えるも盡く因緣和合の上に現はれた假の相である。宇宙そのもの丶上には少しも增したの減たのと云ふことは無いです。一天雲漲ぎり天日爲めに昏く、雨車軸を流すの時も、天地の上には更に變りは無い。清風徐ろに起り、山月影爽かに、萬里の長空一點の雲なき時も、宇宙の上には毫も增減ば無い。一滴の水、結んで霜と爲り、蒸發して氣體と爲り、結晶して氷と爲り、雨と爲り、雲と爲り、雪と爲り、霰と爲るも、水そのものは、やつぱり不生不滅である。我等も亦た其の通りで、因緣に依て假りに生れ因緣盡れば則ち死す、生死の其の儘が、やがて不生不死の大涅槃です。其の道理が解らねば到底、大安心は決定致されませぬ。『ああ樂や虛空を家と住みなして須彌を枕に獨り寐の春』と云ふ樂しみは現はれませぬ。サア此の涅槃の光りが見留められたならば、我等の境界は火に入ても燒けず、水に入ても溺れぬ金剛不壞である。

邪見の眼鏡

扨て過去も、現在も、未來も、唯だ因緣生より現はれた無常なる幻の影であることは分つたが、其の

それからもう一つの問題は、即ち生死の一大事です。修證義の一番初めに『生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因縁なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし、是時初めて生死を離るゝ分あり』とありて、生と死との二途を明らめるのは實に佛教信徒の一大事であります。

小西來山が臨終の時に『來山は生れたとがで死ぬるなりそれで恨みもなにもかも無し』と詠んだと云ふが、全く我等は生れたから死ぬるのである。人生てふ大海に浮沈出沒する一切の事柄・物柄は皆な生と死との中間に飜へる大波小波である。一息截斷すれば萬事休す、山を拔くの力、世を蓋ふの英氣、花を欺くの顏、人を驚かすの富も棺桶の蓋一枚でお終ひです。『夏草やつはものどもの夢の跡』、『長き夜の眠りの中にまた眠り夢の世に猶ほ夢を見る哉』夢の世に猶ほ夢を見て、短かき夢の浮橋を渡りつゝ、惜い欲い、憎い愛いともがきにもがいて居るのである。而して、我等はどうして生れて來たのであらう、それは知らぬ。死んでどうなるであらう、それも知らぬ。來た處も知らず、行先も知らず、我等は實に六道の辻にうろついて居る憐れむべき迷ひ兒ではありませんか。それならば如何樣に生死を明らめたなら宜いかと云ふに、修證義には生死即ち涅槃と心得よとある。これが生死の明らめ方です。

涅槃とは不生不滅と申して、生れも死にもせぬ、常住不變の義である。生れたり死んだりすると思ふは因緣假和合の相を執する妄見である。我等も、萬物も、世界も、元より生れもせず死にもせぬ常住の涅槃

すると良心の制裁力が次第に弱くなつて、何事にも誠實の志操が乏しく、殆んど道德的精神の基礎がグラついて居る樣に思はれます。

　征露の戰爭に於て、東鄉大將なぞは大勝利のある每に、大元帥陛下の御威稜と皇祖皇宗の御神德とに依るものと御信じあそばされたといふ。中には、無暗に天祐冥助と云ふ樣なことを申しては、國民を迷信に誘ふ樣になりはせぬかと言うて心配する向もある。成程、何にも彼も天祐を賴みにする樣では迷信にも陷いらうが『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』と云ふは實に是れ神人感應の妙理である。誠の道に叶うたる心が無ければ神佛の感應は無い。至誠の心を以て事に當れば必ず神佛の利益はあるものです。『神明に對して信心を失ふ者は人に對して信用を失ふ』とは西洋の格言である。『天道は善に福はひし惡に禍はひす』『君子罪を昭々に得ること無きを欲せば、先づ罪を冥々に得ること勿れ』とは支那聖賢の語である。『おろかなる人天猶ほまことを感ずるおもひあり、諸佛の正法いかでかまことに感應するあはれみなからん、土石沙礫にも誠感の至神はあるなり』とは承陽大師の御親訓である。かういふ正しき信仰は決して妨げ無いのみならず、寧ろ精神の根本を養ひ、道德の基礎を立つるものであります。是れが佛敎第二の目的です。

相である。生るゝも死するも凡て因果の鏡に映つた一時の影法師である。唯だ結果の現はれる時期には、三時業と稱して三通りの區別がある。即ち、此の世で造つた業に依て此の世の中に果報を受くると、此の世で播いた種が未來に生ると、此の世の種が次の未來世以後に實を結ぶとの三時期がある。それは業作用の勢力に強いと弱いとがあるのと、其の原因を助けて生長せしむる外部の事情に緩急輕重がある爲めです。是等の事は修證義の四節と五節とに委しく御示し下されてあります。斯く因果の道理の歴然たることが解りさへすれば、人生に於ける我等の苦しみも樂しみも、其の本末始終の關係が分明に知れるから、決して徒らに世を恨み人を怨むこと無く、苦しみに遇うては益々惡心・惡業の恐るべきことを觀じ、樂しみに遇うては愈々善心・善業の貴とき所以を喜びて、自ら心を治め、心を安んじて、苦しみの中に在りながらも苦しみの爲めに束縛せられず、泰然として世に處し得られます。アヂソンの所謂『宗教上の希望は、當に困難の下に屈縮せざるのみならず却て困難の中に樂しみを生ず』と云ふ樣になる。是れが佛教第一の目的であります。

さうなりますれば、寐ても寤ても因果因緣の大法を重んじて、毫末も昧ますことが出來ぬ樣になるから、國家の法律や、社會の耳目などの外に於て、深く天理・人道を明らめ、神佛の御照覽を畏れ愼しみて、道德上の確固不拔なる基礎が出來る。今の世の中の人は、多くは因果の大法をも信ぜず、神佛の照覽をも恐れず、唯だ法律とか社會の賞罰とか云ふ人爲の事のみを以て行爲の標準となす樣であるから、動も

卽ち是れ菩薩道莊嚴の件なり、何を以ての故に、一切の凡夫は智慧正念の心あること無し、故に煩惱を以て怨敵と爲す、菩薩は智慧正念具足す、故に煩惱を以て道の件と爲す、惡友及び業も亦復是の如し』とありて、惡友も、煩惱も、正しき信仰の力を以て見れば、却て我等をして善根を積み、功德を重ねしむる好因緣となる。

因果因緣の大法

世には運命と云ふ樣なものがあつて人生を支配する樣に見えるが、別に不可思議のものがあるではない。卽ち、前世よりの業力作用に依て生じたる因果因緣の現象です。此の因果因緣の道理が解りさへすれば、人生の苦みと云ふことも自から明らかになつて參る。善因あれば善果あり、惡因あれば惡果あり、我等の一念が少しでも動けば、身と口と意との上に種々の作用を起し、其の作用が善業ともなり、惡業ともなり、又は善でも惡でもない無記業ともなる。無記業は勢力が微弱であるから多は報を感じませぬ。縱し感じた處が、無記であるから苦樂は無い。善と惡との二つは必ず其の作用に相應した苦樂の結果を招ぐのである。地獄の如く全然苦しみの衆生もあり、極樂の樣に全然樂しみの衆生もある。又た、人間の樣に苦樂兩つながら具づて居る中にも、苦しみが多くて樂しみの少ない者もあり、樂しみが多くて苦しみの少ない人もあり、十人十色、百人百色、千態萬狀である。過去も、現在も、未來も、盡く此の因果因緣の假の

懸つて赤裸となつた、道樂して親に勘當された、不都合を働いて世間の信用を失つた、危きに近づいて怪我をした、洋燈を麁末にして火事を出かしたの類は、不注意の報である。金儲が致したい、出世が致したい、學問を致したいが親が許してくれぬ、事業を起したいが資本が無い、如何にせば世の中が治まらうや、如何にせば世界列國に對して覇權を握ることが出來樣かなど〻身心を勞するのは、希望より生じた苦しみです。凡そ生きとし生ける者一人として此の苦しみを受けざるは無い。人間の一生に此の苦しみを受ざるは無い。人間の一生は此の苦しみと戰爭して居る樣なものです。

況てや修證義の三節にもある通り『無常憑み難し知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず命は光陰に移されて暫くも停め難し』である。朝にして夕を待たず、出息は入息を待たず、風前の燈よりも脆く、山川の水よりも疾きは無常轉變の有樣です。大江の千里が『紅葉を風に任せて見るよりもはかなきものは命なりけり』と詠じ、和泉式部が『おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへん』と詠みしも、決して厭世觀とのみは評されぬ。『山に入り市を去りても遁れ難きは無常の使、關を固め兵を集めても防ぎ難きは生死なり』と云ふが、正しく人生の一大事實ではありませぬか。

去れど此の苦しみをば無暗矢鱈に厭ひ嫌うてはなりませぬ。寧ろ此の苦しみがあればこそ快樂も幸福も現はる〻のであります。『艱難は最善の教師』、『失敗は成功の伴侶』である。大燈國師は『うきことの猶も我が身につもれかしすてし心のまことをや見ん』と詠ぜられ、優婆塞戒經には『一切の惡友諸〻の煩惱業は

第三には未來の問題を明かにし永遠の安心を與へ、我等の智德をして無限に向上進歩せしむること

以上の三ヶ條が尤も肝要なる目的であらうと思ひます。此の目的は國家の上からも、社會の上からも、暫時も缺くべからざる必須の條件です。而して、此の目的を全うするには、宗敎より外に完全なる機關はありません。佛敎八萬の法藏も歸する所は此の三大目的をば出でぬ。縱や千差萬別の御化導がありませうとも、ドヾのつまりは、人生の束縛を離れて道德的地盤を立て、未來際を期して智德圓滿の佛地に進むの外は無いのです。

抑も、人生には必ず苦痛と云ふいやなものが伴うて居る。これには精神上の苦しみと肉體に感ずる苦しみとの二つがある。而して其の苦しみの原因には、自然界より生ずるものと、境遇に依つて來るものと、自分の迷や又は不注意から特々拵へるものと、希望の上から現はれるものとの區別がある。寒いの、熱いの、飢いの、渴くの、又は年を取て腰が痛む、眼がかすむ、それ地震、それ雷、やれ大風が吹く、大雨が降ると云ふ樣な類は皆な自然界より生ずる苦しみです。お錢が無い、着物が無い、それ叱られた、やれつねられた、休む暇が無い、眠る隙が無いと云ふ樣な事は境遇に依つて來た苦しみである。腹が立つてならぬ、悔しくてたまらぬ、生き易り死に易り恨を晴さで置くべきやなどゝ自ら煩悶するのや、どうしても思ひ切られぬ明められぬなどゝ愚癡に沈むの類は、重に迷から出た苦しみです。食ひ過て腹が痛む、飲み過で目が廻る、遊び過て手違ひが出來た、言ひ過て取返しが付かぬ、相場に手を出して失敗した、博奕に引

本證妙修

佛教の三大目的

吾が宗の安心起行を委しく申上る前に、順序として、修證義の總序に於て御示し下されてある所の、我が宗の信者としては必ず豫め心得置かねばならぬ事柄を述べて、それから、我が宗の安心起行を表示せられた修證と申す意義の大要を御話し致さうと思ひます。

先づ第一に心得べきことは佛教の目的です。佛教を信ずるのは、何の爲めであらう、佛教とは一體どういふことを教へるものであらうと云ふことです。勿論、佛樣に成るのが佛教の目的には違ひないが、之を國家の上から、人生の上から眺めまして、果して佛教の目的は那邊にあるかと云ふことを極めて置かねばならぬ。細かに申せば多くの理由もございませうが、大割に割り出して見ると三種の目的を出でませぬ。即ち

第一には人の精神に安慰と幸福とを與へて、人生一切の苦痛を救ふこと。

第二には人間道德の基礎を確立し、人としての凡ての事業に於て、一定の意義あらしむること

御經を十分御研究になつたら、其の時こそ始めて無佛論を御作りあそばして宜しからうと存じますと申した。居士は之を聞いて益々研究して、遂に佛教の大信者になつたと云ふ御話しがあります。

悟りの眼を開いて見れば佛様も我等も一體平等であるから、凡夫だの佛だのと云ふ隔てが無くなる。これぞ眞の無佛の理であります。其の隔ての無くなつた時、始めて天地法界が皆な佛性の慈悲心孝順心と爲り、山川草木も盡く心の光り佛の御姿である。之を『聖人に己れ無し、己れならざる所なし』と申したのである。己れが無いからして凡夫と佛との隔ては取れて了ふ、己れならざる所が無いからして世界中がそつくり佛の御姿と爲るのです。して見れば、禪門の安心は宇宙の眞理と一致した處に決定せらるゝのであるから、其の妙用に至つては、活動的で、進歩的であることは言ふ迄も無い。また禪門では、佛の御經文は、盡く自己の藥籠中に收めて、少しも之を嫌はぬのみならず、世の中の學問と雖も、一分の眞理あるものは取て以て自家の珍財と爲し、自ら之れが主人公と爲つて眞理を運用するのが、我が宗の本領であります。まだ御話しは盡きませぬが大體だけは一通り述べた積りであります。

數に及ばぬとは殘念なことである、よし〳〵我れ全力を揮つて佛法を排斥してやると云うて、家に歸り、直ちに書齋に入て破佛論の草稿に取懸つて、夜半迄も机に向て考へて居る。其の妻は向氏で、少しは佛法をも心得て却々の行手であつたと見えます。居士の傍に來て、深夜に及んで何事をあそばすやと尋ねまするど、予は無佛論を書く積りぢやと答へた。すると、妻の申すには、無佛論ならば佛は無いと云ふことでありませう、無い佛ならば論ずる迄もありますまい、然れども佛は現在有るではありませんか、佛は常住にして不滅です、して見れば、御考案を改めて有佛論を御書きなされたが宜いではありませんかと云うた。其の語が何んとなく奥床しい感じが致たので、心がドギマギして筆も鈍り、其の儘中止して居つたが、或時、朋友の處を訪うて維摩經を見た。段々と讀む中に『此の病は、地大に非ず、亦た地大を離れず』と云ふ語があつた。これは維摩居士の病氣と云ふ因緣から其の病の本を詮索した文です。此の身は地水火風と云ふ四大の聚つた物だが、此の四大なるものは宇宙に充滿して居つて、生死も增減も無い、然るに、病氣が出た、死んで仕舞うたなどと云ふは、因緣に依て現はれた一時の假の相に過ぎぬ、四大の上には病も無ければ死ぬと云ふことも無い、四大其の儘が佛性常住の孝順心慈悲心である、夫故、四大の上には病氣なぞは無い、併し、此の身あつて、此の病があるのだから、四大を離れて外に病があるでも無いと云ふ意味の語であります。居士は此の處に至つて大に發明する所があつたので、其の御經を借りて來て一生懸命に讀んで居つた。其の時、妻の向氏が之を見て、貴郎は好い御經を御讀みなされますな、其の

諸君も亦た我を縛ばる底のものを能々詮索して御覧なさい。『盗人を捕へて見れば我が子なり』三毒煩惱をばシツカリと捕へ付けて見れば、それがそつくり孝順心慈悲心の御寶であります。之を、自己を明らむるとも、眞理を悟るとも申すのであります。自分が自分を忘れて居るから、煩惱となつて我れを苦しめるのです、自分が自分を悟りさへすれば、煩惱もそのまゝ菩提となつて佛の三徳を現はすのである。

希臘の大賢ソクラテスはアポロの神殿の額の『汝自身を知れ』と云ふ語を以て敎理の骨子と爲し、道は遠きにあらず、己れに在りと云ふことを土臺にして、敎を施し道を講じ、眞理の光明を歐洲の天地に輝かした。是れ等も正しく御悟りの一半を發明したに相違ないのです。我等お互も能く己れを明らめて無我の理に達しますれば、無我は決して空々寂々ではない、死物ではない、自から宇宙の大意思に契うて、獨り手に孝順心慈悲心の作用が活動撥轉して、釋尊傳授の御戒法が、知らず識らず造次顚沛の上に現はれて參りまする。

宇宙を藥籠に收む

唐の無盡居士と云ふは護法論を著した有名な人ですが、姓は張、名は商英と云うて、一度は宰相に迄なつた方です。始めは大の佛法嫌ひ、それも食はず嫌です、一日、或る寺に行て、經藏の中に美麗なる一切經が整然として安置されてあるのを見て、忌々しくて堪らぬ。我が聖人孔子の書が、印度より來た胡人の

誰か汝を縛する

昔、達磨大師より四代目の祖師となられた大醫禪師が、三祖大師に御相見の時『願くば、和尚、慈悲、乞ふ解脫の法門を與へよ』と願はれた。これは、私はどうも煩惱の繩に縛られ、業障の綱に繫がれて三界六道に迷ひ込で居る身の上であります、あはれ大慈大悲を以て此の繩目のスツカリほどける所の御敎化を賜はりたいとの御願ひです。佛法を信仰なさるゝ方々は是非ともかういふ願を心底より起さねばならぬ。面白半分や物好半分の信心では此の願は起らぬものです。其の時、三祖大師は『誰れか汝を縛するや』と仰せられた。汝を縛つたり繫いだりするものは何物ぢや、何物の爲めに煩惱を起したり業障を受けたりするのぢや、汝を縛すると云ふ不屆者を尋ね出せ、三毒煩惱の源は何奴なるぞとの御言葉であつた。そこで、禪師は『人の縛する無し』別に私を縛ばるものが外にはございません『鳴子をは己が羽風に任せつゝ心とさわぐ村雀かな』である。斯く申し上ぐると大師は『何ぞ更に解脫を求むるや』我等を縛ばる者が無いと云ふことが徹底解れば、それが直樣、繩目のほどけた解脫自在の境界である。夢の中に鬼を見て、非常に其の鬼に苦められて居つても、目を覺して見れば、東西南北に鬼らしいものは少しも無い。自分は固より大涅槃の床の上に安住して居る身では無いか、ア、鬼ありと見たのは、夢の中の妄想であつたと云ふことが知れさえすれば、其の儘、安心解脫の境界であるぞよと仰せられました。

ば眞の堪忍は出來ぬものです。『火の中をわけて往くべき法の道雨風雪はものゝかずかは』、『まけてのく人を弱しと思ふなよ己が心にかてばなりけり』である。また、揀別る力が智慧と爲つたのである。之を恩德・斷德・智德、又は大悲・大行・大智の三德とも申しまするし、また、心理學上の語を假りて云へば、完全なる情感と意志と知識との作用と云ふべきである。此の三德の上に、一寸でも我と云ふやつが頭を出すと大變である。慈悲が忽ち變じて貪欲の風となり、勇氣が却て瞋恚の焰と變じ、智慧がアベコベに愚癡の水と爲つて我れと我が身を苦しめて繩なき繩に繋がれる。

一度『心を求むるに終に不可得』と云ふ御悟りが開けさへすれば、其の時は、我と云ふ惡魔を鏖にして、此の身此の儘が三德具足の佛樣である。手の舞ひ足の踏む所がソツクリ孝順心慈悲心のまるころがしである。心の欲する所に從つて矩を踰えず、忠孝・仁義・恭儉・博愛の德は、指の先からも毛の端からも光りを放つて來まする。此を高祖大師は『十方法界三途六道の群類みなともに、一時に身心明淨にして大解脫地を證し、本來面目現ずるとき諸法みな正覺を證會し、萬物ともに佛心を使用して、すみやかに證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等々の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す』と御示し下され、太祖大師は『眼根より光明を放て色相莊嚴をなし、耳根より光明を放て音聲の佛事をきゝ得たり、手裡に光明を放て自を轉じ他を轉じ、脚下に光明を放て進步し退步す』と仰せあそばされたのであります。

皆な盡く孝順心慈悲心の塊まり物である。佛様の心と云ふは大慈大悲であると申すが、我等の心もやはり大慈大悲である。太陽も、星辰も、火も風も、草も木も、そつくり大慈大悲の權化である。我等の孝順心慈悲心も宇宙萬物の孝順心慈悲心も決して變つたものでは無い、即ち同時成道である。天地同根、萬物一體であつて自家の寶藏外より來らずであります。

通身光明を放つ

サア箇様なる貴い身を持ちながら、何故其の孝順心慈悲心に反對するやうな淺ましい煩惱を起し、恥かしい惡業を造るのでありませう。是は宇宙の罪でも佛性の仕業でもない、唯だ〳〵無始劫より以來、自ら起し來つた貪欲・瞋恚・愚痴の三毒煩惱の繩目に縛られて、憐れ果敢ない身の上となつたのである。其の三毒の煩惱は、只だ我（おれが）と云ふ物から生じたのであつて、決して是れが煩惱であると云ふ實體は無いのです。それが因縁造作の力に依て、習慣性となり、遺傳性となり、種々の關係に纒はれて、遂に凡夫外道、惡人邪見人などと云ふいやらしい名前が喰付たのであります。

全體、孝順心慈悲心の運用上、天然自然に、進んで取ると云ふ力と、物に抵抗する力と、取ると捨るの二途を揀別る力との三大力が具つて居ります。此の進んで取るの力が、慈悲の妙用とも爲り佛の大誓願とも爲り、また、物に抵抗する力が、忍辱波羅密とも惡魔降伏とも爲つたのである。抵抗力が強くなけれ

變ずる、是れ皆な萬物の上に現はれたる孝順の德であります。此の孝順の德が我等人間の身の上に現はれますれば、忠義と爲り、孝行と爲り、恭儉と爲り、智能と爲り、義勇奉公とも爲りて倫理道德の根源を造るのであります。

また、慈悲心とは大きな物が小さな物を憐れみ、強い物が弱い物を資け、尊とい物が卑しい物を惠むの德である。太陽は赫々として長へに光りと熱とを與へて、萬物をして、能く生成發育することを得しむ、水は混々として物を潤ほし、火は蒸々として物を乾かし、風は颯々として新らしき空氣を送り、大地は屹々として物を載せて餘さず、花は爛熳として錦を織り、鳥は睍睆として樂を奏す、空中の大氣は動物の口と鼻とより入て血脉の循環を活潑ならしめ、我等の排泄する炭酸瓦斯は植物を養ひ、植物の吐き出す酸素は我等を養ひ、喉が乾けば之を救ふに水あり、腹が減れば之を補ふに食あり、寒ければ火あり、熱ければ風あり『春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえてすゞしかりけり』見るとして美ならざるは無く、聞くとして樂しみならざるは無い、天地萬物は實に是れ大慈大悲の呈露しではありませんか。此の慈悲の德が我等人間の身の上に現はれますれば、博愛と爲り、公益と爲り、信義と爲り、和合と爲りて善根功德の土臺を拵へるのであります。

佛は之を『佛性常住の孝順心慈悲心』と梵網戒經に御示し下されてある。我等お互は宇宙の中に生れ、宇宙の中で働らき、宇宙と同體にして少しの隔ても無い。我等お互の、身も心も、手も足も、眼も口も、

此の心は靈妙不可思議の作用を具へて暫時も休息することは無い。其の作用は無爲無漏と申して天眞の妙機であつて、我等の心の中にウジ〳〵して居る樣な意志は持つて居らぬ。凡夫量見に對して見れば宇宙は全く無意思である。其の無意思が取りも直さず宇宙の大意思である。釋尊は此の大意思を御悟り遊ばされて有情非情、同時成道と仰せられ、草木國土、悉皆成佛とも御示し下されたのであります。此の大意思の發動する所、自から太陽とも爲り、地球とも爲り、人間とも爲り、動物とも爲り、草とも爲り、木とも爲つて千變萬化である。其の千變萬化することが、やがて一つ心の源より流れ出たのであるから、古今に通じ十方に涉つて同一の軌道を守つて居る。其の同一の軌道なるものを、佛敎では因果因緣と說いたものであります。因果因緣と云へば、直ぐ地獄とか極樂とかを聯想して、兎や角申したがる連中が多いが、八遊星の運行も、春夏秋冬の循環も、人間の生死も、草木の榮枯も、火の燃えるも、水の流るゝも、皆な因果因緣の相であります。之を天地生成の德と云ふ側から申せば、孝順心、慈悲心と云ふ名前が付けられる。

孝順心とは親に孝行、君に忠順と云ふ意味で、凡て小さい物が大きな物に順ひ、弱き物が强き物の力を借り、卑き物が尊とき物の指圖を守る所の德です。風一たび吹き來れば草は自から偃す、太陽天に輝けば水は蒸發して空に騰る、東風がそよ〳〵と動けば野邊の千草は忽ちに霞を罩める、梅の花が笑を漏せば鶯が來つて枝に上る、流るゝ水も巖に觸るれば之を避けて逆はず、玉を綴れる菊の花も霜に逢へば色を

今日の學者も、物質不滅、勢力恒存と云うて、物の形體にこそ種々の變化はあれ、物體を組織たる原の物質には生滅、增減は無いと認定して居る。『雨霰雪や氷りと隔つれど落つれば同じ谷川の水』太陽と爲り、地球と爲り、人間と爲り、動物と爲り、草と爲り、木と爲るも根本の物質は少しも變つては居らぬ。然らば此の物質はどうして出來たであらう、物質の原は何であらう、此の物質が如何なる意味を以て色々に變化するのであらうと云ふが所謂哲學上の問題である。此の問題を說き明さんとて、古今の學者が腦味噌を絞つて、思ひ〳〵の解決を下して在るので、唯物論だの唯心論だの二元論だのと云ふ學說が世に現はれて居るのであります。

天地同根萬物一體

併し、其の樣な學問上の議論は別途の御話しに讓るとして、單刀直入に佛敎の上から申しますると、此の宇宙なるものは、心に依て造られたものであります。宇宙間の森羅萬象が千變萬化するのは取りも直さず心の妙用であります。心と申しても、唯心とか唯物とかと云ふ相手のある隔てのつく心では無い。達磨大師が二祖大師に向つて、『心を將ち來れ汝が爲めに安心せしめん』と云はれたので、二祖大師が『心を求むるに終に不可得』と答へられたその不可得の心である。之を佛性とも眞如とも云ふのである。此の心は生きるの死ぬのと云ふことも無ければ、增すの減るのと云ふことも無い、本來平等にして無差別である。

佛教に現はれる、世界説に依れば、須彌山と云ふ山が世界の中心となつて、其の上と下と四方とに無數の小世界がある。之を大別して三界六道と申します、我等の住んで居る世界は須彌山の南に當つて居ると云ふ所から南閻浮提と稱します。此の世界を千合せて小千世界と名け、小千世界を千合せて中千世界と名け、中千世界を千合せて之を大千世界と名く。卽ち千に千を三重にするから三千大千世界とも云ふ、これだけが釋尊御一佛の御受持遊ばさる御教化の區域であると說いてある。何と廣大なことではありませんか。

此の宇宙の大きい所から我等を眺めたならば何んと名けたものでありませう、誰やらが『芥子粒の中をくりぬき堂建てゝ五百羅漢を安置こそすれ』と云うた處が、それではまだ大き過ぎるとて、『蚊のこぼす涙の上の浮島の濱の眞砂を千々に碎きて』と詠んだ者があつたと云ふが、地球と云へる世界は蚊のこぼす淚の上の浮島の眞砂の中の一粒にも如かぬといふ。況てや、お互の身の上などはお話しになつたものではない。

宇宙は空間の上で此の樣に大きい計りでなく、時間の上でも限りが無い。佛教では世界の四相と云ふて、成・住・壞・空を說いてある。成は世界の成り立つ時代、住は現存の時代、壞は破壞れる時代、空は世界の滅却して相の無い時代である。而して空滅の時代から一轉して亦た成立の時代となり、出來ては壞れ、壞れては出來、グル〳〵循環することと井戸水を汲む釣瓶の車の廻るが如くだと云うてある。

も、盡く宇宙の間に孕れて居る一小分子ではありませんか。斯くも廣大なる宇宙は、何に依て出來たものでありませう。科學者の言ふ所に依りますれば、此の世界は太陽を中心として、我等の住んで居る地球を始め土星・水星・金星・木星・火星・天王星・海王星の八つの遊星と四百二十餘の細かい星との團體より成り立て居る。其の太陽も元は大熱を有する氣體であつたが、後に液體と爲つて段々に固まり來つてグルグルと回轉する間に、次第に熱が減じ、遂には分裂して八の遊星及び無數の小星となつた。地球の如きも追々冷くなつた爲めに、草や木も生え人間も生きて居ることの出來る樣になつたが、內部には未だ熱があるから火山が噴出したり溫泉が湧き出したりするのである。其の本家本元は太陽であるから之を太陽系と名けてある。これとても宇宙間の一部分の世界たるに過ぎぬ。其の中で我等の領分たる地球の上から見ても其の周圍が二萬四千哩もあると云ふから、一時間に二十哩を走る汽車に乘て夜晝押ッ通しに走ても五十日かゝらねば一廻り回ることが出來ぬ。處が太陽の大きさはと云へば直徑が八十五萬二千六百哩もある。それが小さく見えるのは地球との距離が九千二百萬哩もあるからである。太陽の光線は一秒時間に十八萬六千三百哩を駈け、一秒時間に地球を八返回る程疾いが、其の光線ですら太陽から地球に達するには八分間もかゝる。地球と北極星との間は、前の光線の疾さでも二十餘年かゝらねば達することが出來ぬ。それ處では無い、天文學者の說に依れば前の光線の疾さで走ても千五百萬年かゝつて初めて達する程な遠い所にも星があると申すことである。

吾が禪法の妙用

無限大の時空

前席に於きましては、禪門の宗旨が佛祖相傳せられた有樣と安心決定の大本とを御話しに及びましたが、これだけでは餘り高尚過ぎる樣で、又た、餘りに漠として、大海の際涯を絶して取り付く島の無い樣な感じをなさる丶方が無いとも申されませぬ。依て、更に我等が平生の行爲の上に當て嵌めて、一通り禪門安心の妙用を御話し致さうと思ひます。尤も只今は講義で無いから、宇宙觀とか、人生觀とか、倫理觀とか云ふ風に論理的に一々論究はせぬ。唯だ御解り易い樣に、何にも彼もひつくるめて其の大綱だけを申し上ぐる積りなのであります。

抑も世の中で、何が一番大きいかと云ふに、宇宙に過ぎたるものはありますまい。仰いで天を望めば日月星辰燦爛として羅列し、俯して地を瞰めば海陸山川歷々として交參す、此の日月星辰も、此の海陸山川

に跡を失うて、『雲よりも高きところに出でゝ見よしばしも月に隔てやはある』皎々たる不變眞如の明月は大千世界に輝やき渉つて生死即涅槃の大眞理が現はれる。これぞ以心傳心の妙處、同時成道の御悟りで、正しく禪門安心の根本土臺であります。幸に曹洞の宗義に値遇し奉りし我等お互は、是非とも斯かる高尚微妙の法門に向つて大安心を決定することが、生々世々の最大幸福と申すべきであります。

打ち割り見れば何にも無し花の種とやなにをいふらん』である。惜い欲い、憎い愛いと思ふ思慮分別の心をサラリと打ち離れて了はねば、決して心の本體は悟れませぬ。斯樣に其の根源を究め盡すを回光返照の退歩と申すのであります。徒らに智・情・意なぞと云ふ枝葉を研究して居つては、學問としては必要だが、安心を得る役には立ちませぬ。

二祖大師は晝夜の分ち無く工夫坐禪をなされて、遂に心の本體を御悟りあそばされ『心を求むるに終に不可得』と御答へになりました。不可得とは得べからずと云ふのだから、無一物と云ふも空と云ふも同じ樣な語ではあるが、唯だなんにも無いと云ふ樣な單純無味なことではない。有とも無とも云はれぬ所を不可得と仰せられたのであります。心と云うても、固より精神とか腦髓とか神經とか申す樣なものを指すのではない、無限の空間と無限の時間とに充滿して其の空間・時間の識別をも離れた所のものである。故に此の身も、此の日月も、此の萬物も、此の世界も、其の儘そつくり有とも無とも云はれぬ不可得である。此を承陽大師は『心不可得は諸佛なり』、『使得十二時の渾身これ心不可得なり』と御示し下されました。其の時、達磨大師は『汝が爲めに安心せしめ了れり』と仰せられた、不可得と云ふ御悟りが出來さへすれば、其の時こそ眞實、安心の地に至つたのである。これが達磨大師の御證明であります。

諸君も亦た一切の煩惱妄念を打ち拂つて、不可得と云ふ處まで究めて御覽なさい。何れの處に、苦しみだの迷だのと云ふものがあらう、地獄の釜も忽ちに摧け、餓鬼道の焰も忽ちに消え、畜生道の橫道も忽ち

觀とか樂觀とか申して、此の世の中を苦しみと見るも、樂しみと見るも、穢土と見るも、迷界と見るも、丁度、眼病人が病の爲めに空中にチラ〳〵と花の如き物がチラついて見える樣なもので、己れの妄見妄念より、本來無一物の處に於て樣々なる影法師が映つて見えるのであります。心の中に一點でも不明の點があつては安心では無い、現世の上に惑があつても、未來の上に疑があつても、倶に安心とは言はれぬ。唯だ此の安心と云ふ一言が、一切賢聖の最終目的、宗教上の一大事因緣であります。時に達磨大師は驀向から、『心を將ち來れ、汝が爲めに安心せしめん』と仰せられた。ナニ安心を得さして欲いと申すか、然らば其の心と云ふものを將て來い、直ぐ安心さしてやらう。サア心を將て來いよとの御催促である。なんと不思議な御化導ではありませんか。だが、これぞ達磨の達磨たる所以であります。千有餘年前の昔話しとのみ思うて居つてはなりませぬ。今日只今、達磨大師より此の樣な御催促を受けたものと思うて、篤と工夫を凝して貰ひたい。

さて『心とは如何なるものを言ふやらん墨繪に書きし松風の聲』我等お互の心は何んなものでせう、長い物か短かい物か、丸い物か四角な物か、惜い欲いと思ふのが心ならば思はぬ時はどこに居るであらう、憎い愛いと思ふのが心ならば眠つた時や死んでの後はどこに行くであらう、心は世界よりも大きい物であらうか、世界よりも小さい物であらうか、此の身の外にあるであらうか、此の身が其の儘心であらうか、頭のギリ〳〵から足の爪先まで、一分〳〵に斬り刻んだならば何處に心らしい物があるであらう『櫻木を

達磨大師は曾て五天竺を遊歴して、到る處、機に臨み時に應じて、諄々として法を説き縱横に教化せられた御方です。然るに今、二祖大師に向ては冷酷なる御化導のなされ方、これには深い〳〵御思召があつて、斯くも惡辣なる手段を御取りなされたのであります。若し我等が此の樣な場合に臨んだなら如何でござりませう。忽ち腹を立てゝ引込で了であらうと思はれます。けれども二祖大師はそんな柔弱な御志ではあらせられぬ。

達磨大師の激勵に依て益々發憤せられ、遂に護身用の刀を執り左の臂をズバリと斷つた。雪を染成す唐紅、血汐滴たる臂一本、達磨大師の目の前に突き出された。ヂロリと見られて達磨大師は、始めて御滿足の體、古の佛は、最初に法を求むる時、身を忘れて顧みたまはず、汝は今、臂を斷つて、道を求めんとす、其の志や可なるものありと仰せられて、慧可と云ふ御名を賜はり、入室を御許しなされ、汝の求むる所は何であるぞと御尋ねになつた。二祖大師は恭しく申し上ぐるには、私は普く、世間出世間の學問を修め盡すも、未だ眞實、安心の地に至ることが出來ぬ、あはれ願くは大慈大悲を垂れて我が爲めに心を安んじ心を樂しましむべき法門を授けたまへと申されました。サア此の心を安んずると云ふことが尤も大切な聞き處である。安んずると云ふは、心の上の苦しみも無く、動き亂れることも無く、一方に偏よることも無く、泰然として山の如く、悠然として海の如くになるが卽ち安心です。此を高祖大師は『萬づを厭ふ心なく欣ふ心なく、心に思ふこと無く憂ふること無き之を佛と名く』と仰せられた。彼の悲

達せられたが、所謂、知識の學、分別の悟であるから、なか〳〵實地に大安心を決定することが出來なんだのである。

そこで大通元年十二月八日と云ふに、嵩山の少林寺に在ます達磨大師を御尋ねあそばされました。處が達磨大師は、如何なる御思召あるや、一向知らぬ顔をなされて、容易に入室を御許しにならぬ。據なく夜に入ても猶ほ窓の外に立て御出になりましたが、頃しも極月の寒空、殊に五老峯の山中、吹き來る風は骨を削るかと思ふばかり、降り出したる雪は風に煽られて卍字巴と散り亂れ、瞬く間に腰を埋むる程に降り積りました。太祖大師は此の時の光景を叙べて『落つる涙滴々凍る涙を見るに愈よ寒きことを増す』と仰せられてある。而れども露ばかりも精神を屈せられず、古の佛菩薩は、道を求むる爲めには血を刺して饑を濟ひ、崖に投じて虎に飼ひしと聞く、古人何人ぞ我れ何人ぞ、縦や雪の爲めに一命を失ふとも、道を求むるの志は撓むべきやと御思惟あそばされた。夜半に至つて、達磨大師は漸く此方を御覽なされ、終夜雪の中に立つ汝は、一體、何事を求むるのぢやと御問なされた。二祖大師はヤレうれしやと聲を震はして、唯だ願くは、和尙、大慈大悲を以て眞實の道を傳へ、我等衆生を濟度したまへと申し上げた。其の時、達磨大師は、諸佛無上の妙法は生々世々にも難値難遇である、我を忘れ己れを忘れ、身を棄て命を捨つる程の覺悟なければ迚も得ることは叶はぬ、聊かの智識の學や分別の悟を擔ぎ來つて之を求め樣としても、到底、無駄事なるぞと仰せられて、其の儘壁に向つて坐禪せられ、更に御取合なさらんのである。

奉つて佛の御位に入るのであるから、之を受戒入位と申すので、それ故に我が宗で在家化導の標準と致すは、專ら此の傳戒相承の方であります。

併しながら嗣法と傳戒とは決して隔てのあるものではない。戒法相續の根源はと云へば信心である。信心の極意はと云へば佛の御心に感應することである。佛の御心はと云へば同時成道の御悟りである。其の御悟りが、衆生に對し萬物に對して御戒法と爲つて作用を現はすのであるから、御戒法は譬へば花の如きもので、佛の御心は實の樣なものです。實に因て花が開き、花に依て實を結ぶ、畢竟、不離不即の關係を有して居るのであるから、戒法相承の裏面には嗣法相續の密意が具はり、嗣法相續の表面には戒法の德相が現はるゝのであります。此の戒法の事は此の法話の骨目でありますから、席を改めて委しく御話しする積りです。

達磨大師と二祖

支那禪宗の二祖神光大師は俗名を光と曰うて武牢の御方であつた。幼年より拔群の志氣を具へられ、長ずるに及んで諸子百家の學を修め、道として窮めずと云ふこと無く、理として辨まへずと云ふこと無しと云ふ程でありました。猶ほ之れに滿足せず『孔老の敎は禮術の風規なり、莊易の書は未だ妙理を盡さず』と云うて歎息せられ、龍門香山の寶靜禪師の門に投じて出家し、深く大小乘の經論を研究して其の堂奧に

入る』と仰せられて、我等一切の衆生は一度此の御戒法を受け奉りさへすれば、直樣、三世諸佛の御仲間入り、此の身此の儘、佛に成るぞと宣はせられてある。又、娑羅雙樹の間に於て御涅槃に御入りの砌、遺教經と申す御遺言の御經を御說きあそばされ、其の中に『我が滅後に於て當に波羅提木叉を尊重し珍敬すべし（乃至）此は則ち是れ汝等が大師なり、若し我れ世に住するとも此に異なること無けん』と仰せられてある。波羅提木叉と云ふは戒法のことです。卽ち、我が滅後は我が說き遺したる戒法を以て我れと思へよ、佛の在まさぬ世には戒法こそ眞の佛なるぞよとの御趣意であります。斯く釋尊は最初の御說法に御戒法を說き、又た末後の御說法にも御戒法を說かれてある。一期五十年の御敎化は、戒法を以て始まり戒法を以て終ると申しても宜い。戒法は實に佛敎八萬の法門を一貫する神經系統の樣なもので、成佛得脫の要道、安心起行の妙法は此の戒法を離れて外にはありませぬ。併し戒法と申しても、眞宗や其の他淨土門の人々が心配するが如く在家止住の輩には到底行ひ難いとか、下根劣智の者には迚も持たれぬとか申す樣なものではなく、在家でも、出家でも、確固たる信仰力がありさへすれば、必ず受けられ、必ず持たれ、必ず其の利益を蒙むることの出來る甘露最極の正法であります。

また、佛法王法の表から見ても、是非受けねばならず、是非持たねばならぬ世間出世間に通じて肝心要の妙則です。其の戒法の箇條は總てゞ十六箇條しかない。此の十六箇條の中に三千の威儀、八萬の細行も殘らず籠り、倫理道德の標準も餘す所なく具つて居ると云ふ甚深微妙の法門であります。此の戒法を受け

此の御悟りが現はれますれば、盡世界、盡く覺皇妙莊嚴の御淨土となり、山川草木も等しく三十二相八十種好の佛の御姿と爲り、我等が手の舞ひ足の踏む所そつくり其の儘が、大光明を放ち、大神通を現じ、大功德を成じ、大法輪を轉ずる樣になります。かういふ風に參らんでは佛法も死物となつて、格別の價値も無いものになります。併し此の境界に至るには、是非、坐禪より入らねばならぬ。故に高祖大師は『諸佛如來ともに妙法を單傳して阿耨菩提を證するに最上無爲の妙術あり、これたゞ、ほとけ佛にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり、この三昧に遊化するに端坐參禪を正門とせり』と御示し下されてあります。自受用三昧とは佛の御悟りのことです。此の御悟りを得るには、端坐參禪、即ち坐禪が正しき入り口であるぞよとの仰せである。坐禪と申しても、決して專門家たる拙衲等で無ければ出來ぬと云ふ樣な窮屈な狹苦しいものではありませぬ。苟も志さへあれば、何んな忙がしい方でも少しも其の事務を妨ぐること無く、優に坐禪することが出來る。此の坐禪の事は別にとつくりと御話しに及ぶ考であります。

傳戒相承

次に傳戒相承と云ふは、釋迦如來の御傳へ下された御戒法を相續することであります。抑も釋迦如來は成佛の當時、梵網戒經を御說きなされて菩薩の大戒を御傳へ下され『衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に

て法を傳へまする時には、必ず此の御嗣書を授かるので、之を嗣法相續と申しまする。此の外に釋尊より嫡々相傳の御戒法を相續致しまして、其の戒法相續の系譜書を戴くのが卽ち御血脉で、之を傳戒相承と申します。故に、我が宗門には自から嗣法相續と傳戒相承との二た通りがあるのでございます。尤も御嗣書と御血脉との外に大事と申すものがあつて、之を合せて三脈と稱しまするが、此の大事なるものは御嗣書に附屬したものであるから、つまりは嗣法と傳戒との二樣に過ぎませぬ。

嗣法相續

嗣法相續のことは前々より申した如く釋迦如來の心法を相傳することであります。心法と云ふは、釋迦如來が六年苦行の後、菩提樹下に在りて、見明星の曉、忽然として無上正覺の悟りを御開きなされ『我れと大地の有情と同時に成道す』と獅子吼あそばされました其の釋尊の御悟りを明らめて、佛の心を相傳することとです。此の御悟りを明らむるには、學問の力や思慮分別の上では迚も得ることが出來ぬ。一切の知解分別、所謂、惜い欲い、憎い愛いと云ふ樣な凡情を打ち捨てゝ、無心無心大無心の境界と爲り、善惡を思はず是非を測らず、我れがと云ふ我見の根本を拔き去り、妄念の波を打ち靜め『千代能が戴く桶の底ぬけて水たまらずば月もやどらじ』水も無く月も無く、吾も無く佛も無く、苦しみも無く樂みも無く、迷も無く悟も無き大虚空裏に安住するの時、忽然として同時成道の御悟りが現はれまする。サア一度

した。懐弉禪師は法を、加州金澤大乘寺の開山に御成りなされた徹通義介禪師に御傳へあそばされ、義介禪師は、今の大本山總持寺御開山太祖弘德圓明國師常濟大師に御傳授なされました。これより曹洞の宗風は旭日昇天の勢を以て日本全國の津々浦々に迄も輝やき渡り、遂に今日の如く一萬四千の寺院、七百餘萬の檀徒信徒を有するに至つたのでございます。只今でも宗統相續の儀式は、密室風を通ぜすと云うて師匠と弟子とが額と額とを合せた處に於て密傳密付して、更に他人の取次と云ふ樣なことを許さぬが宗規上の嚴則と成つて居ります。釋尊より今日までの世代の數は、拙衲が丁度、八十代に當りますから、一般の方々も大概は八十世前後であらうと思ひます。

斯樣に八十代も世代が重なり、殊に釋尊の御涅槃よりは二千數百餘年の星霜を經、印度・支那・日本の三國に流傳して居りまするが、嗣法相續の一事に至りましては、昔日、釋尊が靈山會上に於て一枝の花を拈ぜられ、迦葉尊者がニツコリと破顏微笑せられた時、釋尊の御心と迦葉尊者の御心とがキツチリと證契即通して、恰も割符を合せた樣に感應道交せられたので『我に正法眼藏あり摩訶迦葉に付囑す』と仰せられ、佛法相續の御披露をあそばされました其の時の、以心傳心の儀式がそつくり今日にまで行はれて居るので、此の點に於ては釋尊の時も今日も少しも變りは無い。これが我が宗門の最も貴い處であります。高祖承陽大師が、天童如淨禪師より佛法御相續の時、御嗣書と云ふものを御傳へなされた。是れは傳法の御系譜に如淨禪師の御證明を付せられたもので、宗門第一の寶物であります。拙衲等もやはり師匠よりし

たのです。併し、決して宗義に異りがあつたでは無く、唯だ法孫が繁殖したのと、幾分か宗旨を唱ふる上の機鋒と儀式の上に特得の點があつた處から、宗派と云ふ樣な名前が付たのであります。

高祖と太祖

洞山大師より十三代目が天童山の如淨禪師である。禪師は越上の御生れで、十九歳の時に禪門に投ぜられ、臀肉の穿れるまで坐禪なされたとある。天童山に住せられても、上堂入室に唯だ黑色の袈裟裰子を着せられ、嘉定年間に、時の皇帝より紫衣・禪師號を賜はりしも、上表して御辭退あそばされし程の高潔なる御方であつた。されば太祖大師は禪師を賛歎して『道德當世に並びなく、操行古今に不群なり』と云はれてあります。

我が日本に禪を正傳された高祖承陽大師は、貞應二年、支那宋の嘉定十六年、御年二十四の御時、入宋せられて諸方の知識を訪ひ、最後に此の如淨禪師の室に入り、曹洞の宗脉を御相傳、在宋五年にして二十八歳の時、御歸朝遊ばされまして、最初に宇治の興聖寺を御建立、後に今の大本山永平寺を越前志比の庄に御開創に相成り、前後二十七年間の御化導、これぞ我が日本國に始めて曹洞の宗風が傳はり、靈山少林直指の正法、宇內無比の宗敎が燦爛たる光りを放つた根源であります。大師は法を孤雲懷弉禪師に御相續あそばされ、建長五年八月二十八日、太陽曆では九月二十九日、御年五十四歳を以て御涅槃に御入りなされま

十四代を經て第二十八祖が支那禪宗の初祖と御成りあそばされた達磨大師であります。
達磨大師は南天竺の國王香至と云ふ王樣の第三子であつて、法を二十七祖般若多羅尊者に嗣ぎ、五天竺を巡錫して外道を降伏し、盛んに佛法を弘通せられましたが、梁の武帝の普通元年に支那に渡られ、當時、佛心天子と云はれた武帝に相見して宗乘を示された。が、武帝は皮相の信者であつたゆゑ、それを見切て、楊子江を渡り魏の嵩山の少林寺に錫を駐めて面壁九年せられた。其の間に神光大師と云ふ拔群なる御弟子が出來て、支那の第二祖と御成りなされた。第五祖大滿弘忍禪師に至つて其の下に曹溪大師と神秀大師との二高僧があらはれましたが、神秀大師の宗風は漸修と申して、幾多の修行を重ね漸々に悟りの道に進むと云ふ方であつたから、達磨大師の正統とは許されなんだ。曹溪大師は非常なる大善知識であつて、其の門下には夥多の高僧が出來たけれども、青原禪師と南嶽禪師との御兩人を曹溪の二神足と稱して尤も卓絕であつた。此の青原禪師より五代目に洞山大師と云ふ古今獨歩の高僧が現はれて大に宗風を擧揚し、支那四百餘州は申すに及ばず、朝鮮國にまで弘通せられた。そこで、天下の人が其の宗風を欽慕する所から、遂に曹溪大師の曹の字と洞山大師の洞の字とを取つて曹洞宗と云ふ宗名を付けたのであります。また、南嶽禪師より五代目には臨濟大師と云ふ秀拔な明匠がありまして、洞山大師と相對して實に禪天の日月であつた。其の宗統が卽ち臨濟宗である。其の外に青原禪師の系統から雲門宗・法眼宗の二宗を生じ、南嶽禪師の系統から別に潙仰宗を出し、また黃龍派・楊岐派の二派が出來た。之を總括して五家七宗と云う

吾が禪法の相傳

禪宗の系統

禪宗の起源は、前席に於て申し述べた通り、釋尊の成道がその基礎で、靈山會上に花を拈ぜられて迦葉尊者がニッコリ微笑せられた時、佛法を御付囑あそばされたのが宗統の根源であります。釋尊御涅槃の後は、迦葉尊者が法王と爲つて佛法を護持せられ、之を第二祖阿難尊者に御傳へあそばされた。この相傳の仕方は、面授面稟と云うて御弟子たる者が、眞實、佛のお悟りを得られた時、御師匠と顏を合せて、其の場に於て印可證明と申して御印證を受け、始て祖師の御位に列なるので、決して、經文の上のみで研究したり、又は自分の信仰や見識だけを以て宗旨を定めたのではなく、暖かい手から暖かい手に授受せられた嫡傳の法であります。それから第三祖が商那和修、第四祖が優婆毱多と次第に相續して、第十二祖が大乘中興の祖師たる阿那菩底、卽ち馬鳴菩薩で、第十四祖が八宗の祖師と仰がるゝ龍樹菩薩です。それから、

も其の儘の佛法である、手の舞ひ足の踏む所其の儘の佛教でありますとの仰せでございます。かういふ鹽梅に參らねば活きた佛教とは云はれますまい。念佛宗の人でも、眞實、我を捨て己れを忘れて、佛の光明の外は一物をも留めず『唱ふれば佛も我も無かりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして』と云ふ樣に、佛樣と我との隔てが撤れて、天地同根、萬物一體となる時は、是れぞ同時成道の端的であります。眞言宗から云うても、實際に三密相應して、大日如來と自分とが互融して法界力一枚になつた時、忽然として禪の光明が現はれまする。此の光明が見えない樣では、眞の信心、眞の加持とは許されませぬ。こゝの道理を能々明らめて置て、我が曹洞宗の御法義を聽聞なされたならば、實に人生最大の幸福之れに過ぐる者はあるまいと思ふ。これで宗旨の起原だけは概略御話しが濟みましたから、これより席を改めて三國相傳の大要を演ることゝ致しませう。

は『吾れ四十九年世に住するも未だ甞て一字を說かず、汝吾れに再び法輪を轉ぜよと請ふ、吾れ曾て法輪を轉ぜしや』と御答あそばされた。

是れが禪宗で云ふ不立文字の意であります。禪宗で所依の御經を定めず、直ちに佛の御心を相傳するからとて、決して御經文を嫌ふでも捨るのでもない、唯だ御經文の奥底に潛んで居る佛の御本懷を明らむるのであります。されば華嚴經も好し、法華經も好し、般若經も好し、三部經も好し、手に信せ拈じ來つて盡く同時成道、本來成佛の眞理を現はすのであります。故に禪宗と云ふ宗旨の根源は、各宗各派を離れて外に別に在るのではなくて、各宗各派の腦髓とも、神經とも、消化器とも成つて、各宗各派の經律論を造次顚沛の上に活運轉させる底のものであります。して見れば、三部經の中にも禪があり、法華經の中にも禪がある。此の禪を知らざれば三部經も法華經も眞の大利益を現はすことが出來ませぬ。

昔、東印度の或る國王が、釋尊より二十七代の祖師にて達磨大師の御師匠なる般若多羅尊者を招待して、御齋をあそばされたことがある。國王の御殿に於ての大供養、定めし特別の大法要があるならんと思うて居たに、尊者は一向法要を御勤めなさる景色も見えぬ。そこで國王は、尊者には何故御經文を御讀みなされませぬやと問はれました。其の時、尊者は『貧道、入息蘊界に居せず出息衆緣に涉らず、常に是の如きの經を轉ずること百千萬億卷なり』と申された。卽ち、私は常に佛の妙法の中に在りて寐ても寤めても佛法を離れぬ、入息も衆の因緣に束縛せられず、出息も亦た煩惱の穢を受けぬ。されば、出息も入息

の中に無量の愛情が籠つて居る。此のニツコリの中の味は、歌にも詩にも畫にも文にも描れる者ではないです。時に釋尊は『我に正法眼藏あり摩訶迦葉に付囑す』我が佛法は殘らず迦葉尊者に任せたぞと仰せられた。そこで迦葉尊者は釋尊の法を相續して第一祖と御成りなされました。此の以心傳心こそ正しく同時成道の發現であつて、禪宗の本源は卽ち玆に在るのでございます。

不立文字の眞意

凡そ何事に依らず、其の極處には必ず口にも筆にも及ばざる所のあるもので、之を妙と云ふのです。畫でも彫刻でも、詩でも歌でも、或る程度までは指南も出來やうし、敎育も屆ふが、こゝぞ妙處と云ふに至れば、其の人が自得するより外は無い。佛のお悟りあそばされた眞理は一切眞理の中の極處です、卽ち妙法である。此の妙法を傳へん爲めに、衆生の根機に隨つて、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の五時敎等もあそばされた。大乘とか小乘とか、權敎とか實敎とかの區別はありましても、凡て妙法と云ふ眞理の源から流れ出でざるものは無い。釋尊の御心だに解れば、八萬四千の法門は皆な妙法の花であります。若し佛の御心が解らなければ、三千餘卷の經文も畢竟、月を指すの指に過ぎぬ。文字や言語の上に妙法があるとのみ思ふは間違である。故に釋尊は大般若經の中に『我れ得道よりこのかた一字を說かず汝も亦た聞かず』と仰せられ、また、御涅槃の砌に文殊菩薩が再び法輪を轉ぜられんことを請はれた時、釋尊

る有様はどんなで有りましたらう、世界第一の大聖人が空前絶後の大法輪を轉ぜらるゝのであるから、我等の想像も及ばぬ程の光景であつたに違い無い。時至つて、釋尊は三十二相、八十隨好、赫々たる光明を放つて說法の座に御登りになつた。八萬の大衆は動搖めきわたつたが、暫時にして水を打つた樣に靜まりかへつて、各々首を延べ耳を傾けて居つたけれども、釋尊は沈默して更に御口を御開き遊ばされぬ。良や久うして、優曇鉢羅華と云へる麗しき蓮華の樣なる一枝の花を御手に取て、八萬の大衆の前にズツと拈じ出されたなりで何にも仰せられぬ。是れが有名なる世尊の拈華であります。

サアどうです。此の天眞爛熳なる美しき一枝の花、自から馥郁たる香を放つて縱橫無盡に其の本來の德相を現はして居る。眼ある者は見よ、鼻ある者は嗅げ、此の花蘂には大乘・小乘の名相は無いぞ、此の花心には自力・他力の之乎者哉は無いぞ、煩惱も無ければ菩提も無い、苦も無ければ樂も無い、眞如と云ふも佛性と云ふも人間の付けた假の符牒である。地獄と云ふも極樂と云ふも因緣に依つて現れた自心の影である。これは決して三千年前の昔話とのみ思うてはなりませぬぞ、各々方も亦た能々此の花を見て取る眼がなければなりませぬ。

其の時、八萬の大衆は、さつぱり釋尊の御心が解らぬから、うつかりポンとして居られたと見える。獨り上座の摩訶迦葉のみあつてニツコリと笑はれた。是れが所謂、破顏微笑です。朋友同志が途中で遇た時にニツコリと笑ふ、其の笑の中には無限の友情がある。親子同士が顏を合せた時にニツコリ笑ふ、其の笑

見た人でなければ解らぬ。言にも述べられず、筆にも書かれず、目にも見られず、手にも取られぬ。「一口に飲んだる水の味を問ふ人あらばいかに答へん」、母親が乳吞兒に食物を與ふるに、嚼で哺めて、咽元までは手も屆くが、グッと一息に吞み下して胃の腑に收め、ア、甘ひ味だと自得することは、何んな母親の力でも行かぬ。釋尊御一代の御說法は手の屆く限り嚼で哺んで下された。苦集滅道の四諦、十二因緣、六度の行願を始めとして、或は般若眞空の劍を以て着我妄執の塵を拂ひ、或は諸法實相の門を開いて無相空寂の道に導びき、俗諦と呼び、眞諦と叫び、阿彌陀樣の御手傳やら、觀音樣の助太刀やら、それは〳〵一方ならぬ御骨折である。

然れども他力と云へば他力にへばり付き、自力と云へば自力に取り付き、未來を說けば現在を等閑にし、現在を示せば未來を忽かにすると云ふ鹽梅であるがために、これを教へ導く手引の教法は、幹から枝、枝から葉と次第に分れて、到頭、八萬四千の法門、三千餘卷の經文ともなつたのである。斯く道具立は出來たが、多くは道具の一部分に束縛せられ、其の全體を總合して自ら之れが主人公と爲り、自在に之を運用するでなければ決して釋尊の御本意には適はぬ。

そこで釋尊は最後に至りて、天竺で有名なる靈鷲山に在して、八萬人の大衆を召集して佛教總會とも謂つべき大會を御開きになつた。サア今日こそは、如何なる最上の法門を御演說あそばすやらと云ふので、滿山立錐の地も無き程に所有御弟子が集つて、御說法の始まるのを、今や遲しと待構へて居つた。其の盛大な

佛と同體なる智慧も徳も盡く具へて居る。それが知れぬのは妄想執着と云ふ無明煩惱の所爲である。丁度、法華經の中の長者窮子の譬の如く、大福長者の相續人と生れた若檀那が、稚き時に迷兒と爲つて他國に漂泊し、終には乞食の群に入り、自ら長者の子と云ふことも知らず生涯を非人に甘んじて居つた樣な者です。我等も亦た釋尊と同時に成佛した立派な境界を持ちながら、却て我れは凡夫である惡人であると思うて自ら三界六道に迷うて居つたのです。幸に佛の教に遇ひ奉りて、ア、成程と氣が付きさへすれば、其の時が直樣大福長者の秘藏息子、三世諸佛の御仲間入です。圓覺經には『始めて知る衆生本來成佛、生死涅槃猶ほ昨夢の如し』とある。本來成佛であるから釋尊の成道の時始めて成佛したのではない、久遠劫來の佛樣である。釋尊もそれが知れなんだ爲め三祇百大劫の御難行もなされたが、愈々悟りを開いて見れば、我れと一切衆生とは共に本來の佛であると云ふことが御判明なさられた。

拈花微笑の傳法

併し此の悟りの道は、只今の哲學などと稱する學問の樣に、唯だ理論的に口先計で原理の論究をするのでは役に立たぬ。此のお悟りの光りが全身に充ち渡り、天地に充ち渡り、手の舞ひ足の踏む所が盡く佛の神通光明となり、一言一句が盡く佛の大法輪と爲つて來ねば、さつぱり佛法の難有味は無いのです。こゝの味は自分の心で悟り自分の心で嚼分ねば知れぬ。水を飲んで冷い暖いと知る、其の味は味うて

しく釋尊の御本懐である。

然らば釋尊が悟りあそばした眞理とは何んなものであらうかと云ふに、釋尊は見明星悟道の折、大聲疾呼して其の眞理の光明を全世界の人に御告げあそばされた御語がある。即ち『我と大地の有情と同時に成道す』と云ふ御語である。是れは我が成道は決して我一人の成佛では無い、一切の衆生、人間は申すに及ばず、蝱・蜂・蜻蜓・蟹・蛙に至るまで我と同時に成佛して、盡乾坤裏また一箇の迷うて居る者も無く、一人の凡夫外道、惡人邪見人も無い。一微塵の中にも無數の衆生が居る、一滴の水の中にも無數の動物が居る、斯かる微細の者までも盡く大光明を放ち、大神通を現はし、大善根を成じ、大功徳を具へて居るぞと云ふ御語であります。此の御語が御解りになりましたか、各々方は、自ら我れは凡夫である、否、惡人邪見人である、容易に佛樣や神樣に成れる身で無いとお思召では釋尊の御語に背きまする。我は釋尊と同時に成佛し、釋尊と露ほども變らぬ佛の身である。是れから佛になるのでは無い、業に既に佛に成つて居るのだと云ふことの明らめが附かねば、眞實、佛教の信者とは申されませぬ、啻に我等衆生計りではない、草でも木でも、山でも河でも、日月星辰、宇宙法界の其の儘が皆な佛であります。こゝを承陽大師は『峯の色溪の響もみなゝがら我が釋迦牟尼の聲と姿と』と御示し下されました。

釋尊は猶も、此のお悟りの意味の解る樣にと思召して、華嚴經には『奇なる哉、一切衆生は如來の智慧徳相を具有す、但だ妄想執着を以て證得すること能はず』と仰せられてある。即ち一切衆生は皆な三世の諸

とか難行道とか顯敎とか、密敎とか云ふ名相の爲めに、種々の衝突を來たして、甚しきは、互に排擠して、時としては隨分亂暴なる誹謗罵詈の聲をも聞く樣に至つた。實に歎かはしき限りであるが、是れも止むを得ざる自然の勢とでも申す外はなからう。

我が曹洞宗は世に所謂禪宗の一であるが、此の禪宗なる者は、外々の宗派の樣に、別段所依の經論と云ふものがあるのでも無く、古來よりして直指人心、見性成佛、不立文字、敎外別傳と申してある。一寸外面から眺めると、何にが何やら一向に模索すべからざる宗旨の樣に思はれる。夫れが爲めに、世間の學者ばかりか、佛敎中の方々でも揣摩憶測を以て禪宗を批判する所から、隨分、滑稽じみたほど誤解して居る人も見えるが、是れも強ちに無理からぬことであらうと思ふ。然らば、禪宗なる者はどういふ處から生れて、どういふ風に發達して、今日に至つたかと云ふ事を一通り御話しせねばならぬ。

釋尊の御本懷

一體、佛敎は何を敎へるものであるかと申すに、云ふ迄も無く、釋尊のお悟りになつた眞理を敎へるのである。釋尊は此の眞理をお悟りあそばされて、以て宇宙の本源を盡し、萬物の生起する所以を究め、生死苦樂の本末を明らめ、自己の大安心を決定せられた。更に進んで一切衆生を敎化して、迷を轉じて悟を開き、苦を離れて樂を得、惡を斷じて善を行はしめ、以て人生の第一義を完全に成就せしめたまふが正

槃に御入りあそばすまで、前後五十年間の御說法がありました。

其の五十年間の御敎化中には、大乘と云うて氣高い敎もあれば、小乘と云うて卑近なる敎もあり、大乘の中にも、華嚴經あり、法華經あり、般若經あり、大日經あり、また、無量壽經もあり、阿彌陀經もあり、機に臨み時に隨つて千變萬化の御化導であります。故に、何れが果して釋尊の御本懷であるやら、表面から見た處では幾んど其の選び方に苦む程です。是を以て、三國の高僧方は御自分の信仰と其の時代の狀態とに依て、或は法華經を以て釋尊出世の本懷と定め、或は無量壽經を以て如來化導の最上乘なりと論じ、其の人々に依て所見を異にし、遂に宗派と云ふものが出來るに至つたのです。

我が日本國は、今より一千三百數十年以前、人皇二十九代欽明天皇の十三年に、百濟國より佛敎が傳はつて來て、今日では十三宗五十三派と云ふ澤山な宗派が分れて居りますが、盡く皆な大乘佛敎です。大乘佛敎と云ふ上からは皆な同一であるが、其の內容に至つては、法華經に依て宗旨を開いた天台宗や日蓮宗があり、大無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經の三部の經典を所依として開宗したる淨土門もあり、淨土門の中でも淨土宗は觀無量壽經を中心として宗旨を立られ、眞宗は大無量壽經を中心とし、時宗は阿彌陀經を中心として居るなど、實に蘭菊芳を競ひ日月光を爭ふと云ふ光景である。併し其の源は釋尊御一人の御說法であるから、所謂『分け上る麓の路は多けれど同じ高嶺の月を見るかな』で歸着する所は必らず一致して居るに相違ない。だが聖道門とか、淨土門とか自力とか、他力とか、易行道

曹洞禪要義

吾が禪法の起原

佛教と其の宗派

我が大聖釋尊は、中天竺、卽ち今の印度の中の西北に當る迦毘羅皤卒國の國王、淨飯大王の御子と御生れあそばされて、悉達太子と申されましたが、深く人生の無常にして苦痛の甚しき狀態を觀ぜられ、此の苦痛の根源を究めて、一切衆生を濟度せんとの大誓願を起しまたひ、十九の御年の十二月八日の夜、窃に王城を逃れ出で、處々方々、遍歷せられまして、最後に、當時、波羅門教の高僧と呼ばれし阿羅邏仙人、迦蘭仙人を訪うて、種々の御議論もあつたが、到底御滿足あそばすことが出來ず、依つて斷然、六年間の苦行遍參を止めて、只獨り摩竭陀國の伽耶城と申す町の近處なる伽耶山と稱する山中に入り、六年間の御修行をなされた。御年三十歲の十二月八日の曉、明星の東の山の端を出づるの時、忽然としてお悟を御開きあそばされた。それより八十歲の二月十五日夜半、拘尸那城の附近、娑羅雙樹の間に於て御涅

を以て、廣く民衆を感化するに足らず、今後更に一段の發達と擴張を切望せざるを得ぬ。
曹洞宗は明治の初期に於て早くも宗黌を創立し、漸次に發展して、今稍や教育の體系を整ふるを見るも、宗門の命脈たる僧堂教育は却て衰微に趣きたるの觀あるは遺憾の極みである。此の際速かに禪道復興の方策を講じ、兩祖の眞風を紹隆することこそ實に焦眉の急務と謂ふべし。
要するに臨濟・曹洞・黃檗の三宗は、其の根源既に曹溪の一脉に歸し、倶に佛祖の正法眼藏を單傳し、打開し拈出し受用するものにして、畢竟、唯有一乘禪無二亦無三である。故に、默照看話、時に臨んで應用し、把住放行機に應じて拈弄し、以て少林・曹溪・臨濟・洞山の古に復し、純一無雜の眞風を扇揚せざるべからず。之と同時に禪門の天地を恢弘して、靈機を治生產業の上に轉じ、佛心を政道學藝の中に現じ、禪戒を普及して國民道德の根に培ひ、世界平和の基を固め、禪慧を開顯して人類最高の理想を指示し、以て眞正解脫の大安樂地に誘引せねばならぬ。斯くありてこそ、自覺々他の王三昧を七通八達する所以にして、禪門の一大使命また實に此に存せることを疑はず。

宗も其の影響を被むることが甚大であつた。

然れども、禪は元來以心傳心の法門にして、直指人心見性成佛を宗とす、故に名相に泥まず、格則に滯らず、永嘉の所謂『或は是或は非人識らず、逆行順行天も測ること莫し』で、若し一法に凝滯して窠窟を存せば、早く既に蹉過し了る。白隱禪師の法孫大觀和尚は、其の師東嶺の五家參詳要路門の跋に於て、當時の禪弊を指摘して『今時知見解會を以て正悟と爲す者あり、無事甲裏に坐在して、正修と爲す者あり、不知不會是を向上の禪と爲す者あり、昭々靈々を認めて自己と爲す者あり、湛々寂々に着して禪定と稱する者あり、言句上に向て死模樣を着る者あり、古人の糟粕を甞めて奇特玄妙と爲す者あり、一聯の偈頌を綴りて死活を診する者あり、胡喝亂棒を以て大機大用と爲す者あり、乃至、皆是れ禪病にして眞正の見解に非ず、豈に謂ゆる是れ五家の宗要ならんや』と道破して居る。復た知言と謂つべし。

明治維新に際し時勢の激變に伴ひ、禪界にも非常なる動搖を來し、朝廷の優待、諸侯の保護を失ひ、官廳の壓迫を被むり、一時は孤城落日の觀を呈するに至つた。其の後、文明の氣運に乘じ、各派共に宗勢の挽回に力めて、稍や面目を一新し、其の結果俄に教育の振興を圖り、或は宗立學校を設けて徒弟を教養し、又は官私立學校に入學せしめて、益々教育の普及と進歩とに力を致した。

臨濟各派の大部分は普通教育の方法未だ成らざるも、各僧堂に於て專ら坐禪辨道に精進し、常に若干の道俗を接して見性の工夫に研鑽せしむ。是れ吾人の敬意を表して措かざる所なるも、其の規模甚だ小なる

曹洞宗は開祖道元禪師、始て純一の禪門を我が國に弘通して、曹洞綿密の家風を扇揚せられ、釋尊の正法眼藏を面授面稟せる正傳の宗旨に、禪宗の名を附するは、是れ我が宗を冒瀆するものであるとの見知より、正法眼藏宗を提唱せられた。其の著『普勸坐禪儀』に於ては『心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて、作佛をも圖ること莫れ、豈に坐臥に拘はらんや』と開示し、坐禪を以て見性の機關とせず、端坐卽全修全證なりとし、所謂默照の禪を弘通せられた。瑩山禪師も道元禪師の宗風を瀉瓶せられ、但だ氣力羸弱にして昏沈散亂に礙らるゝ者の爲めに、一則の公案を提撕擧覺せよと垂敎せられた。其の後、宗勢益〻發展し、海內各處に道場が建立せられ、參禪の緇素雲集するに從ひ、爲人垂手の手段として、或は公案を提示して工夫の標的となし、或は話頭を拈じて開悟の南針となすの風も、稍や盛んに行はれたるも、大體に於ては臨濟宗は看話の先蹤を攀ぢ、曹洞宗は默照の古格に則り、兩宗各〻其の特長を發揚して居ることが認められる。

黃檗宗は、支那明末の高僧隱元禪師の傳來する所で、臨濟宗と同一系統に屬するを以て、同宗と共通する所あるは勿論なるも、宋末より元代を經て明末に至る三百餘年間には、禪林の儀式行法等のみならず、禪風にも著るしき變化を來した。殊に其の間に醞釀したる禪淨融合、卽ち坐禪念佛一味の思想は自然濃厚となつたのである。隱元禪師は傑出したる大宗匠なるを以て、其の禪風は時流に卓越し、其の人格と禪風とは璨然として禪界に異彩を放つた。殊に其の門葉には幾多の英俊輩出せしかば、從つて臨濟・曹洞二

禪三宗の禪風

榮西禪師の禪風……看話禪の擧揚……曹洞宗兩祖の禪風……默照の古格……元・明の禪風と隱元禪師の宗風……何ぞ名目に泥み古格に滯らん……明治維新以後の大勢……臨濟宗の專門道場……曹洞宗の學校敎育……禪門の一大使命

鎌倉時代に臨濟・曹洞の二派が傳來してより後、異常なる勢力を示し、日支兩國の高僧碩學は頻繁に往來して、益〻弘通に努力せられた。其の系統より二十四流と稱して居る。

中に就て臨濟宗は、榮西禪師の如き、暗證と惡取空の偏見を斥けて、專ら圓修圓證を勸め『外は律儀にして非を防ぎ、內は慈悲にして他を利す』と說き、『一代五時の諸の經律論は皆是れ佛禪の旨歸なり、佛の威儀行住坐臥併せて禪意なり』と告げ、穩健なる禪風を示された。其の他の諸大德は多く宋の大慧宗杲禪師の宗風を攀ぢて、臨濟禪の特色を發揮し、所謂看話禪を擧揚し、衆を接するに專ら公案の工夫、禪機の鍛錬に力め、以て見性の一路に進ましめられた。

禪師來朝し、水戸義公其の高風を喜び、祇園寺を水府に建て請じて開山とす。是を心越派と稱せるも今は兩大本山の派下に屬せり。

黄檗宗は德川時代、承應年間、支那より來朝せる眞空大師隱元隆琦禪師に依りて開創せらる。禪師は明の福州の人、臨濟宗楊岐下費隱通容に參じて法を嗣ぎ、黄檗山に住す。晩年請に應じて來朝し、宇治に黄檗山萬福寺を開き丕に禪風を振ふ。門下に木菴・卽非・大眉・高泉等の英俊ありて、化門の盛んなる一世を風靡し、臨濟・曹洞の禪侶にして其の輪下に趨るの士頗る多く、爾來、兩宗とも其の影響を受けて、行法儀禮等にも多少の變化を來したのである。故に、幾星霜を經ざるに巍然たる一宗を成すに至れり。黄檗を宗名とせしは、在來の臨濟宗と混ぜざらんが爲め、萬福寺の山號を取りて宗名としたものであらう。

此の外、普化宗なる一派があつた、其の開祖は鎌倉時代に於ける法燈國師覺心禪師である。禪師は入宋して、楊岐下八世無門慧開に參禪して心印を單傳し、歸朝の後、紀州に興國寺を開かれた。在宋中、居士張參に就て虛鐸の曲を傳へ、更に鈴鐸に代ふるに尺八を以てし、之を寄竹等に傳ふ。寄竹より五傳して僧虛無に至る。是より虛無僧なる者世に現はる。普化宗は今は殆ど廢絶に歸す。

曹洞宗は、榮西禪師寂後數年ならずして、道元禪師入宋して、法を洞山下十三世天童如淨に嗣ぎ、歸朝の後、宇治に興聖寺を開きて、祝國開堂の盛典を擧げられた。是れ我國に於て純一無雜なる禪門開闢の創始にして、日本曹洞宗の紀元である。後、永平寺を越前に創して以て根本道場とせられた。

是より四傳して、瑩山禪師世に出で、力を紹隆に盡し、祇園の正儀を整へ、洞上の宗綱を提げて、化門を阿州及び加州能州に啓き、後、總持寺を創して宗門の基礎を鞏固にし、皇室の歸崇を受け、禪侶を教養し祖道を恢宏せられて、其の輪下には峩山・明峰等の碩德を出し、門葉また蔚然として蕃息し、半百歳を出でざるに禪風海內に充滿するに至れり。

明治天皇は、道元禪師に承陽大師の徽號を、瑩山禪師に常濟大師の嘉號を贈謚せらる。承陽大師を高祖と稱し、常濟大師を太祖と稱し、永平・總持二刹を兩大本山として奉戴し、一宗一派、本末一體を以て宗憲の要諦となせり。

鎌倉時代に支那より來朝せる、曹洞派下の東明慧日禪師は建長寺に住し、東陵永璵禪師は南禪寺に住して禪道を擧揚した。當時は、臨濟・曹洞の稱呼も室內の傳統を示すに過ぎずして、寺院として必ずしも兩派間に劃然たる溝渠あらざりしことを知るべし。

戰國時代よりは、宗勢上幾多の陵夷ありしも、高僧碩學は番々に出世し、德川時代に於ては、月舟・卍山・天桂・面山等の大德出現して、大に宗風を扇揚した。延寶の頃、明末に於ける曹洞派の宗匠東皐心越

同　天龍寺開祖　夢窓國師疎石
同　妙心寺開祖　無相大師關山慧玄
同　相國寺開祖　普明國師春屋妙葩
江州　永源寺開祖　圓應禪師寂室玄光
越中　國泰寺開祖　慧日聖光國師慈雲妙意
甲州　向嶽寺開祖　慧光大圓禪師拔隊得勝
遠州　方廣寺開祖　無文元選
藝州　佛通寺開祖　愚中周及

榮西禪師を除くの外は皆な楊岐派に屬し、何れも蓋世の大善知識で、悉く鎌倉及び室町時代に出世せられた。其の門下には英才雲の如くに起り宗勢の盛んなる、江湖を風靡するに至つた。支那よりは、兀菴普寧・鏡堂覺圓・靈山道隱・清拙正澄・明極楚俊・竺仙梵僊等の高僧來朝して、大に化道を興隆せしが、此等諸師も皆な楊岐派の系統であつた。

戰國時代を經て德川時代に至るまで幾多變遷の跡を示し、盛衰常ならさりしが、德川時代に於ては、澤菴・古月・白隱等の明師宗匠現はれ、殊に白隱禪師の如きは、禪道中興の偉人にして殆ど回天の勢を示したのである。

皇后の請に應じて來朝し、禪道を舉揚せしも、幾も無く歸國せられた。第五傳は傳敎大師の弟子慈覺大師圓仁、入唐して居士蕭慶中に就て禪法を繼承し、歸朝の後、禪院を建立して之を舉揚せられた。第六傳は叡山の覺阿禪師、入宋して圜悟の嗣慧遠に參じて禪道を將來せられた。第七傳は大日能忍禪師、禪に於て自得する所ありしも、師承なきを以て、其の徒勝辨、練中の二僧を渡宋せしめ、圜悟下拙菴徳光に參禪して心要を傳へ、師資一體、盛んに禪風を舉揚せられた。以上の七傳は、或は禪を傍修し、或は之を一部の機類に開示するに過ぎざるを以て、未だ一宗を形成するの基礎を爲すに至らなんだ。

鎌倉時代の初期、千光國師榮西禪師渡宋して、禪に臨濟宗黃龍派八世虛菴に參じ、歸朝の後、博多に聖福寺を開き、建仁二年源頼家の請に依り、京都建仁寺の開山となり、後、鎌倉に壽福寺を創し、隨處に禪風を振ふ。時に南都北嶺の抗議ありし爲め、眞言・止觀の二院を設け、台密禪の三宗を兼ねたり。是れ臨濟禪傳來の嚆矢である。榮西禪師以後に於ける、臨濟の派流及開祖は左の如し。

京都　東福寺開祖　聖一國師圓爾辨圓
鎌倉　建長寺開祖　大覺禪師蘭溪道隆（宋末の人）
同　圓覺寺開祖　佛光禪師無學祖元（宋末の人）
京都　南禪寺開祖　大明國師無關普門
同　大德寺開祖　大燈國師宗峰妙超

日本傳來の派流

禪法の傳來……道昭法師……道璿律師……傳教大師……義空禪師……慈覺大師……覺阿禪師……大日能忍禪師……榮西禪師の三宗弘通……榮西禪師以後の臨濟派流及び開祖……楊岐派の諸耆宿……德川時代に於ける臨濟の明師宗匠……道元禪師の出世……純一無雜の禪……瑩山禪師の出世……一宗一派本末一體の美風……東明慧日禪師・東陵永璵禪師……德川時代に於ける曹洞宗の高僧碩德……東皐心越禪師……黃檗宗の開創……普化宗

我國に禪道を弘通せしは榮西禪師を以て始祖とするも、禪師以前にも既に七師の禪傳があつた。初傳は奈良朝時代、我國法相宗の開祖大和元興寺道昭法師にして師は入唐求法して、二祖慧可の嗣慧滿より禪要を傳へられた。第二傳は唐の道璿律師、神秀下三世嵩山普寂より北宗禪を傳へて來朝せられた。第三傳は平安朝に入りて天台宗開祖傳教大師、師は道璿の嗣大安行表に師事して禪法を傳へ、入唐の時、牛頭下の翛然に參禪して心法を稟受せられた。第四傳は南嶽下三世鹽官齊安の資義空禪師、仁明天皇の御宇、檀林

るを以て、今後、或は第二の洞山・臨濟等の大宗匠出現して、正傳の宗風を中華に扇揚すること無きを保せず。予は切に其の實現を熱望して止まざるなり。」

に虚明寂照の正儀を以てす。是を默照の禪と稱す。之と同時に楊岐下五世に大慧宗杲出で、徑山に住して越格の禪風を擧揚し、其の衆を接するや、專ら話頭を授けて猛烈に工夫せしむ。是を看話の禪と稱す。此の二大宗匠は恰も龍虎の互に威を奮ふが如く、禪天に一大法雷を轟かし、何れも蓋世の師表であつた。

宏智寂後七年にして、日本曹洞宗祖の師事せる如淨が出世した。宋末までは禪道も盛運を見たれども、五家七宗の分派以來、漸次禪風の變調を呈した。是れ各派の門葉が、徒らに形式に拘泥して門風を黨議せしと、天下の禪侶中、無眼子掠虚頭の漢ありて、法眼の謂ゆる露布(文字言句)を記持して妙用を解せず、己れの短を護り好んで勝負を爭ふ者や、または無爲無能、亂りに信施に眠食する徒輩も少なからざりし爲めに、禪道爛熟の時に幾多の禪弊を生じたものである。加之、唐代より念佛淨業傍修の端を發し、宋初永明延壽に至りて最も明かに之を發表せられ、是より漸次禪敎融合、往生淨土の思想が顯著となり、更に孔老儒道の影響を受け、禪風は次第に變遷の度を高めた。元朝以後は、禪淨混淆の思想益〻盛んに、純一の祖道漸く衰運を來した。

元には高峯原妙・中峯明本等の宗匠あり、明には恕中無慍・呆庵普莊・雲棲株宏・鼓山元賢等の明師あり、清には爲霖道霈・白巖淨符等の哲人ありしも、一盛一衰、彌〻純禪に遠かり、遂に現今の如く萎靡不振の澆運を見るに至れり。是を禪風陵夷の時代と稱す。然れども、窮すれば必ず通ずるは自然の趨勢な

流、是れ平等一如の眞諦。三に隨波逐浪、是れ諸法實相の妙用。雲門の一挨一拶自ら此の三句を含蓄して餘蘊あることが無い。

法眼宗の禪風は隨處に主と爲り、衆を接するや、鐵を轉じて金と作すの妙手がある。法眼は禪門に於ける當時の弊風を慨し、嚴重に批判して禪病を警誡し、最も穩健着實なる家風を示し、其の著十規論に『大凡祖佛の宗は理を具し事を具す、事は理に依て立ち、理は事を假りて明かなり、理事相資く還て目足に同じ』とあるが如く、華嚴の深義を禪化して縱横に拈提す。而して學人を接するや、因に慧超問ふ『如何なるか是れ佛』、師曰く『汝は是れ慧超』。また僧あり問ふ『如何なるか是れ曹源の一滴水』、師曰く『是れ曹源の一滴水』。師因に修山主に問ふ『毫釐も差あれば天地懸かに隔る、汝作麼生か會す』、修曰く『毫釐も差あれば天地懸かに隔る』。師曰く『恁麼に會せば又爭でか得ん』修曰く『和尚如何』、師曰く『毫釐も差あれば天地懸かに隔る』。是れ即ち啐啄同時の機にして、直下彼をして立地に佛知見に悟入せしむるの轉大法輪である。

黄龍・楊岐の二師は齊く慈明の門下より出で、黄龍は有名なる三關を設けて學人を接するも、其の機用穩密にして敢て奇矯を弄せず、楊岐は行持純眞、專ら身心學道の範を示す。倶に天下の瞻仰する所となる。

宋末に至り、洞山下十一世に宏智正覺出で、洞上の正脉を紹述し、天童山に住して默坐修證、導く

曹洞宗の禪風は眞證妙修、行持穩密を旨とし、洞山は曾て棒を行ぜず、喝を放たず、奇言奇行を弄せず、眞に行解相應、智德雙進の教範を示された。洞山に寶鏡三昧・玄中銘等の著あり、倶に萬代不易の法寶である。接得の手段も穩健にして親切を極め、鳥路の如くにして甚だ峭絕、僧あり問ふ『寒暑到來如何が廻避せん』、師曰く『何ぞ無寒暑の處に向て去らざる』、僧曰く『如何なるか是れ無寒暑の處』、師曰く『寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す』。雲居、因に師に隨って水を渡る、師問ふ『水深きか淺きか』、雲居曰く『濕はず』、師曰く『麁人』、雲居曰く『請ふ師道へ』、師曰く『乾かず』、此等の商量を玩味して其の玄旨を委悉するが宜い。洞山には別に三滲漏・功勳五位・正偏五位等の甚深微妙の垂手あるも、固より魚兎の筌蹄であるから、徒らに文字に拘泥せず、須らく言外に宗を會すべきである。

雲門宗の家風は、一句下に八萬の法藏を網羅し、一微塵に佛祖の命脈を把定し、人をして脚跟下七通八達の大道に遊戲せしむるものあり。因に僧あり問ふ『如何なるか是れ超佛越祖の談』、師曰く『胡餅』。また僧あり問ふ『不起一念還て過ありや也た無しや』、師曰く『須彌山』。また僧あり問ふ『如何なるか是れ塵々三昧』、師曰く『鉢裏飯桶裏水』。また或時垂語して曰く『十五日以前は儞に問はず、十五日以後一句を道取し來れ』、自ら代て曰く『日々是れ好日』。言々句々直指端的、備明適實、虎嘯龍吟の槪がある。また僧あり問ふ『如何なるか是れ正法眼』、師曰く『普』。また問ふ『如何なるか是れ吹毛の劍』、師曰く『骴』。此等を雲門の一字關と稱す。只此の一字能く三句を具す。三句とは一に函蓋乾坤、是れ圓融無礙の聖道。二に截斷衆

ば、凡聖情盡き體露眞常、理事不二卽如々佛』と、體露眞常、理事不二、是れ潙仰宗の宗旨である。仰山因に潙山に問ふ、『百千萬境一時に來る時作麼生』、師曰く『青是れ黄にあらず、長是れ短にあらず、諸法各々自位に住す、我が事に干るに非ず』、仰山乃ち作禮す。此等の話頭に依りても、體用無礙、事に卽して超證解脫する底の妙趣を識るべし。

臨濟は黄檗三頓の棒を喫して、佛法の多子なきことを了じてより、知見の高邁なる、機鋒の嶮峻なる、龍驤麟振、殆ど天下に敵なきの觀あり。其の緇素を接するに當りても、棒は雨點の如く、喝は雷奔に似て、凡を呵し聖を罵り、彼をして湊泊の處なからしめ、其の間に一線路を通じて、超越の知見を開破し、順逆縱橫の禪機を撥轉せしめた。嘗て四種無相の境を示して『儞が一念心の疑、地に來り礙られ、儞が一念心の愛、水に來り礙られ、儞が一念心の瞋、火に來り礙られ、儞が一念心の喜、風に來り礙らる。若し能く是の如く辨得せば、境に轉ぜられず、處々境を用ゆ』、また因に僧に問ふ『有る時の一喝は金剛王寶劍の如く、有る時の一喝は踞地金毛の獅子の如く、有る時の一喝は探竿影草の如く、有る時の一喝は一喝の用を作さず、汝作麼生か會す』、僧擬議す、師便ち喝す。また因に僧の來るを見るや、便ち拂子を竪起す。僧禮拜す、師便ち打つ。また僧の來るを見るや、また拂子を竪起す。僧顧みず、師亦た打つ。以て臨濟の禪風を見るべし。且つ夫れ其の老婆親切なるに至りては、三玄三要を以て、屋裏の玄扉を開き、四料揀四賓主を以て、宗乘の妙旨を示したるも、也た是れ渡海の船筏たるに過ぎぬ。

六祖以後の禪風(二)

五家七宗の禪風……潙仰宗祖の要語並に機緣……臨濟宗祖の要語並に機緣……曹洞宗祖の要語並に機緣……雲門宗祖の要語並に機緣……法眼宗祖の要語並に機緣……黃龍・楊岐の禪風……默照の禪・看話の禪……禪風變調の原因……門風の黨護……無眼子の續出……淨業傍修……孔老儒道の影響……元明の高僧……禪風の陵夷

五家の禪風は古來幾多の宗匠に依りて批判せられたるも、一言にしていへば、潙仰宗の特色は照用無礙、即事默契に在り、臨濟宗の家風は知見超脫、機鋒嶮峻に在り、曹洞宗の門風は修證一如、行持綿密に在り、雲門宗の長處は函蓋截流、直指簡明に在り、法眼宗の特長は事理圓融、啐啄同時に在り、黃龍は禪機穩密、楊岐は道履純眞、倶に一世を風靡し、遂に一派を形成するに至つたのである。

今暫く、前記開祖の要語または機緣を擧ぐれば

潙山、上堂衆に示して曰く『實際理地一塵を受けず、萬行門中一法を捨てず、若し也た單刀直入趣入せ

時は瓦礫も光りを發つ、所謂聲色外の威儀、知見の前の規則である。故に五家七宗の名を執して、徒らに其の特色なるものを擬せば、恐くは混沌に眉を描くの類にして、巧を弄して拙を做すを免れぬ。然れども、今且らく初學の爲めに、同中に異を辨じて其の禪の一端を叙べて見やうと思ふ。

ではない。

五家とは、潙仰宗・臨濟宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗の五派で、之に黄龍派・揚岐派の二派を加へて七宗と稱す。潙仰宗は南嶽下四世潙山靈祐と、其の嗣仰山慧寂を以て開祖とし、臨濟宗は南嶽下第五世臨濟義玄を以て開祖とし、曹洞宗は青原下第五世洞山良价を以て開祖とす。（曹洞と稱するは曹溪の正統たる洞山の宗風といふ意に出づ、或は曰く洞山の嗣に曹山本寂あり、此の師資の名に採ると、然れども日本傳來の曹洞宗よりすれば、曹山は傍系に屬するを以て前說に據るを穩當なりとす）雲門宗は青原下七世雲門文偃を以て開祖とし、法眼宗は青原下九世法眼文益を以て開祖とす。臨濟七世慈明楚圓の下に幾多の英俊あり中に黄龍慧南、揚岐方會の法席最も盛んにして、遂に二派を爲すに至れり。五家は晚唐より五代の間に分立し、二派は宋代に起れり。

禪書の雙璧と稱する碧巖錄は、雲門下第四世雪竇重顯の頌古百則と、揚岐下第四世佛果圜悟の評唱とに成り、從容錄は洞山下第十世天童正覺の頌古百則と、洞山下第十四世萬松行秀の評唱とに成る。

五家七宗の稱ありと雖も、是を宗派の分裂と見るべきにあらずして、畢竟、臨濟・洞山等の大人格者の反映たるに過ぎぬ。されど五家と呼び、七宗と稱するだけそれだけ禪門の勢力は最も全盛を極めたのである。

禪門の曩祖の靈機は、固より繩墨を以て判ずることは出來ぬ。把住する時は眞金も色を失ひ、放行する

喝を下し、有時は揚眉瞬目し拈槌竪拂し、擒住し托開するが如き、所謂大用現前規則を存せざる活手段を弄せられた。棒喝の如きは、既に六祖が神會を接するに當り、拄杖を以て打つこと三下して『吾れ汝を打つ、痛か不痛か』と言はれし因緣が、六祖壇經に出たり。また馬祖が百丈を接する時に大喝を下し、他をして三日耳聾せしめられた。されど、盛んに行はれたのは黃檗・德山・臨濟以後であるが、黃檗の棒下には臨濟を打出し、德山の棒頭には雪峯を跳出せしめ、臨濟の喝下には三聖・興化等の哲匠を輩出した。實に棒頭に眼あり、喝下に淚ありと謂ふべきである。且つ夫れ諸方に徒を匡し衆を領ずるの宗匠、蘭菊芳を競ひ、龍虎威を爭ひ、各々其の特色を發揮するも、其の間自ら共通せる禪格の見るべきありて、叢林の行法、參禪の威儀、主客問答の語格、體裁等、全く禪門一流の風規を傳ふに至れり。是れ禪道發展の結果、有ゆる方面に於て新機軸を生ずると同時に、宗乘の提綱、接衆の機用、順逆縱橫、與奪自在、一句下に不盡の乾坤を開き、一手頭に無邊の風月を藏め、渾身心を拈じて佛法を宣說し、全手脚を擧して祖道を流通せられた。故に六祖以後、唐の宣宗帝の時代、即ち凡そ、靑原下の雲巖・道悟・南嶽下の黃檗の頃までが、禪風更新の時代と稱すべきである。

中國に彌綸する禪門の中にも、卓越せる大宗匠は夫々特色ある風格を示し、其の門下の法子法孫は、其の家風を繼承して益々光輝を發揚し、忽ち禪界の丰標として參禪者の歸仰する所となつた。是れが五家七宗の分岐したる所以である。故に宗派を分つと雖も、彼の顯密聖淨の如く、宗意敎義を異にしたるもの

中にも、靑原の下には石頭希遷あり、湖南に在りて盛んに禪風を宣揚した。其の下に藥山惟儼・丹霞天然・天皇道吾・潮州大顚等を出し、藥山の下に雲巖曇成・船子德誠等あり、天皇の下に龍潭崇信あり、雲巖は洞山良价を出し、龍潭は德山宣鑒を出し、禪門の龍象雲の如くに出現した。

一方、南嶽下には馬祖道一あり、江西に在りて祖道を恢弘し、湖南の石頭と與に日月雙び懸るの槪があつた。天下參禪の道俗、江西に赴かざれば必ず湖南、爲めに禪僧安居の道場を江湖會と稱するに至つた。馬祖下には百丈大智・南泉普願・大梅法常を始め八十餘員の善知識を出し、百丈下には黃檗希運・潙山靈祐等あり、南泉下には趙州從諗・長沙景岑あり、黃檗の下に臨濟義玄あり、潙山の下に仰山慧寂ありて、祖苑の麟鳳林の如くに繁興した。

於是乎、禪道は四百餘州を風靡し、王侯相將は競て禪門に歸し、名藍大刹は隨處に建立せられ、居士の中にも、龐蘊・白居易・裴休・李翺等の如き傑出したる禪者が現はれ、偉大なる勢力を以て璨然たる禪世界を現出した。

從つて各地の禪刹に於ては、朝參夜參間斷なく、擧手投足の上にも相互に禪道の修養を琢磨して、其の識見を戰はすといふ狀態であつた。殊に禪は直截簡明に眞理を提示し、文字に泥まず名相に着せず、直下に佛心を體得し、自己の面目を徹證するを宗旨と爲すを以て、宗乘を擧揚し、學人を接得するに當り、自から其の接化、誘引、勘辯、問答等に獨得の機用を示すに至つたのである。加之、有時は痛棒を與へ熱

六祖以後の禪風（一）

北宗禪の盛衰……六祖門下の盛運……靑原下の法孫……南嶽下の法孫……禪道天下を風靡す……禪風漸く分る……六祖の行棒……馬祖の放喝……禪風更新時代……五家七宗の分出……五家七宗の開祖……禪書の雙璧とその作者……分派は大人格の反映たるのみ……同中敢へて異を辨ず

支那の禪道は、六祖以後に於て異常なる大發展を來した。神秀の門下にも嵩山普寂等の宗匠ありて、北宗禪を擧揚し、大安道璿を經て大安行表に至る。我朝天台宗祖傳敎大師は、渡唐の前、行表に參じてこれを傳へられた。然し、北宗禪は幾も無くして衰運を呈した。

然るに、六祖の門下は多士濟々、靑原行思・南嶽懷讓の二哲を上首として、四十餘人の法嗣ありと稱す。荷澤神會・梵僧崛多三藏、有名なる證道歌の著者永嘉玄覺、唐の肅宗・代宗兩帝が師事せられたる南陽慧忠等は、何れも卓越せる敎界の偉人であつた。

一如、行解相應なるを以て、六祖道の中に、無量の妙義、無盡の願行も、悉く包擁して餘す所なきを知らねばならぬ。

大師のお言葉に

この法は人人の分上に、ゆたかにそなはれりといへども、未だ修せざるには現はれず證せざるには得ることなし

と、深く禪定に入て身心脫落し去る時は、迷悟凡聖の岐路を坐斷し、是非得失の窠窟を踏飜して、本來無物の天地に獨立獨步すべきである。然れども實踐躬行の道業に至りては、常に大慚愧心を抱き、大勇猛心を出し、以て不染汚の修證に精進せねばならぬ。太祖大師は

たゞ諸人の精進と不精進とによりて諸佛頭出頭沒せるのみなり、今日も頻りに辨道し、仔細に通徹せば、釋尊直に出世なり、たゞ汝等自己不明に依りて、釋尊昔日入滅す、汝等既に佛子たり、何ぞ佛を殺すべけんや

と仰せられた。故に、吾人は常に六塵の妄境に惑はされず、名利の爲めに縛せられず、從晝至夜、間斷なく心鏡を琢磨せざるべからず。而して、修し去り修し來りて不退轉ならば、始めて六祖道の端的に證入することを得べし。

要するに、神秀は學地の大賢にして、六祖は入證の聖者である。神秀は上乘の士にして、六祖は最上乘の師である。神秀は行位の規範にして、六祖は證位の正師である。從つて此の兩師は其の家風を異にするも、吾人より之を見れば、倶に師表として崇敬することを妨げず。但し、宗乘の極致に至りては、修證

つて居られた。故に、古來兩師を評するに南頓北漸の稱を以てした。六祖は南方に在りて頓悟の禪を擧揚し、神秀は北方に在りて宣傳したからで、此の名稱は六祖の在世中、既に之れあり、六祖壇經にも記載せられて居る。

其の後の禪風は六祖の法子法孫に依て全盛を極めたが、神秀派下にも亦た幾多の善知識を輩出し、現に我が國の天台宗開祖傳敎大師の如きは、神秀四代の祖、大安行表より禪道を傳へられた。

南北頓漸の派流は、互に相對峙して禪海幾多の波瀾を起したものと思はれ、六祖三世の孫石頭希遷も其の著『參同契』の劈頭に於て『竺土大仙の心東西密に相附す、人根に利鈍あり、道に南北の祖なし』と示されてある。

元來、六祖は神秀の尊敬する所であつた。六祖壇經に依るに、神秀は其の徒に告げて『他(六祖を指す)は無師の智を得て深く上乘を悟る、吾れ如かず、且つ吾が師(五祖)親く衣法を傳ふ、豈に徒然ならんや、吾れ恨むらくは、遠く去て親近すること能はず』というて居る。尤も、壇經は南宗派の著述に係るものではあるが、神秀の人格を忖度するに彼が恭謙の德に富める、六祖を待つに長者を以てせれたであらうと察せられる。

予は此の兩師に對しては別派の觀を爲さず、倶に師表として推尊して居る。六祖の宗風は禪道の丰標にして、所謂最上乘なるもの、神秀の家訓は行持の龜鑑にして、吾人の日常實踐すべきものである。高祖

時に慧能は碓房に在て之を聞き、其の見處を肯んぜず、自ら左の一偈を作り、他に託して之を書し以て廊壁に寫さしめた。

菩提本無樹　明鏡亦非臺　本來無一物　何處惹塵埃

五祖は、此の夜潜に衣法を慧能に附して、達磨六代の祖位に列せしめた。

慧能は五祖の垂訓にに遵ひて跡を四會縣の漁樵の群に晦ますこと十五載の後、始て世に出でて禪道を高唱し、曹溪山寶林寺に住するに及んで、大に化門を伸暢して、天下の龍象を陶冶し、禪風德化四海に充溢し、玆に達磨の禪風を大成せられたのである。神秀は五祖の寂後、江陵の玉泉寺に住して宗風を擧揚し、唐の則天太后の歸崇を受け、高德一世に冠たるものがあつた。

六祖と神秀との禪風は、前偈に於て略ぼ其の大要を見ることが出來る。神秀の所謂『身是菩提樹』は即身成佛の法門、『心如明鏡臺』は法界一心の妙理、後の二句は正精進の行持を說似したるもので、實に宗乘の大旨を道破し、修證の要義を提唱したる千古の格言である。然れども猶ほ相對的修證に滯りて、未だ絕對的悟道の境地に到達せず、六祖に至りては、煩惱菩提の閑封疆を坐斷し、一心萬法の假名字を超出し、無物の當體、有無倶に融じ、無塵の端的、淨穢兩ながら空じ、實に蕩々乎として人能く名くる無きの觀がある。

要するに、神秀は猶ほ門外に在りて未だ門内に入らず、六祖は既に歸家穩坐して佛祖の大機を掌握し去

を起し、母の激勵に依り、意を決して黄梅山に至り、五祖弘忍に參ず。祖問ふ『汝は何れの人ぞ、將た何物を求めんとする』、慧能曰く『弟子は是れ嶺南新州の樵夫なり、惟だ作佛を求む』、祖曰く『嶺南の人佛性なし、如何ぞ佛を得ん』新州は僻陬の地にして文化低劣なるを以て、斯く抑下して、其の志氣を檢せられた。慧能曰く『人に南北ありと雖も、佛性本と南北なし』、祖、其の道器なるを知り、命じて後院の碓房に入らしむ。慧能、欣然勞役に服し、柴を割り碓を踏むこと八ヶ月、此の間、時々に參究し念々に工夫して祖道の神髓を徹證した。

黄梅の會下、七百の淨侶ありて、欝然たる大叢林であつた。中に就て神秀獨り上座に位し、祖を扶けて教授の任に當り、衆の爲めに敬重せらる。神秀は開封の人、初め儒業を修め後ち出家して經論を學び、遂に五祖の輪下に投ず。祖また之を器重して『吾れ人を度すること多し、悟解に至ては汝に及ぶ者なし』と告げられた程であつた。

五祖は寀細に隨徒の悟處を驗辨し、更に衆をして、各々一偈を作りて得悟の端的を呈露せよと命ぜられた。衆は齊しく神秀を推して、敢て自ら出づる者が無かつた。神秀は左の一偈を書し之を南廊の壁間に揭げた。

身是菩提樹　心如明鏡臺　時時勤拂拭　勿使惹塵埃

五祖見て大に歎賞して『此偈に依て修せば、必ずや惡道を解脫して勝果を得ん』といはれた。

六祖と神秀

禪門の二大分派……慧能禪師……神秀上座……悟處の驗辨……神秀上座の一偈……慧能禪師の一偈……二神足の化導……修證の要義……無物の端的……南頓北漸……南北頓漸の對峙……神秀上座六祖を推尊す……六祖の禪風は禪道の丰標たり……神秀の家訓は行事の龜鑑たり……神秀は學地の大賢・六祖は入證の聖者

達磨大師純一無雜の禪風は、五祖弘忍の門下に至りて、二大分派を見るに至つた。尤も、四祖道信の嗣には、五祖弘忍の外に法融ありて化を牛頭山に弘む。稱して牛頭禪といふ。然れども、其の禪風は大同小異にして、宗勢また普及するに至らず、故に分派と稱する程にはあらず、僅に一傍系と見て可ならん。五祖下に於ける二大分派とは、六祖慧能と神秀とである。

慧能は新州の人、三歲にして父を失ひ、母に事へて至孝、家頗る貧窶、長ずるに及んで山に樵し薪を鬻ぎて母に供ず。二十四歲の時、十字街頭に一客の金剛經を誦するを聞きて省あり、是より出家求道の志

然るに、我が列祖は、毫も宗派を立せず格則を設けず、千紫萬紅の如き教苑學圃の間に、超然として不二の大道を擧揚し、唯心爲宗の法門を高唱せられた。されば支那初期の禪門は、恰も富士の雄姿が巍然として雲烟出沒の間に獨露するが如くであつた。而して、其の禪風は坦々砥の如く、穩々當々たるものであつた。故に是を禪道中心の時代と稱すべきである。

家具と爲し、一切の聖教を以て自己の手脚と爲し、自ら主人公の位地に立て、唯有一乘の大禪定門を打開せられたのである。

二祖慧可禪師は、大師の神髓を面稟して、純一の禪風を弘通し、酒肆にも入り、屠門をも過ぎり、時には街談に習ひ、時には廁役にも隨ひ、勞働者の群にまで投じて同事行を打せられた。

三祖僧璨禪師は、信心銘を著はして參禪の要訣を開示し、其の劈頭に於て『至道無難、唯嫌揀擇、但莫憎愛、洞然明白』と說破せられ、末尾に於て『信心不二、不二信心、言語道斷、非古來今』と結ばれた。

初祖に二入四行の垂訓あり、三祖に信心銘の提撕あり、是れ實に支那禪錄の嚆矢である。

四祖道信禪師は化を破頭山に開きて『一切諸法悉皆解脫』と說破し、五祖弘忍禪師は衆を黄梅山に攝して、益〻禪道を紹隆せられた。

四祖の下に法融禪師あり、牛頭山に於て化を開かれたので、是を牛頭禪と稱す。その唱道する所は、圭峯宗密禪師が泯絕無寄宗と判ぜし如く、消極的解脫に相似すと雖も、達磨禪たることを失はず。彼の有名なる南陽の慧忠國師や、鳥窠道林禪師などは皆な其の法孫である。

此の一百五十年間は支那佛教興隆の時代であつて、眞諦三藏・玄弉三藏等は盛んに經論を譯出し、智者大師は天台宗を開き、善導大師は淨土教を開き、道宣律師は律宗を開き、華嚴・法相・三論・成實・倶舍等の宗旨は皆な此の時代に於て立教開宗せられた。誠に蘭菊美を競ひ珠玉光りを交ふるの觀があつた。

當に何事を求めんとす』慧可曰く『唯願くは和尚慈悲甘露門を開きて、廣く群品を度したまへ』、大師曰く『諸佛無上の妙道は、曠劫精進、行じ難きを能く行じ、忍ぶに非ざるを能く忍ぶ、豈に小德小智、輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲し、徒らに勤苦に勞すべけんや』というて、また默然兀坐せり。是に於て慧可は、利刀を執て自ら左臂を斷じ、始て入室を許された。大師は常に『外、諸緣を息め、內、心喘ぐこと無く、心墻壁の如くにして以て道に入るべし』と說似し、驀向に禪道を振り翳して敎外の禪を擧揚せられた。大師の印度に在るや、錫を四方に振ひて、鋭利なる舌鋒を以て、殺活の靈機を轉ぜられたるが如し。然るに、支那に入るに及びて態度一變、多く沈默を守りて妄りに言端に涉らず、單刀直入、見性成佛の法門を打開せられた。大師接化の本懷は、此の態度に依て粗ぼ其の機微を窺ふことが出來ようと思ふ。

按ずるに、後漢の明帝の時、佛敎始めて支那に入りてより、大師の西來まで約四百五十餘年、其の間、西方より入支せる高僧碩學實に少なからず、支那に於ても卓越せる賢哲學匠番々出世し、經典の飜譯、敎理の研究また甚だ隆盛であつた。殊に東晉以前より禪經の傳譯漸く盛んにして、之を實行するの傑人また少なしとせず。羅什・覺賢等の輩出するに及びて一層の發展を致し、大師の西來と相前後して寶誌公・傅大士の如き禪者を生ずるに至つた。此等の禪者は儒道二敎、就中、老莊哲學思想の影響を受けて、禪道提唱の上にも老莊的色彩の存することが首肯せられる。

此の時に當り、大師は正法眼藏を荷擔して、驀直に直截根源の禪風を宣揚し、一切の經論を以て禪門の

五家七宗の分派以後宋末に至る、凡そ四百三十年間（我が後宇多天皇の時代まで）

第四期　禪風陵夷時代

元朝以後今日に至る、凡そ六百五十年間

達磨大師は、西天第二十八代の禪祖にして、支那禪門正宗の初祖である。大師は南印度香至王の第三子、幼にして聰明英叡、夙に脫塵の志氣あり、二十七祖般若多羅尊者に就て出家し、左右に參侍すること四十年、尊者の寂後、廣く佛法を弘通して、隨時隨處に破邪顯正の法輪を轉じ、六派の宗旨を說破して一貫の宗乘を擧揚すること六十七年の後、支那傳道を實行せられた。されば、大師西來時の年齡は、少なくとも一百二三十歲なりしならん。航海三周を經て支那南海廣州府に着す。時に梁の武帝の普通年間であつた。始め武帝に見えられたが、有名なる碧巖錄第一則廓然無聖の話は其の時の問答である。惜い哉、大聲俚耳に入らずして、機遂に契はず、爲めに大師は袖を拂て梁を辭し、一葉の船を泛べて揚子江を渡り、直ちに魏の嵩山の少林寺に入りて面壁九年、直指人心見性成佛を標榜して、禪道中心の宗風を宣揚せられた。

此の間に二祖慧可禪師を得て、心法を面授せられた。慧可は志氣不群にして、內外の典籍に通じたるも、猶ほ自ら滿足せずして『孔老の敎は禮術の風規なり、莊易の書は未だ妙理を盡さず』と嘆じ、遂に大師の禪室を扣きたるも入室を許されぬ。其の夜、大に雪降り積んで腰を埋む。大師曰く『汝久しく雪中に立つ

支那初期の禪風

支那の禪風變遷の四期…支那禪門の初祖…廓然無聖…不立文字敎外別傳…達磨大師以前の禪風…唯有一乘の大禪定門…二祖慧可禪師…三祖僧璨禪師…四祖道信禪師…五祖弘忍禪師…牛頭法融禪師…蘭菊美を競ふ…禪道中心時代と稱する所以

支那に於ける禪風は、凡そ左の四期に劃して見ることを得べし。

第一期　禪道中心時代

初祖達磨大師より五祖弘忍禪師に至る、凡そ一百五十年間（梁の武帝―我が繼體天皇―の時代より唐の高宗帝―我が天武天皇―の時代まで）

第二期　禪風更新時代

六祖慧能禪師より凡そ一百八十年間（唐の宣宗帝―我が文德天皇―の時代まで）

第三期　分派變遷時代

るは三世佛の寃讎と像法決疑經には說き、四十九年一字不說と楞伽經には說かる、是を以て知るべし、

如來本證の境界は究竟じて、凡夫の分別常識文字言句の上には無かりけりと云ふことを說き得て要領を得たるも、未だ以て完全無缺の斷定とは稱し難い。言詮不及意路不到の妙法を拈提して、縱横無礙に宣說せられたのが、釋尊の四辯八音であるから、此の意味よりすれば、一切の聖教を擧げて悉く禪道無相の道場を打開したまひしものとも拜し奉るべきである。

要するに、西天列祖の時代は、別に獨立したる禪宗禪派なるものは無い。二十八祖は箇々大教主であると同時に、箇々大禪師にてあらせられた。故に是を禪教圓融の時代と稱するも、失當の言には非ざるべし。

ねて、此得道の爲めにせんと、悉く是れ華なき空に華をふらし、穴なき處に穴を生ず、塵劫微塵劫を經るとも解脫の分なからん、まさにとかく心にねがふ所なき是を名けて道といふ、云云

と垂示せられた。梵行禮讃は尊重すべき淨業であるが、自己を保任することを知らざれば、依然として妄想窟裡を脫すること能はず、自己保任の大事是れ卽ち禪である。

釋尊一代の聖教は、小乘あり、權大乘あり、實大乘あり、其の修行の法門も亦た萬差なりと雖も、禪道を離れたものは無い。小乘敎には小乘禪あり、大乘敎には大乘禪あり、禪は自悟自得の法なるを以て、全佛敎を通じて禪なきはあらじ。法華には法華三昧あり。念佛には念佛定あり、何れも禪に依て體驗得證するのである。高祖大師は『佛法を習ふといふは自己を習ふなり』と仰せられた。佛法を佛法として研鑽し解說するを敎と稱し、佛法を以て自己に換却して、卽心是佛・卽心是法の理想を實現するを禪と稱す。

されば、斷惑の羅漢、入聖の菩薩は皆な應分の修禪者である。其の禪道を大成して、釋尊自證の法門、卽ち不可說不可商量の妙心に證契して、佛正法を荷擔せられたるを禪門の祖師と稱するのである。

面山和尙は

夫れ如來の一代時敎、頓漸權實の經論は、衆生の根機區々なるに任せて種々の說相あり、是れ隨宜の說なれば如來本證の境界を驀直に示したまふに非ず間大乘經論の中に本懷を宣ふ所ありと雖も、經師論師の判釋とて凡夫の情識知解にて測る故に、正法還て邪義になること多し、是の故に文に依て義を解す

第十四祖龍樹菩薩の如きは、八宗の祖師と仰がるゝ聖者にして、大乘顯密の聖教は、龍樹に依て宣示顯說せられた。その師迦毘摩羅尊者が、龍宮の請に趣きて、如意寶珠を受けたまひし時、龍樹は『此の珠は世中の至寶なり、是れ有相なりや、無相なりや』と問うた。尊者は『汝只だ有相無相を知りて、此の珠の有相に非ず無相に非ることを知らず、亦た未だ此珠の珠に非ることを知らず』と答へられた。龍樹は是に於て深悟せられたとある。有無の論、中道の理は、龍樹の夙に硏鑽し盡せし所なるべし。而も猶ほ一團の疑着ありしが、今の一語に於て瓦解氷消することを得られた。此の深悟の境、是れ卽ち禪である。

第二十一祖婆須盤頭尊者は、常に一食不臥、六時に佛を禮し、淸淨無欲にして專ら道行を修め、衆の歸仰する所であつた。二十祖闍夜多尊者は之を斥して『此の偏行の頭陀、能く梵行を修するも、恐くは佛道を得ること能はじ、縱ひ苦行して塵劫を歷るも、皆な虛妄の本なり』と訓誡せられた。衆は驚て『尊者果して何の德行かある』と問ひしに、闍夜多は『我れ道を求めず、亦た顚倒せず、我れ佛を禮せず、亦た輕慢せず、我れ長坐せず、亦た懈怠せず、我れ一食せず、亦た雜食せず、我れ足ることを知らず、亦た貪欲せず、心に所求なき、是れを名けて道と曰ふ』と示された。婆須盤頭は之を聞て漏智を發せられた。從來の婆須盤頭は身を苦しめて道を得んと努めたが、今は道を以て身と爲して、無漏の聖域に證入したのである。故に、太祖大師は此の因緣を提唱して更に

佛の成ずべきあり道の得べきありと思うて、或は持齋梵行、長坐不臥、禮佛轉經して、一切の功德を重

西天の第二祖阿難尊者の如き、釋尊に近侍すること二十年、多聞第一にして聰明博達なりしも、釋尊滅後、迦葉尊者に參隨すること二十年の後、始て心法を嗣承せられた。吾人の生活に卽して眞理を驗證し、自己の全身心をして佛心佛德に同化せしむるのが禪道である。故に『聞思は猶ほ門外に處するが如し、坐禪は正に家に還て穩坐す』というて居る。

絕對の妙理と淨妙の佛心とは、人々分上ゆたかに具はれりと雖も、修せざるには現はれず、證せざるには得ること無し。但だ煩惱の塵垢を去り、我見の籠窟を脫し、大無我の境地に達する者にして、始て能く豁然として開悟することを得べし。

此の得悟の法は固より言語文字の及ぶ所ではない。人の水を飲で冷煖自知するが如し。之を體驗する者のみありて、自覺自證して正師し印可を被る、是を證契卽通と稱するのである。

釋尊、曾て靈鷲山に在りて、八萬の大衆を集めて說法の座に臨りたまふ。時に釋尊は更に一語をも發したまはず、只だ一枝の花を拈じて瞬目したまへり。大衆は佛意を領ずるに由なく、茫然、之を瞻仰するのみであつた。唯だ摩訶迦葉尊者ありて、莞爾として破顏微笑せられた。卽ち會心の笑を漏らされたのである。尊者の心眼には釋尊の大精神が歷々と映徹し、尊者の心耳には釋尊の大法輪が華鯨の如く皷膜を響動したのだ。時に釋尊は『我れに正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付囑す』と仰せられた。是れ卽ち以心傳心である。

西天列祖の禪風

禪門正傳の禪…歸家穩坐…豁然大悟…證契即通…以心傳心…龍樹祖師の深悟…婆須盤頭尊者得道の因緣…自己保任の大事…教禪の圓融…禪門の祖師…一切の聖教はこれ禪道無相道場の開示なり…箇々大教主箇々大禪師

西天の初祖摩訶迦葉尊者より二十八祖達磨大士に至る間は、禪教圓融の時代とも稱すべきである。

前節に於て敍述せるが如く、禪門傳承の禪は、釋尊金剛座上開悟成道の王三昧であるから、佛敎々義の一部門の如く見てはならぬ。釋尊は此の王三昧に依りて成佛せられ、列祖また此の王三昧に依りて見性悟道せられた。此の王三昧は能く身心を調和して、昏沈散亂を淨除し、心地を鍛錬して不動の境地に安住し、正理を思惟して佛性を開發し、本具の性德を顯揚して慈悲の妙用を示現するのである。縱ひ眞理を究明し佛道を欣求すと雖も、事理圓通、佛我融合するに非ざれば、畢竟、知識の分際たるに過ぎぬ。禪門にては是を學地と稱して、證位を去ること猶ほ遠し。

の不殺生戒に就て之を論ずるも、獨り人類及び動物の生命を愛護するのみならず、國家には國家の生命あり、市町村には市町村の生命あり、家族には家族の生命あり、政治・法律・宗教・教育皆な夫々の生命なかるべからず。其の生命の充實發展を期して、文化の向上に努むべきは、不殺の大活現成である。若し國家に危害を加へ、或は市町村の衰滅を醸し、または政治・法律等の眞精神を破壞するが如きは、最も重大なる殺生の罪過といはねばならぬ。更に進んでは、一法一物をも之を活用し、一草一木をも之を濫費またば徒消すること無く、最善の誠意と最高の智能とを以て之を善用し利用するが如き、亦た實に不殺の大行持である。『持つ人の心によりて寶とも仇ともなるは黄金なりけり』黄金の如きも、濫用すれば德を傷つけ害を流し、活用すれば生を治め業を進め而して他を饒益す。故に吾人は此の意を諦觀して、萬境に對し萬事を處する上に於て、宜く不殺の行願を全うすべし、是れ人類最高の功德行である。

不偸盗の如きも、凡そ理由なく他に損害を與へ、若くは取るべからざるを取るが如き、皆な偸盗の罪過となる。公益を害し世務を妨げ、暴利を貪り侵掠を事とし、若しくは私利の爲めの故に公衆の不利を招致するの類は、悉く偸盗の罪愆たるを免れず。之に反して、公共の利益を增進し、一般の生活を裨益し、若くは他の財産を保護するが如き行動は、皆な不盜より出たる功德行に非ざるは無し。其の他の戒行も亦た之に準じて知るべきものである。

憎嫉、貪利愛名の邪念を増長するものである。是れ菩薩に息惡推善行ある所以である。

第八不慳法財戒。布施は六波羅蜜の初めに在りて積善聚徳の門と稱す。内に慳貪を離れ、外に慈悲を行じ、或は財を施して衆生の生活を資け、或は法を施して衆生の心意を益し、或は無畏を施して一切の不安を絶ち、之を行ふに當りては、自己の利名に拘はらず、他の報酬を期せず、但純愛の眞情を運らして、分に隨て之を行ふべし。是れ菩薩に財法倶施行ある所以である。

第九不瞋恚戒。瞋恚は惡趣の因にして滅善の魁なり、怨を結び生を害し自他をして倶に惱亂の渦中に投ぜしむ。忍の徳たること持戒苦行も及ぶ能はざる所、能く之を行ずる者は有力の大人と稱すといへり。一念の瞋心は衆魔をして便りを得しめ、一切の善根を喪失す。是れ菩薩に忍辱行ある所以である。

第十不謗三寶戒。吾人既に三寶に歸す、宜く其の聖訓を奉じて正道を進修し、現身に佛徳を顯彰し、現在に佛土を建立し、以て三寶の威徳を莊嚴せざるべからず。然るに、若し不信の群に墮して、妄りに三寶を謗り、又は佛教を曲解し、婬祠邪教に混じ、或は同一佛法中に於て、凡情我見を以て互に相排擠誹謗するが如きは、迷妄の甚しき者と謂ふべし。是れ菩薩に讃三寶行ある所以である。

是の如く、十戒各々、防非止惡の威力と、積善行道の徳相とを有す。故に是を十戒と名け、十行と稱す。威徳兼ね備はりて濟生利人の大慈悲光を無限に發揚するのである。

更に應用に約すれば、十戒の精神は、時に應じ處に隨ひ、回轉無礙にして盡くることあるべからず。彼

にするは人の道なり。萬徳の本は一誠に在り。是れ菩薩に諦語行ある所以である。

第五不酤酒戒。酒は身心を害し、諸過を招くの本なるを以て、道俗皆な之を誡む。飲酒は己れを損す、酤酒は人に及ぶ。經に酒は起罪の因縁と云へり。酒に溺るゝ者は、六情を放逸にし、色欲を増進し、惡友に親み、賢善に遠かり、節度を忘れ、財貨を傷け、事に懶く、理に昧く、約に背き、義を廢し、禮を失ひ徳に違ふ、加之、苟も精神を錯亂し見知を顚倒するは、亦た是れ一種の酒である。錢財に迷ふあり、美色に誤るあり、嗜好に溺れ、娛樂に狂ふも、亦た醉人の伍たるを免れず。故に禪戒には『迷悟も酒なり、生佛も酒なり、法界も酒なり、山川も酒なり、大地も酒なり』と示された。迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、只だ當に隨時隨處に不動不惑の三昧に住して、正慧を明了ならしむべし。是れ菩薩に明慧行ある所以である。

第六不說過戒。慈悲柔輭の心を以て他を愛語するは佛子の行持である。徳あるは讚むべし。徳なきは憐れむべし。若し妄りに他の過失を訐き他の缺點を說き、以て自ら得々たるが如きは、是れ寧ろ自己を傷け自己を瀆するものと謂ふべし。況や佛法中に於て、徒らに憎惡の情に駈られて互に相毀謗するが如きは、佛法を護持する所以ではない。是れ菩薩に護法行ある所以である。

第七不自讚毀佗戒。常に謙讓の美德を養うて憍慢に遠かり、他の善法を隨喜し、他の短處を扶護し、他の長處を推稱せざるべからず。然るに名利の爲めに自ら己れを讚し、漫りに他を誹毀するが如きは、偏執

じ。吾人は、單に人類のみならず、一般動物に對しても、人間生活上止むを得ざるもの以外は、平等大悲の念に任して、努めて愛念保護すべきである。本心の慈德一たび顯はるれば、一切萬物に對しても、自づから慈愛の心を存すべきである。戰場に臨んで敵を斃すにしても、仁義の軍に於ては、彼我國民の平和と幸福との爲めにして、其の目的は全然殺生と相反して居る。菩薩の十行に於ては是を慈悲行と稱するのである。

第二不倫盜戒。清廉潔白は人格の要素である。妄りに財欲に蔽はれて、他の財物を侵さんとするは、己れの所得を益せんとして却て其の罪累を重ぬるので、顚倒の甚しきものである。劫取・嚇取・偷取・不與取等は言ふに及ばず、恩を受けて之に酬いざる、祿を享けて職を怠る、權利を獲取して義務を閑却するが如き、亦た倫盜罪を構成することゝなる。吾人は須らく分を守り足ることを知り、專ら正義に則りて、俯仰天地に愧ぢざるを要す。是れ菩薩に少欲行ある所以である。

第三不貪婬戒。男女の禮を愼み、夫婦の道を正うし、邪念妄情を制して、身心兩ながら純潔なるべきは、家庭和樂の本、子弟教養の基である。若し情慾を恣にし婬蕩を維れ事とせば、家財を蕩盡し、職務を曠廢し、親族故舊をも辱むるに至るべし。是れ菩薩に淨梵行ある所以である。

第四不妄語戒。十惡の中、口罪最も多く、口罪の中、妄語最も重し。内、己れを欺き、外、人を誑かし善法に遠かり實道を塞ぐ、獨り佛祖の逆子たるのみならず、實に人道の賊である。誠は天の道なり之を誠

禪傳の大戒(三)

不殺生戒・・・慈悲行・・・不偸盗戒・・・少欲行・・・不貪婬戒・・・淨梵行・・・不妄語戒・・・諦語行・・・不酤酒戒・・・明慧行・・・不説過戒・・・護法行・・・不自讃毀他戒・・・息惡推善行・・・不慳法財戒・・・財法倶施行・・・不瞋恚戒・・・忍辱行・・・不謗三寶戒・・・讃三寶行・・・十戒と十行・・・不殺生の大功徳行・・・不偸盗の大功徳行

此の十戒を事相に約して略説すれば

第一不殺生戒。一切諸の珍財の中、身命財より貴ときは無し、佛心を體得して大慈悲心に住する者、誰か他の生命を尊重し保護せざるべけんや。殺生は、或は貪欲より、或は瞋恚より、或は愚癡より之を行ふ。境に輕重の別あり、意志に善惡の差あるも、均しく天地生成の徳に違背する大罪たるに於ては一なり、自ら殺生し、他をして殺生せしめ、方便を以て間接に殺生し、または他の殺生を隨喜し讃歎し、或は呪詛して殺生を遂げる等、其の方法は千態萬狀なるも、佛性の孝順心慈悲心を昧却するに至りては皆な同

融無礙である。故に、十戒は竟に一戒に歸し、一戒は無戒に歸するの如是法にして、銀盌に雪を盛り明月に鷺を藏すの妙旨に參徹せざるべからず。

過患法中に於て、過罪を說かざるを不說過と名く』とある。

盡十方界眞實人體なることを知らず、妄りに好惡長短の相を執すれば自讃毀佗罪を犯す。佛子は宜く大無我三昧に住して、六塵惡まざれば却つて正覺に同じきことを會取せざるべからず。故に戒文には『自性靈妙平等法中に於て、自他を說かざるを不自讃毀佗と名く』とある。

無緣の慈悲は廣く群生を攝し、無礙の光明は普く法界を照す。若し妄りに自他を執して慳惜の念を生ずれば慳貪罪を犯す。佛子は宜く平等大悲の念に住して、一莖草頭に寶王刹を建て、半杓水中に大法輪を轉じて、利生の行願を營むべし。故に戒文には『自性靈妙眞如周遍法中に於て、一相の慳執を生ぜざるを不慳貪と名く』とある。

法界を觀見するに、大地有情同時成道なり。若し妄りに憎惡の執を起し、瞋恚の情に縛せらるれば瞋恚罪を犯す。佛子は宜く法喜禪悅に住し、無我法中、進退動靜、無限の妙樂を占取すべし。故に戒文に『自性靈妙無我法中に於て、實我を計せざるを不瞋恚と名く』とある。

常住三寶は法界に充滿す。若し妄りに生佛を差別して、念々是れ佛心、法々即ち佛道なることを知らざれば謗三寶罪を犯す。佛子は宜く常に三寶海に入りて佛作佛行を打せざるべからず。故に戒文には『自性靈妙一如法中に於て、生佛の二見を起さゞるを不謗三寶と名く』とある。

以上の十戒は一大眞理の運行である、一大佛心の靈動である、十戒の一々が禪門向上の公案にして、圓

殺生と名く』とある。

自他一如の法中に於て、妄りに己利の欲念を生じ、刧奪盜竊の業を起さんとすれば偸盜罪を犯す。佛子は宜く人法二空の理を了じ、得失の見を生ずべからず。故に戒文には『自性靈妙不可得法中に於て、可得の念を生ぜざるを不偸盜と名く』とある。

諸苦の因る所は貪慾を本とす、清淨法中に於て、妄りに色相に迷うて愛染の念を生ずれば貪婬罪を犯す。佛子は宜く清淨法身を護念して不染汚ならんことを要す。故に戒文には『自性靈妙無著法中に於て、愛着の見を生ぜざるを不婬欲と名く』とある。

眞如實相を諦觀せずして妄法に迷惑し、正語正見に違背すれば、妄語罪を犯す。文に依りて義を解するは三世佛の寃となる。佛子は宜く假の名字に着せず、三業をして實相の理に一如ならしむべし。故に戒文には『自性靈妙不可說法中に於て、一字を說かざるを不妄語と名く』とある。

本性を昧却して顚倒の見を生じ、諸法に役せられて、見聞に瞞ぜらるれば飲酒罪を犯す。他を帶累して顚倒せしむれば沽酒の過に陷る。佛子は宜く迷狂を遠離して、常に正知見に住ぜざるべからず。故に戒文には『自性靈妙本來清淨法中に於て、無明を生ぜざるを不飲酒と名く』とある。

諸法本來解脫、日々是れ好日なるに、妄りに罪過を認めて憎嫉の念に蔽はるれば說過罪を犯す。佛子は宜く盡法界一佛法なりと觀破して、禪界に欲なきことを體得せざるべからず。故に戒文には『自性靈妙無

事相に約すれば、律儀を攝して諸惡を防止するは、是れ善意の活動にして、如來の斷德法身は之に由つて成ず。善法を攝して衆善を奉行するは、是れ正智の顯現にして、如來の智德報身之に由つて成ず。衆生を攝して平等利益するは、是れ純情の發露にして、如來の恩德應身之に由つて成ずるのである。

應用に約すれば、時處諸緣に應じて、不規を矯め、不正を匡し、不和を融じ、不利を除き、以て律儀を圓成す。時處諸緣に應じて、智能を廣め、德敎を興し、風俗を美にし、文化を進め、以て善法を莊嚴す。時處諸緣に應じて、貧窮を濟ひ、罪惡を化し、鬪諍を解き、福利を與へ、以て衆生を擁護するのである。

是の如きは皆是れ佛心の大機大用なるを以て、生々世々を盡して之れが實現を期するは、實に是れ佛子の本誓にして、人類に共通すべき最高の理想である。此の理想實現の標準として傳授せられたのが十條の行持門である。

梵網經には戒を輕重に分ち、此の十條を重として別に、四十八條の輕戒を說かれた。禪戒には輕を略して重のみを傳ふるが如くなるも、實に輕重相對の戒に非ざるを以て、此の十戒中に自づから一切諸戒を包容するものと見るべし。

今、理體に約して之を說かんに、衆生本來平等の法中に於て、敵對觀念を生じ、且つ生命の永遠なることを知らず、妄りに命根斷滅の想を起せば、殺生罪を犯す。佛子は宜く生死の執を脫し、佛性常住の妙理を體得せざるべからず。故に達磨一心戒文には『自性靈妙常住法中に於て、斷滅の見を生ぜざるを不

靈、圓通の妙道である。法は此の大靈妙道が無限に活動して、森羅萬象、生成進化するに名け、僧は一塵一法能く宇宙の大靈に歸入し、一事一物能く圓通の妙道に融合し、一卽一切、一切卽一、法々相合し事々無礙なるに名く。是を一體三寶とも稱するのである。

事相に約すれば、妙道の人格化せる釋尊を佛といひ、釋尊所證の法門を法といひ、その法門を習學するを僧といふ。是を現前三寶とも稱す。

應用に約すれば、大道の實現する是れ佛、敎化の行はるゝ是れ法、轉迷開悟、止惡作善、離苦得樂の功德を現はす是れ僧、之を住持の三寶とも稱す。禪戒に於ける住持三寶は、單に木佛畫像を佛とし、黃卷赤軸を法とし、剃髮染衣を僧とするに非ずして、三寶の威德の實現に依りて、歸依處たるの意義を有するものとする。要するに僧は法に依つて成り、法は佛に依つて現はる。三寶其の名を異にするも、終に一佛心に歸す。二祖慧可曰く『是心是佛、是心是法、法佛無二、僧寶亦た然り』と、馬祖曰く『卽心卽佛』と、吾人は宜く自己を返照して退歩承當すべきである。

次に三聚淨戒は誓願門にして、吾人本具の佛性に固有する靈德の發現である。理體に約すれば、諸法本來解脫と究盡せば、豈に煩惱業苦の我を礙ゆる者あらんや。草木國土悉皆成佛と參究せば、萬法悉く衆善の德相ならざるは無し。有情非情同時成道と體達せば、一衆生として佛化に浴せざるは無い。盡十方法界その儘が凡聖の窠窟を超越したる一大佛光明である。

禪傳の大戒(二)

三歸戒……一體三寶……現前三寶……住持三寶……回光返照の退歩を學すべし……三聚淨戒……理體に約してこれを說く……事相に約してこれを說く……應用に約してこれを說く……十重禁戒……斷滅の見を生ぜざるこれ不殺生……可得の念を生ぜざるこれ不偸盜……愛着の見を生ぜざるこれ不婬欲……一字を說かざるこれ不妄語……無明を生ぜざるこれ不飲酒……過罪を說かざるこれ不說過……自他を說かざるこれ不自讃毀他……一相の慳執を生ぜざるこれ不慳貪……實我を計せざるこれ不瞋恚……生佛の二見を起さゞるこれ不謗三寶……十戒は一戒に歸し一戒は無戒に歸す

佛法の大海は信を以て能入とす。故に初めに歸敬門あり、佛子の信仰は、佛法僧の三寶に歸投依伏して尊重恭敬すること、子の父に歸し、民の王に依るが如くなるべし。是を三歸依戒と稱す。

南無は歸命と譯するも、今は救我または度我の義譯に據るを可とする、理體に約すれば、佛は宇宙の大

讃毀佗戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒

禪戒の意義は、甚深微妙にして短文簡釋の能く盡すべきに非ず、宜く高祖大師の受戒卷、弉祖の教授戒文、卍山の禪戒訣、面山の大戒訣及び說戒、指月の禪戒篇、本光の試參請、萬仭の禪戒鈔等を參尋し、且つ廣く大小乘の戒經戒釋を討究して、其の深義に通曉するを要す。小見小知、獨斷臆說を以て私議してはならぬ。

今は之を細說するを避け、聊か說明も便なる爲め、理體・事相・應用の三義に分ちて、禪海の一滴を掬して參考に資することゝする。

諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛敎

是れ戒法の骨子である。諸惡莫作の時、盡法界一塵の煩惱罪惡を存せず、衆善奉行の時、盡天地一々淨光明を放ち、自淨其意の時、山河大地を擧げて佛德を顯現し、草木國土を擧げて佛淨土を莊嚴す。是れ卽ち禪身・禪心・禪界・禪生活である。『維摩經』に曰く

淨土を得んと欲せば當に其の心を淨うすべし、其の心淨きに隨って卽ち佛土淨し

禪定に非ざれば心意の垢穢を洗淨すること能はず、智慧に非ざれば心意の靈德を發揚すること能はず、三學圓融して戒德乃ち全きを得るのである。

禪門所傳の戒法は十六條にして、是を佛戒または菩薩戒、また一心戒等と稱す。此の十六條は、一切戒を攝し、一切定を攝し、一切慧を攝し、佛に在りても增さず、衆生に在りても減ぜず、一代藏經亦た悉く此の中に存して、圓滿具足せざるは無い。之を大別して三門と爲す。一には歸敬門、此に三あり。

南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧

次に誓願門、此に三あり。

第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒

次に行持門、此に十條あり。

第一不殺生戒、第二不偸盜戒、第三不貪婬戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自

みたまふや、衆大いに之を悲み、滅後誰を以て師となすべきやと問ひし時、釋尊は戒を以て師とせよと宣ひ、我が滅後は戒律を尊重し珍敬すべし、此の戒こそは汝等の大師なるぞ、若し我れ世に住するとも此に異なること無し、とまで極言せられた。

榮西禪師も

其れ佛法は持戒を以て先と爲す、若し佛戒を破して、佛子と號する者は、譬へば國王の臣の王命に順はずして、王臣と稱するが如し

と示された。『梵網戒經』には

持戒を平地と爲し、禪定を屋宅と爲して、能く智慧の光りを生じて、次第に明照を得、定慧の力莊嚴して萬行爲めに具し、乃至、佛道を成ずること、悉く戒を以て本と爲す

とありて、戒律を護持せざる者は斷じて定慧圓明の域に到ることは出來ぬ。『華嚴經』には、

戒は是れ無上菩提の本なり、應當に具足して淨戒を保つべし、若し能く具足して淨戒を持たば、一切の如來に讃歎せられん

と仰せられた。戒は實に昏衢の明燈、惑病の良藥、貧人の至寶、業因の解放である。只だ之を死守せずして宜く活守すべきである。

七佛通誡の偈に曰く

大眼目に歸すべきである。釋尊は、多くは時と處と機根とに應じて、適宜の戒を定められた。故に普通性の律儀もあれば、特殊性の禁戒もあり、之を實行するに當りても、戒相に拘泥して却て戒旨に背くこともあれば、戒則に反するが如くにして却て戒德を成ずる場合もある。

釋尊の在世に二人の比丘ありて、戒律を犯し慚愧に堪へず、尊者優波離に就て、疑惑と悔恨とを解脫するの法を求めし時、優婆離は懇ろに懺悔の法門を示した。時に維摩居士來りて優婆離に告げて『重ねて此の二比丘の罪を增すこと勿れ、罪性は內に在らず外に在らず中間に在らず、妄想是れ垢なり、妄想なき是れ淨なり、我を取る是れ垢なり、我を取らざる是れ淨なり、諸法は皆妄見なり、夢の如く炎の如し、其れ之を知る者を奉律と名け善解と名く』と說破した。是れ罪性本來自性なし、此の無自性に於て罪相を執する。是れ迷執罪累を增加する所以なることを示したので、謂ゆる實相懺悔の法門である。

梵網經には

正戒の相をも取らず、亦た邪念の心も無き、是を清淨の戒と名く

と說かれてある。戒法は畢竟、佛性無礙の妙德を表示したるものにして、決して煩瑣なる模型を設けて、之を株守せしむるが如き窮屈の法ではない。故に開遮持犯の特例を示して、自づから一條の活路を通じ、聲聞の持戒を以て菩薩の破戒と爲す場合もある。此の意甚深、仔細に參究せざるべからず。

されど、戒は是れ我が佛敎の道德律にして、令法久住の法、獨り戒を以て貴しとす。釋尊の入涅槃に臨

法眼藏なり、成佛作祖、必らず正法眼藏を傳持するによりて、正法眼藏を正傳する祖師、必らず佛戒を
受持するなり

と教訓せられた。

自己を究盡するを禪と稱し、禪心發揚の妙德を戒と名く、前に禪心と禪機とを敍述せしが、その禪機が道德的に活動するのが戒である。而して活動そのものが天眞の妙理に合し、佛性の慈悲を現はし、自利々他の功德を顯彰するを以て、其の言行も自づから秩序あり、節制あり、風規あり、格則あり、是れ戒法儀則の存する所以である。

然れども敢て人爲に成りたる一時の制法には非ずして、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざる、所謂無漏の法則、無作の威儀なるを以て、戒法の究竟する所は唯一佛性の德相であるから、是を一戒光明とも稱するのである。

前に於て、禪は三學六度を該ぬと說きしが、戒も亦た三學六度中の一部門に非ずして、學度を包容したる佛心戒であるから、禪と戒とは遂に一如に歸す。故に古人は『禪中に戒あり一にして二、戒の外に禪なし二にして一』と說き、是れ禪戒の稱ある所以なりと斷じて居る。

元來、佛教に說く所の戒律は、比丘戒あり、比丘尼戒あり、沙彌戒あり、沙彌尼戒あり、式叉摩那戒あり、優婆塞戒あり、優婆夷戒あり、五戒あり、十戒ありて、重々無盡であるが、要するに、自利々他の二

禪傳の大戒(一)

参禪問道は戒律を先となす……承陽大師の箴言……禪心と禪機と戒律……一戒光明……禪戒の稱ある所以……戒律の精神……懺悔滅罪……實相懺悔……戒はこれ佛性無礙の妙德なり……佛の正法を世にあらしむるものは實にこれ戒なり……佛戒を持たざるは佛子にあらず……戒法の骨子……禪門所傳の戒法……歸敬門……誓願門……行持門……禪戒の指南書……說述の三義

禪門には、一大事因緣として、必ず正傳の大戒を授受するを以て洪範とす。参禪問道は戒律を先と爲すとは禪規の示す所にして、戒律を護持するに非ざれば、斷じて禪を大成することは出來ぬ。故に高祖大師は、特に『受戒』の一卷を著はして

西天東地佛祖相傳し來れるところ、必らず入法の最初に受戒あり、戒を受けざれば未だ諸佛の弟子にあらず、祖師の兒孫にあらざるなり、離過防非を参禪問道とせるが故なり、戒律爲先の言、既に正しく正

看話の窠窟に投入し、片言隻語の名字に沒頭せば、恐らくは公案工夫の玄旨に辜負することであらう。」

思ひ、恰も禪道を切り賣するが如く見做すことあらば、これ祖道を賣弄する戲論事と謂はねばならぬ。

或人曰く、「今や臨濟の禪風は大慧の轍を履んで看話禪を擧揚し、曹洞の禪風は宏智の蹤に倣つて默照禪を提撕す」と。前者は時々に點檢し、頻々に警策するを以て、自然、階子禪と爲り易し。然れども、之に參ずる禪客は、其の志氣鋭利猛烈なる者が多く、後者は公案を與ふるも、多くは一本調子なるを以て、工夫動もすれば緊張を缺き易し。併し是れは、何れも一種の弊習であるから、兩者とも大に覺醒して穩密健剛の工夫に精進せしめねばならぬ。

高祖大師も『學道用心集』には、趙州無字の公案を擧して

> 無の字の上に於て、擬量し得てんや、擁滯し得てんや、全く巴鼻なし、請ふ試に手を撒せよ、且つ手を撒して、看よ、云々

と提示せられた。太祖大師は『父母所生眼、悉見三千界』に於て七年の研鑽を積まれ、峨山禪師は『月に兩箇あることを知るや』との接得に逢うて大疑團を生じ、猛烈に參究せられた。

然も與麼なりと雖も、公案現成する時、一條に非ず多條にあらず、階梯に非ず非階梯に非ず、一に多種あり二に兩般なきに至りて、始て七通八達することを得ん、工夫も亦た疑情を氷解して不疑の地に進み、迷執を打破して眞源に徹底し去らば、畢竟じて眞妄並べ究盡し迷悟倶に放下することを得ん。須らく知るべし、公案を跳出する時、公案當處に圓成し、工夫を忘却する處、工夫直下に透徹す。若し錯つて默照・

公案現成、羅籠未だ到らず

と示された。太祖大師は『坐禪用心記』に於て

思量せずして威儀を現ずる時は、見成卽公案なり、囘向せずして修證を成ずる時は、公案卽見成なり

と垂訓せられた。

彼の幾十則の公案なるものを收拾して、階級的に之を按排し、學人を接するに當り、一案を與へて疑着を強ひ、之を解答し得るに及び、更に他の一案を授け、三案四案、重々に捻出して、恰も階梯を昇るが如くなるものは佛祖屋裏の公案ではない。尤も太祖大師も、『坐禪用心記』に於て

心若し散亂する時は、心を鼻端丹田に安じて、出入の息を數へよ、猶ほ未だ息まざる時は、須らく一則の公案を提撕擧覺すべし

とも示され、また『三根坐禪說』に於て

中根の坐禪は萬事を放捨し諸緣を休息して、十二時中暫も怠隙なく、出息入息に就て、斷々として工夫す、或は一則の公案を提撕し云々

とも指南せられてあるから、公案接得の手段も、學人の知見を啓發し禪機を鍊磨して、之を大悟の妙境に誘引するの手段としては、固より不可なるに非ざれども、之を以て、悟處に階級あり、公案に淺深ありと

元來、公案とは、問題または法章といふに同じく、天目中峯は『山房夜話』に於て『佛祖の機緣世に公案と稱するは何ぞや』の問に答へて曰く

公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、法の在る所にして而して王道の治亂實に焉に係る。公とは乃ち聖賢其の轍を一にし、天下其の途を同うするの至理なり、案とは乃ち聖賢理を爲すを記するの正文なり、凡そ天下ある者未だ嘗て公府なくんばあらず、公府ある者未だ嘗て案牘なくんばあらず、蓋し取て以て法と爲して天下の不正を斷ぜんと欲するなり。云々

說き得て分明なりと謂ふべし。殊に我が曹洞禪に於て、高祖太祖の唱道せらるゝ公案は、佛法または祖道の代名詞とも見るべきである。釋尊が摩訶般若波羅蜜と說き、妙法蓮華と說き給へるは、正に是れ公案である。五蘊皆空と說き、諸法實相と說き給へるも亦是れ公案である。達磨の廓然無聖、曹溪の本來無一物、何れか公案に非ざる。是れ佛法なり、祖道なり、而して是れ佛子の服膺すべき法章にして、工夫辨肯すべき問題である。故に高祖大師は、特に『現成公案』の一卷を選述せられ、文中には

佛道を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝといふは、自己の身心及び佗己の身心をして脫落せしむるなり云々、

と教訓せられ、『普勸坐禪儀』の中にも

の如き、原曰く『何れの處より來る』、頭曰く『曹溪より來る』、原、拂子を拈じて曰く『曹溪に却て這箇ありや』の類である。此の方法が廣く行はるゝに及び、主として佛祖の機緣を擧して公案と名け、之を學人に授けて工夫の標準と爲すに至れり。

それが晩唐より五代を經て、宋に至り益々盛んに行はれた。彼の雲門下の高僧雪竇重顯の頌古の如きは、公案百則を選びて之を頌し、學人をして諷詠吟誦の間に、其の玄趣を會得せしめんとした。後に臨濟下の圜悟が之を評唱して碧巖錄を著はした。また曹洞下の碩德天童宏智は、雪竇の提唱に滿足せず、別に頌古百則を親撰して、曹洞綿密の宗風を擧揚せり。後に萬松行秀が之を評唱して、從容錄を著はした。此の二書は今猶ほ天下に流通して、禪門の雙璧たるの觀がある。

宏智と時を同うして大慧宗杲あり、法を圜悟に嗣て徑山に住し、機鋒辛辣にして碧巖錄を火中に投じたりしも、學人を接するに公案を以てし、專ら話頭に向て參究せしめ、遂に看話の禪風を弘通するに至る。宏智は頌古百則を選すと雖も重きを公案に置かず、只管に純一の禪風を擧揚せしに依り、稱して默照の禪となすに至る。

然れども、公案工夫なるものは益々天下に普及して、參禪上缺くべからざる一大至寶として、獨り臨濟門下のみならず、曹洞門下にも頗る流行を極め、其の結果一種の禪弊を生じ、得失相半ばするの觀を呈したのである。

公案工夫

參究の標的……佛祖の機緣……碧巖錄……從容錄……看話禪と默照禪……公案の普及……公案とは何ぞや……公案とは佛道の謂なり祖道の謂なり……現成公案……公案の階級的按排を斥く……公案の提撕擧覺……楷子禪と居眠り坐禪……先聖の公案工夫……切に忌む窠窟裡に沒在することを

禪門は不立文字教外別傳にして、以心傳心の宗旨なるを以て、元より公案と稱するが如き一種の模型を存すべきに非ざるも、禪風の隆盛に伴ひ、參禪の道俗稻麻竹葦の如く、賢愚相混じ、利鈍相雜はり、動もすれば研究の方嚮を誤り、參學の目標に惑ふ者を生ずるに至つた。是に於てか佛言祖語の中、最も適切なるものを擇びて之を授け、または一問一答の中に於て、參究の標的を示すことゝなつた。

南嶽懷讓の曹溪祖師に參ぜし時の如く、祖曰く『什麼の處より來る』、讓曰く『嵩山より來る』、祖曰く『是れ什麼物か恁麼に來る』、讓對ふること能はず、八載を經て始て省あり。また石頭が青原に參ぜし時

と開示せられた。知るべし、大乘といひ小乘といふは、法に在らずして人に在り、凡界といひ佛界といふも、境に在らずして心に在り、故に高祖大師曰く、

常住を談ずる門には萬法みな常住なり、身と心とをわくことなし、寂滅を談ずる門には諸法みな寂滅なり、性と相とをわくことなし

人法圓融する時は、佛法と自己と一に非ず二に非ず、心境雙び亡ずる時は、淨土と娑婆と同に非ず異に非ず、是の如くなる時は、靈山も吾人の面門に屹立し、少林も亦た吾人の座間に欝密たるべし。故に太祖大師は

此の會は是れ靈山會たるべし、靈山は是れ此の會たるべし、たゞ諸人の精進と不精進とによりて諸佛頭出頭沒せるのみなり、今日も頻りに辨道し、仔細に通徹せば、釋尊直に出世なり、たゞ汝等自己不明によりて釋尊昔日入滅す、汝等既に佛子たり、何ぞ佛を殺すべけんや

と誨示せられた。禪門には是の如き一隻眼が無ければならぬ。是を超越の知見とも向上の識見とも稱するのである。

り。火神來つて火を求む、是れ自己を以て自己を求むるの謂なり、盡十方世界自己ならざるは無し、是れ某が得入の妙境なり』、眼は大に叱して之を否定す。則、不滿に堪へずして山を下り、中路に於てまた自ら反省して、再び歸り來つて敎を乞ひ、乃ち問うて曰く『如何なるか是れ學人の自己』、眼曰く『丙丁童子來求火』、則、言下に省あり。前後の問答は同工同曲である。而して、前には不會にして後には省悟す。這裏の禪味仔細に參究せざるべからず。若し此の禪味を飽喫し去らば、洞山の麻三斤、南泉の茅鎌子、趙州の柏樹子、雲門の須彌山も亦た如是經の轉讀なることを了却し得るであらう。

是に於て超越の知見を開破し得ば、獨り溪聲下に如來の廣長舌を聽取し、山色裏に佛陀の清淨身を見得するのみならず、四阿含經の上に古佛の公案を參究し、阿羅漢道の上に佛地を見辨するの道理がある。故に高祖大師は『菩提分法』の卷に於て

古佛の公案あり、いはゆる三十七品菩提分法の敎行證なり、昇降階級の葛藤する、さらに葛藤公案なり、喚作諸佛なり、喚作諸祖なり

と提唱せられ、『阿羅漢』の卷に於ては

阿羅漢を稱して佛地とする道理をも參學すべし、佛地を稱して阿羅漢とする道理をも參學すべきなり、阿羅漢果の外に一塵一法の乘法あらず、いはんや三藐三菩提あらんや、阿耨多羅三藐三菩提の外に更に一塵一法の剩法あらず、いはんや四向四果あらんや

趙州從諗は祖席の英雄である。因に嚴陽尊者問ふ『一物不將來の時、如何』絶對無物の眞人その活計は如何なるや。州曰く『放下著』捨てよ放せよ、無物をも無するに非ざれば、絶對の道は通じ難し。尊者曰く『一物不將來、這の什麼をか放下せん』有無倶に放下し盡したる端的である。州曰く『擔取し去れ』それこそ無盡藏の至寶なるぞ。是れ永嘉の所謂『不レ得レ取不レ得レ捨、不可得中只麼得』の妙趣である。

道吾、曾て漸源と與に檀越の葬儀に臨む。源は棺を撫して曰く『生か死か』此の場合に此の問題を提起す、以て古人が如何に求道に熱烈なるやを知るべきである。道吾曰く『生とも道はじ、死とも道はじ』、源曰く『什麼としてか道はざる』、道吾曰く『道はじ道はじ』、默處雷鳴の如き響あることを會取すべきである。歸路、途中に於て再び問ふ、『和尚願くは某甲が爲めに道へ』、道吾曰く『道はじ』、源曰く『若し道はずんば和尚を打し去らん』、道吾曰く『打つことは卽ち打つに任す、道ふことは卽ち道はじ』、源便ち打つ、師弟倶に不惜身命である。漸源、後日、石霜の處に於て此の問題を會得し、道吾不道の慈旨に感泣し、袈裟を披して遙に禮謝した。雪竇は此の公案を頌して『兎馬に角あり、牛羊角なし、毫を絶し釐を絶し。山の如く嶽の如し』というて居る。

玄則、曾て法眼の會下に在りて、自ら得悟せりと稱す。法眼、一日、問うて曰く『汝は何れの處に於て入處を得たる』、則曰く『某、曾て青峰の輪下に在りて、如何なるか是れ學人の自己と問ひしに、青峰は丁丙童子來求火と答へたり、某言下に於て徹底せり』、眼曰く『如何か會す』、則曰く『丙丁は是れ火神な

迷相を超え、悟境に在りて悟處を越え、世間に在りて世間に墮せず、出世間に在りては出世間に墮せず、一法を拈じて一切法を了じ、一切法を擧して一法に攝す。高祖大師は

この單傳正直の佛法は、最上のなかに最上なり、參見知識のはじめより、更に燒香禮拜念佛修懺看經をもちゐず、ただし打坐して身心脫落することを得よ

と說かれたが、是れ必ずしも燒香・禮拜等を絕對無用視するのではない。端坐の正當時は、只管に端坐三昧の一法究盡にして、世法も無く佛法も無い。而して念佛懺悔の功德も自ら此の中に圓滿具足す。燒香の正當時も、只管に燒香の一法究盡にして、世法も無く佛法も無い。而して百千の三昧も自ら此の中に圓滿具足す。禮拜・念佛等の時も亦た復是の如くである。

黃金貴しと雖も眼に入れば翳と作る。些かも境に於て著を生ずれば早く我執に滯り、法に於て見を立すれば既に法執に礙へらる。是を以て跛鼈の空谷に入るが如く、觸處に累縛を招ぐのである。禪門の知見は此等の罣礙や累縛を超越するを以て、其の提撕も亦た凡情を以て測度することが出來ぬ。

禪錄の傳ふる所に依れば、釋尊が涅槃に入りたまふに臨み、文殊は特に再び法輪を轉ぜられんことを請うた。四十九年間の說法の總勘定を求めたのである。時に釋尊は『吾れ四十九年世に住して未だ嘗て一字を說かず、汝は吾に再び法輪を轉ぜよと請ふ、是れ吾れ曾て法輪を轉ぜしや』と曰はれた。一句下に於て一代藏經を抹殺せられた。此等の消息も名相に滯る者の肯定し能はざる所であらう。

超越の知見

超越の知見……大道の體寛にして法界を包容す……打坐の正當時……一法究盡……黄金貴しと雖眼に入りては翳となる……四十九年一字不説……放下著……一默雷の如し……玄則得悟の因緣……知見開發後の消息……葛藤も公案なり公案も葛藤なり……羅漢を稱して佛地となし佛地を稱して羅漢となす……大小は法にあらずして人にあり佛凡は境にあらずして心にあり……人法圓融の妙境……常濟大師の直指

禪は直指端的の法門なるを以て、禪の貴ぶ所は超越の知見である。超越の知見とは、何物にも拘束せられざるを云ふのみにあらず、事に卽して眞理の全體を盡し、法に卽して宇宙の全量を盡し、物々上に佛法の全機を現じ、頭々上に佛陀の全身を見るのである。

抑々、大道は體寛にして法界を包容す、自己も道なり、他己も道なり、草木山川も道なり、天地虛空も道なり、此の道生滅なく増減なく、大小の量なく迷悟の相なし。故に此の道を體得すれば、迷境に在りて

ならしめるのである。

然れども、一たび禪門の一大事たる宗乘を商量し、または提唱し擧着する時に際しては、閃電の靈機を發轉して、佛を呵し祖を罵るが如く毒氣を吐却することあり。故に參禪の士は、煙を見て早く火なるを知り、角を見て早く牛なることを知るが如く、言外の宗を會し、機先の旨を體するの一隻眼が無ければならぬ。

とゝする。禪門の大刹には、七堂伽藍それ〴〵主幹の職司を設けてあるが、中にも庫院または庫堂と稱するは、大衆の食糧を調辦する厨房である。禪家は古來より專ら枯淡を旨とし、其の食料の如きも、或は寺産に賴り、或は信施に俟ち、厚薄緣に任せて、貧を憂へず乏きに甘んず。芙蓉楷祖の如きは、多數の衆僧を敎養するに施物を借らず、寺有の莊園一歳の所得を三百六十分として日に一分を取り、飯を備ふるに足らざれば粥となし、粥と爲すに足らざれば米湯となして餓に充て、賓主共に憂色なく、只だ道業の進修を惟れ樂まれた。我が國の禪林も多く此の例に漏れなんだのである。骨山に在りて空乏に處し、僅かに陳米枯菜を以て大衆に給する場合の如き、自然に物品に對して輕忽の感を生じ、職務に對して嫌厭の念を起すは凡情の常である。高祖は『典座敎訓』に此の際に處する心術を敎訓して

凡そ物色を調辦するに、凡眼を以て觀ること莫れ、凡情を以て念ふこと莫れ、一莖草を拈じて寶王刹を建て、一微塵に入つて大法輪を轉ず、謂ゆる縱ひ莆菜羹（粗菜をいふ）を作るの時も、嫌厭輕忽の心を生ずべからず、縱ひ頭乳羹（好菜をいふ）を作るの時も、喜躍歡悅の心を生ずべからず。既に耽著なし何んぞ惡意あらん、然れば則ち麤に向ふと雖も全く怠慢なく、細に逢ふと雖も彌〻精進あるべし、切に物を逐うて心を變ずること莫れ、物を逐うて心を變じ、人に順つて詞を改るは是れ道人に非ず

と仰せられた。高下は人に在りて物に在らず、尊卑は心に存して物に存せず、凡情を離脫し、道眼を以て觀る時は、陳米敗醤にも無量の功德あり、運水搬柴にも無限の風流あることを知るべし。況や粒米片葉も

一休の瓢逸、桃水の枯淡等、人の意表に出づる行跡少からず。此等は何れも其の人にして始て意義ある者にして、之を以て一般禪者の常規と爲すべきではない。此等古禪德に對しては、其の行跡よりも寧ろ其の知見と願行に就て觀察する所が無ければならぬ。

殊に湖南の祇林が、毎に文殊・普賢を叱して皆な精魅と呼び、手に木劍を持して自ら魔を降すと稱し、僧の參問するあれば『魔來れり〳〵』と叫んで劍を亂揮し潛かに方丈に入る、是の如きこと十二年なりしといふが如き、五台山の隱峰が終りに臨み、倒立して寂を示したるが如きは、禪機を濫弄するの謗りを免がれざるべし。是れ吾人の斷じて學ぶべき態度ではない。

我が曹洞宗の如きは、古來より最も行持の綿密を貴び、高祖承陽大師、太祖常濟大師に至りて、一層嚴肅に威儀を恪守せしめられた。高祖の衆寮箴規、對大己法、赴粥飯法、洗淨卷、安居卷、袈裟功德卷、示庫院文、及び太祖の總持清規に於ける、日分月分年分の行持の儀禮等を拜讀すれば、其の行持の綿密にして森嚴なる、只々感激の外は無い。

尤も其の儀禮は、佛制の律儀と百丈の清規とに基き、更に卓越せる正知見と大信念とを以て制定訓誨せられたるものなれば、縱ひ僧門の行法とは言ひながら、其の含蓄せる精神を觀察し體忍せば、一般人に對する日常行爲の修養上、最高の指針と爲すべきものである。

今は此等の作法訓誨を一々敍述するの餘裕なきまゝ、其の中、厨房に於ける高祖教訓の一斑を擧ぐるこ

綿密の行持

禪門の標語…古禪德の奇言畸行…禪機濫弄の謗を免れず…行持綿密…日常行爲の最高指針…廚房の教訓…典座教訓…尊卑は心に存して物に存せず…常に敬重の念に住すべし…戯言亂語を誡む…敬を以てその宗となす…八正道…身業の感化…綿密の家風…閃電の靈機と綿密の行持

禪に參ずるの初より『綿密なれ』、『如法なれ』、『道に親しかれ』とは、其の師家より朝な夕なに教訓せらるゝ日常行持上の標語である、實に綿密の行持といふことが禪者の暫時も忘るべからざる德目であらねばならぬ。

尤も、古來の禪僧や禪客の中には、磊落不羈の事蹟も少なからざる爲め、規繩に拘泥せざるを以て禪の風格の如く思はるゝ點もある。丹霞の天然が寒天に木佛を焚て暖を取りしが如き、京兆の蜆子が閩川に在りて蝦蜆を採て餓に充つるが如き、普化が一鐸を振うて城市を横行せしが如き、布袋が一布嚢を荷うて聚落に遊戯せしが如き、其の他、豐干、寒山、拾得等の奇言畸行は全く常調を超越して居る。我が國にても

と說似せしも亦た此の意に外ならず。

ふとも此心を發せば既に一切衆生の導師なり、云々

太祖大師は『坐禪用心記』に

常に大慈大悲に住して、坐禪無量の功德、一切衆生に回向せよ。憍慢・我慢・法慢を生ずること莫れ、此は是れ外道凡夫の法なり。誓つて煩惱を斷じ誓つて菩提を證せんと念じ、只管に打坐して一切不爲なる、是れ參禪の要術なり

と示された。

慈悲は佛性本然の德で、自己心の發露である。慈悲心の存する所には憍慢邪念が無いから、進んでは布施となり、退いては持戒となる。また初發心より斷惑證眞の志堅固なれば、能く己れに克ちて、妄情を制し邪念を離れ、能く道に親しみて、善を修し德を積むを樂みとするに依つて、退いては忍辱となり、進では精進となる。また正身端坐の力能く一心を不動の地に安住し、知見を形象の外に開破するを以て、退いては禪定となり、進んでは智慧となる。

是の如く我が宗所傳の禪道は、六度の全德を包含したる王三昧であるから、諸佛菩薩の說法度生も、悉く此の大禪定の遊戲神通なることを知らねばならぬ。聖一國師が、

夫れ坐禪の宗門と云は、大解脫の道なり、諸法は皆此門より流出し、萬行も皆此道より通達し、智慧神通の妙用も此中より生じ、人天の性命も此中より開けたり

敬順慈愛は佛性本然の妙德である。參禪の結果は見性悟道であるが、見性悟道の時、本然の妙德を顯現し、戒德自づから身口意の上に光輝を放つものである。一たび敬順慈愛の德を發する時は、他の生命に對しては、消極的には不殺生となり、積極的には生命の愛護救濟となる。他の財物に對しては、消極的には不偸盜となり、積極的には保護とも扶助ともなる。其の他の諸戒も、推して知るべし。是れ卽ち心地戒德の莊嚴である。

禪定は散心亂想を停止して精神を統一するの法門である。參禪の正當時は身心倶に解脫して、其の心動かざること山の如く、散亂に走らず昏沈に陷らず、有心と無心とを超越するを以て、稱して大定といふのである。

智慧は煩惱を斷じ眞理を證するに名づく。參禪は能く自己の心地を開明し、生死の原理を覺了し、惑業の因由を究め、苦縛の根源を絕つを以て大慧と名くるのである。釋尊一代の行持は、皆な三學融合の一大禪定三昧の大機妙用なることを知らねばならぬ。

禪は決して超世間の法ではなく、人間生活を蔑視するものでもない。禪は人間生活の根本力となりて、世間を淨化するの法門である。故に、禪は參究の始より大慈悲心を涵養せしむるを以て一大要件とす。高祖大師は『發菩提心』の卷に於て示されてゐる。

菩提心を發すといふは、己れ未だ度らざる先に、一切衆生を度さんと發願し營むなり、其形卑しとい

不充分の嫌がある。故に、高祖大師は禪宗と稱する宗名を極端に排斥して

若の佛法を稱して禪宗と爲さば、舌盍ぞ墮落せざる、測り知りぬ、禪宗と號するの學人は、釋尊の遺弟に非ず

と戒められて、常に佛法の名を以て宗旨を唱道せられた。誠に我が宗所傳の禪道は佛教の一部に非ずして、實に其の全體である。故に、禪は三學六度を該ねたる最大最高最善の法なりと參究せざるべからず。太祖大師は『坐禪用心記』に於て此の意を示して曰く

又坐禪は戒定慧に干るに非ざれども、而も此の三學を兼ねたり、乃至、今の坐禪は戒として持たざる無く、定として修せざる無く、慧として通ぜざる無し、降魔成道轉輪涅槃皆此の力に依る、神通妙用放光説法盡く打坐に在り

此の慈誨中に於て丁寧親切に其の玄旨を開説せられたるも、文章頗る簡古にして難解なるを以て、今は略して其の大要を述ぶることゝせん

戒法の本質は、必ずしも釋尊の强爲に出でたものではない。彼の五戒の如きも防止の方面からは、不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不飲酒となるが、進修の方面からは、愛護・廉潔・貞操・誠實・剛健といふ德目ともなる。況や禪門に傳ふる所の三聚淨戒・十重禁戒の如き、其の淵源は吾人性德の發露であつて梵網經には佛性常住の孝順心慈悲心とあるが、換言すれば敬順と慈愛とである。

るに、目足ありと雖も導師なき時は邪路に陷いるの憂あるに喩へ、戒は足の如く、定は目の如く、慧は導師の如しといへり。然るに我が宗の禪道は、此の三學の中の定學には非ずして三學融合の大禪定である。

六度は布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六門にして、是を六波羅蜜とも稱し菩薩正行の本である。波羅蜜は彼岸到と譯し、煩惱業苦の此岸より菩提淨樂の彼岸に到るべき衆生濟度の法門である。財法二施を以て群生饒益するを布施といひ、佛の制戒に從うて、惡を制し善を修するを持戒といひ、謙讓を守りて憍慢に遠かり、雅量を養うて忿怒怨恨を制し、諸〳〵の艱難に耐へて憂苦の念を起さゞるを忍辱といひ、身心倶に放逸ならず、能く善法を勤行して身心相續するを精進といひ、散心亂想を制して、一心を安住するを禪定といひ、一切諸法の實相を覺了して、眞理を究辨するを智慧といふ。起信論には五門と說き禪定と智慧とを一門として、是を止觀門と稱して居る。

之を智・情・意に配すれば布施と持戒とは情操の善美なるもの、忍辱と精進とは意力の剛健なるもの、禪定と智慧とは智識の公明なるものである。施戒は以て貪慾を制して恩德を莊嚴すべく、忍進は以て瞋恚を制して斷德を莊嚴すべく、定慧は以て愚癡を制して智德を莊嚴すべし。凡夫の三毒を淨除し佛陀の三德を積聚するには、此の六度を以て正門となすべきである。然るに我が宗の禪道は、六度の中の禪定には非ずして、六度の全德を包含したる大禪定である。

元來、禪といふ名稱は、一應之を解すれば諸行の一に過ぎざるを以て、我が宗の禪を釋明するには甚だ

禪は三學六度を該ぬ

三學……三學は互に相依り相資く……三學融合の大禪定……六度……六度と三德……六度の全德を包含する大禪定……宗門の禪は三學六度を該ぬ……常濟大師の慈誨……大戒は性德の發露なり……妙德顯現の二方面……大定……大慧……禪は人間生活の根本力なり……大慈大悲の涵養……布施と持戒……忍辱と精進……禪定と智慧……六度は大禪定の遊戲神通なり

三學は戒定慧と稱して、戒律學・禪定學・智慧學の三科である。佛教を學する者は必ずや此の三科を修めざるべからず。故に古德は『戒定慧は佛法の大綱なり』とも『三乘の達道なり』とも云へり。戒律は身口意の三業を律して非を防ぎ惡を止め、善を作し德を修むるの學、禪定は心念をして散亂せしめず、能く寂靜の三昧に住するの學、智慧は理を究め道を辨へ、一切の境に對して惑なからしむるの學、此の三者は鼎足の關係を有し互に相依り相資けて以て學佛道の目的を達成するのである。戒德を修むるに非ざれば定力を生ずること能はず、定力を得るに非ざれば、正慧を發すること能はず。古人は之を、嶮路を經過す

きを大道の實踐躬行に置かれたのである。要するに、佛法をして生活化せしめ、眞理をして人格化せしめんが爲め、端的に自家本具の佛性を直覺せしめらるゝのである。此の場合は、問者も答者も只だ大道あるを知つて己れあることを忘れ、全身心を佛法に投げ込みての眞劍勝負であつて、毫末も人情や技巧に渉らざることを味ふべきである。

然るに若し禪機に現はれたる形式のみを見て、濫りに模倣し去ることあらば、胡喝となり、亂棒となり、眉を張り目を怒らし、顚言倒語、風癲漢の如くにして、却て禪風を傷くることゝなるであらう。故に禪道に參ぜん者は、必ず先づ禪心を體得せんと精進せざるべからず。

禪心旣に體得せば、禪機自つから轉ぜらるべし、禪心と禪機とは元より別般あるに非ず、禪心は猶ほ皎月の玲瓏澄徹內外なきが如く、禪機は猶ほ影を百川萬江に分ちて映照無礙なるが如し、禪心の存する處、禪機自づから發し、禪機の轉ずる處、禪心自づから圓かなることを觀破せざるべからず。

五、驀頭に宗乘を擧揚して、毫も人情に凝滯せず。

昔、趙州に僧問ふ『某甲乍ち叢林に入る師の示旨を乞ふ』、州曰く『粥を喫し了るや』、僧曰く『喫し了れり』、州曰く『喫し了りなば鉢盂を洗ひ去れ』、僧言下に省悟す。禪天地を打開して隨處に主と爲る時は、遍法界皆な佛印となり、盡虚空悉く悟りとなる。能く大道に趣向して天眞の風流を占取する時は、順境に處するも染汚を被らず、逆境に居するも繋縛を受けず、故に、金殿玉閣の中に於ても深山幽谷の神韻を味ひ、蓬窓竹屋の間に在りても安養淨國の妙樂を感ずるのである。

其の衆機を接するに當りては、直下に大道を證入せしめん爲め、多くは斬釘截鐵の靈機、奔逸絶塵の家風を示し、他をして理路に彷徨し妄想を擡頭するの暇なからしむ。彼の臨濟の如き、初め黄檗の會下に在り、一日、黄檗に參じて『如何なるか是れ佛法的々の大意』と問ふ。黄檗聲に應じて一棒を與ふ。是の如く三たび問を發して、三たび打たる。臨濟遂に辭して高安灘頭の大愚の處に至り『某甲黄檗に佛法的々の大意を進問して三たび棒頭を以て打たる、未審何の過かある』と、大愚大に叱して『嗚呼黄檗はかほどまでに親切に提撕せられしか、然るに來りて過失の有りや否やを問ふ、何の譫言ぞ』、臨濟言下に悟得して『黄檗の佛法元來多子なし』と叫んだ。

是の如き機縁は禪錄に甚だ多い。其の他、徳山の棒、臨濟の喝、趙州の柏樹子、洞山の麻三斤等、皆な徹悃慈悲より發したる轉法輪である。是等は決して徒らに高尚なる數理を說明せんが爲めに非ず、專ら重

ち上下相憐れむ、讓は則ち尊卑和睦し、忍は則ち罪惡喧しきこと無し、能く木を鑽りて火を出すが若くなれば、淤泥定んで紅蓮を生ぜん

と、是れ卽ち平常心是道の的意である。

高祖の身心脫落、太祖の黑漆崑崙夜裡走は、禪心の上乘なるものである。此の禪心を體得したる禪者の活動は、自づから凡夫の常情を以て測り難く、普通の格則を以て律し難きものあるべきは、自然の勢である。其の活動の靈機を稱して禪機といふ。碧巖の垂示に圜悟が『衆流を截斷するに至つては、東涌西沒、逆順縱橫、與奪自在』と言ひしは、禪機の妙用を說いたものである。

併しながら其の行蹟の如きも、世の所謂畸人變人と同一視してはならぬ。其の問答商量や接衆爲人の手段の如きも、決して徒らに機鋒を弄するにも非ず、また漫りに大言壯語するにも非ず、縱ひ豪放洒脫の風あるが如きも、世の所謂頓智輕口など〻同格に見たならば、そは禪道を冒瀆するものである。故に、古聖先德の禪機の內容には、自づから左に記するが如き特徵あることを看取せねばならぬ。

一、日常の行履、隨處に主と爲りて、禪天地を開破す。

二、順逆の境に於て、直下に向道の風流を打す。

三、人を接するに、單刀直入、當處に向上の玄關を打開して大道に證入せしむ。

四、法を說くに當り、重きを大道の實踐に置き、名相理論に拘泥せず。

を究盡して禪機を磨錬せねばならぬ。禪心なる語は本より禪門常用の語には非ざれども、今、說明の便宜上、如上の意味を以て禪機に對して名けたものである。

要するに、禪心は禪的人格の異名である。故に、禪心を成就せんと欲せば、凡そ左の標準に據り、自ら己れを陶冶することに努めねばならぬ。

一、深く卽心是佛の理を信じ、また佛祖の大道を信じ、常に大道と一如なるべし。

二、法界緣起の理趣を諦觀して、生死の窠窟を透脫し、順逆の境に於て不染汚なるべし。

三、驀直に佛知見に悟入して、自己と佛祖と第二面なき境地に安住すべし。

四、渾身に慈悲心を滿して、動靜云爲、自から道德の儀表たるべし。

五、道を以て心とし、法を以て身とし、常に天眞の風流を占取して、形骸に役せられざるべし。

古來、禪門の師表と稱せられし巨匠哲人の、其の心操行履には、自づから此等諸德の存することが見らるゝであらう。其の日常の行持は、自然に戒行の德を備へ、禪定の威を現はし、定慧兩ながら莊嚴するのである。斯くありてこそ、彼の般若多羅尊者が東印度の國王に答へし如き『貧道、入息蘊界に居せず、出息衆緣に涉らず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷』といふ自信も生ずるのである。此の境界は固より禪僧のみに限れるに非ず、六祖曹溪大師は在家人の修行を頌じて

心平かならば何ぞ持戒を勞せん、行ひ直ければ何ぞ修禪を用ひん、恩は則ち親く父母を養ひ、義は則

禪心と禪機

禪心は體なり禪機は用なり……禪門諸祖の勝躅……禪心體得の標準……巨匠の心操行履……在家人の大修行……禪心の靈機……誤つて會すること莫れ……禪機の特徴……古德の禪機……學人をして直に承當の分あらしむ……徹悃慈悲の轉法輪……人情に凝滯せず……胡喝亂棒に墮すること莫れ……禪心の存する所おのづから禪機あり

予は禪の體用を解說せんが爲めに、禪心と禪機とに就て一應述べて見ようと思ふ。

禪は諸佛の心印、佛法の要機、天眞の大道、實相の法門なるを以て、修因證果を通じて一道である。初中後位を通じて一行である。が、今暫らく同中に異を辨じて禪の體用を明さば、內に大道を證して佛心に相應するを禪心といひ、外に靈機を發して萬境に對應するを禪機といふ。禪心は體にして禪機は用である。

禪心は本證にして禪機は妙修である。禪心は安心にして禪機は起行である。古今禪門の碩德は、深く禪心を體得して能く禪機を發轉す。故に、其の人格一世に高く其の言行千載に範たり。吾人も亦た能く禪心

されど、行と解とは元より相表裏す。修と證とは本來一如なり、一時も之を行ずれば一時の解なかるべからず。一日之を修すれば必ず一日の證あるべし。されば見性悟道を以て、難到難得の想をなしてはならぬ。萬緣を放下して三昧に安住する時は、直下に見性一分の光明に觸れん。己我を忘却して大道を參究する時は、當處に悟道一分の妙致を體することを識得せねばならぬ。

春有百花秋有月。夏有凉風冬有雪。若無閑事掛心頭。便是人間好時節。

といふた。閑事の心頭に掛るとは妄想執著である。一心生ぜざれば萬法咎なし、有心無心を透脱したのが絶學無爲の道人と稱するのである。

介祖は猶ほ直ちに許したまはず、『未在更に道へ』といはれた。佛法は最も實地を貴ぶ。縱ひ道ひ得て水を漏さゞるも、他の寶を算する者では何の益かあらん。太祖は聲に應じて『茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す』と答へられた。是れ實に平常心の眞面目である。閑事の心頭に掛ること無ければ、茶裡飯裡別處に向はず、茶裡の大道あり飯裡の佛法あり、大道茶を喫し佛法飯を喫す。是れぞ脱落身心の好風流である。時に介祖は歡喜の笑を湛へ『汝こそは向後洞上の宗風を起すべきぞ』と證明せられた。

以上兩祖得道の因縁の如きは、見性悟道に於ける最高の榜標である。天目斷崖和尙も

若し凡を超え聖に入り、永く塵勞を脱せんと要せば、直に須く皮を去り骨を換へ絶後に再甦し、寒灰焰を發し枯木重ねて榮ゆるが如くなるべし、豈に容易の想を作すべけんや、我れ先師の會下に在ること多年、大棒を被る毎に一念遠離の心なく、直に今日に至つて、痛烈に觸着して覺えず涙流る、豈に儞等が些子の苦味を咬着して便ち頭を掉つて顧みざるに似んや

と言はれた。眞箇の見性悟道は其の容易ならざること是の如し。即ち篤く信じ、深く解し、正しく行じてこそ、證悟の大事を了ずべきものである。

せば、些子の覺觸に於て則を取ることを得ざれ、汝更に去つて工夫を做せ』と誡められた。彼の數則の公案を工夫し若干の話頭を研鑽して所得あるが如きは、多くは些子の覺觸に過ぎぬ。悟上更に悟あり證上更に證あることを知らねばならぬ。太祖は是れより攝心寢ること無く、暫時も放過せず、専一に練修せられ、一日、介祖が『平常心是道』の話を擧せらるを聞いて、豁然として徹證せられた。

平常心是道といふは、支那禪門の巨匠趙州が、南泉に參じて悟道せし時の公案である。趙州が南泉に問ふ『如何なるか是れ道』、泉曰く『平常心是道』、州曰く『還つて趣向すべきや』、泉曰く『向はんと擬すれば即ち乖く』他に向つて道を求めんとす、既に早く道に背くことを免れず。州曰く『擬せずんば爭か是れ道なることを知らん』求めずんば道の道たることを知ること能はざるべし。是れ猶ほ對待の見に滯る。故に泉曰く『道は知にも屬せず不知にも屬せず、知は是れ妄覺、不知は是れ無記、若し眞に不疑の道に達せば、猶ほ太虚の廓然として洞豁なるが如し、豈に強いて是非すべけんや』趙州は此の言下に於て大悟したのである。

太祖は其の所悟を呈似するに『黑漆の崑崙夜裏に走る』と言はれた。黑い玉が暗夜を走る、這裡一點の文彩を形はさず、是れ身心脫落の端的である。而も靜處に動ありて運奔無礙なり、即ち是れ脫落身心の神境である。古人是を死中に活を得るとも、木人方に歌ひ石女立つて舞ふとも解釋せられた。無門和尚は此の平常心是道の公案を頌して

し、後に榮西禪師に參じて、漸く瓦解氷消せられた。爾來、教禪兼ね學びて益々其の秘奥を極め、更に宋に渡りて諸山の宗匠に歷參せられたるも、猶ほ未だ自ら安んじたまはず、天童如淨禪師の玄扉を敲くに及びて一層功夫を進め、千重萬重の玄關を透破して、苦修練行せられた。一夜、淨祖が僧堂に入りて大衆の打睡するを誡めて『參禪は身心脫落を要す、何ぞ只管に打睡するや』といふを聞いて、廓然契悟致された。身心脫落とは、自己を放下して大道に歸入することである。凡夫は物欲に累はされ名利に役せらるゝが爲めに、言行一致せず事理相應じ難し。宜しく自己を忘却し身命を投げ出して大道に驀進せざるべからず。此の時、熱烈なる信根力內に漲り、勇猛なる精進力外に發し、修行其の力を增し、大道當處に現成すべし。高祖は直ちに、方丈に上りて燒香せられた。淨祖問うて曰く『燒香の事作麼生』、高祖曰く『身心脫落し來る』これ通身是れ大道の王三昧、萬法卽實相の光明體である。淨祖曰く『身心脫落脫落身心』身心を脫落し去る時、脫落の身心堂々として露現し來る。是れ實に淨祖の印可證明である。高祖が『正法眼藏』に於て、

佛道を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり

と仰せられしは、正しく身心脫落の妙趣を開示せられたるものと見るべし。また太祖は、曾て法華經を看讀し『父母所生眼悉見三千界』の處に至りて省悟せられた。其の師徹通義介禪師は『此の事を究めんと欲

ず、後、達磨大師に參じて諸佛の法印を聞かんとするや、大師は『諸佛の法印は人より得べきに匪ず』と示された。慧可は『我が心未だ寧からず、乞ふ師爲めに安んぜよ』と願はれしに、大師は『心を持ち來れ、汝が爲めに安んぜん』と提示せられた。慧可は此の話頭に眞參實究して、遂に『心を覓むるに了に不可得』と道破し去るに及んで『我れ汝が爲めに安心せしめ竟る』との印可を受けられた。是れは『不可得安心』と稱して有名なる公案であるが、普勸坐禪儀に所謂身心自然に脱落して、本來の面目現前する底の活三昧境である。

潙山の嗣、香嚴智閑の如きは、聰明博識の道人であつたが、潙山に問着せらるゝに及んで、遂に答ふること能はず、自ら學解の功なく、畫餅の饑に充たざるを知り、萬緣を謝して南陽に至り、膝を茅舍に安んじて純一に工夫しけるが、一日、艸木を芟除し、端なく瓦礫の竹を撃つて響を作すを聞いて、廓然として省悟し、潙山の輪下に至り『一撃亡所知、更不假修治』といへる所解を呈して、潙山より印可せられた。是れも撃竹悟道と稱して著名なる話頭であるが、畢竟、大死一番大活現成底の消息である。

古聖先德は、大道を信ずること最も深く、大道を求むること最も切にして、自己を放下して大道に歸入し、衆流を截斷して大道に朝宗したるを以て、此の見性を得、此の悟道に達したのである。我が高祖、太祖の悟道の因緣の如きは、實に是れ千古の儀表として親しく參究すべきである。

高祖は十五歲の時、既に『本來本法性、天然自性身』の法義に就て大疑團を起し、山門寺門の碩學に質

德の莊嚴となり、動じては慈悲の光明となる。これを佛祖の大道とも、正法眼藏とも名くるのである。佛陀は此の大道を徹證して正覺を成就したまひ、菩薩は此の大道を修習して衆生を導利したまふ。故に見性即悟道にして見性即成佛である。

元來、大道には內外の封疆は無い。故に全宇宙是れ大道である。佛性には自他の差別は無い。故に盡天地是れ佛性である。是の如きの妙法は、元より思慮や學解を以て之を究盡すべきに非ず、また之を心外に覓むべきに非ず、宜く一切の妄想分別を截斷し、自己に返照して、端的に之を徹證せざるべからず。故に『普勸坐禪儀』に曰く

須らく言を尋ね語を逐ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退步を學すべし、身心自然に脫落して本來の面目現前せん

占察善惡業報經には、信・解・行・證の四滿成佛を說いてある。深く大道を信ずるは信位、敎理を領解し疑惑を斷除するは解位、大道を實踐するは行位、自己と大道と融合一如にし去るは證位、是れは成佛の階級を示されたるものであるが、之を參禪の道程に擬すれば、見性悟道とは實に此の證位である。彼の若干則の公案や兩三語の話頭を工夫するが如きは、身心を抖擻して漆桶を打破するが如くなるも、多くは解位の分際にして、證位に徹底せるものには非ず。

震旦の二祖慧可は、孔子の學を究め、大小乘の敎理に通曉せしかども、未だ安心の地に至ること能は

見性悟道

參禪の目的…自性とは何ぞや…見性とは悟道なり成佛なり…見性悟道の妙術…四滿成佛と見性成佛…不可得安心…擊竹悟道…見性悟道の通則…實にこれ千古の儀表なり…身心脫落…佛道を習ふといふは自己を習ふなり…證上更に證あり…平常心是道…黒漆の崑崙夜裏に走る…便ちこれ人間の好時節…佛法は實地を貴ぶ…天目斷崖の語…直下見性當處悟道

兜率和尙が『撥草瞻風は祇だ見性を圖る』と言ひし如く、參禪の目的は見性悟道を以て主眼と爲す。見性とは自性を證見することである。

自性とは、人々具足箇々圓成の本性にして、是を佛性とも、自己とも、心地とも、諸佛の法印とも、本來の面目とも稱せり。此の自性は世の謂ゆる精神を呼ぶに非ず、また謂ゆる自我を指すにも非ず、天地同根萬物一源の靈體、心佛衆生三無差別の大元を謂ふのである。其の體は生滅の境を泯じ、増減の量を越え、迷悟の跡を絕し、大小の相を亡す。而して、其の用は能く萬物を造作し、萬行を生起し、發しては智

時、歡喜と安心と滿足とのみありて、何等の要求も欲望も無い。是れ即ち感應道交難思議である。禪の信仰は是の如く純一無雜となりて、始て其の妙致を體驗し得べきである。

も入れず心をも費さずして、生死を離れ佛となると仰せられた。知るべし、正信心は無我の三昧より發現することを。既に己れを忘れ我を忘る、誰か是を自力など〻稱することを得べき。故に禪門の信仰は、自力他力を超越したる自他冥合の妙處に存す。起信論には四種の信心を說けり、其の第一は根本を信ず、是れ主觀的信仰である。他の三は佛法僧の三寶にして、客觀的信仰と見るべし。主客圓融して正信茲に成るのである。

彼の黃檗禪師が、香嚴の會下に在りて首座たりし時、一日、佛を禮して居られた。宣宗帝即位以前、難を避けて僧流に混じ、同會中に在りて書記の任に當られてゐた。黃檗の禮佛を見て問うて曰く、『佛に着いて求めず、法に着いて求めず、僧に着いて求めずとは、維摩の所說にして禪者の學ぶべき所である、心外に求むる所あらば、早く既に妄想に墮し去るに非ずや』と、黃檗曰く、『佛に着いて求めず、法に着いて求めず、僧に着いて求めず、常に禮すること是の如し』親に孝行するのは欲望の爲めではない、欲の爲めに孝を行ふは眞の孝と謂ふべからず。帝、其の意を解せずして、『然らば禮拜することは無用の業に非ずや』と再問した。黃檗、この無眼子とばかり、いきなり痛く一掌を與へた。帝驚きて、『太麁生』と云はれた。黃檗叱して『這裡是れ什麼の所在ぞ、麁と說き細と說く』と云うて、更に一掌を與へた。

此の公案は仔細に參究するを要す。徹底、佛陀に歸命する者は孝子の慈母に親むが如く、顔々相對する

佛道を修行する者は先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずる者は、須く自己本より道中に在りて迷惑せず、顚倒せず、增減なく誤謬なしといふことを信ずべし、是の如くの信を生じて是の如くの道を明らめ、依つて之を行ふは乃ち學道の本基なり

此の信心は宗派の如何に拘らず、佛敎を信ずる者の必ず發起すべきものである。

自己本具の佛性を信ぜざれば成佛を期するの念生ずべからず、成佛を期するの念生ぜざれば佛陀に歸命するの心生ずべからず。此の信心開發すればこそ、自己の迷妄を愧ぢ、自己の罪惡を怖れ、客觀的信仰心を發得し、進んで佛陀の大人格を瞻仰し、其の大慈悲に投歸するに至るのである。

渾身を佛陀の大人格に投じて無我の境地に達し、佛心に感謝して我が心を調へ、佛德に感激して我が德を養ひ、佛陀の大智光に照され、佛陀の大慈悲に救はれ、迷雲忽ち霽れて心垢自から消し、永嘉の謂ゆる、諸佛の法身我が性に入り、我が性却て如來と合し、感應道交して、遂に佛陀と自己と相卽融合して、生佛一如の神境に達するものである。承陽大師は『生死』の卷に於て此の信仰狀態を開示して

此の生死は卽ち佛の御命なり、之を厭ひ捨てんとするは卽ち佛の御命を失はんとするなり、これにとゞまりて生死に着すれば、是れも佛の御命を失ふなり、佛のありさまをとゞむるなり、厭ふことなく慕ふことなき、此の時始めて佛の心に入る、但し心をもて圖ること勿れ、言葉をもて言ふこと勿れ、唯だ我が身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛の方より行はれて、是れに從ひもてゆく時、力を

雖も竟に一佛心を出でぬ。此の三寶に、現前三寶・住持三寶・一體三寶の三種の功德ありと說けり。釋尊在世時の三寶これを現前三寶といひ、佛滅後、三寶を住世護持するこれを住持三寶といひ、三寶內秘の眞理これを一體三寶といふ。此の一體三寶を曹溪大師は、無相の三歸または自性の三寶と名けられた。佛は靈覺の妙體、法は靈覺の妙相、僧は體相不二、事理和合の妙用である。故に、三寶の功德は一釋迦牟尼佛の外には出でぬ。故に、釋迦牟尼佛を萬德總持の寶號とも稱するのである。

佛陀は萬德圓滿なるも、之を大別して三德と爲す。卽ち智德と斷德と恩德とである。大智眼を開いて眞理の本源を究め、生死の來由を明らめ、事理無礙の正智を開發するを智德と爲す。一切の煩惱を斷除して無限の神通と威德とを發現するを斷德と爲す。廣大の願力を運らし、一切の衆生を攝護して絕待の大慈悲妙用を起すを恩德と爲す。是れ卽ち大智・大勇・大慈の三德にして、眞理の權化、意力の表現、慈悲の結晶と謂ふべきである。吾人の佛陀に歸依するは、卽ち眞理に歸命し、意力に信賴し、慈恩に感激するものと謂ふべし。

以上二種の信仰は、相依り相扶けて一大信念を鑄出すのである。主觀的信仰に依りて、徹底的に自己を覺知し、成佛の大願を確立し、之と同時に、現在の迷妄を慚愧して懺悔の心を起し、且つ自ら深く反省して、其の心地を淨め、其の行持を愼み、常に佛心を顯彰し、佛德を莊嚴せんと期すべし。是れ卽ち根本的信仰と謂ふべきである。承陽大師曰く

滅の域を超え、增減の相を離れ、垢淨の跡を泯ず。永嘉大師は稱して『本源自性天眞佛』といへり。然れば、我が身は直ちに佛身にして我が心は卽ち佛心である。凡夫は妄想執着に蔽はれて之を覺知すること能はず、恰も無價の珍寶を抱いて自ら他國に跉跰するが如し。須らく返照一番して、自己本具の佛性を尊重し、佛功德を禮讃し、以て佛光明を發揮すべきである。

客觀的信仰は、客觀的に佛陀の大人格を瞻仰し歸敬し奉るのである。禪門に於ける信仰の對象たる本尊は釋尊である。經中には無數の佛名を擧げて、各々其の功德莊嚴を說かれて居る。されど禪門の本尊觀は、彼を捨て、此を取るといふが如き、差別觀に依つて釋尊に歸依するのではない。法界一佛心印の見地に立脚するのである。故に承陽大師は

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり、過去現在未來の諸佛ともに佛となる時は必ず釋迦牟尼佛となるなり、是れ卽心是佛なり

と仰せられた。三世十方の諸佛は、畢竟、一釋迦牟尼佛の光明體に歸するのである。而して、此の釋迦牟尼佛は久遠實成の佛陀にして無量壽無量光である。

抑も佛敎にては、佛・法・僧の三寶に歸依するを通則とす。佛は無上尊にして吾人を救濟したまふ大恩師なるを以て歸依し、法は釋尊及び聖賢所說の妙義にして成佛得道の指針なるを以て歸依し、僧は佛に代つて化を揚ぐる修道の師友なるを以て歸依す。僧に依つて法を學び、法に依つて佛を信ず、三寶異なりと

大信心は卽ち是れ佛性なり、佛性は卽ち是れ如來なり

信仰はまた信心とも稱す。信の字義を譯すれば、或はマコトと訓じ、或は又マコトニスと訓ず。前者は信の質にして後者は信の德である。マコトとは、眞實にして欺かず、約を守りて違はざるの謂にして、誠の字と粗ぼ同一の義と見ることを得べし。誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。天理人道みな誠を以て本とす。誠心は實に、邪曲なく、偏僻なき、公直正明の道である。マコトニスとは、此の信が外に發すれば、心を一境に歸し固く守りて疑ふこと無きの謂である。人に對しては、信用となり、信任となり、信賴となり、宗敎的には信仰となる。經論には多く信心または正信と稱して居る。古來、禪門の高僧は皆な熱烈なる信心ありて、精進不退に之を洗錬し長養せられた。西天の祖師馬鳴大士は起信論を著はし、震旦の三祖鑑智禪師は信心銘を著はされた。俱に是れ禪門の法寶である。

此の信仰には、主觀的と客觀的との二種がある。主觀的信仰は、佛陀の妙體と德相とを自己心中に問うて、觀照し諦信するのである。達磨大師は『直指人心見性成佛』と說き、馬祖は『卽心卽佛』と說けり。『觀無量壽經』には

諸佛如來は是れ法界身、一切衆生心想の中に入る、是故に、汝等佛を想ふ時、是の心卽ち佛にして三十二相八十隨形好あり、是の心作佛す、是の心是れ佛、諸佛正偏智海は心想より生ず

と開示せられた。萬德圓滿の佛身心は自己方寸の中に實在す。是を佛心印とも稱せり。此の佛心印は、生

禪の信仰

信仰は佛教の生命なり……信の字義……主觀的信仰……佛心印……客觀的信仰……法界一佛心印……歸依佛法僧は佛教の通則なり……三寶三種の功德……萬德總持の實號……佛陀の三德……根本的信仰……歸命心發現の過程……成佛得脫の過程……正信心と無我の三昧……誰かこれを自力といはん、また他力といはん……黃檗の禮佛……感應道交難思議

信仰は佛教の生命である。佛教は信仰に因りて證入することを得べく、また信仰に據りて悟後の行持をも全うすることが出來る。信仰は佛教の門戶であると同時に、佛教の堂奧である。故に、信仰即佛心なり、佛法なり、佛行なりと參究すべきである。『大智度論』に曰く

佛法の大海は信を以て能入とす

『涅槃經』に曰く

坐禪を晝修夜修するの心操なかるべからず。故に古人も『十方三世の諸佛如來も坐禪を常の居所とせり』というて居る。華嚴經に『恒處菩提座』とあるは此の坐禪三昧のことである。

きが如く、柔かなるが如く、重きが如く、輕きが如く感ずることあり。精神の上に於ては、氣力の沈むが如く浮くが如く、智力の曚昧なるが如く鋭敏なるが如く、或は室外を透視し、或は體内を通見し、或は佛菩薩の影迎を感得することもある。多くは念息の不調より生ずる變態現象であるから、斯る場合は、宜しく心を定印の上に安ずるが宜い。『總じて昏沈する時は心を髮際若くは眉間に安じ、散亂する時は心を鼻頭、若くは丹田に安ぜよ』とは乃祖の親訓である。

坐禪中の工夫は『普勸坐禪儀』に

> 兀兀として坐定して、箇の不思量底を思量せよ、不思量底如何が思量せん、非思量、此れ乃ち坐禪の要術なり

と示されてある。是れ實に禪の最大要訣であるが、此の事は後に至つて詳說することゝすべし。

第三に出定の威儀を述べんに、坐禪より起たんとする時は、端坐のまゝ靜かに、身を左右に搖がすこと數回して細より麁に至る。次に口を微しく開きて氣を吐き、兩手を伸べて地を捺へ、輕く座を起ちて徐々に行歩す。專門道場には別に經行の法がある。是れ亦た後に至りて說くべし。縱ひ直ちに世務に從事する場合にも、猶ほ坐禪時の安心狀態を保任して、動中の靜を修せざるべからず。

入定出定共の儀を異にするも、終始、三昧の座を離れじと期するは參禪者の用心である。而して此の坐禪の正儀は、必ずしも待悟の機關ではない。全く佛行である、佛威儀である。佛果位に至るも、猶ほ

には、靜かに輕く身を左右に搖らすこと數回、麁より細に至りて自然に坐定すべし。是れ諸支節の調和を護らんが爲めである。結跏趺坐には、左右の足を前記とは反對に組む法もある。佛の坐相は多く是れである。古來、是を吉祥坐と稱し、前記の結跏法を降魔坐と稱す。されど禪門にては、必ずしも降魔・吉祥の別を存せず。天童如淨禪師は、若し坐久うして疲勞を感ぜば、左右の足を組み代るも妨げ無しと指南してある。

　調息の法は、止觀には風・喘・氣・息、四種の相を說けり。坐する時、鼻息の出入聲を作すを風相と云ひ、氣息聲なきも出入結滯あるを喘相と云ひ、結滯なきも猶ほ出入の麁なるを氣相と云ひ、聲あらず結せず麁ならず、出入綿々として、存するが如く亡ずるが如く、神を資けて安穩に、情に悅豫を抱くを息相と云ふ。此の息相は調息の實を得たものである。息相の生じ難き時は、心を氣海丹田に安んじ、身體を寬やかにし、且つ氣息全身に充塞して、出入無礙なることを想念せば、氣息自ら調ふことを得ると說いてある。されど禪門にては、極めて簡單に、端坐の後、念想を靜め、身儀を整へ、長息なれば長に任せ、短息なれば短に任せ、漸々に之を調へなば、自然に調適すと示されてある。

　次に坐禪の時は、牆壁、露柱、椅子、屛障などに靠り、または風の烈しき處、餘り眺望の好き高處等に於てすること勿れ、發病の因緣となる事もあるからである。坐禪の中に種々の幻覺や錯覺を起すことがある。身體の上に於ては、熱するが如く感じ、寒きが如く感じ、滑かなるが如く感じ、澁きが如く感じ、堅

を供ずるは敬順の至り、是に於て妖孽來ること無し、一切の賢聖は無爲にして此の如き事を爲す、是れ行道の正儀なり

と說いて居る。『坐處は、晝も明らかならず、夜も暗からず、冬煖かに夏冷かなるべし』とは曩祖の家訓である。四には諸の緣務を謝すべし。修坐の時は一切の緣務を放下すべきは言ふまでも無い。五には坐褥と蒲團を用意すべし。坐褥は厚きを善とす。蒲團は圓形にして直徑一尺二寸周圍三尺六寸である。疊の上ならば坐褥を省くも可なれど、久坐するには、成るべく之を用ゆるを宜とす。若し蒲團を有せざる時は、普通の坐蒲團を以て代用するも可なり。以上五則は坐禪を修するの準備法である。

第二に坐禪の正儀を述べんに、坐法に結跏趺坐と半跏趺坐の二樣がある。結跏趺坐は、先づ右の足を左の髀の上に安じ、左の足を右の髀の上に安ず。足の先は髀と齊しくすべし。半跏趺坐は、唯だ左の足を右の髀の上に安ずるのみである。衣帶は寛かに著けて正しく整ふべし。次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、左右の大拇指は面ひて相拄ふ。是を法界定印または略して定印と稱す。乃ち正身端坐し、全體の姿勢を方直にして、聊かも前後左右に傾斜してはならぬ。耳と肩と相對し鼻と臍と相對するを要す。氣息は靜かに鼻孔より通ずべし、口は堅く閉ぢて唇齒相著くべし。眼は常に開いて張らず微めず、全く開く時は心散亂し易く、全く合する時は心昏沈し易きに依る。斯く調身し已りなば、欠氣して息を安んずべし。其の法は、口を開きて氣を吐くこと一兩息すべし。是れ濁氣を吐くの法である。次

は、禪を修すること難し。故に端坐せんと欲する時は、先づ其の身心を清淨にすべきである。二には衣食睡眠の三を調節すべし。衣足らず食足らず、睡眠足らず、是を三不足と稱して、皆な退惰の因緣となる。衣服は成るべく美服と垢衣とを避く、厚薄身に適するを可とす。食は飽に過ぎれば、氣迫り身滿ちて百脈通ぜず、少きに過ぐれば、身羸れ心疲れて意慮固からず、故に飲食共に節量を旨とし、飽滿にも失せず、飢渴をも感ぜざる程度に於てすべし。睡眠も亦た適度に調節して、常に心氣を爽快にし倦怠を生ぜざるを要す。三には居處閑靜なるべし。修坐の道場は僧堂、或は閑寂の境地最も好し。太祖大師は、海邊、酒肆、婬房、妓樂の邊り、極明、極暗、極寒、極熱、遊人、戲女の處は打坐に宜しからず、叢林の中、善知識の處、深山幽谷之に依止すべし、綠水青山是れ經行の處、谿邊樹下是れ澄心の處ぞと示された。されど、身劇務に當り、または居室狹隘、家族雜居して、閑處を得ること不可能なる場合は、佛壇か床間に向ひ、或は壁に面し、または佛菩薩、若くは達磨や羅漢などの像に對し、または目前に線香を點ずるも宜し。斯くする時は、自ら靜寂の氣を味ふに足るものである。常濟大師『坐禪用心記』に示して曰く

道場は須く清潔なるべし、而して常に香を燒き華を献ずれば、卽ち護法善神及び佛菩薩影向して守護するなり、若し佛菩薩及び羅漢の像を安置すれば、一切の惡魔鬼魅其の便りを得ざるなり

是れ修禪の人の護身の術である。指月禪師は之を釋して

燒香散華すれば敬心肅體儀相端正に在り、蓋し邪の至るは己れ正肅ならざるに因る、聖像を安じ香華

坐法の正儀

修坐の準備……三業清淨……衣服飲食睡眠の調節……居處の閑靜……必ずしも居處を選ばず……常濟大師の慈誨……指月禪師の釋……諸緣の放捨……坐褥蒲團の用意……坐禪の正儀……調身……吉祥坐と降魔坐……調息……調心……出定の威儀……恒に菩提座に處すべし

坐禪實修の正儀は、曹洞宗高祖承陽大師の『普勸坐禪儀』、太祖常濟大師の『坐禪用心記』等に詳說せられてあるが、玆には特に、通俗的に儀則の大要を說明することゝすべし。而して說明の便宜上、修坐の準備と坐禪の正儀と出定の威儀との三項に分ちて述ぶることゝする。

天台の止觀には具緣・呵欲・棄蓋・調和・方便の五法を擧げて、正修行に入るの要門として居る。されど我が禪門に於ては、此等の多くは坐禪の正儀中に含有するを以て、今は且く修坐の準備として五則を擧ぐることゝする。一には身・口・意の三業を清淨ならしむべし。身行不淨にして精神混亂する者

用三昧に安住するのである。坐定り禪熟すれば、自ら無相坐を體驗することを得べきである。

禪は學術ではない、また見識本位でもない。否、學術の源泉を湛へ見識の根柢を築く所以の法である。故に、禪は體驗に依つてのみ其の眞價を現はすことが出來る。兀兀として坐定し、寂靜安穩の神境に直入すれば、己れを忘れ我を忘れ、除くべき妄想もなく、求むべき菩提も無く、所謂五蘊皆な空じ去つて、本來無一物の眞諦に還元することを得るのである。斯くいへばとて、木石の如き無心なることではない。有心無心を超越したる狀態となるので、是を大無心と稱して居る。大無心と爲り了る時、本心の智光が燦然として輝を放ち、こゝに定力と慧力とが顯現する。是れ卽ち大死一番大活現成の端的である。

坐と禪との關係、夫れ是の如くなるを以て坐禪と稱するのである。要するに坐禪なる語は、靜慮または三昧と、畢竟、異名同體なりと知るべきである。

凡そ一切の事物は不動の活動ならざるはない。天地萬象の關係は前に既に述ぶるが如し。汽車は進行最も迅速なるも軌道は毫も動搖せぬ。此の不動の軌道に由りて、汽車は安全に進行し得るのである。時計の針は動に依りて時を示すも、其の盤面は更に動ぜぬ。不動の盤面ありてこそ、運針も其の使命を果すことが出來る。人類の生活も、朝奔夕走、暫くも休止すること無きも、人類の依止する大地は寂然として不動である。飛行機の如き高く空中を雄飛するも、其の機關の中軸に堅く守る所が無ければ、忽ちにして墜落を免れぬ。吾人の生活も亦た是の如く、政治・經濟・敎育・宗敎・農商・工藝、其の業を分ち、各々之が改善と發達とに力むるは勿論であるが、個人として、また社會の一員として、また國家の一臣民として、また世界人類の一數として、必ず守る所が無ければならぬ。若しも左顧右眄して止まる所を忘れなば、人の人たる德を失墮し、却て害毒を世に傳ふるに至るものである。

況て參禪修養の士女の如きは、常に信念を大道に歸し、一心を泰山の安きに置き、進んでは六塵の繫縛を脫し、退いては六識の妄動を制し、行住坐臥の上に於て、正見を打開し正道を實踐すべきである。能く是の如くならば、起居動靜、悉く禪天地の遊戲三昧に非ざるは無いのである。

以上有相坐と無相坐との大要を述べたるも、こは便宜上二種に分釋したるに過ぎずして、畢竟、差異あるには非ず、有相坐を修せざれば無相坐を實現すること能はず、無相坐を實現せざれば有相坐を徹底すること能はず、禪門に於ては專ら有相坐を奬勵して居る。正身端坐して、修練を凝らし工夫を進めて、自受

十方に亙りて表裏なし。謂ゆる生せず滅せず、垢つかず淨からず、増さず減らざるものである。是れ豈に無爲の坐にあらずや。天は言はずして人高きを推し、地は言はずして人厚きを推す、是れ豈に天眞の默に非ずや。然れば宇宙天地の根本は常に坐にして常に默なり。故に是を法性天然の坐默三昧とも稱せられる。

是の如きの三昧も、之を遠きに求むべからず。人々本具の佛性、是れ實に宇宙の大道と同體にして、萬德圓滿の光明聚である。是を佛心印とも稱す。只箇佛心印、三際を超越して流轉生滅の異り無く、十界に周偏して國土淨穢の差を亡じて居る。而して、發しては無限の智光と爲り、動じては慈悲の妙用となる。

此の佛心印を究盡して不動の三昧に安住す。是れ即ち無相の坐禪である。

六祖曹溪大師曰く

善智識、何をか坐禪と名く、此の法門の中、無障無礙、外、一切善惡の境界に於て心念起らざるを、名けて坐と爲す、內、自性の不動を見るを、名けて禪と爲す

是れ、一心不動、萬境に對して眞解脫を得るを坐となし、心地を開明し、本分に安住するを禪とせられたるもの、坐と禪とは必ずしも別般あるに非ず、無相坐よりいへば、不動安住の一切が禪なることを會取すべきである。

次に無相坐とは、若し能く三昧現前することを得ば、此の身心の當體が道と相應するを以て、行住跪臥も皆な坐定と一如にして、盡く禪觀の威儀となる。往き來の人を故に深山木に視んとせば、猶ほ技巧を弄することを免れぬ。當所卽禪にして迷悟の情を脫し、觸事是眞にして色空の域に墮せぬ。故に天桂禪師は、古歌の下の句を改めて

　坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人をそのまゝに見て

と示したことがある。永嘉大師は『證道歌』に於て無相の坐を詠じて

　行も亦禪坐も亦禪、語默動靜體安然

と言ふた。

蓋し、坐の字を廣義に解釋すれば、居處を占めて動かず、其の止まる所を守るの義にして、俗に謂ふ落着の意である。宇宙の本體、天地の根源は、必ず守る所ありて古今を一貫し、決して時と與に變化するものではない。天に日月星辰の運行、風雨雲雷の起滅ありと雖ども、天心は曾て動かぬ。地に水火の隱顯、人畜の生死、草木の榮枯ありと雖ども、地軸は曾て動かぬ。法は法位に住して世間の相常住なり、天地は不動の位に止まりて而して能く動く、故に、動くと雖ども未だ曾て動かず、其の止まる所を道と稱す。道は本來一如にして二元なし、老子は『天は一を得て以て清し、地は一を得て以て寧し、神は一を得て以て靈に、谷は一を得て以て盈つ、萬物は一を得て以て生ず』といへり。此の一道は古今に通じて興廢なく、

期を剋して跏趺正坐し、諸の亂想を離れて法界觀に入るを常坐といふ。期を尅して常に旋行して休息せず、專ら佛名を唱へ佛德を念じ、能く惑障を斷除するを常行といふ。期を尅して若行若立して大乘の妙典を讀誦し、坐して實相の理を思惟するを半行半坐といふ。敢て期を尅せず、一切時中、一切事上に於て、實相の妙理を諦觀するを非行非坐といふ。是れ皆な教家所談の禪法である。然れども猶ほ『四威儀の中に於て亦た即ち皆な得る、然るに學道の者は坐を勝れたりと爲すと』說いて、特に坐中に於て禪を修せしめてある。

有相坐と無相坐との二種あることを知るべきである。有相坐とは行・住・坐・臥四威儀の中の坐相である。禪は必ずしも形式に拘るに非ざれども、端坐を以て最も得便宜なりとす。行と住と臥とは、心念氣息を調ふる上に頗る不便である。

坐の中にても、結跏趺坐または半跏趺坐は殊に態姿及び念息を調ふるに適せり。正身端坐する時は擧身自づから調整し、其の心安定し易く、外魔の刺擊を防ぎ、散意を制し、觀想に宜しく、長時に耐ゆ。故に坐に依つて禪を行ふのは、實に是れ安樂の法門である。古人は

坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て

と詠じた。此の端的には、十方壁落なく四面亦た門なく、法界洞然として、身心自然に脫落し去るのである。

禪と坐

三昧王三昧の正儀……天台の四種三昧……有相坐と無相坐……端坐はこれ安樂の法門……行住跪臥も坐定と一如すべし……廣義に解したる坐の意義……天心曾て動ぜず……無爲の坐・天眞の默……法性天然の坐默三昧……曹溪大師の語……一切萬象は悉くこれ不動の活動なり……禪天地の遊戯三昧……有相坐・無相坐畢竟如何……修せざるには現はれず證せざるには得ることなし……大死一番大活現成

禪に參するには、端坐を以て正門と爲す所より、坐禪と稱して居る。禪そのものは定慧圓明の三昧なれば、必ずしも坐と非坐とに拘はるべきに非ざるも、之を修し之を行ふの要術は端坐に過ぎたるは無い。端坐は實に佛威儀である。釋尊は六年端坐に依つて大禪定を修し、達磨大師は九年面壁を打して兀坐を行はれた。其の他、古今の禪祖は皆な端坐を以て王三昧の正儀とせられざるは無い。

天台止觀には四種の三昧を說けり。即ち常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧である。

我が此の法門は定慧を以て本と爲す、大衆迷うて定慧別なりと言ふこと勿れ、定慧一體にして是れ二にあらず、定は是れ慧の體、慧は是れ定の用、慧に即するの時、定は慧に在り、定に即するの時、慧は定に在り、若し此の義を識らば、即ち是れ定慧等學なり

知るべし、定は是れ本心の靈力、慧は是れ本心の靈光なることを、古人は『單定は癡定、單慧は狂慧』といへり。單に定のみならば、唯だ膽力に長じて悲智の妙用を發すること能はず、單に慧のみならば、唯だ才能に長じて常に外界の爲めに飜弄せらる。されば止觀双び修め、定慧兩ら圓かにして、自己本心の靈德靈能を發揮し、以て自己心と佛心とを融合一如ならしむるのが、禪、即ち靜慮の眞意義である。

ね、達磨禪は卽ち最上乘禪なりと斷じ、且つ之を說明して

若し頓に自心を悟れば、本來清淨にして元と煩惱なく、無漏の智性本と自ら具足す、此の心卽ち佛にして、畢竟異なること無し、此に依て修する者、是れ最上乘の禪なり、亦は如來清淨禪と名け。亦は一行三昧と名け、亦は眞如三昧と名く、此は是れ一切三昧の根本、若し念々に修習せば、自然に漸く百千の三昧を得ん、達磨門下展轉相傳する者是れ此の禪なり

と書いてゐる。

抑々、釋尊の敎を垂れたまふや、衆生をして自性本具の靈德を開發せしめんが爲めである。『華嚴經』には

我今普く一切衆生を見るに、如來の智慧德相を具有す、但妄想執着を以て證得せず

と說かれた。此の妄想執着を解脫するのが定力にして、智慧德相を開發するのが慧力である。故に、禪は畢竟自己究盡の法門である。中峯禪師は

禪何物ぞ、吾が心の名なり、心何物ぞ、吾が禪の體なり、乃至、禪は心を離れず、心は禪を離れず、禪と心と異名同體なり

と言へり。然れば、定慧といふは心性本具の靈能である。定と慧とは決して各別のものではない。禪に參ぜん者は、常恒に寂定に住し常恒に慧光を發せざるべからず。六祖曹溪大師は此の意を示して曰く

心行處、または正受、また正定等の譯がある。凡夫の心行常に曲りて端しからず、此の三昧に住すれば心則ち端直なること、蛇行の常に曲れるを、竹筒の中に入るれば直きが如し。故に調直定または正心行處と云ふ。心を佛智慧光明藏中に住して諸受を受けざるを以て正受と云ひ、所緣の境に於て正しく思察するを以て正思といひ、心體寂靜にして邪念を離るゝを以て正定と云ふ。要するに、亂想を停止して精神を統一し、能く一境に止住して正慧を發生するのが三昧である。遠法師は

夫れ三昧と稱するは何ぞ、專思寂想の謂なり、思ひ專らなれば則ち志二にして分たず、想寂なれば則ち氣虛にして智朗かなり

といへり。『大論』には『一切の禪定攝心、皆名けて三摩提と爲す』とあれば、三昧は禪の異名と見るべきである。

但し我が宗正傳の禪は、迷悟の域を超え生佛の邊に墮せず、正に是れ定外の定、慧外の慧にして、三昧安住の端的、妄想の除くべきも無く、菩提の求むべきも無し。所謂絕學無爲の神境に到達せり。是を自受用三昧とも、三昧王三昧とも稱して居る。承陽大師は『辨道話』に於て示して曰く

諸佛如來、ともに妙法を單傳して、阿耨菩提を證するに最上無爲の妙術あり、是れ唯だ、佛、佛に授けて、よこしまなることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり

圭峯宗密は其の著『禪源諸詮集都序』に於て、外道禪・凡夫禪・小乘禪・大乘禪・最上乘禪の五種を列

無心なれば便ち是れ山』の境涯にして、正しく定力を表示したものである。

禪には必ず定力あるを以て禪定とも稱す。『遺教經』に曰く

若し心を攝むる者は心則ち定に在り、心定に在るが故に能く世間生滅の法相を知る、是故に汝等常に當に精進して諸の定を修習すべし、若し定を得る者は心則ち散ぜず、譬へば水を惜める家の善く堤塘を治するが如し、行者も亦然なり、智慧の水の爲めの故に能く禪定を修して漏失せざらしむ

定力は實は正智開發の基礎である。

香嚴智閑禪師は潙山に參隨すること多年、經論を討覈し公案を參究して頗を學解に長じたるも、潙山の印可を得る能はず、自ら畫餅の飢を充すに足らざるを知り、武當山に入り、慧忠國師の遺跡を尋ねて庵居し、諸緣を放下して禪定を專修した。一日、道路を掃除する次、瓦礫の迸りて竹に當り響をなすを聞き、忽然として悟道した。是れ師が學解を超越して定力を鍛錬せしに依り、遂に正智を開發したので、即ち大慧力の發動である。

天台にては此の定・慧の二法を成就するに止觀の法門あり、說き得て精彩を極めて居る。止とは煩惱を伏するの術にして、觀とは煩惱を斷ずるの法である。止に依りて心識を愛養し、觀に依りて神解を策發す、止は定力の因にして觀は慧力の本である。

また禪を三昧とも稱す。三昧は梵語にて三摩提、三摩地、三摩鉢底ともいふ。之れに調直定、また正

入るのである。

思ふに、凡夫の心識は常に六塵の境を追うて輕躁動轉し、色に迷ひ聲に惑ひ、香に溺れ味を執し、名利の波は性海に飜へり、我見の山は心地に聳え、妄想顚倒暫くも息む時なし。是を以て、益ゝ本心を昧却して正知見に遠ざかり、三界の苦縛離れ難く、生死の輪廻免るゝに由なし。此の迷衢を脫せんには、先づ須らく紛飛する妄念を遮斷して、一心を不動の地に安住せざるべからず。是れ卽ち定力である。天外雲散ずれば霽月たちどころに光りを放ち、定力現前すれば本性自ら現はる。『坐禪用心記』に曰く

、妄息めば寂生じ、寂生ずれば智現ず、智現ずれば眞見はる

智現じ眞見はるは慧力である。

大智禪師、肥後の大慈寺に在りて寒巖義尹禪師に參侍す。前に河川ありて商舟常に往來す。寒巖禪師、或時、舟を指して『汝這裏に在りて行舟を停め得んや』と垂問せられた。諸行無常、轉變して窮まり無し、恰も商舟の去來して暫くも停まらざるが如し、衆生は此の間に在りて、常に貪瞋癡慢の妄情を生起し、喜怒哀樂の巷に彷徨す、如何が之を脫すべけん。時に大智は徐に起て前面の障子を鎖した。六根門を閉却すれば、萬境爭でか我を侵すことを得ん。禪師は更に『倘ほ手脚を勞すること在り』手を動かし足を動かし、辛うじて六根を閉鎖するが如きは、未だ其の人といふべからず。時に大智は、其の儘瞑目して自若たりき。『遮莫萬境の時と與に轉變することを、某が這裏一塵の眼を遮る無し』是れ卽ち『到る處

禪の意義

禪の譯語甚だ多し……靜慮……定力と慧力……萬境いかでか我を使すを得ん……定力の妙用……大慧力の發動……天台の止觀……正心行處……專思寂想……我が宗正傳の禪……最上乘禪……自己究竟の法門……禪と心とは異名同體なり……單定は癡定・單慧は狂慧

禪は梵語にて、詳くは禪那と稱し、譯して靜慮といふ。『智度論』には思惟修と譯し、『阿毘曇論』には斷結と譯し、其の他、普智、棄惡、功德叢林等の譯もある。禪の思想は、遠く梨俱吠陀時代に萠芽を發して、次第に發達の蹟を示し、釋尊に至り新機軸を出して、此に大成せられたものなれば、其の內容に淺深の差あることは言ふまでも無い。我が禪門に於ては、多く靜慮の譯に從つて之を解釋して居る。

靜慮とは寂靜にして審慮するの謂である。念想の浮動を靜止して安住不動ならしむるを靜といひ、自己を返照して心地を開明するを慮といふ。靜は定力を發し、慮は慧力を生ず。定慧双び完うして以て禪に

参徹し禪中の教を讀破すべきである。一代の藏經も禪の注脚である。隨類得解の相に着せず、直ちに一音の妙法に通達せば、法華・華嚴等八萬の法門も盡く是れ大公案であることを了知するのみに非ず、山河大地草木瓦礫も皆な大乘の妙典たることを悟得することを得ん。

釋尊一代の經藏は世界を莊嚴すべき什寶家珍である。縱ひ高閣に羅列して尊重禮讃するも、若し之を受用することを知らざれば、終に益なきに非ずや。我が禪道は、直ちに其の珍寶を薦取して自家の藥籠に收め、之を横拈倒用して自を度し他を度し、世を利し國を益す、即ち、珍寶の主人公となりて有利に之を運用するのである。達磨大師は空手にして西來せられたりと稱するも、其の空手中に全佛法を掌握しつゝあることを知らねばならぬ。故に吾人が或從知識し或從經卷する時、若し能く審細に參究して、言説經文の內面に潛在する佛心の祕奥に觸着し去らば、一言の下にも無量の妙義を諦觀し、一字の上にも無盡の法門を打開することを得べし。故に禪は佛敎の全體である。全佛敎の精神である。承陽大師は禪宗の名を排して、佛法または正法眼藏等と稱せられ、其の『廣錄』中にも

佛祖單傳は唯だ是れ我が釋迦牟尼佛の正法なり、阿耨多羅三藐三菩提なり、所以に須らく知るべし、佛法の中に法華華嚴等ありて、法華華嚴等の各々の中に各々の佛法あるには非ざるなり、然れば則ち法華華嚴等八萬四千の法藏悉く是れ佛祖單傳なり、法華華嚴の外に別に祖道あるに非ざるなり

と示された。

巴陵鑒禪師に僧問ふ『祖意と敎意と是れ同か是れ別か』、巴陵曰く、『鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る』と、此の主旨を翫味して敎禪遂に二致なきを知るべし。古德曰く、『文に依つて義を解するは三世佛の寃、經を離るゝこと一字もすれば却つて魔說に同じ』と、苟も禪道に參ぜんと欲せば、敎中の禪に

なり、若し月を觀ば則ち指もまた用所なし、然れども人皆筌蹄を認めて魚兎を得ず、指頭を認めて月と觀ず、故に不立文字と云ふなり、世尊四十九年竪說横說し、最後に至り一枝の華を拈じて衆に示したまふに、衆みな默然たり、唯迦葉尊者のみ破顏微笑す、是れ不立文字敎外別傳の極致なり

と。然れども、別傳の語を錯會して聖敎を無視するが如きことあらば、是れ佛法に非ず、また佛子に非ず、卽ち外道の流類である。皷山の永覺は『禪餘外集』に禪敎の關係を論じて曰く

禪と敎とは二あるに非ず、敎は禪の詮たり、禪は敎の髓たり、文義を執して經を守れば禪も亦敎たり、文義を離れて心に契へば敎も亦禪と名く

天目の中峰も亦た『東語西話』の中に

禪は卽ち離文字の敎、敎は卽ち有文字の禪なり

と曰へり。『寶慶記』に依るに、承陽大師は在宋中、敎外別傳の意を天童如淨禪師に拜問せられしに、禪師明快に答へて曰く、

佛祖の大道、何ぞ内外に拘らん、然るに敎外別傳と稱することは、唯だ摩騰等の所傳の外に、祖師西來して親く震旦に到りて道を傳へ業を授く、故に敎外別傳といふなり、世界に二の佛法あるべからず、祖師未だ東土に來らざる先き東土に行李のみありて未だ主あらず、祖師既に東土に到る、譬へば民の王を得るが如し、爾の時に當つて國土國寶國民皆な王に屬するなり

き、或は半提を示し、或は滿分を示したまへり。されど、こは敎化上當然の徑路にして、敎育の機關に、小學、中學、高等、大學等の階級あるに同じく、其の程度にこそ深淺高低の差はあれ、敎育の目的に於て必ずしも差別ありと謂ふべからず、故に、釋尊一音の說法が分れて、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃等の別あるに至れることと敢て怪しむに足らず。

然れども釋尊自內證の法に至りては、人の水を飲みて冷煖自知するが如く、唯だ飲む者のみありて能く其の味を知得すべし。言語文字を以て之を詮表し盡すことは不可能である。單に一時の言說一部の經文のみに依憑して、徒らに言語文字に拘泥せば、恰も衆盲の象を模するが如く、終に佛敎の眞相を大觀することは出來ぬ。故に禪門所傳の心法は、言句に執せず名相に泥まず、寧ろ言句と名相とを超越して、驀直に佛心印を悟了するに在り。是を不立文字敎外別傳と稱す。此の意味よりせば、禪敎全く其の趣を異にすと謂ふべきである。

常濟大師は、後醍醐天皇の祖意と敎意との異同に關する勅問に對し、奉答して曰く

祖と敎とは水と波との如し豈に異あらんや、然りと雖も敎者は多く是れ敎網に纏はれて洒脫なること能はず、故に古來祖意に參じて旨を得る者甚だ多し、云々

また、不立文字敎外別傳に對する勅問に奉答して曰く

文字は是れ魚兎の筌蹄なり、若し魚兎を得ば則ち筌蹄渾て是れ用所なし、修多羅の敎は月を標するの指

禪と敎

禪と敎とは不二にして亦不一なり……衆生隨類各得解……須く冷煖自知すべし……常濟大師の奉答……不立文字敎外別傳の的旨……聖敎を無視すること莫れ……世界に二つの佛法あるべからず……什寶家珍の主人公たるべし……達磨は空手の中に全佛敎を掌握せり……佛祖單傳の正法……敎中に禪あり禪中に敎あり

釋尊一代の轉法輪は、皆な禪定三昧より發現し來るものとすれば、禪と敎とは本來二にして不二である。然れども、外觀よりすれば同中に異ありで、不二にして二なるの道理なきに非ず、是れ禪敎其の名を分つ所以である。佛口一音演說法、衆生隨類各得解と稱して、釋尊は成道の曉より涅槃の夕に至るまで、唯有一乘法にして一音の說法であるが、衆生の機類一樣ならざるが爲め、其の根機の智愚利鈍に依り、領解する所各々相同じからず。

尤も、釋尊は觀機三昧に入りて所化の根性を觀察し、其の程度に應じて或は一端を說き、或は全體を說

端的を謂うたものである。然れば、一切の文字一切の言句は悉く三昧境の發動である。知るべし、釋尊は禪に依つて轉法輪し給へるものなることを。」

隨つて應用窮り無し。無心にして應ずるが故に功に功跡を認めず、無爲にして說法するが故に能聽所聽の隔てを融ず。溪水石に激して聲あるも豈に分別を存せんや、靑松風を抱いて鳴るも誰か思量ありと謂ふを得べけんや。

若し此の意を會せば、釋尊一代の轉法輪も禪定三昧の靈機たるに過ぎず。故に禪錄に記する所に據れば、釋尊入涅槃に臨み、文殊菩薩來りて法輪を轉ぜんことを請ふ。時に釋尊咄して曰く『吾れ四十九年世に住して未だ曾て一字を說かず、汝再び法輪を轉ぜよと請ふ、吾れ曾て法輪を轉ぜしや』と、是れ卽ち三百餘座の說法を總括して、一大禪定海に收められたのである。

維摩經に據るに、釋尊在世の時、佛弟子中神通第一と稱せられし目連が居士の爲めに說法しけるに、維摩居士來りて『汝の說法は眞の說法に非ず、眞の說法は法の如くに說くべし』と稱して、法の眞諦を說き、最後に

夫れ說法は說くこと無く示すこと無し、其の聽法の者聞くこと無く得ること無し、譬へば幻士の幻人の爲めに法を說くが如し、當に是の意を建てゝ而も爲めに說法すべし

と諭されてある。眞の說法と眞の聽法とは、是の如き妙致に達せねばならぬ。縱ひ佛の說法を聽取して遺漏なきを得るも、佛の三昧境に徹底せざれば、眞に能く聽き得たりとは許されぬ。其の三昧境は、徒らに文字言句に拘泥する者の會取する所ではない。禪門に不立文字敎外別傳と稱するは、佛の三昧境に觸れた

味に入りて圓覺經を説き給うた。説法の前には必ず禪定に入り給ふこと實に是れ佛の威儀である。これを三昧王三昧といひ、無量義處三昧といひ、寂滅道場といひ、大光明藏といふ。皆な大禪定の異名である。釋尊は大禪定に入りて而して後に説法し給うたのみならず、轉法輪中と雖も、曾て禪定を離れ給はぬ。故に華嚴經には

佛身は法界に充滿し、徧く一切衆生の前に現ず、緣に隨ひ感に赴いて周ねからずといふこと靡し、而も恒に此の菩提座に處したまふ

と説いてある。

抑ゝ、佛の眞法身は猶ほ虛空の如く、內外寂靜にして一點惑業の塵を留めぬ。これ即ち三昧身である。物に應じて形を現ずること水中の月の如く、無心にして緣に應じ無爲にして物を利す、故に、不斷に説法敎化して常恒の菩提座に處し給ふ。

佛の大禪定は固より形式に拘らぬ。行禪あり、住禪あり、坐禪あり、臥禪あり、神通妙用縱橫無礙なりと雖も、常住湛寂にして未だ暫くも三昧の座を離れ給はず、動處に靜あり、語處に默あり、宏智禪師は默照の銘に於て

默は唯だ至言、照は唯だ普應、應ずれども功に墮せず、言あれども聽に涉らず

と道破せられた。默は禪定三昧なり、千言萬語も一默の波動である。照は利他の妙用なり、機に臨み緣に

佛印となり盡虛空悉く悟りとなる、故に諸佛如來をしては本地の法樂を增し學道の莊嚴を新たにす、及び十方法界、三途六道の群類みな俱に一時に身心明淨にして大解脫地を證し本來の面目現ずる時、諸法みな正覺を證會し、萬物俱に佛身を使用して、速に證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等々の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す、云々

釋尊の大禪定は實に是の如くである。然れば、釋尊は正しく禪に依つて成道せられたと言ふよりは、寧ろ禪に卽して成道せられたのである。

また釋尊が、三十五歲の成正覺より八十歲の入滅に至る四十餘年間は、醇乎たる禪の生涯である。釋尊は常に禪定に住して自受用法樂に遊戲せられたのである。

自受用法樂とは、所證の眞理と所修の福慧とを樂みて、無限の法悅を感じ給ふをいふ。此の法樂を他に分與して、他をして法悅を得せしむるを他受用法樂といふ。又、禪定力に依つて現象差別の世界を照し、衆生無數の機類を觀察し給ふ、是を觀機三昧と稱す。此の大法樂を普く一切の衆生に開示せられたのが金口の說法である。故に、大般若を說き給ふ時の如きは、自ら師子座を敷きて結跏趺坐し、身を直くして三昧王三昧に入り給ひ、この座より起ち、渾身より光明を放ちて普く三千大千世界を照し、以て般若の妙義を宣說せられた。法華經を說き給ふ時の如きも、結跏趺坐し、無量義處三昧に入りて身心を動じ給はず此の三昧を起ちて大乘の妙典を演說せられた。また寂滅道場に坐して華嚴經を說き給ひ、大光明藏三

釋尊の成道・轉法輪

禪定と成道との關係……釋尊は禪に卽して成道し給へりと謂つべし……說法住世は醇乎たる神の生涯なり……自受用法樂と他受用法樂……金口の說法……恒に此の菩提座に處し給ふ……佛の眞法身……大禪定豈に形式に拘らんや……轉法輪は禪定三昧の靈機なり……眞の說法と眞の聽法……不立文字敎外別傳

前段に述ぶるが如く、釋尊は金剛座上に坐して大禪定を修し、而して成道、卽ち正覺を成じ給うた。此の禪定と成道との因果關係を異時に見て、前後あるものとのみ思うてはならぬ。一應は禪定を修因とし成道を證果とするも、畢竟、因果は同時にして修證は不二である。釋尊は金剛座上に坐して、天魔を降伏し正覺を成じ給へりと稱するも、其の實は六年端坐の正當時、念々に降魔し刹那々々に成道し給うたのである。故に、曾て一時も降魔の威力を發揮せざるは無く一日も成道の嘉績を收め給はざるは無い。承陽大師は此の端坐の功德藏を打開して曰く

若し人一時なりといふとも、三業に佛印を標し(端坐の容儀をいふ)三昧に端坐するとき、遍法界みな

惟ふに、金剛座上に於ける釋尊は、其の渾身が禪體、禪心、禪修、禪證である。此の大禪定は、釋尊が前正覺山になされた六年端坐の收獲である。六年の苦行は決して徒勞であつたのでない。時々に精進し日々に精錬して、遂に金剛座上の王三昧を打成せられたのである。苦行六年の端坐と菩提樹下の趺坐とを別に視てはならぬ。初後一如である、終始一味である。

萬德圓滿の釋尊は實に此の大禪定の爐鞴より鑄出せられた。四十餘年の轉大法輪も此の禪源より流出し、八萬四千の法門も此の禪道より打開せられた。禪門無數の公案も、畢竟此の大禪定の注脚たるに過ぎぬ。此の大禪定是れ實に禪の起源である。

因に言ふ、釋尊降誕の曆年及び出家成道の年齡には幾多の異說がある。本文は多くの學者の研究の成果に遵據して成したものである。

我が大聖釋尊は、西紀前五百六十五年、中印度迦毘羅衛城に於て、釋迦族たる淨飯王の太子として降誕せらる。聰明叡智世に雙び無く、學藝競技倶に拔群の成績を示されしが、天性浮世の欲樂を厭ひ、常に閑靜を好みて冥想に耽り給ふ。長ずるに及びて、深く諸行の無常を觀じ、衆生の苦縛を悲しみ、自ら出家練行して解脫の正道を求めんと欲し、二十九歲の時、深夜潛かに妻子を棄て王城を逃れ、身を苦行林に投じ、且つ跋迦等の諸仙を歷訪し、更に進みて、道を數論學派の碩學たる阿羅邏迦蘭及び欝陀羅に訪ねられたが、其の敎ふる所、猶未だ究竟解脫の法と爲すに足らざるを知り、自ら思へらく『無上菩提を證し一切種智を成ぜんには、他に依りて之を求むべきに非ず、唯だ我れ自ら證得すべきのみ』と、乃ち去りて尼連禪河の東岸なる前正覺山に淨地を卜し、鄕里より遣されたる五人の比丘と與に、謂ゆる一日一麻一米の苦行を積みて端坐觀行し、此處に前後六年の星霜を送過せられたのである。

後、飜然として、食を絕ち身支を苦しむるは菩提を成就する正修行に非ざるを知り、即ち坐より起ちて尼連禪河に浴し、牧女難陀婆羅の奉獻せる乳糜を喫して體力を囘復し、別れを五比丘に告げて獨り佛陀伽耶に達し、畢波羅樹の下なる金剛座に、淨輭草を敷きて結跏趺坐し、『我れ一切種智を得ずんば此の座を起たじ』と誓ひ、寂然不動、思惟觀察し、內外强輭の衆魔を降伏し、惑執の根本を斷除し、大智眼を開き、大神力を現じ、三十五歲の十二月八日、明星の東天に輝く時、豁然として無上正徧智、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成就し、三界の大導師、大慈悲父たる佛陀大覺の聖位を得給うたのである。

自ら神秘的となり、從つて何れも多少の禪味を含有して居らざるは無い。故に、禪定觀法は優波尼沙土に萠芽を發し、數論學派、瑜伽學派等に至りて一層發達の跡を示せり。尤も、瑜伽の勃興は釋尊の滅後に屬するを以て、自然、佛敎の影響を受けたること亦た少なからざるべしと想像せらる。此等の印度敎學派を、佛敎に於ては之を外道と稱し、その禪を外道禪と稱す。是れ佛敎と揀別し佛敎の禪と區別したる稱呼にして、必ずしも侮蔑の意にはあらず。然れども釋尊は、外道禪に依りて眞解脱を得る能はざるを看破し、斷然、外道學派の舊套を脱して、無師獨悟の境に入り給うたのである。

外道學派は梵神を執し神我に着す。故に、其の敎理頗る深遠なるが如しと雖も、畢竟、着我の執見を脱すること能はず、佛敎無我の眞理と、敎義の深淺、理想の高低、固より同日の論に非ず。その修する所の禪定も亦た然り。故に、承陽大師の師僧たる如淨禪師は、大師に示して曰く

> 西天の外道も亦た坐禪せり、然りと雖も、外道の坐禪は必らず三つの患ひあり、謂く着味、謂く邪見、謂く憍慢、所以に永く佛祖の坐禪に異なり

是れ龍樹菩薩の十七大論に說く所である。外道は偏執の見に蔽はれて諸法の眞實相を觀ること能はず、故に着味と稱す、因果の大法を知ると雖も、之を究むること全からずして多くは斷常の二見に墮す、故に邪見と稱す。我見を固守するに依りて自法に愛染し向上の知見を開くこと能はず、故に憍慢と稱す。着味は正智を塞ぎ、邪見は正信を妨げ、憍慢は德性を傷く、これ其の正禪たらざる所以である。

禪の起源

禪の濫觴‥‥印度の諸學派と禪‥‥釋尊は無師にして獨悟し給へり‥‥外道禪の三患‥‥釋尊の天資‥‥出家求道‥‥體軀を變はせ給ふ‥‥金剛座上の大誓願‥‥降魔成道‥‥禪體・禪心・禪修・禪證の大禪定

禪は必ずしも釋尊の創出ではないが、釋尊に至りて、禪に一大進境を見たのである。禪は曾て婆羅門教徒に依りて唱道せられたりしも、釋尊が之を襲蹈するに及び、其の內容を改作し、換骨脫體して、所謂ゆる最勝無爲の妙術とせられた。故に禪の濫觴は釋尊以前にありと雖も、我が禪門に傳ふる所の禪は、正しく釋尊を以て大玄と爲すべきである。

抑ゝ印度の文明は世界の最古に屬し、既に西紀前一千五百年に於て吠陀の經典ありと稱せらる。それより益ゝ發達して優波尼沙土哲學を生じ、更に進展して六派の哲學を見るに至れり。六派哲學とは、聲論派・韋陀論派・因明論派・勝論派・數論派・瑜伽論派である。學派は更に學派を生みて、所謂九十五種に分類せらるゝに至つた。元來、印度民族は冥想的思索的の特性を有するを以て、其の教義は各派を通じて

禪は單に禪宗の禪に非ずして佛敎の禪なり。單に佛敎の禪に非ずして宇宙の禪なり。故に智愚を論ぜず男女を問はず、一般的に之を實踐して、自己本來の面目を開顯すべきである。以下次を追うて之を說似すべし。

本篇は主として、曹洞禪を學得する人の爲めに筆を執るものなれば、引例は、最も多く高祖承陽大師、太祖常濟大師、及び曹洞系に屬する祖師の遺訓を以てす。併し、禪の要諦を說似するに至つては、決して五家七宗の形式に拘泥せず、且つ、一面には一般國民修養の資料にも供する所あらんとするを以て、謂ゆる應用禪を說くこと亦た尠なからず、讀者諸賢の諒承を翼ふ。

縁に觸るゝことありとも、明鏡の萬像を映しながら、微塵も其の痕跡を留めざるが如くなるべし。外、境界の逼迫なく、内、妄念の刺戟なくんば、正智自づから開發して本心乃ち現はる。故に承陽大師は『辨道話』に示して曰く

諸佛如來、ともに妙法を單傳して、阿耨菩提を證するに最上無爲の妙術あり、是れ唯だ、佛、佛にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり、此の三昧に遊化するに端坐參禪を正門とせり、云云

常濟大師は『坐禪用心記』に示して曰く

夫れ坐禪は、直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ、是を本來の面目を露はすと名け、亦本地の風光を現すと名く、云云

此の禪を實參實究すれば、能く心地を開明して妙法を單傳し、退いては無窮の安樂を得、進んでは佛德を身心に莊嚴し、禪心の動く所、日常生活の上に宇宙の大道を履踐して縱横自在、禪機の發する所、世界に處すること猶ほ虛空の如く、觸處圓通して些子の罣礙なかるべし。

要するに、禪眼を以てこれを觀れば、釋尊一代の聖教は悉く是れ禪心の發露である。佛教各宗の敎義信條も一として禪心に觸れざるは無い。加之、國民の知識も禪に依つて其の正を得、國民の道德も亦た禪に依つて其の完きを得、社會の平和、人類の幸福も、禪の餘慶であるとも言ふべき道理がある。然れば

如く泡沫の如し。念々刹々に生滅する暫有的現象にして、畢竟、實體の認むべきは無い。凡夫は多く此の識神の爲めに、煩惱を生じ妄想を起して六道流轉の苦果を招いで居る。長沙の景岑禪師は

學道之人不レ識レ眞　只爲三從來認二識神一　無始劫來生死本　癡人喚作二本來人一

と訓誡せられた。此の識神は有爲の心念である、有漏の思量である。常に聲色の爲めに役せられ、名利の境に轉ぜられ、縱ひ正念に住するが如く善心に止まるが如き場合あるも、猶ほ妄想の窠窟に滯ふることを免れぬ。若し此の識神を認めて以て自己と爲さば、恰も奴僕を呼んで主人公と爲すに似たり。故に眞實、自己を證得せんと欲せば、一切の妄想邪念を放下して、斯く知り、斯く感じ、斯く動く底の本源を返照して、自己本來の面目を覺了すべきである。自己本來の面目は、生なく滅なく、迷なく悟なき、大智、大勇、大慈の絕對的功德體である。而して此の覺了は、能覺と所覺と對立するものにあらずして、自己の全身心を一大佛心と爲し去るのである。是れ卽ち禪の妙趣にして之を自受用三昧とも稱して居る。

此の禪を修得するの法門が坐禪である。行・住・坐・臥、四威儀の中に於て、坐の一行が最も善く修禪に適して居る。坐は不動の姿勢にして寂默の態度である。身不動なれば心亦た不動なり。身寂默なれば心亦た寂默なり。不動なるを以て外境の爲めに轉ぜられぬ。よしや境遇の刺戟を受くることありとも、蓮華の泥中に在りながら曾て染汚せざるが如くなるべし。寂默なるを以て妄念起らず、よしや順逆の因

發せられた。

是の如きの佛心、如何にして之を證悟し體現することを得べきや。是れ凡慮の及ぶ所に非ず情識の至る所に非ず、必ずや禪に於てのみ之を體驗することが得らるゝのである。縱ひ百千の法門に通曉し無量の妙義を究辨するも、唯だ學解に止まるならば、恰も天文學者が天體を觀測して毫に入り細を穿つと雖も、己れは一歩も地球を離るゝこと能はざるが如し。また商舗の店員が財物を取扱つて出納に自由を得るも、己れは之を所有するの權能なきに似たり。是れは單に佛教修學の上のみではない。世の倫理學者が、口に東西の倫理を講說し、筆に古今の道德を解釋して、眞を探り實を寫すも、己れ自ら之を實踐躬行せざれば、之を學者と稱することを得るも、之を德者と名くること能はざるが如し。現代の世相を觀察するに、智彌〻明らかに德却て昏く、學益〻進みて行ひ却て退くの觀あるは、畢竟學理を對外的に研究して道德を對內的に修得せざるが爲めである。

然らば此の佛心は那邊に向つて證悟し得べきや。道は本より邇きに在り、人之を遠きに求む。宜しく自己を究盡して、自己の全身心に此の佛心を實現すべきである。

自己是れ何物ぞ、吾人の意識なるものは、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、色・聲・香・味・觸・法の六境に交涉して發生するものである。此の間に、迷あり悟あり、善あり惡あり、苦あり樂あり、憂あり喜ありて、千態萬狀なるも、皆な夫々因緣に依つて生起するものなれば、仔細に點檢し將ち來れば空華の

固より一佛教である。

抑ゝ釋尊の化を開きたまふや、橫說竪說圓通無礙にてあらせ給ひ、眞理に惑ふ者の爲めには、導くに迷を轉じて悟を開くの道を以てし、德性に乏しき者の爲めには、敎ふるに惡を息め善を修するの範を以てし、煩悶に沈める者の爲めには、授くるに苦を離れ樂を得るの法を以てし、佚樂に溺るゝ者に對しては人生の苦なることを示し、現實に迷ふ者に對しては色心の空なることを示し、常見に滯ふる者に對しては世相の無常なることを示し、我執に囚はるゝ者に對しては諸法の無我なることを示し、轉じて、人生苦に惱める者には、爲めに極樂の門を通じ、空理に偏する者には、爲めに實相の法を說き、無常に拘泥する者には、爲めに常住の理を演べ、無我を偏執する者には、爲めに大我の眞を敎へ給へり。而して終に煩惱即菩提、娑婆即淨土、色身即無量壽、幻相即眞實相の妙理に證入し、以て智德圓滿の佛境界に到達せしめ給うたのである。古歌に

分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな

とあるは、正しく釋尊說法の目的を詠じたものである。

その高嶺の月とは謂ゆる眞如の明月にして、即ち佛心である。此の佛心能く萬德を具有して、曾て缺くることが無い。最勝の智德あり、最高の斷德あり、最大の恩德あり、智は佛心の光明なり、斷は佛心の威德なり、恩は佛心の慈悲なり。釋尊は此の佛心を體驗し莊嚴して、等正覺を成じ精進力を現じ大慈力を

禪の要諦

佛心體驗の法門

禪は佛心體驗の法門にして自己究明の妙術なり・・・同じ高嶺の月を見るかな・・・月とは即ち佛心なり・・・佛心體驗の方法・・・道は邇きにあり・・・誤つて會すること莫れ・・・學道の人眞を識らず・・・自己究明の妙術・・・坐禪・・・最上無爲の妙術・・・一代の聖敎は禪の發露なり

禪は佛心體驗の法門にして自己究明の妙術である。否、禪は全佛心であり且つ全自己である。釋尊一代の聖敎は機に隨つて法を說き病に應じて藥を與ふ。爲めに小乘あり大乘あり最上乘あり、漸敎あり頓敎あり最極圓頓の敎ありて、竟に八萬四千の法門を開き三千餘卷の經典を傳ふるに至つた。然れども、何れも一佛心の發露ならざるは無い。故に二も無く三も無く、謂ゆる唯有一乘法である。されば外部より之を觀見する時は、顯敎密敎其の所說を異にし、聖道淨土各々相同じからざるも、內面より之を驗證する時は

した時、始めて與に禪を言ふべきである。舌頭上の說明は畫にかいた餅も同じこと、予の切に冀ふ所は實參實究これである。

禪をそれに當て欲めて見やうとして居るのがある。其の根本の眼の着け處が違つて居るから、哲學的心理學的の禪となつて了うて禪門の禪とはならぬ。即ち一種特別な禪を唱へ出して揚々として居る。右は兩頭ともに不是である。禪は宜しく禪として參究すべし、而して傍ら通佛敎の大義を究め、哲學心理の梗概を明らめ、以て禪の參究及び其の運用に資するでなければならぬ。然らざれば主客を顚倒するの謬見たるを免れぬ。

以上說き去り說き來つて處、畢竟兒啼を止むるの黃葉にも如かず、甚だ慚愧千萬である。殊に予が如きは未だ學地の頂に至らず、目下修學の途中に在る者なれば、禪の綱要を御話しするなどとは恐れ入つたことである。解毒の丸呑はお互に深く誡むべき所である。中には早呑込をして、手に在ては執捉し足に在ては運奔する、是れ皆な禪ならざるは無いなどと云うて居る。禪若し是の如くならば、古今賢聖何を苦んでか臂を斷ち指を斬るの修行をなされませうぞ。

或る者は、親に向つては孝、君に對しては忠、夫は夫のあるべきやう、妻は妻のあるべきやう、是れ即ち禪なりと說て居る。禪若し是の如くならば倫理敎、道德敎と何の擇ぶ所かあらん。

何事でも同じ樣なものであるが、難かしいと云へば近づかず、易いと云へば輕んずる、禪の一部面を瞥見して、我れ會せりを擔ぎ出すには困るのである。故に禪に參ぜんと欲する者は先づ以て大死一番して見るが宜い。大死一番とは正身端坐して妄想の窠窟を粉碎することである。自己の妄想を拂ひ盡

併し今日では禪にも種々の弊風あり、且つ之を發展せしむべき有力なる師家も多からざるに依り、世の誤解を招いて居る所も多い。されど私は西洋靈界の革命の如くに、今日の禪を根柢より全然改廢するの必要あるを認めるものではない。素よりそれは、不可能のことである。只その或る部分は大いに修繕を加へて弊習を除却しなければならぬ。何れにしても今日は禪の大修繕時代である。修繕時代なりとて參禪者其の人には何も差支はない。一軒の中でも屋根などが毀れて修繕する必要があれば、他の修繕を要せざる所、縱ひ要するにしても比較的破損の少ないところに居れば雨漏りの憂なきが如く、成るべく弊害の少ない、穩健中正なる師家の門に投ずるが宜い。禪と云ふ家は根本的に腐つた譯ではない、只だ一部禪弊の修繕に過ぎぬ。參禪者その人は禪弊と云ふ雨漏りに遭はん樣にさへ注意すれば、禪其の者は諸人を容るゝに十分の餘裕がある。人の修養に根柢を與ふるには毫も差支ないと思ふ。參禪者にして若し驀直に佛祖の堂奧に入つて至心に實參實究せられなば、必らずや心の安住する所を發見するであらう。

今日の禪者若くは禪の研究家を見るに、大別して二種ある樣に思ふ。一は專門的の禪、他は學究的の禪である。然るに專門的の禪者には往々にして舊習を墨守し、所謂樣に依て胡蘆を描くの風がある。自分獨り最向上の位地に立つた積りで、さも愉快さうに禪を擧唱するも、仔細に觀察すれば哲學者の說にも劣る樣な說を述べて居つたり、又は三論學の極々幼稚な程度ぐらゐに住つて居る人がある。此等は惡く云へば井蛙禪とでも云ふべきものであらう。學究的の方には往々にして世の哲學や心理學などを定規として、

知れぬが、併し私は今暫く禪者と云ふ立場を離れて、佛教の概括的見地の上から公平なる眼を以て見ても、禪は比較的に統一的中心となり易ひ位置に居るものと信ずる。

禪は實行上より見るも、哲學思想の上から見るも、宗教と云ふ上から見るも優秀の位置にある。或る一派の如く徒らに深遠なる理致を貴んで其の實、空理空論に走るといふ弊に墮することも無く、宇宙絶大の眞理も平常の上に實行して行くといふ點に於いて禪宗が一番適切である。故に禪に於ては理想と現實とを一致せしむるを以て特色とし、それがやがて實踐哲學の基礎、又、人類道德の根柢となつて居る。

禪は實踐道德の上によく基礎を與へて居る。其の實行の上に就て見るも、差別中に平等を見、平等中に差別を見て、自づから不偏不黨、中庸を得て居るから、彼の社會主義の如き惡平等に陷る弊もなく、と云ふて人類を無視し若くは輕視して、無限絶對の道理に憬れると云ふ厭欣取捨の惡差別にも陷らぬ。されば宗教としてこれを見るも、道德教としてこれを見るも、禪は善く其の天職として、安心の基礎となり道德の中心となりて、穩健なる信念と確實なる行持とを調和し雙進して社會人類の發展を資くるに偉大なる實力あるものである。

これを要するに禪は內は佛教統一をなすに最も好望の地位を占め、外は、實踐道德の根柢となるに於いて最も適當なる資格あるものである。果して然らば、禪者責任の所在は將來必ず此處にあるものと思ふのである。

佛教の統一と禪

上來十一章に於いて、禪とは怎んなものか、特に曹洞禪とは怎んなものか、と云ふに就て其の大綱を述べた積りである。予の目的とする所は大概了つたやうだが、更に一章を付して一言したいと思ふ。

村上博士に依つて佛教統一と云ふ事が盛んに稱へられたが、殊に現代に在りては、或る意味に於ける佛教統一問題の講究が甚だ必要なことゝ思ふ。村上博士の説に依ると、佛教を統一するには、念佛宗と禪宗との歸趣が合一したものが中心とならなければならぬ、と云ふ樣な意見である樣に記憶して居る。宋朝以後の支那佛教は自然とさう云ふ風になつて居る。(尤も今日の支那佛教は殆と形骸のみを存して居る樣なものであるが) 予の考へよりすれば、其は理論としては一應尤も千萬なる説ではあるが、元來、眞の禪は佛教を統一する樣に發達して居ることを忘れてはならぬ。

禪には最も純潔なる信念がある。而して其の信念が理想的で且つ道德的で、又、最も簡易にして普通的であるから、眞の禪旨を以て佛教を統一したならばと思ふのである。尤も法華宗の人は法華を以て統一せられると思ひ、律宗の人は戒律を以て統一せられると思ひ、各宗ともに統一の中心であると云はれるかも

が、禪の眞面目を充分に發揮されて能くその位置を回復するに至つて居るとは云へぬ。

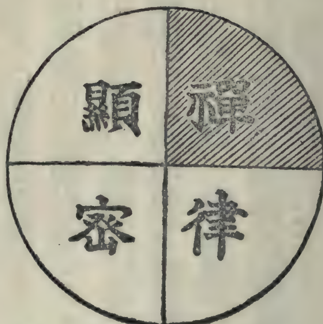
禪の本領を能々會得したならば、禪は各宗共有のものであることが解るであらう。法華には法華三昧あり、楞嚴には楞嚴三昧あり、天台の三止・三觀、華嚴の法界觀、眞言の阿字觀、淨土の念佛定、其の蘊奧を究め其の眞源に徹すれば、我が禪門の眞面目は忽爾として顯現するものである。

予は禪敎各派の諸賢に向つて、禪を禪宗の禪とせず、之を佛敎の禪として修養せられんことを望むのである。興禪護國論には佛弟子に三類あることが說いてある。即ち禪師・律師・法師是れなり。禪宗と天台宗と眞言宗をば悉く禪師と稱し、戒律を專らにするは律師、其の他の諸宗を法師と稱してある。併し戒律も決して禪を離れたるものに非ず、定共戒といふことなどは別としても、禪に依らざれば三業一致の淨戒は現はれ難い。又、念佛宗に就ても眞宗の口傳抄等には、法然上人の住居を指して『黑谷聖人の禪房』と云うてあるではないか。殊に上人の一枚起請文に

たとひ一代の法を能々學すとも、一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知の輩に同じて、知者の振舞をせずして只一向に念佛すべし

とある。此の中に幾多の禪旨あることを味はねばならぬ。

然るに、支那に在りて五家七宗等の流派を分ちたる頃より、日本に在りては足利時代の中頃より、漸々樣子が變つて來て、禪は敎に非ず、律に非ず、密敎に非ず、此等の外に別に禪なる特殊の宗派を別置する樣な狀態になつたのである。今これを圖示せば、



右の通りに天下を四分して其の一を有つて居る有樣となつて居る。併しながら上に述ぶる如く尤も二十四流の禪祖は多くは敎外別傳を標榜せられてあるが、其の抱負は決して敎の外に宗を立するには非ずして、諸經論と云ふ寶財の監督、所有主、使用方指導者を以て任ぜられてあるのである。然るに漸々に禪の抱負が下落して、他の經論と優劣を爭ふたり、又は敎者の眞似をして見たりする樣になつて、たうとう禪の領土が狹まくなつて來たのである。今日は天下に知音の人があつて日一日と禪の振興の聲を聞くことである

に法華經も禪中にあり、涅槃經も禪中にあり、楞嚴經も禪中にあり、三部經も禪中にあり、かくして禪は絶對のものとなつたのである。依つて佛教全體は總て禪中に有りと云ふ事が出來る事になつた。これを圖示せば



我が國に在りても、承陽大師の如きは禪宗といふ名稱を排斥して常に佛法と仰せられた。而して、華嚴・法華等の中に佛法あるに非ずして、佛法の中に華嚴・法華等があるのであると示されてある。併し佛教諸經論が禪より劣つて居ると云ふ意味ではない。佛教を吾人の身體の各部機關であるとすれば、禪は吾人の精神である。各宗が深遠の理を究め、若くは佛界に交通する方法を研鑽實行するに當り、禪は身を以て理を示し、自己の心内に佛界を顯現したのである。

ともありて、佛陀の說法度生の妙用は皆な禪の上の働きである。依つて有らゆる經文の中心は必らず禪であると云ふ事が出來る。今これを圖に示せば



禪は佛敎の根本種子の如く、佛の成道說法は幹枝花葉の如くである。八萬の法門無量の妙義も未だ曾て禪を以て中心とせざるは無い。故に苟くも佛敎を知らんとするものは先づ禪の何物たるを知るべきである。

併し支那の佛敎になると、禪の最も發達したる唐宋の時代に在りては、禪の位置は今一層擴大せられてある。卽ち禪の中に一切藏經を包含して盡く之を禪の手脚となしてゐる。佛敎は一味平等なるがゆゑ

純自力と云ひ純他力と云ふは、思想の表面より暫らく假に設けたる區別に過ぎない。宗教の眞の信念の究竟せる狀態は單なる自力でも單なる他力でもなく、自他の界畔を超越して無我に歸した所にあるものである。不思善、不思惡、身心脫落の時、どこに自力がある、どこに他力がある。自力他力の議論をして居る中は本當の禪でも無ければ、本當の念佛でも無い。禪で『即心是佛』とか『作佛を圖らず』とかあるを見て、自力敎などゝ評するは全く門外漢の說である。禪は遙かに自力他力の界域を泯絕する所のものである。

史上より見たる禪の位置

以上は敎理上から佛敎中に於ける禪の位置を說明したのであるが、更らに歷史上よりこれを說明するに、時代の變遷に隨つて佛敎中に於ける禪の位置が種々に變遷して居ることは事實である。今これを大體印度佛敎・支那佛敎・日本佛敎の三者に就いて考へてみる。

印度佛敎に於ける禪は佛敎の中心に位して居たやうに思ふ。尤も禪にも色々の禪がある。外道の禪、二乘の禪、世間の禪、出世間禪、三學六度の中にも必ず禪定の一科を設けてある。されど此等は禪の端緒、若くは禪の一部分を示したものである。吾が所謂禪は佛陀成道の母たる金剛座上の王三昧をいふのである。佛が說法せらるゝ時は必らず先づ禪定に入つて說かるゝ『大寂定を起さずして諸〻の威儀を現ず』

はれぬ。米の飯を大乗とすればお粥は小乗である。これを受ける其の人に取つては小乗も眞の法味であり、大乗も眞の法味である。佛は對機次第に眞個の佛法を説かれたものである。本來法の根本義から云ふならば、大乗も小乗も無い、皆な一佛法である。故に承陽大師は

　佛家の教の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず、但だ修行の眞僞をしるべし

と示されてある。修行の眞僞とは食べて見て其の身心を健全ならしむると否とである。如何に上等の料理でも腹に障りては食べんにも劣る。縦ひ茶漬一碗でも身に適すれば生命の綱である。一切藏經に大小乗の區別を立て丶我田引水的の論議を勞して居る者は、まるで食物其の物の目的を忘れて居るも同然である。故に文字や説相を死守せず、直下に佛陀の大精神を證するのが一大事である。禪は此の佛陀の大精神を立脚地として居るのであるから、大乗にも偏せず、小乗にも偏せず、大小兩乗を消化して自己の寶財となし、以て自利々他の功徳を莊嚴するのである。遥かに大小兩乗を超越して居る宗旨と云ふべきである。

或る學者はまた禪を念佛宗と比較して、念佛は純他力宗で禪は純自力宗であると云うて居る。比較研究の上から見たら一應は斯樣にも見えやうし、斯樣にも云はれやうが、元來自力他力の名稱は自我といふものを中心として、忘我的信念を他力といひ、自我の教養發達を自力とはいふのである。併し實際宗教上の効用は自他冥合の上に現はれるものである。故に其の堂奥に入て見れば、他力を借らずして自力の成功することもなく、自力を度外にして他力の感應を得ることもないはずである。

ある。

禪は佛陀一代の經文を以て自己本來の面目を徹證するの明鏡龜鑑となし、依て以て天地の實相、佛法の根本義を知悉するのであるから、他宗の如く一經一論の主旨を所依として固執することは無い。即ちこれ等一切經文の奧底に遍在する根本主義を所依とするのである。そこで禪は佛法の總府なり、佛法の頂𩕳に位するものなりと云ふた所が敢て高貢自尊の大言では無いはずである。

大小自他を超越せる宗旨

或る學者は、禪は戒定慧三學の中の定學である、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六度の中の禪定であると思うて說明して居るが、今日謂ふところの禪は左樣な部分的なる狹い意味の禪でない。彼の百丈禪師の語にも

吾法は小乘にあらず、大乘にあらず

とある通り、大小乘の隔歷をも飛び越えたる法門である。佛敎に大乘小乘の別があるといふけれども、大乘・小乘と云ふは何れも比較的の上に名けたものに過ぎぬ。佛御自身に於て小乘・大乘と區別せられたものではない。こは對機の不同よりして、時には小乘的に現はれ、時には大乘的に示されたばかりである。例せば、健康なる人には米の飯が必要であらうが、健康のすぐれない人には柔らかな粥でなくては食

又、高祖承陽大師が入宋求法し歸國せらるゝに當つて、吾れは唯だ眼横鼻直なる事を認得したのみである。此の外別の佛法は無い、即ち『空手還鄕ぞ』と云はれて居る。

これ等は何の意味であるかと云ふに、天地の實相を徹見せられたことを云ふのである。天地の實相を徹見するとは如何と云ふに、其の物を其の通りに見るまでのことである。即ち善を善と見、惡を惡と見、花を紅と見、柳を綠と見る、これである。一寸聞くと、そんな事は何でも無いやうに思ふであらうが、究竟の眞理は實相を證する時に始めて獲得せらるゝのである。承陽大師が

春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえて冷しかりけり

と詠ぜられしは實に佛法的々の垂示である。此の實相が解りさへすれば決して迷惑することは無い。從つて煩悶も妄想も有るべきはずのものでない。然るに凡夫の悲しさには此の實相に迷ふ所から、無常を常住と見、常住を無常と執し、苦を樂と見、樂を苦と執し、空を認めて有と爲し、無我を認めて我と爲し、一切の顚倒夢想皆なこれより生ずるのである。それが爲めに風なきに波を起し、空中に華を認め、種々の惡業を增長し、遂には社會が面倒にも成り、人生が悲慘にも成つて來るのである。たとひ參禪した所で、眞個にその實相に徹見が出來ない所から徒らに文に依りて義を解し、日夜他の寶を數へて自からは半錢の分なきのみならず、動もすれば、佛法を以て貪名愛利の資料となしたり、又は高貢我慢の媒介となしたりして、却つて邪禪野狐禪に陥つて了うのである。これ等は何れも此の宇宙の實相が洞見されないからで

佛教の中に於ける禪の位置

禪は佛法の總府なり

禪は佛教の頂顙に立つべきものである、佛法の總府である、と禪者たる私が申すと、甚だ以つて自畫自讃のやうに聞えるが、併し、これは敢て私見では無い。禪の起源および先德の禪を傳ふる所以を知りなば、最も分明である。

彼の達磨大師が東土に渡られた時の如き、傳燈錄等には四卷の楞伽經を持來せられたとも云ふが、本宗所傳の正說に依ると、大師は空手にして支那に來られたのである。其の時の辭に『吾れは佛法の荷主である、荷物は前々に支那に到着して居るからその取扱と監督をする爲めに來たのである』と申されたさうである。荷物とは佛教の諸經論のことである。一切の藏經も畢竟隨機の說法にして月をさすの指である。法門八萬、其の說相本より同じからざるも佛の御本領は不異不別でなければならぬ。其の不異不別なる一實眞如の佛心を把定して自己の身心と爲し、之を縱橫無礙に使用するのが大師の精神である。

用人の實。言行を察し、可否を定む、乃ち求賢の實。其の實を存せず、徒らに虚名を衒ふは理に益なし。

是故に人の操履、惟だ誠實を要す。苟も之を執て渝らざれば、夷險と雖も以て一致すべし。

とあるが如く、臨濟と曹洞とを問はず、知行共に其の實を得るを至要とす。されば曹洞禪に於て綿密なる行持のみを主張するも不可なり、又、臨濟禪に於て嶮峻なる機鋒のみを貴ぶのも擔板漢である、若し一方に偏すれば兩者倶に不是である。元來禪は一なり、宗に於て風を異にすと思ふは、既に間違ひである。

要するに現代の樣子を見ると、何れも一の禪弊を以つて居る事は掩ふべからざる事實である。將來は各々その弊を一洗して、出來得ることならば曹洞禪を立脚地として臨濟の禪機を鍛錬するやうに致したいものである。これが今日禪に對する私の希望である。

肅なのを見て、丁度彼の程明道が山中の禪院に遊んだ時の如くに、公は大にこれを感じて『三代の禮樂は緇衣の中に在りと、此の言誣ひず』と云はれたさうである。和尚が長崎に在留する時などは、寢て居る時でもその居間を大勢で拜みに來たと云ふ位に一般の尊信を受けて居たのであつた。和尚の平生の行持の綿密な事は實に敬服の外は無い。和尚が平日信徒より得たるところの御布施は封も解かず、蓄へて置いて一度に長崎の貧民に施恤いたされました。長崎の人々は當時和尚を生佛のやうに思うて居つたのである。後和尚が故郷へ還るときに當つて、長崎の人々は恰も子の母に分かるゝが如くの思ひを爲し、道路に送るもの市をなし、長崎から小倉まで四里の間人を以つて充たしたと云ふことである。

禪心內に滿ち、禪用外に現はれ、進では大慈悲光明を放ち、退ては大智慧妙德を蓄へ、其の一動一靜が萬民信仰の模範となり、其の一進一退が道德感化の標本となるでなければ、眞の禪的祖師とは稱せられぬ。蘭山和尚の如きは兎に角理想的の禪を體現したる人と云ふことが出來やうと思ふ。私はかゝる人を理想的模範的の禪僧と爲すに足らうと考へる。

臨濟と云ひ曹洞と云ふた所で同一味の禪である以上は、よしや幾分の形式が異なればとて、何れか優れて居て、何れが劣つて居ると云ふ事は出來ぬ。古人の言にも

此の道を傳持するは、貴ぶ所一切眞實なるべし。邪正を別ち妄情を去る、乃ち治心の實。因果を識り、罪福を明らむ、乃ち操履の實。道德を弘め、方來を接す、乃ち住持の實。才能を量り、執事を請す、乃ち

止まつて世の中を風流がり愉快がつて、人生を見ること猶ほパノラマを覽るが如く若くは對岸の火災を見るが如くであるならば、これ即ち自調獨善主義であつて、禪としても枯木死灰の如き何等の活動も無い邪禪たるを免がれないのである。

以上大體に於いて曹洞・臨濟兩宗の異同の模樣を述べ、且つ其の禪弊を指摘したが、將來の禪者たるものは第一に此の禪弊を除去する事に力を盡さなくては成らぬ。然らば吾人が此の禪弊を除去するには如何なる方針を以つてすればよいか、言葉を換へて言ふならば、將來に於ける理想的禪風とは恁んなものであるか、私の考へにては、餘り都合のよい說かも知らぬが、此の臨濟曹洞兩者の長を採りて互に其の短處を補つたならば、玆に立派な禪風、即ち內に綿密の實行あり外に峻烈の禪機を有する理想的の禪風が出來やうと思ふ。

是れを古人に見るに、支那に在りては、藥山、百丈、洞山、曹山、芙蓉、宏智等の古佛ありて千古の模範を垂れたまうてある。我が國に在りては、道元禪師、關山禪師、瑩山禪師等を始め、鎌倉時代より今日に至るまで吾人が理想的禪風を宣揚せられたる明師宗匠其の數乏しからぬ。殊に臨濟宗の師家とても知見行持兩つながら穩密なるの人は枚擧に遑あらざる程である。近世の人に就て一例を擧ぐれば

彼の臨濟の孤月和尙の弟子に蘭山和尙と云ふのがあつた。後に九州豐後の開善寺に住職し、其の會下に集まるもの三百餘員もあつた。或時、小倉の城主小笠原忠總公が其の寺に參詣して寺內の風儀の非常に嚴

禪の見知の上から諸法實相の理を見たならば、山は高く、海は深く、柳は緑、花は紅、目は横、鼻は竪、犬はワンワン、烏はカアカア、皆な其の儘が佛法の露現であらうが、併しこれは向上第一義門の話だ。この向上第一義の所に安住して、これより人生を見下したならば、事々物々が法性自然の妙德を現はして居るのであるから、愉快でもあらう風流でもあらう、崇高でもあらう莊嚴でもあらう。が然し此の所に止まつて獨り自ら宇宙萬象の相狀を樂んで居ては、さつぱり禪の功德妙用と云ふものは無くなる。二乘の自調解脱と大差は無いことになる。禪門の術語ではこれを向上の死漢と云うて甚だ嫌ふのであります。人一度禪に參じたならば必ずや此の絶頂の所にまで進まなくてはならぬ。進んだらば更らに、謂ゆる百尺竿頭進一歩して、再び第二義門に下らなくてはならぬ。是を却來の消息と謂ふのである。

高い山の頂から麓の風景を眺める時には、海も見えれば谷底も見られる。百姓の地を耕やす有様も漁夫の魚を漁さる樣子も實に一幅の活畫圖である。其の絶景微妙は云ふに言はれぬ面白味を有して居る。併し其の實際は農夫それ自身、漁人それ自身に成つて見ると、面白い所ではない、極寒極熱の時と雖も、雨に沐し風に櫛り、其の艱難勞苦は一通りではない。それをば自分一人に詩的觀察を以て風流であるとか趣味があると云うて、呑氣に構へ込んで居るなどは決して佛陀の慈悲を體得した者とは言はれぬ。故に彼等が實地の境界を知りて、其の苦を觀じ其の勞を憐れみ以て宗教的大慰安を與へんには、一歩を進めて山下に足を降し、謂ゆる隨波逐浪、墮泥帶水して見なければ實際の事は分らぬのである。單に自分獨り氣高き處に

と云うて長逝したと云ふが、これが眞個に安心が決定して居て、斯る口吟をして生死に着せざる底の力量を示したものならば頗る立派なものであるが、後世皮想の管見を以つて此等の事柄を見て、禪は浮世を三分五厘程にも思はず、まるで世の中を馬鹿にして通る事のやうに心得る者があつたならば、大きな間違と云はねばならぬ。

某高等官が近頃東都に在つて熱心に禪學をやつた。彼れ要用ありて大阪へ行き某旅館へ着した。すると旅館の主人は兼ねて某高等官と知り合ひであるから早速挨拶に來て

『貴殿は近頃禪學をやつて御居でださうであるが誠に結構な事であります、一言に云ふと禪とは怎んな物でしようか』

と久し振りの挨拶の序でに、御世辭半分に云ふと、某高等官は得たり賢こし、何とも言はずに、驀直主人の横面を力まかせにビシヤンと打つて、後で『會すや』と云うたツきり何とも云はん。依つて主人は大きに驚きホウ〳〵の體にて逃げ去つた、と云ふ話がある。禪の流行しはじめた時分には間々斯樣類の事を耳にしたが、これは全く解毒の丸呑とやらで、着實なる禪の修養に乏しき所より、たゞ古人の手段に現はれたる影像を認めて禪の本義を誤つたのである。禪は決して左樣なものでない。冷かなる人には溫味を與へ、狂熱なる人に對しては清涼を與へ、無意義なる人生に意義を與へ、不如意なる人生に滿足を與へ、慈悲願行至らざる無しといふところに禪の妙用がある事を忘れてはならぬ。

で無くては眞個の禪と云ふことは出來ぬ。病的の禪風は曹洞には比較的に少ないかと思はるゝが、臨濟の方には隨分多い様である。是は臨濟の眞の宗風でないは勿論のことである。玉泉禪師か犢鼻褌に歴代祖師の名號を書し、また『文殊普賢些子に較れり』とて二大士の名を帯に書したと云ふことや、丹霞和尚が木佛を燒て煖を取られたと云ふ話などは、實にニガ〳〵しき限りである。唯だ古人は一種の正直なる確信があつて、その信念より起りたる作用であるから、其の精神には感ずべき所があるが、其の行爲は縱ひ如何なる大慈悲大方便ありとするも、實に禪門の大魔子と謂はねばならぬ。斯る禪弊は今後は斷々乎として大にこれを改めなければならぬ。若しこれを改むること無ければ、遂には一盲衆盲を挽いて放縱不羈無慚無愧の穽に陥らしむる恐れがある。果して斯の如くならば、禪者それ自身の誤謬は勿論の事、其の社會を毒し人類を惑はす罪は決して少々ならざるべきを信ず。禪者たるものゝ大に誡むべきことである。

禪についての正しき理解

序でだから一言添へて置くが、禪に就ては今一層甚しき誤解をして居るものがある。それは禪とは何か滑稽洒落なやうな呑氣で無貪着なやうな言行をするものゝやうに考へて居る連中も無いでは無い。彼の蜀山人であつたか

行く先も行く先もまた同じこととこゝらで一寸土に成らうか

ことであるが、これらは求法の志の切なるより出でたるものにて、其の精神は感歎に餘りあるものと謂ふべし。併し出家して後、修行漸く成れるに當りても、餘りに禪機に誇るの傾があつて、綿密の行持を傷つけた。圓覺寺に使僧として行かれた時の如き、奇拔なる機用は察女にも勝れて居る程なるが、決して穩健なる靈機とは申されぬ。寧ろ狂的禪風である。最後に至り薪を積んでその上に端坐し火定に入つて死んだと云ふ事である、其の薪に火の移つた時、兄の了庵禪師がこれを引導して、

『惠春熱いか怎うだ』と問はれると、尼は徐ろに開目して

『生道人の知る所に非らず』と云うて入滅したと云ふ。

一寸聞くと如何にも痛快である。如何にも大禪定家らしい、眞に悟つたらしい。又、大禪定家たるの要素は有したに相違ない。然し曹洞綿密の宗風より見れば決して憬慕すべき機用でない。一種禪病の標本である樣に思はるゝ。禪は決して奇行を貴ばぬ、禪は決して矯激なる動作に擬すべきものではない。私は彼の察女惠春尼等を極力排する譯ではないけれども、眞個の禪の行持は決して左樣なものではない。常規常道に合つて而かも心に罣礙なく、承陽大師の曰へる如く

佛となるに、いと易き道あり、諸の悪を作らず、生死に着する心なく、一切衆生の爲めにあはれみ深くして、上を敬まひ下をあはれみて、よろづを厭ふ心なく欣ふ心なく、心に思ふことなく、憂ふることなきこれを佛と名く、また外に尋ぬることなかれ

闇の夜に啼かぬ烏の聲きけば生れぬ先の父ぞ戀しき

と云ふ妙な歌を作つて父に渡された。父は變な事だと思うたが、白隱禪師が折角賜つた物ゆゑ、それを戴いて來て娘に與へると、娘は

『流石は白隱だ、豪い、お父さんは駄目だ、妾は生れぬ先の父を徹見して啼かぬ烏の聲を聞いた、其の妙味言ふべからず、あなたは私が生れた後の父だ』

と云うて父を困らせたが、後、禪師の門下に投じ、女流でこそあれ、機鋒敵なしと云ふ程の女丈夫になつたと云ふ奇譚があるが、これ等は一見甚だ禪機峭峻で最も面白く感ぜらるゝ節もある。併し決して圓熟した態度と云ふ事は出來ぬ。貴ぶべきを貴び、敬ふべきを敬ふのが、平生心是道の妙用である。若し察女なる者が、果して史傳に記する所の如くならば、縱ひ機鋒の鋭利、佛祖の眼睛を驀過する底の器量ありとも、依然として大々的お轉婆たるを免れぬ。禪は決して面白いとか奇拔だとか云ふ樣な手段を弄するはずのものでない。然らば察女の如きもやはり一種の禪弊に陷りたるものたるを免れないのである。

以上のやうな例は臨濟の方ばかりでない、曹洞の方にもある。

彼の小田原最乘寺の開山了庵禪師の妹慧春尼は、在俗の當時非常な美貌であつた。彼れ出家せんとする時、兄の了庵禪師、其の美貌にては到底修行圓成し難しとて、出家することを許されなかつたから、尼は直ちに庫下に趣き燒け火箸を面に當てゝ其の面容を醜くゝして、初めて出家を許されたと云ふ

臨濟宗は曹洞宗に較べると甚だ一方向きの様に見える、依つて動もすれば餘りに小節に滯り、一機一境の禪というて、小さな見識を振り廻す、其の結果は事に依ると行持が甚だ疎暴に流れ易い。一例を擧ぐれば彼の白隱門下の老婆察女の如きがそれである。

臨濟の大宗匠白隱禪師が駿州原の松蔭寺に在りし時、其の附近の農家に察と云へる女子があつた。彼れは十六歳の時に世間で最も富める最も氣前の善き最も美貌なる男子を夫とせんと云ふ望みをおこした。併し自分を顧みるに、美人と云ふにも非ず且つ多く財産を有するにもあらざれば、到底我が望みに副ふべき者が聟に來てはくれまい、故に人力にては其の目的を達するは覺束なし、此の上は佛天の威神力を仰がなくてはならぬと云ふ所から、一心不亂に佛檀に向つて高王觀音經を讀誦した。日々夜々に讀誦して居る中に、自然と禪的知見が現はれた。お察は何時しか其の經文を尻の下へ敷ひて觀音經を讀んで居た。父はこれを見大に驚き

『汝は左樣な勿體ない事を何故致すのか』

と責めると彼れは平然として

『お父さん私が臀と觀音經と何れが眞に有難いか』

と云ふた。父は益々驚き、是れは發狂せしものならんと思ひ、周章てゝ白隱禪師の許に行つてこれを語ると、禪師は之を聞て然らばお察にこれを與へて見るがいゝとて

故に上にも述たる通り、曹洞は行持綿密を宗とし、專ら潜行密用を尊ぶ。一見魯の如く愚の如くにして、棒喝を妄りに行ぜず拂拳もやたらに拈じない。所謂茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫し、天の永へに覆ふが如く、地の永へに載するが如く、萬事自然にして更に奇特玄妙を弄せず、一言にして云ふならば、曹洞禪は甚だ平凡主義にして且つ常識主義である。

然るに臨濟になると機鋒甚だ峻烈で、大喝も下せば三十棒も與へる、佛に逢ふては佛を呵し祖に逢ふては祖を殺し、天に對しては天を粉碎し、地に臨んでは地を寸斷す、百千の惡魔も一時に撲滅し、三世の諸佛も一擊に擊破すると云ふ風であるから、一言にして云ふならば、臨濟禪は向上主義にして且つ超絕主義である。

曹洞臨濟の禪弊

今日に到つては、曹洞・臨濟、何れも多少弊害に陷つて居る傾きがある。

曹洞宗は臨濟宗よりも風呂敷が大きいから、何と無く漠然として望洋の歎あるを免れぬ。且つ儀式に拘泥する傾きがあるのみならず、凡て秩序整然を主とする爲め、勢ひ學問的に流れ易い。これは古來曹洞宗の宗師家の大に警戒せられた所であるが、どうも其の餘習を再現したがつてならぬ。本來、この默照の妙致は、學問や理屈を以つて會得せんとするならば、何時まで立つても解決のつくものでない。

者は後者の弊を指して看話の禪と評し、後者は前者の弊を稱して默照の邪禪と云ふた。然るに兩禪師は共にこの指稱を嫌厭せず、却つて其の指稱を借りて各自の特色を標榜する名詞とせられたのである。

　默照とは、默は寂默で一切の分別言語を超越した處、照は佛知見の開發のこと。それ故に默照とは王三昧に安住して不思量底を思量する當相をいふのである。

　此の處は、月舟和尚が無心〱大無心、徹底無心大無心と云はれし如く、心念を解脫して無心の處にも止まらぬ境界である。併し決して枯木死灰、傍に雷が落ちても知らずにゐるのではない。枯木寒岩に倚り三冬尙暖氣ありで、萬事を空じて能く萬事に應じ、己れなくして己れならざる所なしといふ作用を現じてゆくのである。是を本來の面目現前と云ふ。『坐禪儀』に於て、

　心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて、作佛をも圖ること莫れ、豈に坐臥に拘はらんや

とあるが卽ち默照の禪の眞の面目である。故に默々として端坐し、妄想をも除かず眞をも求めず、遂に絕學無爲の聖域に進み、自然智を發現し來る、これが曹洞禪の行り方である。

　看話とは、古人の垂示や商量を公案と稱し、之を御悟りの標準として此の公案に向つて大疑團を生じ、熱心に之を工夫して、其の疑團を氷解してゆくことである。故に小疑には小悟あり、大疑には大悟があると云うて疑團の氷解を主要とす。一疑を破し了つて更に一疑を生じ、徹底打破し盡して禪機汪溢、之くして可ならざるなし、これが臨濟禪の行り方である。

曹洞の開祖承陽大師は最も綿密の宗風を唱道せられ、禪界に於ける千古不磨の憲典を示されてあるが、是れとても臨濟に對する曹洞禪として示された譯ではない。併し其の承陽大師の家風が何時の間にやら、曹洞の特色と云ふ樣なことになつたのである。又、臨濟宗の大部分は宋の大慧禪師等の風に倣うて來たが、それが臨濟宗の特色の如くに思はるゝことゝなつた。是に於てか自然に兩宗の家風が大に異なる樣な觀を呈するに至り、今日では全く兩宗の間に著しき異點を生ずるに至つたのである。今日鎌倉や京都の臨濟の會下などへ行つて參禪した人と、永平寺の僧堂で修行した人とを比較して見ると、其の結果の上に甚だしき相異があるのを見ても明かである。依つてこゝに私は一通り此の二宗の關繫異同を辯ずる必用があると思ふのである。

默照禪と看話禪

宋朝時代より兩者の禪を批評して

曹洞禪……………默照禪

臨濟禪……………看話禪

と云うて居る。宋末に曹洞に宏智禪師と臨濟に大惠禪師と云ふ巨匠があつた。前者は行持の綿密を主とし、後者は機鋒の嶮峻を主とせられた傾向がある。併し物には必ず一長一短のあることは免れぬ、故に前

曹洞臨濟宗風の異同

一味の禪法と二宗の對立

禪門五家の宗風を述べた所に於いて、略此の二宗の宗風の異同は解説したのであるが、五家七宗の中にて日本へ傳來して居るものは、この曹洞と臨濟との二宗のみである。黄檗宗はやはり臨濟宗であつて、黄檗山に於て隱元禪師が禪を擧揚せられたから山號を以て宗名としたまでのものである。

純粹の禪風が吾國に傳つたのは鎌倉時代からで、當時は臨濟とか曹洞とか云うて宗派を別立しては居らず、只だ法系の異なりがあつたのみである。故に臨濟と曹洞との二宗は鎌倉時代より吾國に於て、それぞれその特色を發揮しつゝ互ひに融通し合うて或は曹洞に參禪して臨濟の法系を嗣ぎたる人もあり、或は臨濟より曹洞の系譜に入りたる人もあり、又、其の家風の上から見ても、臨濟の人にして曹洞的なるあり、曹洞の人にして臨濟的なるありて、兩宗の間に一定の家風ありと判別することが出來ぬ。足利氏以降に至りても此の兩宗は殆んど交換融通の狀態をつゞけてゐた樣に思はるゝ。

の身命を損し其の精神を毒するは盡く是れ酒なり。故に所謂衆生顚倒の心を離れ去るを以て此の戒の本領とするのである。不謗三寳は邪見の遠離である。三寳は宇宙の妙理なり天地の大德なり。此の妙理に隨順し此の妙德を發揮するを此の戒の要旨とす。

然れば上述する所の十六條戒は、畢竟ずるに自己の光明を十六輪相に分說したるものに過ぎぬ。皆な是れ禪定の上の活動狀態にして、畢竟じて禪戒一如なりと知るが宜い。

不自讃毀他戒……息惡推善行
不慳法財戒……財法具施行
不瞋恚戒……忍辱行
不謗三寶戒……讃三寶行

戒法には止惡と作善との二方面がある。止惡は惡事をするなと云ふ制止の方面、即ち消極的方面である。作善は善事を行へと云ふ奬勵の方面、即ち積極的方面である。此の止惡作善の功德を獨占せず、常に一切の衆生に及ぼし、衆と共に道を守り道を樂まんことに努むるのが利物である。

併し此の戒法を以て世間の律法やモーゼの十誡などゝ同じに見てはならぬ。釋尊傳授の佛戒とは申しながら、其の實は人々本具の戒德であつて即ち自己の光明である。端坐一番、妄情頓に脫する時、宇宙の大精神は忽爾として通身に顯現し、自然に止惡・作善・利物の大用が現前するのである。其の大用を描出したのが十戒である。即ち其の大用が他の生命に對して止惡・作善・利物の功德を發するを不殺生と名くるのである。以下九戒についても之れに準じて知るが宜い。

唯だ第五と第十とが少しく名稱が他に異なつて居るから略說して置かう。不酤酒とは酒類を酤りて他を損害せざれとの意義である。他を害するは自を害するよりも其の罪重し、倘ほ廣義を以て解釋すれば、正生命を害し正知見を昧ますものは凡て一種の酒である。花に迷ひ月に迷ひ色に溺れ財に溺れて、遂に其

三聚
- 攝律儀戒——斷德(止惡)——法身
- 攝善法戒——智德(作善)——報身
- 攝衆生戒——恩德(利物)——應身

三身

此の三聚の戒德が境に對し物に接して實際の行持となつて現はれたのが十重禁戒である。十重禁戒は『梵綱經』を根據とす。この經には輕重二種の戒を說けり。我が宗の傳ふる所は、輕を除いて重のみを取るに非ずして、此の十重の中に大小乘輕重一切の戒法を網羅して居るのである。今は戒法の說明をするのでないからこれを一々御話は止めにするが、指月和尚の『禪戒篇』に依つて、十重禁戒と、十行との名目だけを揭げて置かう。委しくは『修證義』を始め『禪戒抄』等に就て研究せらるゝ樣に致したい。

十戒 (止惡)		十行 (作善)
不殺生戒	……	悲慈行
不偸盜戒	……	少欲行
不邪婬戒(又は不貪婬戒)	……	淨梵行
不妄語戒	……	諦語行
不酤酒戒	……	明慧行
不說過戒	……	護法行

三聚淨戒 ─┬─ 攝律儀戒 ─┐
　　　　　├─ 攝善法戒 ─┼……誓願門
　　　　　└─ 攝衆生戒 ─┘

十重禁戒（下に詳記するが如し）……行持門

以上の三歸と三聚淨戒と十重禁戒とで十六箇條となる。此の內三歸戒は佛と法と僧との三寶に歸依し奉り、誓て他の邪魔外道に迷ふまじとの信念を確立するのであるから、信仰門の戒である。佛は言ふ迄も無く吾人の所依處にして智德の標準、慈悲の源泉である。佛の所說を法といひ、法を學び法を傳ふるを僧といふ。僧は法より生じ、法は佛に依て現はる、故に三寶は竟に一體である。

次に三聚淨戒とは誓願の戒である、吾人の目的はこゝに確立するのである。攝律儀戒とは一切の惡を斷せんとの誓志、攝善法戒は一切の善を行はんとの誓志、攝衆生戒とは一切の衆生を利益せんとの誓志である。前の二戒は自利にして後の一戒は利他なり。自他平等の大利益を以て一切行爲の理想と定め、從晝至夜暫くも忘るゝこと無く、此の大理想に向つて向上精進するのが佛弟子たるものゝ本務である。此の本誓を發し此の本務を護持すれば、取も直さず眞の菩薩である、佛子である。又、此の三聚淨戒を佛の三德と三身とに配して見れば左の如くになる。

禪機禪用と十六條の戒法

禪心あるところ禪機あり禪用あり。禪機禪用といへば往々奔放不羈なる行爲だと思ふ人があるが、それは誤解である。禪家には禪家の軌範がある、典型がある。佛祖正傳の大戒が即ちそれである。この大戒は十六條に分れてゐるが、この十六條は佛の言行の軌範であり、また轉凡入聖の要津である。

故に『梵網經』には

衆生佛戒を受くれば、即ち諸佛の位に入る、位大覺に同じうし已る、眞に是れ諸佛の子なり

と仰せられてある。故に我が宗では一般的化導の標準として受戒入位を安心の歸趣と定めてある。即ち戒法本位である。是を表示すれば

三歸戒 ｛ 南無歸依佛 / 南無歸依法 / 南無歸依僧 ｝……信仰門

道理の根據が無い。禪僧の無智なる者は、自分の學び得たものを天下第一なりと思ひ、空見識を振廻はして、佛祖以上の境界にでも達した樣に考へ、而して其の說く所は三論にも及ばず、西洋の哲學にも及ばず、少かに莊子の草履取り位の者がある。世に謂ふ野狐禪の輩は多くは此の類である。此の歐陽修の如きはそれと反對に學文的の智慧はあつても定力が添はない。謂ゆる狂慧の徒たるを免れない。されば老僧を問ひ詰めんとして反つて老僧に言ひ詰められたるも道理の譯である。

眞の定慧は決して各別なるものでは無い。眞定は自づから慧を生じ、眞慧は自づから定に通ずるものである。吾人にして着實に坐禪せば、一分の定力を生ずると共に一分の慧力を發し、知らず〳〵定慧均等の人となるものである。

に敬服したと云ふ。

今云ふ『定』とは、善悪を放下して坐り込んだ當體を云ひ、本來の面目、宇宙の妙德現前するを『慧』と云ふのである。禪は此の定と慧との二つが具はらなくては眞個の應用は出來ないのである。定力なきの智慧は單慧である。單慧は畢竟して狂慧である。今日の世の中を見ると狂慧の人が澤山である様に思はれる。彼の伊達政宗の語にも、

仁に過ぐれば弱くなる、義に過ぐれば堅くなる、禮に過ぐれば諂となる、智に過ぐれば虚をつく、信に過ぐれば損をする。

とあるが如く、心の坐りの無き智慧は徒らに外界の事物にのみ貪着するから、始終智慧を濫用する様になる。濫用の智慧は實行に乏しい。實行なければ狂人の智慧で、着實に道德を修むるの力が無いものである。學者とか才人とか云ふ連中にも、學問の研究才能の應用は甚だ人に勝れて居つても更に身が修らず德が備はらず、口先ばかりで實行が伴はないのは、何れも狂人の仲間を脱することが出來ぬ。依て單慧は決して眞の智慧と云ふべきものでない。何故ならば其の智慧が腹の底にも收まらず、全身を充たすに足らぬからである。丁度酒呑が醉つて居ながらも己れは醉つて居ないぞと云ふと同じことである。

と云うて又た定力計りで、智慧が伴はないと單定となる。單定は痴定と云うて一種の愚癡たるを免れぬ。禪僧の上から云うても、智力を有せず唯だ定力一方のみの人は動もすると徒らに棒喝のみを行じて、更に

四圍の風景が實に清洒である。段々本堂前まで行くと、眉毛雪の如き老僧が一心不亂に御經を讀んで居る、時に彼は老僧に向うて

『貴僧は何を誦んで居らるゝか』と云ふと、老僧

『拙衲は法華經を誦んで居る』と答へたつきり振り向きもしない。其の態度が何處となしに泰然として少しも動搖する色がない。歐陽修は益々感じ入つて、更らに

『古の高僧は死の面前に迫るの時に於て、皆な談笑して脫し去り、何れも生死の爲めに束縛せられず、死を見ること生の如くである、是は何の道に依て是の如き自由無礙の境界を得たので御座るか』

と尋ねると、老僧答へて

『古の高僧は定慧の力によつて然るのである』

と云ふと歐陽修は更に、

『然らば今の僧侶に是の如くなる者殆んど少なきは何ぞや』

と云うと、老僧間に髮を容れず

『古の人は念々定慧にゐるがゆへに臨終亂るゝ事が無い、今の人は念々散亂にあるがゆへに臨終如何ぞ亂れざるを得んや』

と流石の歐陽修も茲に到つて言葉窮して、更に何等の問答を發することも出來ず、且つ膝の屈して非常

慎しみ自ら警しめなくてはならぬであります。

狂慧と痴定、眞慧と眞定

餘りにくど〳〵しく云う様であるが、公平無私なる宇宙の妙徳に融和して其の徳を以て萬事に處して行くのが禪の生活である。かくしてこそ禪的生活の眞面目は社會の上に活動して行くのである。丈夫は縱へ荊棘林中に在るとても決して束縛は受けぬ。そは禪心に坐して禪機を發し禪用を施して居るからである。如何に盤根錯節の間に處するとも、泰然不動にして而かも能くこれを截斷するの勇と、揀別するの智と、利導するの恩力とを發揮することが出來る。

彼の程明道といふ人は、程伊川なる兄と與に支那宋朝に於ける學者の泰斗である。佛教反對者としても共に有名な人であるが、其の實は佛教に私淑する所の多かりしは皆な人の知る所である。或る時、定林寺と云ふ禪院に立寄つたことがある。恰も數百の禪僧が午餐を喫する時であつた。其の衆僧が食堂に入るを見るに、周旋歩武、威儀齊々、一坐一起、規に中り矩に契うてゐる。彼見て大に感歎して「三代の禮樂は盡く浮屠の中に在り」と言うた。と云ふ話がある。程明道は禪僧が禪心禪機を飯を食ふ儀式の上に活現したのを見て驚いたのである。

また彼の大文章家と云はれたる歐陽修が一日嵩山に遊びし時、一字の山寺を見て獨り寺内に入りしに、

所なきものである。

今や世の新聞を見るに、彼の三面記事なるものが毎日の如くに、血腥き事、忌はしき事、恐ろしき事、汚らはしき事が多く記されてある。此等の出來事は何れもこの本性本德を昧まして之を惡用する所から生ずるのである。甚だしきに到ると、最も惡性なる耽溺主義や、最も過激なる社會主義を唱ふる者すらある。かゝる耽溺主義は畢竟この感情を私せんとする所より起るのが多い。

明治四十一年の事なりと記憶するが、明治天皇は高崎男爵を御側近く召させられ、新聞紙上に日々記載せらるゝ社會の狀態を御痛心あそばさせられ、種々御下問あり、陛下は双の御眼に御涙を湛へさせられて暫時は龍顏を垂れさせられて擡げさせたまはなかつた。而して畏くも陛下は男爵に向つて『遺憾である』と仰せられたといふ。世人の非行を陛下は御自身の非行と思召されて深く慚愧あらせられたのである。高崎男爵は叡慮を畏しみ奉り覺えず總身に汗を流し、遂に志を決して國民道德の普及を圖らんとし、老人の身を以つて各地に巡回演說を爲して一德會なるものを組織し、大に社會風紀の矯正に盡力せられたと云ふことである。

誠に恐れ多い譯ではないか。

かく國民道德の頽廢が陛下の大御心までも御煩はし奉るかと思へば、殆ど身を容るゝ地なきを覺ゆるのであります。而してこの本はと云ふと、皆な吾人の私情私欲から生ずるのである。吾人は最も深く自ら

が故に妄りに貪慾を生じて休することを知らず、貪ること彌々多くして愈々不滿を増すが故に、瞋恚の煩惱を生ず。貪慾・瞋恚・愚痴は、是を三毒の煩惱と稱して一切の妄想の大本である。古歌に

　三毒を並べて置いて眺むれは貪欲坊の長けの高さよ

とある。三毒とはいふが、中でも貪欲が一番いたづらをやる。社會の罪惡は多くは貪欲より起る。併し非理の欲を恣にするの源は、全く愚痴にあるのである。三界六道の苦患、五欲六塵の迷惑も盡く此の三毒の仕業ならざるは無い。近くは彼の日露戰爭の如きも、露西亞が我が國の精神と東洋平和の大本とに通曉せざりし愚痴の上から、望むべからざる貪欲を生じて來たのだ、我が日本はこれに向つて智德を發揮し、斷德を應用し、能く恩德を施して、遂に平和の克復を見るに至つたのである。

　恩德も其の通り、人間が善くこれを活用すると、君臣の禮となり、父母の恩となり、子孫の孝順となり、主從の和樂となり、夫婦の愛情となり、兄弟の友情となり、朋友の信誼となり、家庭、國家、社會の上に於ては大仁德となり、大慈悲となり、謙讓となり博愛となつて、冷かなる人生に偉大なる溫味を與へる事が出來るが、さて一朝これを誤るときは、亂倫荒德これより甚だしきは無いのである。

　天地は一源、萬物は一理である。人に對して恩德を現はせば其の恩德却て其の身を潤ほす、人を虐すれば人亦た我を虐す、獨り人間のみならず、金錢に親切なれば金錢亦た我れに親しむ。田地を疎略にすれば田地亦た亦た我れを疎んず、道德の領土には人畜の別は無い。禪の生活は有情と非情とに通じて至らざる

地と其の徳を一にした者とは言はれぬ。禪の應用は永久に不斷に宇宙自然の妙德と一致するところに價値があるのである。

宇宙の三德と人間の知情意

人間の精神に知情意の三方面ある事は誰も知る處である。而してこの知情意が自づと宇宙の大精神宇宙の三大德と脉絡貫通して居る。併しながら、人間の淺ましさ、煩惱妄想、私意私情をその間に挿むから、宇宙自然の如くに公平無私不偏不黨といふ行履が出來ないのである。

人間は本來、豪毅果斷の性能を以つて居る。即ち宇宙の大意志、佛の斷德と相通ずる者をもつてゐる。若しこれを昧まさず利用すれば勇氣とか決斷とか云ふ美德となり、私心私情を以てこれを惡用すれば我見とか亂暴とか蠻勇とか云ふ不德となり、事を亂すに至る。

智識とても其の通り、宇宙自然の大智慧の如くに一點の謬見なからしめ、正を正とし邪を邪とし、高低上下、善惡美醜、凡て其の判斷を誤らず其の位置を誤らず、其の義務と責任とを誤らずに行つて參れば、直に宇宙の大智慧、佛の智德と相通じて、萬事を處し萬行を施す上に於て一糸も亂るゝことがないのである。然るに人間は私情煩惱を以て正邪善惡を誤まるから、自他上下の別を亂し、道を明らかにする所以のものをして却て道を昧まさしむるに至るのである。この知識の明を昧ますを愚痴の煩惱と云ふ、愚痴なる

を露はし秋には自づと秋聲を送る。柳に在りては自から綠の色を保たしめ、花と現はるれば自から紅の裝をなさしむ。斯くて千秋萬歳變ることなく亂るゝことがない。これ宇宙自然の大智德であります。

恩德と云ふのは恩惠である。宇宙自然についていへば、その麗はしい感情がそれである。これあるがために、日は長へに光と熱とを與へ、月は長へに輝きを分ち、水は物を濕ほし、風は新鮮なる空氣を傳へ、天は上にあつて覆ひ、地は下にあつて載せ、四時循環して百物生育す。動物は植物に養はれ、植物は動物に養はれ、山澤氣通じ、水火相扶け、鳥は花間に戯れ、花は鳥を得て彌々其の美を添ふ。天地自然の大感情、大恩惠は、森羅萬象の間に充滿して暫くも間斷あることは無いではないか。

以上の三大妙德は佛の三德であり、宇宙の三大德であり、宇宙の大精神であつて、此の大精神は古今に通じ東西に渉りて決して僞りも無く過りも無い。斷德には微塵の私なく、智德には寸毫の謬りなく、恩德には露程の偏頗がない。此の無私、無謬、無偏にして公明正大なる大德は萬物化育の源泉にして成佛作祖の根柢である。吾人も亦た斯くの如くに私なく、斯くの如くに謬りなく、斯くの如くに偏頗なきことを得るならば、此の身此のまゝが大聖人である、佛である、神である。然し吾人凡夫の悲しさには一時は志を發して道に進み、此の妙德の幾分を占取することを得ても、動もすれば怠慢不信の爲めに半途にして失却したがつてならぬ。宇宙は恒久不變である。吾人も亦た常住不斷に此の德を修むるに非ざれば、天

であり、恩徳は大感情である。
此の中、斷徳とは何であるか、即ち大果斷の力で、宇宙の大意志力、即ち威力に相當する。世に宇宙の威力ほど廣大勇猛なるものは無い。例へば大地震であるとか大雷雨であるとか、又は大暑であるとか大寒であるとかいふものゝその威力は實に偉大である。或は一夜にして山を築き或は一朝にして島を沒す、是の如き萬般の施爲、萬差の作用は全く他の拮抗を許さゞるものがある。而してこの大威力は、人間の一箇一箇の私的の立場より言はゞ恐ろしとも見え苦しみとも見えるのであるが、宇宙そのものから言へばこの大威力こそはすべての生々化々の根源である。これが即ち佛の斷徳である。春風一たび吹き來ると梅櫻桃李珠を聯ね、其の美しさ、麗しさ、人は何時までも春にてあれと憬れて居るに拘らず、三日見ぬ間に泥土に塗れて見る影もなからしむ。或はまた秋風地上に滿つる時、千山萬峰骨立して紅葉錦を織り、滿目荒寥何とはなしに寂寞の相を現はれしむ。これ何れも宇宙の大意志、佛の斷徳の作用であつて、此の間には寸毫の私を容れぬ。また纖塵も躊躇する所が無い。

智徳といふは宇宙自然の徳で、公明正大なる大知識即ち天道である。天道は善に福し、惡に禍し、因果の道理は歷然として私なく、造惡の者は墮ち修善の者は昇る。積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり、毫釐も差ふこと無し。是れ豈に大智慧の致す所にあらざらんや。加之、水は流れて自から卑きに就きて其の相を違へず、火は燃えて自から高きに上りて其の用を過たぬ。春には自然に春色

佛の三德と宇宙の三德

佛の三德は即ちこれ宇宙の三德なり

佛敎の經典を拜覽すると、佛の御德を三種に分けて說いてある。佛は宇宙の大道を徹證したまへる御方である。宇宙の大道の體現者である。されば佛の三德とはつまり宇宙の三德である、宇宙の大精神の顯現である。佛の三德と宇宙の三德を對照すれば、左の如くになる。

三德	斷德	宇宙の大意志	宇宙の大精神
	智德	宇宙の大知識	
	恩德	宇宙の大感情	

宇宙の三德として大意志・大知識・大感情をあげたのは、人間の立場より宇宙の大精神を推定して說明したものである。宇宙には大精神があるが、是を人格的に考究すればやはり吾人々類の如くに智情意の三方面を具して居るといふべきである。而して佛の三德の一なる斷德は宇宙の大意志である。知德は大知識

る。此の時本當の妙用を現はす。卽ち寂靜の禪心に返照した時眞の活動を起す、これが慈悲とも孝順ともなるのである。眞理は元來一體にして差別は無いが、其の間自づから一面には寂靜の體を具へ、一面には活動の用を有す。而して此の兩面は畢竟じて一體である。人も亦た是の如く、靜と動との兩面あること、時に晝夜あり節に春秋あるが如し、故に大なる活動は必ず大なる寂靜より生じ、大なる寂靜は必ず大なる活動を發するものである。

併し、斯く說明すると動と靜との間多少の隔てがある樣に見えるが、眞個の活動は自づと其の中に眞個の寂靜を含んで居り、眞個の寂靜は云はずして其の中に眞個の活動を持て居る。彼の王陽明の云ふ『動中に靜を得、靜中に動を得る』は此處の消息を漏らしたものである。併し、眞の禪的生活は更に動靜の二相をも超越して自由自在の作用をするものである。是を『木人方に歌ひ、石女立て舞ふ』とも稱す。禪の生活は此處まで到らなくてはならぬ。

坐斷して、宇宙の妙體に融合せるところである。然れども、此の妙體の中に自から萬化萬用すべき機微を有して居る、これ即ち禪機である。此の禪機あるが爲めに自由無礙に種々の妙用を現はす。それが禪用である。これがまた天地自然、萬物各々に具つてゐる。例せば此處にコップがある。コップはコップそれ自身の面目を保ち、此の一個のコップの中に宇宙の妙理を悉く有して居る道理がある。即ち禪心を有してゐるのである。而してこの中に自づと水を入れて之を飲むことが出來るといふ能力を持つて居る、これが禪機である。禪機であるがゆゑに一たび水瓶の水を注げば必ず其の能力を現はし、また一たび手に捧ぐれば忽ち人をして自在に水を飲ましむる作用を現はす禪用がある。また此のテーブルの如き、テーブルの全體が天地の妙理を含藏して餘す所が無い。即ちテーブル其の物が直に一小天地で禪心の獨立である。此のテーブルが物を載せるといふ無心無私なる禪機を有して居る。而してその禪機が働いてコップでも盆でも自在に載せるといふ禪用が現はれるのである。

されば吾人の一擧手一投足も、禪心禪機の根柢より活動するに非ざれば眞の妙用といふ事は出來ぬ。根なし草の波間に漂ふ如く更に禪心の根柢なき時は、生死去來も醉夢と一般で何等の意味も無きことになる。是を凡夫の境界と稱するのである。靜的なる禪心より動的禪用を現はせば、造次顚沛も宇宙の活動、佛祖の妙用と云ふことが出來るのである。この動靜の二つが主と爲り賓と爲りて互に相離れぬ處に非常な面白味を有つて來る。眞理は活物である。吾人が端坐一番して私欲私情を放下する時、眞理と一枚にな

は無い。然るに人情の盲目的なるために正智が之れに伴ふこと無くして、動もすると此の至正公平の大理法を曲げ、私心私情を以て事を行ふから、毫釐の差が天地の隔てを生じて、平等眞如の佛界も忽ち變じて五濁煩惱の魔界となり、親子兄弟互に反目し、夫婦朋友互に怨恨し、遂に家庭の風波が起り社會の秩序が亂れ、暴動や戰爭をも見る樣になるのである。その他社會百般の不良不善なる出來事を調べると、その動機は皆んなこの私心私情が角を出したところにあるのだ。禪の生活は此の私心の角を自然に矯めて、否、矯めんと欲せずして任運に角が無くなつて、行住坐臥擧手投足が自然の大理法と一致して行く處にあるのである。彼の孔夫子が『七十にして心の欲するところに從つて矩を踰えず』と云はれたは禪の生活に注脚を下したも同然である。『任運流入薩婆若海』とは是の事です。佛祖の慈悲、誓願、神通、光明も皆な禪の生活ならざるは無い。

話の順序として、禪の生活を今一層明かならしんために、自然と人生との關係を述べて見よう。

自然の大理法を禪者の生活に當て嵌めて見ると次の如くである。

禪者の生活	禪心	不動	體	自然の理法
	禪機	靜中有動	相	
	禪用	動	用	

禪心とは禪の本位、心の本體にて不動着の當體である。所謂不思善不意惡の正當時、迷悟是非の葛藤を

し、禪の根柢より活動するのであるから、終日說て口に過なく、終日行うて身に咎なく、終日思うて心に罪なし。換言すれば其の一言一行の上に決して私心がない。故に自ら天地の道理に合體する。依つて同じ仕事をしながらも、そのする事なす事がそつくり其の儘、諸佛の大法輪を轉じ諸佛の大光明を放ち諸佛の大威德を現ずることが出來る。本業瓔珞經の中には

理に隨順するを善と云ひ、理に乖背するを惡といふ

とある。無心にして天地自然の理に隨順する、これが正しく禪の生活である。

天地自然の理とは如何なるものかといふに、宇宙に遍在して十方古今も皆な此の理に包容せられざるは無い。而して其の理たるや平等にして絕對なるも、能く萬物を化し萬用を起す。是を吾人の上に就て見る時は、即ち一點の私欲なき心、平等無差別の心が全く此の理の全體を現はして居るのである。而して此の天地自然の理は宇宙間に周遍せるを以て、天地萬象の凡べての物に備はつて居る。一莖の百合の花すら能くソロモンの榮華を物語る如く、牆壁瓦礫皆な此の理を有せざるはない。而して大虛空の理も一微塵の理も大小廣狹の差は無い。一塵一芥と雖も其の理を究むれば、其のまゝ無限絕對である。此の理は生滅の法に非ず、故に萬物亦た常住なり。此の理は生々化々の德を有す、故に萬物各々生々化々の德を現はす。

是を人間界の上から云へば、忠ともなり、孝ともなり、慈悲ともなり報恩ともなる。故に子の孝、親の慈、夫婦の和、朋友の信を始め、家庭の上、社會の上に生起する人事上の一々、盡く此の理の存せざる處

目の脱體現成である。東坡は此處に端なくも氣が付いて見ると、山の色も佛の清淨身、溪の聲も佛の大説法と徹證したのである。否佛の清淨身が山相を現じ峯相を現じ、佛の廣長舌が溪聲を轉じ風聲を轉じたとも感じたであらう。觀來れば天地は實に無限大の趣味、無盡藏の風流である。彼れが悟後の詩に、

盧山烟雨浙江潮　未レ到千般恨不レ消　到得還來無二別事一　盧山烟雨浙江潮

と是れが痒處を搔き得たる活句である。

任運にして薩婆若の海に入る

所謂悟も此處まで來なくては眞の妙用は現はれぬ。何か悟とか禪とか云ふ一種の臭味のある中は未だしである。修行が此の無臭無味の處にまで到つて、これより始めて實際の上に圓滿なる活用を現はすことが出來る。これが眞個禪の生活といふべきである。禪的生活が無礙自在を得るに至れば、家庭上に、社會上に、教育上に、法律上に、實業上、工藝上、何れに應用しても盡く佛陀の神通と一如となる。

さればとて別に異つた事をするのではない。大悟底の人と雖も、花を觀ればその美を感じ、月を觀ればその清きを感ず。飢え來れば飯を喫し、困じ來れば眠りに就く、別に奇特玄妙あるのではない。唯だ第二念に墮し妄想妄見を生ずることがない。見聞覺知盡く道に通じ德を明らかにし毫末の迷執も無い。是を正法に不思議なしというて、悟後の作用というても素より變つた珍らしい藝能の有るべきはずがない。併

中に縛られてゐる中は佛法の主たる能はず、世法に着する間は世法を活用することは出來ぬ。更らに其の處を飛び出して悟邊にも滯ほらず、世法佛法にも罣礙せられざる處に達するでなければ駄目である。

併し、それのみでは復た未だ了事底の人とは云はれぬ。廬山の外に出て其の全體を見了つた後、更に廬山に却來して見よ。峯は峯、嶺は嶺、溪は溪、谷は谷、個々特種の風光を弄した千態萬狀、差別の當相が一々に天地の精氣を蘊み宇宙の妙理を收めて居ることが眞に觀破される。依つて東坡は更らに洞山の常聰禪師に參得して研究の歩を進め、遂に大に得るところがあつたのである。歸途驢に跨つて溪山の間を過ぎつゝも、殆ど鞍上の人たることを忘れて、自己の安心問題に向つて工夫を下しながらやつて來ると、左は青山雲を帶び、右は綠水烟を含み、山色溪聲兩ながら塵寰の外に天眞の美を呈して居るやうな絕勝の處に到着し、この無限の妙趣に對して忽然として悟得した。其の時の詩が有名なる左の詩である。

溪聲便是廣長舌　山色豈非淸淨身　夜來八萬四千偈　他日如何擧似人

佛法とか眞理とかいうて、今までに大變にむつかしく思うてこれを遠くに求めたが、觀來たれば宇宙はすべて是れ屋裏の大經卷である。花咲き鳥謳ふ、山の高き水の淸き、峰に舞ふ雲、谷を護る林、見るとして皆佛法ならざるは無い。松吹く風も說法度生の聲である。柳を染む色も觀音微妙の相である。天地世界は實に是れ莊嚴なる大殿堂である。其の中の雨竹風松盡く如是經の露現である。牆壁瓦礫も本來面

て我見の巣窟に留まつて居る中は、眞に佛法その物の價値は分るものではない。

日本に於ても明治十五六年頃までは、盛んに西洋を排斥したり耶蘇教を攻撃するを以て能事とした時代もある。而して、攻撃しつゝ耶蘇教の教理も十分に調査せず、西洋の特點も知らず、無暗に惡るく言うて居つた者もあつた。今から考へると甚だ見當違ひして居たことが澤山ある。佛教は元來極めて寛容なる精神に於て發達して居る。支那でも儒者は頻りに佛教を攻撃したが、佛者は寧ろ儒教を導いて我が教理の一階級に加へた程である。日本に於ても神道や儒者は佛教を敵視したが、佛教は常に此等の長處を採容して我が友教として取扱かつて居る。耶蘇教にも長處あり短處もある。其の長處を取りて其の短處を誡しむる樣にするのが寧ろ佛陀の本懷ではあるまいか。

今日、禪學々々とやかましく云うて居つても、其れに固執して一種の偏僻なる禪病を特發し、少しばかり參禪した事や坐禪した事が鼻の先に付いて居るやうでは、眞個の禪味の解るものでない。世法と佛法とを一如ならしめて、我が手脚の上に一大藏經を運用するのが眞箇の禪機である。是ぞ吾人本來の面目であるのである。此の本來の面目を現はさんとするならば、先づ以て諸縁を抛捨し萬事を休息し、妄想の根柢を打破し徹底身心脱落して見よ。然らば直に脱落身心を活現し活用し活運轉する事を得ん。

東坡が廬山の風景に對する所懷を見ると、差別門を透得するの機鋒を有するも未だ廬山の主人公たる能はず、故に尙ほ十成と云ふ事は出來ぬ。廬山の中に居つては勿論廬山の全面目が分りやうが無い。佛法の

て全知全能に誇らんとする。學問が次第に分科して專門的に研究するといふ事は甚だ結構なわけではあるが、今日のやうに種々混亂しても困つた者である。哲學上の問題から見ても、或は物心一元論を唱へ、或は宇宙二元論を唱ふる。各〻不同であるから、全體より觀察するならば其の主張が互に矛盾して居る樣に見ゆる。併し、眞理は決して矛盾すべきはずのものでない。其の根元を究むれば何れも相當の眞理があつて、其の間必ず統一する中心があるに相違ない。左すれば心的解釋も物的斷案も絕對の眞理では決してない、所謂部分的の眞理である。盧山で云ふ峯たり嶺たりである、盧山の眞面目でない。さればとて盧山の外のものでもない。故に眞の絕對的の大眞理を悟却せんとならば、更らに差別的圈内より脫出して、高く眼を着けて之を見んければならぬ。

佛敎とても見る人の眼鏡に依つて、或は念佛宗が佛敎の極致とも、秘密宗が佛敎の頂上とも見られやう。遠近高低一も同じき事はない。ちやうど群盲模象のやうに色々に見られやう。自分流義の眼鏡をかけて佛敎を眺めて居る中は、到底佛法の全體を見る事は出來ぬのみならず、自宗の本領すら本當に明らめる事は出來ぬ。青い眼鏡を掛くれば天地皆な青し、赤き眼鏡を掛くれば萬物盡く赤し、妄想の色眼鏡は能く吾人をして厭世的たらしめ、また樂天的たらしむ。されど法の實相は、決して厭ふべきにあらず、また樂しみに耽るべきではない。故に佛法には色眼鏡といふ我見は大の禁物である。吾れは佛法信者なりと云うて沒常識の動作に涉つたり、或は何宗の信者なりとて徒らに自讃毀他を恣にし、頑固に其の物に執し

は宋代に於ける屈指の大學者である。夙に禪門に歸依し、其の一生を通じて佛法を信仰せられた。佛印禪師に參じて後更に熱心に坐禪辨道を勵み、常に袈裟を搭けて坐禪をなし、或は佛を禮し、或は經を讀むで最も至心に法を求められた。

されど禪の堂奥に至つては容易に徹底する事が出來なんだと見え、それには非常に雪辛霜苦を嘗められたと云ふ事である。居士ある時、彼の有名なる廬山に遊び、其の絶景に感動して詩を作つた。

横看成ㇾ嶺側成ㇾ峰　遠近高低無二一同一　不ㇾ識廬山眞面目　只緣三身在二此山中一

廬山と云ふ山は無數の峯巒より成り、これが一つになり居るのを總稱して廬山と云うたのである。故に見る人の立脚地如何に依つて、或は峯と見え、或は嶺と見え、遠近高低、各々其の趣を異にし其の姿を別にして千態萬狀である。其の千態萬狀なる景色の一々が一として廬山ならざるは無い。併して、一局部を見るから不同なれども、全體を見れば只一箇の廬山である。若し一箇の廬山たる全面目を見んと要せば山を離れて見ねばならぬ。人世を觀るには人世を解脱せねばならぬ。生死の實相を了ぜんには生死を超越せねばならぬものである。

今日世間の思想を一瞥すると、皆んな人生の眞面目を承知してゐない觀がある。倫理學者は倫理を以て人生問題を解決しようとする、教育者は教育學を以て凡てを説明しようとする、其の他社會學者、法律學者も各々其の學を以て人生を盡さうとして居る。實以て種々雜多千種萬樣で、各々の自家の眞理を主張し

禪的生活の眞の面目

東坡居士の親言

さて禪を修し禪に參じた曉に於ける人の生活、いはゞ禪の應用とでもいふべき生活は何んなものであるかといふと、決して一定の軌轍があるわけでもない。東湧西沒、逆順縱横、把放與奪すべて自由自在であるべきはずのものである。前にあるかとすれば忽焉として後にあり、右に在るかとすれば忽爾として左に在りと云ふ工合に、或時は向上、或時は向下、或時は天は是れ天、地は是れ地、或時は天も高きに非ず、地も卑きに非ずと云ふ様に、機に臨み變に應じて受用無礙なるを以て、一定の格則があらうはずが無い。併し格則なしと云ふと雖も、無方針と云ふには非ず、其の間脈絡貫通せるものあるは勿論である。故に、今日吾人がこれを說明するに當つては、軌轍なき所に軌轍を設け、以つてその趣を概觀するは決して無用の辨ではあるまいと思ふ。

僧侶以外に於ける禪的修養の積める人を思ふとき、先づ第一に想起するのが彼の東坡居士である。居士

沈を生ず、有心は凡夫に墮し、無心は二乘に墮つ。有心は生に迷ひ、無心は死に沈む。そこで不思量底を思量するのである。

　不思量底とは世人の所謂不可知的とか不思議界とか云ふものではない。見聞覺知そのまゝ不思量底である。山川草木そのまゝ不思量である。それを如何に思量するかといふと即ち非思量である。思量の當體に迷悟凡聖の纏累なきを非思量といふ。故に非思量とは思量せずといふにあらずして非の思量である。解脫の思量である。先づ以て一切の妄想を截斷するを要す。『坐禪用心記』には

　直に須らく煩惱を破斷して菩提を親證すべし

と示されてある。煩惱を斷ずると云うても、無心になるというても、心をそこに勞したのでは妄想である、煩惱の上塗となる、此のところ工夫一段を要する。

と示されてあります。

昔、汾陽和尚の會下の一僧が、和尚から趙州狗子の話の公案を授かつて眞劍に工夫して居ると、何時しか眼前へ大きな狗子が現れて來て、如何しても去らぬ。依つて其の僧はその事を和尚に告げて指導を仰ぐと、和尚は『今度狗子が來たら、一つ其の口の中へ汝の頭を突込んでやれ』と云はれた。僧が坐禪をしてゐると、前と同じ狗子が現はれて大口を開いて居る。『此の時だ』と僧は勢ひ込んで、グツと頭を狗の口の中へ突込んだ。するとガチンと音高く頭にぶつつかつたものがある。すわと思ふ途端、氣がついて見ると、そは狗でもなんでもなくて、函櫃（坐禪人の前に置いてある函）の中に頭を突つ込んだのであつたと云ふ話がある。顧ふにこれ、この僧の氣息が充分に調つて居なかつたから、こんな妄想を描いたのである。氣息を調へずして工夫にばかり心を勞すると、動もすれば氣違じみても來るものである。學人も師家も此の邊に充分の注意を拂はねばならぬ。

次に調心法である。身體よりも、呼吸よりも、心を調へることが最も大切であることは云ふまでもない。眞に心が調へられたならば、坐禪の目的が達せられたというても宜いのである。然らば如何に調心するかといふに、高祖大師は

箇の不思量底を思慮せよ、不思量底如何んが思慮せん、非思量これ即ち坐禪の要術なり

と示されてある。吾人が端坐の當體には、謂ゆる有心と無心とを超越する。有心は散亂を生じ無心は昏

次に調息といふ事がまた甚だ大切なことである。第一、吾々が坐禪つて居る時には心を氣海丹田に安じなくてはならぬ。氣海丹田とは、臍の下二三寸の間を云ふ。心を落ち着けて下腹に力を入れ、下腹を前側へ突き出す樣な心持になりて、精神を安靜ならしむる時は、自然に呼吸が調うて來る。呼吸は吾人の生命の繫る所であるから、調身も調心も、この呼吸とは密接の關係あるのである。若し呼吸がうまく調うて居ないと、身體も精神も落ち着くことが出來ぬ。『坐禪用心記』の中に

> 坐禪の時、身或は熱するが如く或は寒きが如く、或は澁るが如く、或は滑らかなるが如く、或は堅きが如く、或は柔らかなるが如く、或は重きが如く、或は輕きが如く、或は驚覺するが如きは、皆な息の調のはざるなり

とある。斯く身體に種々の不思議なる感觸を生ずるのも息の不調なるに依る。其の他、身體が或は空に浮んでる樣な氣がしたり、または地に沈む樣な氣がしたり、或は心の明るくなつたり暗くなつたり、または腹の中の臟腑までも見える樣な心持がしたり、世界中が見える樣な感じがしたり、或は見神見佛などと云うて佛や菩薩其の外色々の影法師を見るのも、總て息が調うて居らないからであるぞと仰せられてある。故に調息の方法は、坐つた時、暫く口を開き張りて欠氣一息し、それより心靜かに息をなして漸々調ふべきである。『坐禪儀』の中に

> 鼻息微かに通じ、身相既に調うて、欠氣一息し、左右に搖振して、兀々として坐定せよ

この中第一の調身とは、身體を調整する事で、即ち坐法中に於ける主たる威儀です。今『坐禪儀』の中の文に依つてこれを示さば

或は結跏趺坐、或は半跏趺坐、謂く結跏趺坐は、先づ右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を以て右の脛の上に安ず、半跏趺坐はたゞ左の足を以て右の脛を壓すなり（安足法）

寛るく衣帶を繋けて齊整ならしむべし（衣帶法）

次に右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩の大拇指向ひて相拄ふ（安手法）

卽ち正身端坐して、左に側ち右に傾き、前に躬り、後に仰ぐことを得ざれ、耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめん事を要す（正身端坐法）

舌は上の顎に掛けて唇齒相着け（口を調ふるの法）

眼は須らく常に開くべし（眼を調ふるの法）

此の外に、坐禪に要する物としては、坐物と蒲團がいる。支那では僧堂が土間であるから、坐禪するのに、坐物といつて藁で作つた圓坐のごときものを敷き、その上に蒲團を敷くのである。が、我が國の如く疊を敷てある處では坐物を用ゐなくも妨げない。

蒲團は是非入用である。蒲團といつても坐禪用の蒲團で、これを坐蒲といつてゐる。直徑一尺二寸、周圍三尺六寸の圓き蒲團である。お尻を半分かけて敷く。卽ち後半身を坐蒲の上に安ずるのである。

とある。我れと我が志氣を以て一切の妄念妄想を截斷して、悟らうとか佛にならうとかいふ思慮分別を起さず、全身に力を込めて徹底靜坐する事が必要であります。

或る人が坐禪をしながら色々なことを考へて居つたが、さつぱり工夫がつかぬ。併し、何かうまいことがあるだらうと思うて、妄想袋の底を叩いて考へたが大したこともない。その中に、ふと五年前に金を人に貸したといふ事を思ひだしたと云ふ話があるが、そんな工夫をしてゐたのでは眞個の坐禪は出來るものではない。また下手に公案などを工夫しだすと、妄想袋の展開に了る結果を見ることがある。注意すべきことである。

そこで更らに證悟の境地を師家に檢點にしてもらふと云ふことが大切である。所謂是處は印可し不是處は剪却してもらふのである。でないと、動もすれば禪病に陷つて悟でもないものを悟と思ひ、瓦を以て玉と爲す樣なことになり、二進も三進もならぬ鬼窟裡に身を投ずることゝなる。

坐禪の心得三箇條

次は愈々坐禪に取掛つてからの要心である。『禪經』の中には五調と云ふ事が出て居る。其の中、前の二つは調食と調眠である。これは五具足の內にもある。殘の三調といふのは調身・調息・調心である。前の五具足は間接の方法で、この三調は卽ち直接の方法であります。

吾々を益すること最も多いのである。

併し、以上は正則の上から云うたので、少し其の人が出來てさへ居るならば、本より時・處・緣を擇ぶに非ず、或は電車・腕車の中でも汽車・汽船の中でも、步行しながらでも床の中でも差支へはない。眞の坐禪は『行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然』まで到らなくてはならぬのである。こゝを中峯禪師は

> 蓋し、一念不動を坐と爲し、萬法歸源を禪と爲す、或は云く、戒定は是れ坐の義、智慧は卽ち禪の義、情識の詮すべきに非ず、豈に動靜の能く間つるものならんや、故に知る、四威儀を離れずして、而して四威儀に卽せず

と云うてゐられる。併し、多くの初心の人には到底出來ない相談であるから、やはり正式に、なるべく靜閑の場所を擇んで、暫時なりとも眞面目に坐はり込むと云ふ事は大切なことであります。

そこで私どもの實驗によると、初めの中は、坐つて居るととかく色々の分別や妄念が起つてならぬ。是れを沈めようと思へば思ふほど却て心が散亂し動搖して困るものである。然らされば反對に、昏沈といふて氣が昏くなる樣なことになる。散亂も昏沈も兩頭共に不是で、坐禪しても十分の功を奏することが出來ぬ。故に『坐禪儀』に

> 諸緣を放捨し、萬事を休息し、善惡を思はず、是非を管することなかれ、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止めて、作佛をも圖ることなかれ

次には坐禪する場所の問題である。これは成るべく靜かな場所を撰ぶがいゝことは云ふもでもない。吾人凡夫の淺間しさは境に依つて心を生ず、春聲に曳かるれば春の心を生じ、秋色に逢うては秋情を動かすは免るべからざるところである。依つて雜鬧の巷にてはなかく靜坐の工夫は困難である。佛も『遺教經』の中に

將に憒閙を離れて獨處に閒居すべし

と示され『坐禪儀』の中にも『靜室宜しく』と適切に示されてある。

併しながら、今日、專門家にあらざる限りは、さう思ふやうに靜處のみで禪を修することが出來ぬ。また人に依つては東京・大阪・京都と云ふやうな熱鬧なる市中に居つて、到底暫くも靜處に安坐する事の出來ぬ場合もある。

私の實驗上から考へると、まあ靜處や靜室を得られる人は好し、若しそれが不可能の人ならば、佛檀の前で坐禪るのが一番宜いやうに思ふ。佛檀は佛・法・僧の三寶を奉安してある所であり、また先祖の靈廟でもある。よし其の家が市中雜鬧の巷に圍るゝにせよ、此の佛檀に向つた時には、吾人の精神は自づと鎭靜に歸して、散亂を防がんと欲せざるも獨りでに散亂が息むものである。人間が一家の中で最も眞面目になる處は佛檀の前である。若し佛檀でなければ、奧まりたる座敷、または書齋等でも宜い。それらの場處の無き人は何處でも妨げ無い。されど、信念内に發せされば識神が安靜とならぬ。佛間は此の點に於て

坐禪は精神を安靜ならしむるを首となす。身にも口にも犯すところなければ、心は自ら平安なるものである。聊かでも心に疚しき處あれば、苦悶頻りに生じて、到底安詳として坐禪に住する事は出來ぬ。依つて坐禪するには先づ佛の戒律を持つて、何よりも精神を平安ならしむるが大切である。持戒清淨でなくてはならぬ。

次のは身體攝理の問題である。身體を裨護するには、第一に缺くべからざるは衣と食とである。衣服は熱からず寒からざるを要す。食物は分に應じて節するが宜い。坐禪儀の中にも『飮食節あり』とある。餘り食ひ過ぎても行かぬ。また斷食を行る者もあるが、是れも非常手段であつて穩健なる修行の方法ではない。『衣足らず、食足らず、睡眠足らず、これを三不足と云ふ』というて、坐禪に妨げありと太祖大師も申されてゐる。

衣食の節制は只だ坐禪の上ばかりでなく、今日の學生が學問する上に就いても同じ事である。この衣と食と睡眠との三者は、吾人の身體を養ふ所以の方法で、修行と云ふ上から云うても大切なる條件である。此の中何れ一つを缺いても不可い。

だが、過不及なきを旨とす。元來、睡眠は身體の精力を養ふ一種の食物である。睡るのは眠る爲めでは無く働く爲めである。然るに唯だ倦怠の心を以て妄りに睡眠を貪りては、そは休息では無い、一種の煩惱である。衣服についても之れと同様に、其の本旨に反せぬ樣にせねばならぬ。

坐禪の實修法とその心得

坐禪の準備的心得五箇條

坐禪の方法形式は高祖大師の『普勸坐禪儀』や、太祖大師の『坐禪用心記』の中に詳しく示してあるから、大體はそれを拜讀すれば分りますが、今は更に他の禪經を參考として坐禪の實修法を說明しようと思ひます。

『禪經』等の中に五緣五事といふ指南がある。五緣はまた五具足ともいふ。要するに、坐禪の實修についての準備的心得五箇をあげたものである。

持戒淸淨・衣食具足・閑居靜處・息諸緣務・得善知識

第一の持戒淸淨とは、佛の戒律を持ちて身・口・意の三業を淸淨にすることである。佛の戒律は非を防ぎ惡を止むるをその本旨となす。人間は些少なりとも非行あれば精神に不安を致すものである。よく佛の戒律を持つて、非を防ぎ惡を制してゐれば心は自ら安靜となる。

目を醒まして聞いてゐると、住職は小僧と一緒に御經を誦んで居る。一口誦んでは大きな聲で小僧を叱りつけ、また一口誦んでは小僧に小言を云ふ。心經一卷の中に何返怒鳴りだしたか解らぬ。到頭御經の纏まりがつかなんだ。この住職の精神は奇麗なもので、小僧を叱るのも全く小僧の爲めと思ふ親切より出で居るのであるが、今の教育法に照して見たならば、其の親切が少しも役に立たぬやうに思はれた。これなどは禪機の一隅に滯つて禪心の全局に通ぜぬ爲めである。寔に是れ行解相應といふことは難きものである。

といふのでなければならぬ。禪では實行を重ずると云ふよりも、寧ろ實行そのものゝ上に禪を擧起すると云ふのでなければならぬのである。

臨濟宗に於ても、勿論、實行を重んせぬと云ふのではない。臨濟宗も亦た同じく實踐的禪風を貴ぶのではあるが、その趣が、我は綿密を旨とし、彼は機鋒を主として居るといふ違ひがある。

例せば此處に一人の放蕩なる禪僧があるとせんに、曹洞宗式ならば涙を流して之を誡しめ、是をして參究し去らしむる樣にするが、臨濟風であると、先づ以て大喝一聲頂上より三十棒を與ふると云ふ樣な遣り口である。尤も曹洞宗にも通幻禪師等の孤危嶮峻なる宗匠もあり、臨濟宗にも仙崖和尚等の慈悲徹悃なる師家もあれば、此の二宗を全く別々のものと見てはならぬのである。

前述の如く、中世以後、宗風漸く亂れ、現代の如きは甚だ無規律になつて、宗門の命脈たる打坐その者の如きも衰頽の極に達して來た。此の點に至ると臨濟にはまだ〳〵專門道場の見るべきものが多い樣である。然し近年に至りて、これではならんと云うて禪風の復興に努めて居る人があるから、追々其の特色を發揮するに至るであらう。

私は僧侶と居士とを問はず、一致協同して禪風の擧揚に盡されんことを望んで止まぬのである。私の知つて居る人で、今は某縣に住職して居らるゝが、以前は叢林育ちの人である。自分は悟つた〳〵と云ちて御自慢をして居らるゝが、この人が非常な癇癪持であつて、私が曾て其の寺に泊つた時に、朝早く

までもなく『大清規』、『正法眼藏』等を見らるれば直ぐ分る。太祖大師も亦た『總持清規』等に於て、日分・月分・年分の行事を懇篤に示されてある。

私どもは平常言葉が粗末で恐入る次第であるが、高祖大師は庫院に於ける言語の使ひ方まで御示し下されて、米を搗くにも、米を搗けと云ふべからず、米は生命の親であるから、中心尊敬を拂はねばならぬ。依て『米白め參らせよ』と云ふべし。米を洗ふことをば『淨米し參らせよ』と申すべし、汁を煮ることをば『御汁の物爲參らせよ』と申すべしなどと仰せられてあります。

今時の青年の人たちは、或は迂遠とか頑固とかいうて笑ふかも知れんが、而し、古人が其の知見に於ては、佛來らば佛を呵し祖來らば祖を打たんと云ふ程の、最も氣高い壁立萬仭の見識を有つて居らるゝにも拘はらず、其の威儀作法は最も嚴肅を極め、如何なる些細の事にても忽諸に付せられず、それを以て直ちに大乘佛法の德用とせられたことは、誠に欽仰すべきことではないか。特に曹洞禪が此の點を特色として大に發展したと云ふことは、佛法の華ともいふべきもので、洵に法界の大莊嚴である。

曹洞宗にては、悟りとか三昧とか云ふことゝ、平生の行持卽ち實地の行爲とを決して別物に見ない。行ずれば證その中に在り證すれば行その中に現はるで、吾々の日々の行事がそのまゝ悟りであり三昧であらねばならぬ。一擧手一投足が皆なこれ禪となり佛法となつて現はれねばならぬ。出ては君臣の和となり、入りては父子の情となり、家庭の樂となり、朋友の信となり、世の木鐸となり、百世の師表となる

儀も八萬の細行も皆なこの禪に綜括すると云ふでなければ、實行的の佛法とは言はれぬ。禪門で平常心是道と云ふも全く實行的佛法の標示である。曹洞宗では常に之を『威儀即佛法、作法是宗旨』と云うて居る。併し、作法や威儀に束縛されては偏固なる律僧と一般であるから、禪心に契はざることは勿論である。

天地萬物、皆な整然たる法則を守らざるは無い。柳は綠、花は紅、松は直く棘は曲れり、盡く是れ天眞の妙法である。吾人にも亦た其の日常の行動に於て、依るべき整然たる法則がある。人に對するには對するの法あり、人と語るには語るの法がある。行住には行住の規律があり、坐臥には坐臥の道がある。然るに、この作法常規を度外視して、妄りに突飛なる作法を貴ぶの風を生じたのが晩宋以來の禪弊である。

熱い時には熱いのがあたりまへ、寒い時には何人も寒い味は同じであるべきはずである。然るを、少數の古人が臨時の活作略として行ぜられたる施設を、沐猴冠的に模擬するのは誠に笑ふべく憐むべきである。人の死を見ても悲しまず、人の苦痛を見ても憐れまず、長上に對して敬ふ態度なく、愚痴の輩を見れば惡罵を逞うするが如きは、決して中正を得たる者と言はれぬ。

高祖大師は『正法眼藏』や『大清規』の中に於て、行持の心得及び法則の事を詳しく示されてある。柄杓の持ちかたから、雪隱へ行く時の儀式から、米を洗ひ菜を擇ぶ時の心得まで、細大漏さず叮嚀親切、至れり盡せりと云ふ風に、まるで慈母が子供に教へるやうに悃々と教訓せられてある。こゝで一々說明する

と云ふ評判が立た爲めに、斯くも大勢に心配いを掛け、少かに一人一飯の供養にそれほど人手を煩はしたかと思へば實に勿體ない、松蕈好きなどゝ思はるゝは佛弟子の耻である、元來、佛弟子たる者は佛法が好きじやと云はるゝも慚づべきことであるのに、松蕈好きなどゝいふところより、斯くも人に無益な苦勞をさせたのは、あゝ實に濟まなかつた』と云うて、其の後は一切松蕈を食することを息められたと云ふ話がある。是れ正しく道に親切なる上人の志操より出でたる眞の行持である。

曹洞宗では行持の嚴肅を貴ぶ。嚴肅と云ふよりも或は綿密と云ふ熟字の方が善いかも知れん。行持と云ふは道の實行である。その實行を重んずると云ふのが曹洞禪の特色なり精神なりである。

『行解相應是を祖師と曰ふ』とあつて、知と行とが合一するのが、禪祖の面目であるが、臨濟宗は知を重んずる風があり、曹洞宗は行を重んずる風がある。故に曹洞宗には如何なる大善知識でも、動靜大衆に一如し、衆と共に坐し衆と共に行き、衆と共に着衣し、衆と共に喫飯するのである。行の無間斷である。しかも行卽知である。『我れは了事の人なりとて、單寮を構へて、雲水の入室のみを受くる』と云ふ樣なことは決して爲ない。

元來、道の現はれが行である。平生の一擧一動が、悉く佛祖と同一の妙德妙用を現はすと云ふでなければ、縱ひ如何ほど知見が開發しても役に立たぬ。眞箇の禪機を有した人ならば任運自然に、進んでは造次顚沛も他の模範となり、退いては直にそれが禪の全機現とならねばならぬはずのものである。三千の威

今日道を明らめ禪を悟つたと云ふと、一種の出世間的なる仙人か奇人となつて、世と沒交渉になることであるかの如くに思ふ人もあるが、佛道は元來、決して左様な不自由な偏屈な者でない。「道本圓通」と云うて道は元來天地に充塞し、之れを舒ぶれば六合に瀰り、之れを捲けば芥子粒に隱る。その根本に達する時には自由自在の作用が現はれる。卽ち八面玲瓏十方通暢である。君に對しては忠と現はれ、父母に對しては孝と現はれ、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、國家にあつても、家庭にあつても燦然として光りを放ち、義勇ともなり、信義ともなり、勤儉ともなり、忠實ともなり、之くとして可ならざるは無い様になるところのものである。曹洞禪の特色は、奇人的ならず仙人的ならざるところに在る。而も、其の知見は能く道の根本に徹して綿々密々であるのであります。

彼の栂尾の明慧上人は禪僧ではないが、其の知見と云ひ行持と云ひ、確かに禪を體得して居られた様に思ふ。上人は至つて松蕈が好きであつたので、或時、信者のものが師を請待して松蕈の供養をした。其の日の御馳走が松蕈ずくめ、御平も御壺も御皿も汁の實も皆んな松蕈で、其の上御飯までが松蕈飯である。性來大好物であるから、上人は十二分に頂戴して歸山せられた。歸山して後、一人の弟子、上人に向つて云く『上人には今日は大滿足で御座いませう、上人が松蕈が御好きだと云ふところから、施主家では家内中が大層心配して、此程より献立や料理方に苦心して馳走したのであります』と申上げた。上人はこれを御聞きなされ、思はず嘆聲を發せられた。『あゝ左様であつたか、自分が松蕈が好きだなど

得の作略で、亦是れ一種の慈悲行であるけれども、一面には是れが爲め後人を誤ることも少なくない。大慧禪師等の顰に倣ふ者は、妄りに大慧の精神を忘れて其の皮相に則とり、往々にして禪門の獅蟲となる者がある。

曾て宗師家其の人が越格の見識を有して、或は拂子を拈じ或は棒を行じ、或は眉を張り或は目を怒らしたのは何れも爲人の施設手段である。若しその人ならば是れ亦た一段の轉大法輪である。が、後世其の人にあらずして徒らに樣に依て胡蘆を描き、妄りに悟に誇り會に豊かならんことを欲して、拂拳棒喝の閑手脚を弄するのは何の益にも立たぬ。却つて禪林は奇人と奇想家との製造所の樣なものとなる憾みがある。とは寧ろ禪の弊害と云ふべきである。

されば、芙蓉道楷禪師は此の禪弊をいたく嘆かれて

拈槌竪拂、東喝西棒、張眉怒目、癇病の發するが如くに相似たり

と呵嘖せられてある。古へ既に然り、況や今日に行はるゝ棒喝の禪をや。中には立派な宗師家も學人もあるには相違ないが、多くは感心の出來ぬ方である。尤も快刀亂麻を截つが如く、閃電光中に龍蛇を辨ずる底の俊逸の氣を錬磨せしむるのが禪の妙手であるから、決して棒喝的機鋒を惡いと謂ふのではない。が、唯だ金剛不動の磐上に坐して智德の光明を放出するでなければ、未だ以て禪の機用とは許されぬといふのであります。

坐禪人は常に大道を離れず、大道は坐禪人の通身に溢れ佛智は坐禪人の徧身に充つ。これが實に穩密なる知見と云ふべきものである。

曹洞宗にては古來『當今の諱を犯さず』と云うて理窟に渉らず、機鋒を露はさず、平常心是れ道なることを貴ぶのである。これを『知見の穩密』と稱したのであります。

嚴肅なる行持

曹洞禪から云ふならば、悟りといふことは、迷悟の二邊をも超越したところなるが故に、悟のことを本證と云つてゐる。機鋒に誇り知見を弄して、吾れは悟つてゐるぞと云ふなどは、實は悟つたのでなくして悟りの香氣を齅だばかりである。似ては居るが本物でない。彼の悟つた悟つたといふ連中には、着實なる行履の無いものが多い。動もすれば人を罵倒する事なぞが上手に成つて、其の境涯も一種の奇人たるに過ぎぬ。眞個の禪者は奇人ではない。智德の標準、人格の模範でなければならぬ。眞個の禪は迷悟を超越するを以て、例ひ千萬人の中に在りても、一人に背かず一人に觸れず、諸法の中に在りても、一法に迷はず一法を厭はず、背觸ともに脫落して而も應用自在なる底の活手脚がなければならぬ。

宋の晩年より禪風漸く弊害を生じ、色々な異風が行はれた。大慧禪師の如きは其の師圜悟和尚の作られた碧巖を燒いて了ふといふ奇行を敢へてした。是れ本より德山の故智に慣はれたのではない、大慧禪師獨

不思量底を思量せよ、不思量底如何が思量せん、非思量これ即ち坐禪の要術なり

と示されてある。坐禪の正當時には有心無心を超越して居る。有心なれば凡夫に墮落して六道輪廻の暗路に彷徨す、無心なれば聲聞や緣覺の如くに枯木死灰の漢となつて、何等の活用も無い事になつて了ふ。

　坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て

と大燈國師が云はれたのは、適切なる訓歌であるが、これを文字通りに解すれば間違ひとなる。往き來の人をわざ〳〵深山木に見やうとする無理がある。所謂餘計な『之乎者哉』があるから、動もすれば人生に遠かり、または社會を輕視して一偏見に落つるの恐れがある。そこで天桂禪師は更に

　坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を其まゝに見て

と訂正されました。『其の儘に見て』とは、實相に違背せざるをいふ。即ち有心とか無心とかいふことを超越して身心の束縛を解脫し、動に於ても、靜に於ても、常に大道を履踐し、吾人の本性が赫々として光明を輝かし、隨處隨時、宇宙の大眞理と契合して自由の境涯に達した消息である。この場合になつては所謂悟りにも留まらないのである。『悟跡を亡ずる』というて悟りに住まらぬのであります。

　思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はざりけり

とあるこれが坐禪の心境の極則である。

　水鳥のゆくもかへるもあとたえてされども道は忘れざりけり

團を敷き破つたといふ。その間、日一日、刻一刻に進境があつたに相違ない。十八個の蒲團を坐破したといふところから、大悟十八返と云うたのであらう。

禪の根本義からいふならば、迷を離れて悟りに入り、更にその悟りをも超越する時、そこに禪の本來の面目が現前するのである。迷悟を超越したるこの悟り、これが本當の悟りである。故に悟と云うたとて、決して客觀的に何かゞ現はれて來るものでなければ、また新しい眞理を發見いたすと云ふでもない。つまり妄想の巣窟を打破し疑惑の葛藤を截斷して、此の身心を擧げて宇宙の大道に一致したのが本當の悟りである。是を本來の面目現前とも云ふのであります。坐禪用心記に

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ

と云はれたのは正しく此の意である。禪家でいふ語に『公案悟り』とか『階子段悟り』とかいふことがある。學人接得の手段としては宜いものである。されど、これが爲めに悟りを以て恰も謎を解くことの樣に考へて居る者も少くないが、それは間違つてゐる。古人に對して相濟まぬことである。階子段悟りや公案悟りは、曹洞禪に謂ふ所の悟りに遠くして遠いのである。

元來、坐禪するのは決して悟るための手段として之をなすのでない。坐禪は迷悟の二邊を超過したる安樂の法門である。迷悟の論は門外の商量である。禪の堂奧には迷悟の音沙汰は無い、高祖大師の坐禪儀に

穩密なる知見と嚴肅なる行持

穩密なる知見

曹洞禪の特色とするところのものを茲に說明して見やうと思ふ。細かに分けたならば澤山の科條も出來やうが、予は曹洞禪の特色として

知見の穩密

行持の嚴肅

といふ二つを擧げたいと思ふ。この二つの特色は高祖大師に依つて遺憾なく發揮せられた。而して其の後も、此の特色が他門の中に嶄然頭角を露はして來たのであつたが、足利の末葉より德川時代にかけ、段々と衰頽し、遂にその光輝を失却してしまつた觀あるは誠に遺憾である。

禪は悟と云ふことを云ふが、曹洞宗で云ふ悟りとは『一時の機發』などをいふのではない。彼の雪峰は『大悟十八返小悟其數を知らず』と云つたが、一體、悟りには大悟小悟の區別階級はない。雪峰はたゞ無階級のところに階級を立てたまでのことである。雪峰禪師は拔群の修行を積み、一生の間に十八個の坐蒲

とごとくさとりとなる、故に諸佛如來をしては本地の法樂をまし覺道の莊嚴を新たにす、および十方法界三途六道の群類みなともに一時に身心明淨して大解脫地を證し、本來の面目現ずるとき諸法みな正覺を證會し萬物ともに佛身を使用して、すみやかに證會の邊際を一超して覺樹王に端坐し、一時に無等の大法輪を轉じ、究竟無爲の深般若を開演す

と、知るべし、一時の坐禪は永久の佛事にして一蒲團上の坐禪は十方法界の覺道を莊嚴することを。

また、禪は三學六度を兼ね具へてゐる。禪は三學六度の中の一部分たる禪ではない。太祖大師は『坐禪は戒定慧に干かるに非ざるも、而も此の三學を兼ねたり』と仰せられた。禪の中に戒あり定あり慧あり、布施あり持戒あり忍辱あり精進あり禪定あり智慧ありて、道として備はらざる無く德として收めざる無き佛敎の要機であり法藏である。」

る。決して念佛に束縛されては居られぬ。絶對の念佛には絶對の自己を顯現する。眞個の佛法信者はこゝまで到らなくては駄目である。卽ち佛法を忘れ自己を忘れ、信ずるものも信ぜらるゝものも打ち忘れる、これが眞個の佛法信者である。これを卽ち絶學無爲の人といふのである。

西行法師やらが住吉神社に詣でゝ

　來て見ればこゝも火宅の中なるになに住吉と人は云ふらん

と歌はれると、奧の院に聲あつて

　善し惡しと思ふ心を打ちすてゝ只何となく住めば住吉

といふ歌が聞えて來たといふ話があるが、此の善とか惡とか云ふ我他彼此待對の二見を打捨てゝ、天眞の理に契ふことが大切である。禪の要處はこゝにあるのである。

禪は佛法の全體なり

禪は吾人をして、此の身心そのまゝにて直下に佛祖大法の相續者とならしめ、大道佛法の主人公となりて、擧手投足、造次顚沛の間に自利々他の功德を發揮せしめる。

我が高祖大師は親しく左の如く御提撕あらせられた。

もし人一時なりといふとも、三業に佛印を標し三昧に端坐するとき、遍法界みな佛印となり、盡虛空こ

證悟しなくてはならぬ。

禪にはその臭味なし

すべて學問でも同じ事であるが、學び盡して絶頂に到ると、更に其の學地をも超越する。彼の佐藤一齋翁は

眞孝は孝を忘る念々これ孝、眞忠は忠を忘る念々これ忠

と云うたが、忠と云ひ孝と云ふも、此處まで到らされば眞の忠孝と云ふことは出來ぬ。吾々の身體も、健全なる時は自ら手が何處に在るやら足が何處にあるやら忘れて居る。そして能く其の作用を爲して居る。が、偖て少しでも身體に故障が起ると、やたらに目のところへ手が行つたり、耳が邪魔になつたり、手足が氣にかゝつたりなどする。これ即ち病氣のために束縛せらるゝからである。吾れ我を忘るといふ境地に到らねば駄目である。

佛法を信ずるもその通りである。念佛とか題目とか云うてそれを信ずるのは宜いが、其の信仰が一種の愛染となつて、偏狂に陷いる樣では眞個の佛法信者と云ふことは出來ぬ。高祖承陽大師は

佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり

と仰せられてある。法然上人や親鸞上人の法語を拜見するに、さすがに念佛に於て大自在を得られて居

「象は大繩のやうなものである」と答へ、各々自説を主張し、王の前で爭うたと云ふ話がある。昔も今も變らず、自法愛染で各自の執見と云ふものに固執し、自力だの、他力だの、或は顯敎だ、或は密敎だと云うて、互に議論をして止まない。かゝる徒は到底眞個の佛法を見ることは出來ぬ。猶ほ群盲模象の如しではあるまいか。

昔、支那に葉縣の公子高と云ふ人があつた。非常に龍を好んで、柱掛にも、家の紋章にも、床の間の飾物にも、日用の道具にも、皆な龍の繪や彫刻を付けて、朝夕となしにこれを愛玩して居つた。天の眞龍これを感じて、或る時、彼の窓前にニユツと頭を現はした。子高は見て驚愕顚倒、周章狼狽して走り出し、それより龍が大嫌ひになつたと云ふ話がある。昔も今も同じく、徒らに木を刻みし佛像や文字に書きし經典のみを見て、これが眞の佛法であると云うて、各々の己見己我に依りて佛法を解釋する者が少くない。自我流の佛法を愛玩するも善いが、眞の佛法を見ることを知らず、偶ま〱眞の佛法が到來すれば、僞物のやうに怪しみ訝かつて、却つて相手にしない者がある。彼の梁の武帝と達磨大師との相契はなかつたなども全くこれである。榮西禪師が禪を弘通せし時、南都北嶺の故障ありしもやはりこれである。高祖大師時代にもこれが多かつたと見えて、久しく模象に習うて眞龍を怪しむことなかれと云はれてある。

禪は卽ち直指端的である。絶學無爲である。若し心外に向つて求法すればこれ外道である。禪は畫龍ではない、眞龍である。禪は畫佛や木佛ではない、眞佛である法佛である。これを直下に人々の方寸の中に

は僧寶本位の宗旨である。併し、法は人によりて弘まり、また人に依つて衰へる。故に禪僧の位置は非常に尊いものであると同時に、禪僧の責任はまた重大なることが解る。

禪は各自の心膽にあり

高祖承陽大師は普勸坐禪儀の結文に、左の如く示されて居る。此の一節の文は、能く禪の本領を說き得て餘蘊なしと云ふべきである。

冀くは其れ參學の高流、久しく模象に習うて眞龍を怪しむこと勿れ、直指端的の道に精進し、絕學無爲の人を尊貴し、佛々の菩提に合沓し、祖々の三昧を嫡嗣せよ、久しく恁麽なることを爲さば須らく是れ恁麽なるべし、寶藏自から開けて受用如意ならん

昔、印度に鏡面王といふがあつた。ある時、大勢の盲人に象を摸でさせて『象とは如何んなものか』と尋ねると、その足を索つたものは『象は漆桶のやうなものだ』と答へ、その尾を索つたものは『象は掃箒のやうなものだ』と答へ、其の尾の本を索つたものは『象は杖のやうなものだ』と答へ、其の腹を索つたものは『象は太鼓のやうなものである』と答へ、其の脇を索つたものは『象は壁のやうなものである』と答へ、其の背を索つたものは『象は高丘のやうなものだ』と答へ、其の耳を索つたものは『象は簸箕のやうなものだ』と答へ、其の牙を索つたものは『象は角のやうなものだ』と答へ、其の鼻を索つたものは

禪は僧寶爲本なり

禪は學問ではないと同時に、禪宗は學問的の宗旨ではない。直覺的に宇宙及び人生の實相を把捉するところのものである。彼の達磨大師が支那へ來られた時に、一冊の經典を持つて來られないので、人がその所以を尋ねた。すると其の答が面白い。『吾れは佛法の荷主である、荷物は先きに色々の人があつて澤山に傳へて居るから、今は唯だ其の取扱ひに來たのである』と云はれたといふ、實に偉大なる抱負ではないか。これは決して駄法螺ではない、能く禪宗の眞面目を云ひ盡して居る。

古人又曰く『一切經は吾が家具なり』と、これまた禪宗の立脚地を能く現はして居る。家具にはその種類が澤山あつて、時と處とに依つて用不用がある。此の用不用を知つて能くこれを善用する時は、立派に家具としての作用をなし、一々家庭の助けとなり寶器となり莊嚴となつて行く如く、一切經も經そのものの本來の根本義を價値あらしむる樣に用ひていつて、在々處々に大に活佛法を活用し、以て社會を利し國家を益すると云ふ樣に大活現成せしむるのである。

故に、禪宗は佛法僧三寶の中何れを主にするかと云ふと、僧寶を主とする。さればとて、佛と法とを輕視するのではない。佛の威德と法の功用とは僧に依るに非ざれば顯現せぬからである。僧は三寶運用の機關である。縦へ薙髮染衣せずとも、能く佛法を顯現する者はやはり有髮の僧と云ふことが出來る。故に禪

やうであるが、其の實決して曖昧でない。何となれば、これを反面から申したならば、禪はこれと云ふ一經一論を所依とすることはせぬ代りに、一切經何れも所依とせざるなしだと云へるのである。禪は他を宗旨の如く藏經中の一部の教義に固執して佛教を見ると云ふのでない。何れの經にも必ず佛の眞意、佛法の根本義が秘んで居る。此の根本義は一切經に通じて共通平等であらねばならぬ。禪はこれを直ちに把捉して眞個の佛法を擧揚する宗旨である。換言せば、佛の言説を寫し傳へたる經（修多羅）に依らずして、佛がこの修多羅を說かうとされたその佛心佛意を根據とするのである。これ禪が佛心宗といはれる所以である。

　佛一代の說法は、時と處と對機（學人）とに依つて種々に異つて居る。或は頓教、或は漸教、或時は淨土の有難きことも說かれ、或る處では戒法の尊いことを示された。その教相は何れも別々である。一つが眞とすれば他が僞である。一つが本であるならば他は末であらねばならぬ。併しながら、本來より見來れば佛の說法に眞僞だの本末だの云ふ區別はない。何れ劣らず、佛は其の時相應に眞個の佛法を說かれて居る。依つて只だ言教の皮相に固着して色々に佛法を判釋すると、本末始終の區別を生ずるが、そは佛教を研究する場合に、時としては必要であらうが、やゝもすると群盲が象を摸つたやうな毀りをうけ、眞龍を怪しむやうな過ちを生じて來るのである。

禪の大意

禪に所依の經典なし

禪宗は何時始まつたのか、如何にして傳つたのか、曹洞禪の系統は如何と云ふ說明は既に大略述べましたから、これより、禪とは如何な宗旨であるか、特に曹洞禪とは如何なるものかと云ふことを說明しようと思ふ。

他の天台とか法相とか眞言とか眞宗とか云ふ宗門には、依り所とする經典と云ふものがあつて、これに依つて宗旨を建立して居るが、禪宗にはこれと云ふ定まつたその聖典と云ふものがない。然らば全く釋尊御一代の經文を所依とせぬかと云ふと、決して左樣なことは無い。禪宗と云うたところで素より佛教である。釋尊の敎法を根本的に閑却するわけではない。古人の語にも『文に依つて義を解するは三世佛の寃であるが、經の一字を離るれば却て魔說に同じだ』とある。

禪では一切經典を所依とするにあらず、また、せざるにあらずと云ふ態度である。それでは甚だ曖昧な

まく合致したる當所に、八萬の衆流を截斷する。例せば『從容錄』の中にある通り、或る僧が雲門に『不起一念還つて過ありや也た無しや』と問ふ、雲門これに答へて『須彌山』と云ふ、そこで學人が要領を得てしまふ、さういふ有様である。

同論に、潙仰は『方圓默契』と云うてある。これは甚だ面白い。問答の中に、自然に禪味を味はしむると云ふのである。『從容錄』の第十五則に潙山と仰山との商量が出て居る。潙山が仰山に『何處から來た』と問うと、仰山云ふ『田中より來たる』、潙山曰く『田中多少の人ぞ』此の時、田中にて仰山も仕事でもして來たばかりで、鍬を手に持つてゐたらしい。仰山は鍬を挿下して叉手して立つた。潙山これを見て曰く『今日南山に大に人があつて茆を刈つて居るぞ』と、仰山はその語を聞くや、直ち鍬を取り擔ぎ直して出て行つた。これは一例であるが、すべてさう云ふ具合に、臨濟のやうでもなく、また曹洞とも異つた愉快な宗風である。

最後に法眼宗の宗風は如何と云ふに『當機覿面』とも云ふべきである。其の物其の人を捕へ來つて直に大法を擧揚するのであつて、彼の『碧巖集』にある如く、僧が『如何なるかこれ佛』と問うて來たらば、直にその僧の名を持ち來つて『汝はこれ惠超』と呼びかけると云つた調子である。

は師家が學人を提撕することである。學人が問へば師家はこれに唱和する、其の敲唱の間に寸毫の間隙なく、同道一如の妙用を顯すを旨とする。

之を偏正回互の宗意より云へば、敲とは賓位にして差別門なり、唱とは主位にして平等門なり、賓主不二にして平等に偏せず差別に偏せず、一言一行、一擧一動、盡く中道實相の妙德を現はすの宗風である。

彼の『參同契』に云ふ回互不回互の說は卽ち是れで、誠に溫和しい綿密な行持である。故に洞山大師の語錄の中には、狂氣じみた荒々しい見識は何處にも認められない。實に穩密なる禪風である。併し綿密なる中に模索不着底（手さぐりして、こんなものと早呑みこみする譯にはいかぬ深遠なる趣あること）の妙旨ありて、平溫なる言語が却て三十棒に勝るの大威力あることを忘れてはならぬ。

次にまた同論に、臨濟は『互換機を爲す』と示してある。卽ち一隅を擧げて全部分を現はすと云ふ宗風である。故に曹洞宗の如く穩かでない。殺活手に在りと云ふ調子であつて、機鋒甚だ峻烈である。例せば『如何なるか佛法の大意』と問うて來た場合に、洞山の如く『麻三斤』と云ふ樣な手ぬるい行り方でなく、驀然頭上から三十棒を付與すると云つたやうな工合に甚だ惡辣な禪風である。併し其の一棒一喝は徹底慈悲徹悃である。隻手の聲、鳴かぬ鴉の中に佛智慧の源泉が直示されてあることを忘れてはならぬ。

次に同論に、雲門の宗風を述べて『函蓋截流』と云うてある。函蓋とは函と蓋である。師家と學人とのう

楊岐派が最も多く、二十人の多きに達して居ります。東福寺派開祖聖一國師、建長寺派開祖大覺禪師等、鎌倉時代より足利時代にかけて日本へ禪を傳へた人は、多くはこれに屬する。黃龍派は建仁寺派開祖榮西禪師一人のみであります。

曹洞宗には三人ありまして、建長寺の東明慧日禪師と南禪寺の東陵永璵禪師と我が高祖承陽大師道元禪師とであります。中に就て、前の二人は宏智禪師の門葉に屬するものである。言ふまでもなく曹洞宗の正統を傳へたる御方は永平寺開山承陽大師道元禪師であります。即ち私の語らんとする曹洞禪は、道元禪師に依つて日本へ傳へられたのである。依つて道元禪師の傳を御話するが順序であるが、餘り繁に流れ、且つ禪師の傳記は別に詳しき書物が澤山あるから、今はそれに讓ることゝして、五家の宗風を簡單に御話することといたします。

五家の禪風

根本が同一であらうが平等であらうが、今、五家と分れ七宗と別になつた以上は、宗風の上に幾分の特色がなければならぬ。法眼禪師の『十規論』と云ふ書物は簡にして能くその特色を現して居るから、これに依つて見るに、

同書に曹洞宗の宗風を說いて『敲唱用を爲す』と云うてある。敲とは學人が師家の門を叩くこと、唱と

取つては非常な痛撃であり、致命傷を蒙つた位であつた。當時武帝の發したる勅語に依つて見るのに、僧侶を還俗せしむること五十萬、寺院を破壞すること六萬だと云ふが、其の頃支那の佛教がいかに盛んであつたかゞ窺はれると同時に、この會昌の法難が如何に激烈であつたかも知らるゝのである。

然るに、玆に不思議なるは、禪が五家七宗と分派するほどに榮へたのは、此の武宗の會昌の法難と前後した時代で、彼の靑原下の惟儼禪師の時がそれであつた。當時、禪師は藥山と云ふ山に難を避けて、衆と共に瓔珞粥を喫し秘かに佛法を擧揚せられたと云ふ事である。其の他、黃檗・潙山・仰山・洞山・臨濟等の巨匠は皆な此の時代の御方である。

當時の佛教各宗は何れもこの法難に罹つて、各々秋風落寞の憂き目を見たに拘はらず、禪家は獨り五家七宗と云ふ黃金時代を作らんとする有樣と云ふ事は、歷史上甚だ興味ある現象であらうと思ふ。他の天台とか、華嚴とか、三論とか、法相とか、その他唐朝に於ける一般佛教は、何れも都會の地に布教されて居つたから、如何にしても破壞をされ易いが、これに反し、禪宗の寺院は日本でもその通りであるが、一般に山奧や溪間の、世俗紅塵の飛んで到らぬと云ふ人里遠き不便な所にあつたので、其の害が及ばなかつたであらうと私は信じます。

以上の五家七宗の中にて、後に吾が日本に傳來したものは、曹洞宗・臨濟宗であります。他の三宗は傳らなかつた。而して、此の宗旨が日本へ傳つた法脈が二十四流ありと云はれて居る。中に就いて、臨濟の

仰宗の五家の名があり、臨濟下の黃龍・楊岐の二師によつて更に二宗が出來、かくて所謂五家七宗といふ稱呼が出來たのである。

古來、禪家の家風の別を云はゞ、先づこの五家七宗の禪風を云ふのであるが、併し尙委しくは、其の他に、圭峰宗密禪師は『圓覺經疏』の中に、北宗禪・智侁禪・老安禪・南嶽禪・牛頭禪・南山念佛門禪・荷澤禪など七種の名稱を擧げて說明してゐられる。今は餘りに緻密の說明を要せぬから、こゝには略すことにする。そこで、斯く禪が五家と分れ七宗と派を別にすると云ふ事は、卽ち禪の甚だ隆盛なりし事を示すものであつて、禪宗史の上から見れば實に黃金時代と云はねばならぬ。

行政上の壓迫と禪法の興隆

然らば禪が斯くも盛に分派したのは全體何時の時であるかといふに、それは唐の時代で、殊に一般に佛敎が迫害されてゐたその時であつた。

全體、支那の佛敎は四回も帝王の迫害をうけて、非常なる打擊を蒙つたのである。古來、佛敎者はこれを熟語して『三武一宗の法難』と云うて居る。

三武とは魏の太武帝、北周の武帝、唐の武宗帝を指し、一宗とは周の世宗を云ふのである。何れの時にも廢佛棄釋の態度は激烈であつたが、中に就いても唐の武宗の時の難を『會昌の法難』と云うて、佛敎に

だ異つて居る事に注意せねばならぬ。

禪はこれを擧揚し拈提する師の行方、即ち爲人接化の流儀が一樣でない。其の人に依つて幾分異つて居る。それを學人が選んで自分の好きな流儀を取り敬慕するところより、所謂臨濟・曹洞・雲門等の五家七宗が出來たものである。天台・眞言等の他の宗旨の如く、一宗旨を建設して殊更に分立したものではない。故に、この五家七宗の場合の宗の字の意味は、他の一般に於ける宗とは甚だ意味が異つて居る。雲門宗と云へば雲門大師風の禪、臨濟宗と云へば臨濟大師風の禪とでも云ふ位の意味である。然らば五家七宗とは如何なる人々の禪風を呼んで云ふものであるかといふに、便宜上これを圖示せば左の如くである。

- 六祖慧能
  - 青原行思─石頭希遷
    - 藥山惟儼─雲巖曇成─洞山良价▲（曹洞宗）
    - 天皇道吾─龍潭崇信─德山宣鑑─雪峰義存
      - 雲門文偃▲　雲門宗
      - 玄沙師備─羅漢桂琛─法眼文益▲（法眼宗）
  - 南嶽懷讓─馬祖道一─百丈懷海
    - 黃檗希運─臨濟義玄▲（臨濟宗）─興化存奬─南院慧顒─風穴延沼─首山省念─汾陽善昭─慈明楚圓
      - 黃龍慧南▲（黃龍派）
      - 楊岐方會▲（楊岐派）
    - 潙山靈祐▲─仰山慧寂▲（潙仰宗）

以上の中に於いて▲印を右側に附した人々によつて、それ〴〵、法眼宗、雲門宗、曹洞宗、臨濟宗、潙

一味の禪法と諸祖の家風

一味の禪法と五家七宗の分派

達磨大師の禪が二祖、三祖、四祖、五祖と傳はり、六祖の下に神秀と慧能の二神足あり、その下が大に隆昌して遂に五家七宗の分派をなすに至つた。同じ一味の禪宗であるにも拘らず、何故にかくも分派するのであるか、それは宗旨發展の上より起つた現象で、人力の如何ともする能はざるところである。禪が斯く分派すると云ふのは決して禪が末になつたと云ふのではない。禪が益々隆盛になつたことを示すのである。これを例せば、植物も最初は芽生の二葉であるが、それが段々生長するに隨つて、枝が生じ葉が生じて、その枝葉が益々繁茂して、その植物が段々樹木として立派な價値を現はすと同じ譯である。而して、其の枝葉が幾十百に分れたところで、その根幹が一つである以上は全く別の者でないと同樣に、禪は幾派に分れてもやはり禪である。

禪の分派した由來を考へて見るのに、彼の日本佛敎に於ける淨土宗から眞宗が分派れた樣子などゝは甚

後來の分派に屬する、彼の有名なる五家七宗の如きは、此の中、南頓に屬するのであります。禪はこれより益々隆盛時代となつて來るのであつて、隨つて、これより多くの分派をなす事になるのであるが、それは後章に改めて御話しする事にいたします。

釋尊より一糸も紊れなかつた禪宗の系統は、玆に南宗禪・北宗禪の兩派に分れたのであるが、此の中、南宗禪は前の偈に依つても明かなる如く、頓悟成佛を主張して、直に佛法の第一義を談ずるところより、これを南頓と云ひ、これに反して、北宗禪は漸々修學悉當成佛の義を現はすゆゑに、之れを北漸と云ふことになりました。これは禪宗の歴史を學ばんとするものには頗る大切な事であります。而して北宗禪の方は一時北地に繁へたが、其の後幾許も無くして法燈消滅の悲運に陷り、獨り南宗禪が支那南方の地に在つて向來益々その枝葉が繁茂し、加之、遠く吾國に傳はつて、今日も尙ほ禪風愈々競はんとして居るのである。尤も我が國の傳敎・弘法の二大師は入唐の際北宗禪を傳へられた。殊に傳敎大師は神秀四代の孫、大安行表の弟子であり、弘法大師は三代の孫大慈光より禪を傳られたと云ふことであります。

此の南頓北漸の思想に就いては、歴史家の說明するところを聞くと、從來支那は、南地と北地とではその思想が甚だ異なつて居る。御承知の如く北方からは孔夫子が出で、修身齊家治國平天下と云ふ頗ぶる着實な、現實的な、漸々修學的な思想が一般に盛んであつたが、南地の方は彼の老子・莊子など云ふ人等が出で、恬淡虛無の說を唱へ、孔子の說に較べると、甚だ非現實的な、出世間的な、超經驗的な思想が盛に行はれたのであるが、彼の南頓北漸の二宗の思想も、單に神秀・慧能の特長より生じたばかりでなく、更に此の支那の兩思想が冥々の間に影響を及ぼし（佛敎の術語にいふ所の緣となつて）兩者益々その思想を發達せしめたと云ふが、或は然うであらうかと思はれる。

若し盧行者が傳法したと云ふ事が神秀崇拜者一派に聞えては、却つて擾亂を醸す原因となると云ふ所から、五祖禪師は慧能禪師に諭し『十餘年間世を避れて跡を晦ませ』と命令があつたから、六祖は其の夜、命に從うて黃梅山を出發し、何處ともなく立ち去られました。下山の折しも五祖禪師は、山下の渡船場まで六祖を見送られ、且つ自ら棹を執つて五祖を對岸まで渡された。六祖は自ら船に棹をさゝんとせしも、五祖は『彼岸へ渡すまでは師たる者の務めなり』と云はれた。かくて六祖の後姿の見えずなるまで佇立して、孤影悄然と歸山せられたと云ふことである。何たる美談、何たる貴き事柄であらうか。

慧能禪師は既に五祖の法燈を嗣ぎて黃梅山を出られたが、後に至りて大衆の知る所となり、若干の僧徒が追跡して衣法を爭はんとしたが、遂に能はず、明上座なるものは六祖に追附きしが、却て其の敎化を蒙むりて六祖の保護者となつたのであります。

然し、神秀上座も高德の方で、その德化は北支那の地に弘まり、慧能禪師は南地に隱れて十餘年の後ちに禪法を擧揚されることゝなりました。かくして五祖禪師の下から神秀と慧能といふ二大系統が出ることゝなつたのであります。而して、神秀上座は北方に居を占てゐられたから、神秀側の禪を北宗禪と云ひ、六祖は南方の曹溪に住されたので、これを南宗禪と云ふことになりました。

南頓北漸の分流

その翌日になると大衆の評判はまた喧しく、先に神秀上座の偈を見て賞讃したところの彼等は、今またこの盧行者の偈を見て絶驚した。こは何人の書か分らぬが、とにかく普通の者でない、必らずや肉身の菩薩の仕業ならんと云ふところで、黄梅山中またも此の評判で埋つたのであります。

折ふし五祖禪師、例の貼付の廊下を御通行に成つた。心中既に慧能なる事を御承知に成り、心に思ふところあつて、其の足で碓房へ到られ

五祖『米白まれりや』(修行は出來たかの意)

慧能『白まれども未だ篩る事あらず』(修行は出來たが、まだ祖師の證明を得ませんの意)

五祖、杖を以つて臼を打つこと三下す(今夜三更吾が室に來たれの意なりと云ふ者あれど、そは一を知つて二を知らざるの漢である。打臼の響は天地に震ひ、延て今日に聞え、幾許の耳朶を響破してゐる)。

慧能、箕の米を三度篩て入室す(是れ何の手脚なるぞ、請ふ試に工夫一番せよ)。

斯くて其の夜三更ひそかに五祖の室に到り、懇々たる訓戒を受けて、慧能禪師は釋尊より正傳せる大法を相續して第三十三代、達祖より第六代の祖師となられました。古來より禪家に六祖大師と云へば誰れ知らぬ人は無いのである。

斯く傳法の月桂冠は、得さうであつた神秀上座には得られずして、却つて盧行者といふ物の數にも認められなかつた慧能禪師が佛祖の大法を得られたのである。

と稱してゐた。登山入衆以後まだ僅かに八ヶ月であつて、同學の人達はまるで相手に致さず、その人達は只だ徒らに神秀上座ばかりを崇拜して居つたのであります。

この盧行者慧能禪師が神秀上座の偈を批判せられたのは、今日の人が行る樣な嫉妬排擠と云ふ曲つた根性からでは無く、實際に斯く感ぜられたのである。併し前に云ふ如くの始末で、同學のものはまるで鼻先で挨拶し、さつぱり取合はないから、慧能禪師は其の夜、ひそかに一童子を呼び、師自から燭を秉つて神秀上座の偈の側に童子をして、

菩提本無レ樹　明鏡亦非レ臺　本來無一物　何處惹二塵埃一

と云ふ和韻の偈を寫さしめられた。

此の五言四句の偈文を、前の神秀上座のそれと比較對照して見れば、兩者の間には甚だ徑庭がある事が分るであらう。神秀上座より見ると慧能和尚の方が數十歩を出でゝ居る。百尺竿頭の絕頂に進みきつて向上第一義の立脚地にある。この處に立脚する限り、菩提もなく、煩惱もなく、生死もなく、涅槃もなく、本來無一物である。實に淸風明月である。

雲よりも高きところに出て見よしばしも月にへだてやはある

で、此の時に到つては一塵の足に受くべきなく、一翳の眼を遮ぎるべきは無い。これ實に佛法の根本義、大乘の極致を說盡せられたものである。

を搗くと云ふ頗る勞働的の御役目を仰せ付かつたのであります。

普通の者であつたならば、人を米搗にしたとか、人を莫迦にしたとか云うて、小言を云うたり不平を云うたり、或は自暴を起したりすることであるが、流石は慧能禪師である。これを自己の天職とし、これを佛祖の行持として、綿密に遂行せられ、或る時の如きは、腰が輕いと云つて腰部に石を縛り付けて米を搗いて居られたと云ふことである。斯くして身は米搗に從事するも修行は日を逐うて成就せられる。一寸考へると、何だか變なやうであるが、決して變でない。一心不亂なれば杵臼是れ道場である。碓房即菩提座である。陽氣の發するところ金石も透るとは玆の事である。何も怪しむに足らぬ。

月日の經つは早いもので、禪師が黃梅へ登山せられ、此の勤務に從事せられてから、ちやうど八ヶ月である。修行も大分完全の域に進んで來た。此の時恰も上述の通り、神秀上座が四句の偈を提出して、黃梅全山、上へ下への評判が喧しくなつた。從晝至夜、碓房にて米搗をして居た禪師には知れやうはずがなかつたが、餘り喧しかつた爲めに、この事が如何しか慧能禪師の耳へ入つたのである。

慧能禪師は同學の人から其の樣子を委しく聞き、且つ神秀の詩偈をも詳かに聞かれた。慧能禪師はこの偈を聞きて云はるゝやう『此の偈は卽ち美であるが、未だ十分と云ふ事は出來ぬ、佛法の第一義門は盡し得たるも第一義諦に到つては未だしである、依つて吾れも一偈を呈せん』と。

禪師が黃梅に入られてより、正確に姓名すら呼ばれなかつた位であり、俗姓が盧氏であるから盧行者〳〵

『嶺南人は無性佛といふから佛には到底なれぬ』、師は肯はずして『人にこそ南人北人の別はあれ、佛性には豈に嶺南嶺北の區別がありませうぞ』といはれた。實に意氣衝天にして佛祖も呑却し盡さずんば止まざる勢である。

これを以てもその非凡なことが明かであります。五祖禪師は一見既にその非凡なることを看破せられ、考ふる所あつて『槽廠に着き去れ』と云うて、師を直ちに碓房に入れて米搗の役に充てられたのであります。

今日では大分亂れて來たやうであるが、古は禪僧の多く集つて修行する處を叢林と云うて、五十人あらうが百人あらうが、それぞれ配役があつて、或は雪隱の掃除をする役もあれば、或は勝手で味噌を擂る役もあり、或は本堂へ出でて、經を讀む役の者もあつた。一口に七十三役と云ひまして、大叢林では尙ほそれ以上の役々があつた。而して各々その自己の役目を以て自己の眼睛として、大切に修行をしたものである。否、何れも役目そのものを以て佛祖の行持として、綿密にこれを修して行つたものである。共同的生活としても、實に規律あり節制ある模範的なものであつて、今日、學校などで些々たることでストライキなどをやつて騷ぐ樣なものではなかつた。其の秩序の嚴肅なる服務の忠實なる、今日の軍隊の制度も遠く及ばない位であつた。故に儒者からも『三代の禮樂は浮屠の裡に在り』と羨まれた位である。五祖禪師の會下は斯の如き有樣であつて、慧能禪師は最初碓房に入りて杵臼三昧に入り、七百人の大衆が喫すべき米

此處で慧能禪師のことについて話さなくてはならなくなつた。慧能禪師は、俗姓は盧氏であつて其の先は范陽の人であつたが、今は南方の新州に籍を占め早く父を喪つて、獨りで老母を養はれた。家甚だ貧しくて其の日の暮しも餘り豐かな方ではなかつたと見え、毎日山へ入つて薪を採り、これを町に賣つて僅かの賃錢を得て母を養ひ、兼ねて一家の生計を立てゝ行かれた、世に稀なる孝行な御方でありましたが、或る日、例の如くに薪柴を擔つて町に賣つて居る途次、人が或る經を讀むのを聞かれ、その教義に非常に感ぜられ、これは何と云ふ書物であるかと聞いて見ると、其の人答へて、これは金剛經と申す經文であるといふ。禪師は忽然としてこれより出家求法の志を發起せられ、種々苦心せられたが、家は貧にして老母を養ふためには杜とも杖ともならねばならぬと云ふ身なれば、容易く出家することも出來ず、母に幾度かそのことを告げられたが、恩愛の情如何しても捨斷することが出來ぬ。されど慧能禪師求法の志はこれを以て止まるべきにあらず、後ち遂に母の承諾を得て、直に韶州に到り、無盡藏といふ尼や智遠禪師といふ方の周旋に依つて、第五祖大滿弘忍禪師の會下に投ぜられることゝなつたのであります。

五祖禪師との初相見の時、五祖問うて曰るゝのに『汝何れより來る』、師答へて曰く『嶺南』、五祖更に『汝は嶺南からこゝまで來りて何事を求めんと欲するや』、師答へて曰く『唯だ作佛を求む』、五祖又曰く

明鏡臺とは佛知見のことである。吾人は現身を離れ現世を離れて成佛をするのでなくして、此の身此の儘に成佛する。いや、吾人は本來成佛してゐるのだ、吾人の一心は、本來佛知見を具有して、缺くることは無いのだ、衆生は本來成佛、生死はそのまゝ涅槃である。吾人各自は、己れの身心に於て妄りに欣厭取捨の執見を生ずべきでない。佛界は脚跟下に在り、寶所豈に之を遠きに求むべけんやである。然るを惜いことに、吾人凡夫の敢果なさでその道理を知らず、己れに迷ひて物を逐ひ、日々軟魔や剛魔のために礙へられて、我見妄執のために縛せられ自ら自己明鏡臺の靈光を曇らし、本來成佛の身を以て、枉げて輪廻生死することを致す、なさけないことである。佛祖門中の修行といふ事は、此の明鏡臺を拭ひ清めて、一翳の塵をも留めず一切の妄念妄分別を掃蕩し去つて、靈々昭々たる佛知見を發揮するにある。先づそのためには時々刻々に精進して塵垢煩惱を付着せしめぬ様に拂拭せなくてはならんと、漸々修學悉當成佛の義を綿密に示されたのがこの偈である。修養の親切なる、行履の着實なる、流石は神秀上座であります。吾人日常の箴規としても甚だ好き教訓と云ふべきである。

この偈が廊下に貼付せらるゝや、忽ち一山の評判となつた。翌日五祖禪師が其處を過ぎられるの次で、此の偈を御覽になり、直にこれ神秀の偈なることを知り、大にこれを賞讃し、機嫌うるはしく方丈に歸へられた。於玆乎、一山の輿望は、無論大法の相續六祖の椅子は神秀上座の手に歸するものと成つたのである。併しながら五祖禪師は、その後傳法の事について神秀には何等の言葉もおかけにならなかつた。

來有名な話柄が傳はつて居る。話が少しく繁に過ぎる嫌はあるが、勢これを話さざるを得ない事になつて來たから、一應此の事について大略を話すことにいたします。

五祖弘忍禪師の時代には禪風大に振つて、苟くも禪に非ざれば宗教に非らず、禪僧に非ざれば僧侶に非ずと思うた位であつたから、當時、五祖大師の勢力と云ふものは實に堂々たるものであつた。さればその嗣法者の重ぜられたと云ふ事は自然の理である。依つて五祖會下の七百人中の若僧たちは、吾れこそはと氣を張つて修行を熱心にやつて居る。

此の時に當つて五祖大師、一日、全山の大衆を一堂に會せしめ『吾も非常に老年になつたから、愈々この大法を何人にか相續したいと思ふ、若し修行が熟して吾れこそはと自信のあるものは、憚らず出頭し來つて吾れに呈露せよ』と云はれた。さあ時が來た、吾れこそは多年の工夫を提出して拔群の功を荷はんと、各々が意氣込んで出たが、さて、いざとなると七百の高僧中では神秀に及ぶ者は一人も無い。そこで神秀は衆望を一身に聚めて、

身是菩提樹　心如二明鏡臺一　時時勤拂拭　勿レ使レ惹二塵埃一

の一偈を作り、これを五祖禪師が平生通行される廊下に貼付したのである。

この偈の意味はと云ふと、僅々二十字ではあるが、この中に立派に禪的大乘佛教の妙旨を實踐的に言ひ現はして、修行事の眞面目が發露してある。菩提樹とは釋尊が成道された場所に繁つてゐた樹木である。

つた。また布教傳道にも甚だ熱心であつて、當時、盛んに路傍演説等をやつて禪風を皷吹せられたと云ふ。

慧可大師のお弟子で、支那禪門の第三祖となられた鑑智僧璨禪師には『信心銘』の著あり、達磨大師の四行觀と相並び禪宗の古書として有名なるものである。第四祖になられた大醫道信禪師は澤山の御弟子を育てられて、門人は一百八十三人あつたといひます、その中にて有名なのが、大滿弘忍禪師と牛頭山法融禪師との二人であつて、法融禪師は牛頭山に在りて正法を宣布して居られた故、後世この流を牛頭禪と呼ばるゝのである。而して、正統の傳法相傳を爲したのは大滿弘忍禪師で、牛頭禪はその傍系である。後世有名なる慧忠國師や、また白樂天を接得せられた鳥窠道林禪師などは、皆な牛頭禪の末葉に屬して居ります。

神秀上座

五祖大滿弘忍禪師の會下には百有七人の法子と六百餘員の淨侶が居つた。何れも當時の新進氣鋭の士であつたに相違ない。中に就いて最も有名なのが神秀上座であつた。神秀は會中の上座と崇められて、第六祖となる方は必らず此の人であらうと云ふ一般の輿論であつた。然るに、第五祖の法燈を實際に嗣いだのは神秀上座でなくて、碓房に苦役を努めてゐた盧行者慧能であつた。故に此の付法相續に就いては、古

ります。

達磨大師は梁を去つて魏の少林寺に入るや、默々と端坐せられた。卽ち面壁九年とはこのことである。然し九年の間も、唯だ、沈默無爲に何事も成さず、坐禪ばかり爲して居られたかと云ふと、決して左樣ではない。大師の行蹟に關する記錄の徵すべきものなきを以て、明らかに斷言も出來ぬが、四行觀等の慈誨ありしを見れば、這の間盛に大乘佛敎の眞髓たる正法眼藏を擧揚せられたものと思はれる。

大師が所謂九年面壁の間に、特に來つて法を求め弟子となつたものは多かりしならんが、其の中に、優等なる者が四人ある。道副と道育と總持尼（武帝の娘）と慧可とである。大師は一日諸弟子の修行を點檢して『汝は吾が皮を得たり』、『汝は吾が肉を得たり』、『汝は吾が骨を得たり』、『汝は吾が髓を得たり』と、一々その修行淺深の程度に應じて證明を與へられた。『髓を得たり』とは達磨の佛法を得たりと云ふ印可の意味であつて、其の印可を得たるものは、卽ち慧可大師である。達磨大師は法を慧可大師に付屬せられ、慧可は第二十九祖、支那に於ける第二代の祖師となられたのである。

斯くて達磨大師は、梁の大同二年十月五日端坐したまゝ長逝せられた。同年十一月二十八日に聖骸を熊耳峯に葬り、塔を定林寺に建てたとある。尙ほ一說には、死後三年を經て、魏の國使宋雲なる人が葱嶺にて、大師が隻履を携へて西歸するに邂逅したといふ。是を畫にしたのを『隻履の達磨』と稱す。

慧可大師は、雪中斷臂等の聖跡が達磨面壁と好一對に世間に知られてある通り、頗る熱心な求法家であ

『廓然無聖』、武帝曰く『朕に對する者は誰ぞ』、達磨曰く『不識』、惜い哉、武帝は達磨の佛法を咀嚼することが出來なかつた。この問答は碧巖集の第一則にも從容錄の第二則にも、達磨廓然の話として出て居る。問答公案として古來却々有名なものに成つて、少しでも禪書を開いた人は大概御承知のことである。達磨大師は武帝と相見したところが、武帝は案外に未熟であつて、未だ佛法の第一義を聞くの分が無い。そこで遂に楊子江を渡り魏の洛陽に出で、それより錫を崇山の少林寺に駐め、默々として面壁九年せられたと云ふ事である。

『渡江達磨』と云ふものが古來畫題になつて、それが蘆葉に乘つて江を渡る有樣を書いてあるが、これは大師が小舟に駕して楊子江を渡航されたのを詩化して畫いたものである。かゝる事柄は素より事實として穿鑿する程の要は無い。

大師には種々なる傳說があるが、彼の『元亨釋書』には聖德太子と達磨大師との問答の事柄が記してある。古來、達磨大師の三國傳道說なるものがあるが、若しこれが事實とするならば、達磨はまた禪の宣傳者として日本へも渡航せられたものであらう。然し年代に五六十年も間隔があつて、到底信ずる事の出來ないものである。要するに、此等の大聖の妙用を描き示めされたもので、後世の達磨崇拜者の架空說である。根據も考證もなく、固より史上の事實として論ずるまでもない事である。餘りに此等の事蹟を主張する時は、却て達磨大師の眞面目を傷つくるの恐れがある。私は只だ參考にまで語つて置くのみであ

禪宗史の研究考證をなすのでなく、大體禪宗の相傳を語る順序として御話すること故、それ等の細かい詮議は專門の歷史家に讓ることに致し、私は古來一般に言ひ傳ふるものに依つて、その傳記を御話する。

達磨大師は南天竺の刹帝利種香至王の第三王子であつて、少年にして般若多羅尊者に就いて出家し、大修行の後、傳法相續して二十八代の祖師となり、更にその師に事ふること四十年、布教傳道に從事することと六十餘年で、支那へ渡來されたときは凡そ百二三十歲になつてゐられたらうと云うてある。

船に乘じて印度を發し、航海すること三年間にして支那の南海即ち今の廣東の地に着された。その時がちやうど梁の武帝の大通元年だつたといひ、また普通年間だつたとも云ひます。私は古來多數の傳記に依り、達磨大師の支那到着を暫く梁の武帝大通元年九月二十日として置きます。

この年は吾國にては繼體天皇の御代二十一年に當るから、欽明天皇十三年に佛教が日本へ傳來したのに先つこと約三十年である。西曆では紀元五百二十七年となります。

當時、梁の武帝は大の佛教信者で、佛心天子と稱せられてゐた位です。寺を起て塔を建つること幾十百千なるを知らず、佛教の保護殆んど到らざる無かりしが、ちやうど此の時外國の高僧達磨大師が渡航して來られたと云ふを聞いて、直ちに大師を招待して、殿中に於て相見せられた。其の時、武帝は『朕は寺を建て僧を度すること無數、此の功德如何』と問はれた。達磨は向上より『無功德』と喝破せられた。武帝の有所得心を打破したのである。武帝は語を更へて問うて曰く『如何なるか是れ聖諦第一義』達磨曰く

當り北天竺の地にあつて、當時盛に佛敎を扇揚せられた祖師である。少しでも佛敎史をやつた者は此の人を知らぬものは無い位で、その著述は古來支那日本の佛敎界に非常なる感化を與へたるものである。尊者は第十二代の祖師として禪宗で崇拜するのみならず、佛敎史上に於いて忘れんとして能はざる功績高き大人物であります。

馬鳴菩薩と均しく大乘佛敎史上に於いて著名なる偉人は、龍樹菩薩であります。禪宗で第十四祖の那伽閼刺樹那和尙といふのが卽ちこの龍樹菩薩であります。古來、八宗の祖師と云はれる大人物である事を忘れてはならぬ。

それに次いでは第十五祖の伽那提婆、第二十一祖の婆須盤頭、第二十七祖の般若多羅等の祖師で、何れも有名な聖跡があるが、それは專門の硏究に托することゝして、今は玆に震旦の初祖達磨大師が爲人の大略を述べるにとゞめます。

達磨大師とその法孫

達磨大師の傳記に就いては色々の說があり。近來に到つて特に變つた方面から大師を硏究する人もある。其の渡來の年代等についても異說紛々殆んど正邪を甄別することが出來ない位である。近來、甚だしきに到つては、達磨は架空的の人物で、史上の人物では無いなどといふ說も出て居ることであるが、今は

第二十九祖（同　二祖）太祖慧可
第三十祖（同　三祖）鑑智僧璨
第三十一祖（同　四祖）大醫道信
第三十二祖（同　五祖）大滿弘忍
第三十三祖（同　六祖）大鑑慧能
以上が東土の六代である。

特に著明なる祖師

西天東土三十三代の祖師は、何れも大聖大賢ならざるは無い。中にも西天二十八代は、啻に禪家に於いて祖師と仰ぐばかりでなく、各宗の系統圖の中にも入つて居る。殊に二十四代師子菩提尊者までは天台宗に於て祖師として尊重して居る。二十五代以後には多少の議論もあれど、今はそれを論じて居る程の餘裕も無いから略して置く。とにかく、印度佛教史上に於いては、何れも直接に大關係のある人ばかりであるから、一々に就いて詳しく話さば餘程趣味深きことも澤山あるが、今は只だ其の中に就いて、特に有名なる方二三人の傳の一分を摘記する事にいたさうと思ひます。

第十二祖阿那菩提尊者と云ふは、一般佛教の上からは馬鳴菩薩と稱する人であつて、佛滅後五百年頃に

第三祖　商那和修　　第四祖　優婆毱多
第五祖　提多迦　　第六祖　彌遮迦
第七祖　婆須密多　　第八祖　佛陀難提
第九祖　伏駄密多　　第十祖　婆栗濕縛
第十一祖　富那夜奢　　第十二祖　阿那菩提（馬鳴）
第十三祖　迦毘摩羅　　第十四祖　那伽閼刺樹那（龍樹）
第十五祖　迦那提婆　　第十六祖　羅睺羅多
第十七祖　僧伽難提　　第十八祖　伽耶舍多
第十九祖　鳩摩羅多　　第二十祖　闍夜多
第二十一祖　婆修盤頭　　第二十二祖　摩奴羅
第二十三祖　鶴勒那　　第二十四祖　師子菩提
第二十五祖　婆舍斯多　　第二十六祖　不如密多
第二十七祖　般若多羅　　第二十八祖　菩提達磨

以上が西天の二十八代である。

第二十八祖（震旦初祖）　菩提達磨

多と傳はり、嫡々相承して今日まで到つたものでありますから、これは理論を以つて否認する事の出來ない所のものであります。

西天の四七、東土の二三

佛敎中に宗派は澤山あるが、禪宗ほど傳法相續の系統をやかましく云ふ宗門は他に無い。古來禪宗にては、この傳法を宗門の最大事としてゐる。その方式は、所謂面授面稟で、師匠と弟子とが面たり、親しく手より手に承け、口より口に傳ふることゝなつて居る。宗風が甚だ廢頽したとは申しながら、此の事は今日も尙ほ非常に大切な事となつて居ります。

一般に禪宗にて『西天の四七、東土の二三』と云ふ事を申すが、これは傳法祖師の數をあげる熟語で、即ち天竺にては大迦葉より次第相承して菩提達磨に到るまで、四七二十八代、東土即ち支那は菩提達磨が初祖となつて、それより大鑑惠能に到る六代、西天と東土と合せれば三十三の祖師となる。この正系祖師を指さして西天四七、東土二三と申したものであつて、此の三十三代の間は一器の水を一器に移すが如く、別段の支派分裂もなく、順々に相傳承燈し來つたのであります。今これを明瞭ならしめんために祖師の名を列記すれば

第一祖　摩訶迦葉　　　第二祖　阿難陀

に住まり給はんことを願うた時にも、釋尊は宣うて
吾が無上の正法は摩訶迦葉に付囑せり、吾れ滅度するとも憂ふることなかれ
と仰せられてゐる。其の他祖師方の著書に多くこのことは記されてあります。」

向上の一路千聖不傳

上述せる如く、禪宗は直に佛法の骨髓を悟得し相承する宗旨であり、他の宗門の如く記錄が明かで無いから、古文書に出て居ないからと云うて、本來の基礎が動搖されるものでない。文殊菩薩が釋尊に向つて最後の說法を請へるに對して、釋尊ば

吾れ四十九年未だ曾て一字を說かず、汝吾れに再び法輪を轉ぜんことを（說法することを）請ふ、これ何の意ぞや、吾れ曾て法輪を轉ぜしや

といふ意味の答を與へられたと云ふ。また『大般若經』の中には『第一義には文字あること無し』と示され『傳光錄』の中には『輪扁尙ほ不傳の妙あり』とある如く、禪の秘奧、向上の一路は千聖も不傳のものであつて、記錄などにては到底傳へ得べからざる所のものである。

禪はこの不傳の端的を證契即通する事に依りて傳法相傳を爲すのである。大迦葉は斯の如くにして釋尊より傳法せられたものであります。斯くて大迦葉より阿難陀、阿難陀より商那和修、商那和修より優婆毱

此の拈華傳法の事に就て異說をなすものは、一切藏經の何れにもこのことが出て居ないといふことを證據にあげ、拈華云々のことは後世の揑造說であると云うて、これを否定せんとしてゐます。學者の間にはこれが問題になつて居る樣であります。宗門雜錄と云ふ書物の中には、宋の王安石が佛慧泉禪師に對し、『翰苑に於て大梵天王問佛決疑經と云へる經を見しに、釋尊拈華の事出たり』と申された事が出て居る。併し、此の問佛決疑經は古來より僞經としてあつて、縮刷の藏經にも編入してない程のものでありますから、勿論これを以つて依憑考證とする事は出來ない、といふ樣なことまでいつて論ずるのであります。然し、拈華傳法の話が藏經の正しい經文の何れにも更に出て居ないからといつて、是れを妄誕なる架空說としてしまふことは出來ませぬ。藏經にそのことが出てゐなくとも、禪門嗣法相傳のことが、これが爲めに覆がへることは決してない。禪門に於ては嫡々相承面授口訣といふを尊ぶ。假ひ拈華のことが一代藏經の中に記されて無いにした所で、毫頭の痛痒を感じないのである。のみならず、禪本來の根本義から云ふと、藏經中にないのが、寧ろ室內相傳の口訣として神聖であるかも知れないのであります。

尤も、拈華微笑の事實が藏經に記してはないにせよ、佛法を迦葉尊者に付囑せられたことは、諸經の證する所である。彼の涅槃經の中に、數多の佛弟子が佛の滅度の餘りに速かなるを悲んで、佛の永く此の世

元來、言語や文字といふものは記號に過ぎない。理の極致、情の極致、意の極致に臻つては到底これを說示することは出來ない。私が飮む所のコツプの此の水の味は何人も知らない、また私が何人に向つても說示する事も出來ぬ。只だこれを飮んだ所の私がこれを知るのみである。

釋尊が說法せられたところのものは、只だ釋尊大悟の正當を、說明の可能なる範圍內に於て、機に應じて說法せられたゞけのものである。言はゞ魚兎の筌蹄に過ぎないのである。釋尊が悟得せられたる理の極致、換言せば眞の意に到つては、四辯八音も好くこれを說示することは不可能である。こゝを以て釋尊は、大眞理を大衆に了解せしめんとするに當つて言語によらず、拈華を以てせられたのである。されば釋尊の拈華の端的は說法中の大說法であるとも申される。また眞理中の大眞理を直々に提出せられたのであると申すべきである。然し眞個に這の大說法を聽取し、此の大眞理を了悟し得たるものは、八萬の大衆中、大迦葉一人のみであつた。釋尊は大迦葉の旣に修證の圓熟せるを見透されて、遂に大法を相續せられたのである。以心傳心と云ふはこゝの消息をいふのであります。

かくして大迦葉尊者は禪宗に於ける傳燈の第一祖となられたのであります。尤も拈華微笑以前、佛が始めて大迦葉尊者と多子塔前に於て相見せられた時、衣法を付囑せられたといふ深秘の說も別にありますが今は其の說明を略して置きます。多子塔前に於て、衣法は御付囑になつたにしても、公然たるその傳法式をなされたのは靈鷲山に於てゞあります。

うと、一同は固唾をのんでお待ち申してゐた。すると釋尊は壇上より一同を御覽になりて、默然靜坐、一言半句の說法もなく、只だ大梵天王が佛に献じたる金鉢羅華を御手に執り、大衆の面前に拈出せられたきり何とも語れぬ。大衆はまるで手持無沙汰の爲體、其の意味を會得するものが無かつた。然るに其の中にたゞ一人、第一座の大迦葉尊者のみは、それを見て忽ちニコツと破顏微笑せられた。釋尊の拈華と大迦葉の微笑、此の消息は所謂以心傳心にして、餘の人々には了解することが出來ぬ。このとき釋尊は始めて語を發して宣うた。

吾れに正法眼藏涅槃妙心、實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に付囑す

と、これが古來靈山會上の無言の大說法として有名なる拈華微笑である。禪宗の語錄等にも拈華微笑の公案として出て居るのであります。これが正しく禪宗の傳承の最初となつて居るのであります。

拈華微笑の面目

この世尊拈華の端的、迦葉微笑の面目果して如何、これは妄りに憶測を以て說明を試みんとすれば、早く既に第二第三に落つ。這は理の極致、道の絶頂であつて、言語文字にては說示することの出來ないところのものである。所謂唯佛與佛乃能究盡で、只だ佛と佛、釋尊と迦葉とのみ解するところ、素より餘人の窺知する能はざるところのものである。

燦たる光芒を御覧あつて、豁然大悟あらせられた。その時の御言葉に

吾と大地の有情と同時に成道す

とあります。これが實に釋尊が釋尊として世界に出現し給ひし第一の宣言であります。釋尊は天地の有情非情、草木國土、悉くが皆な佛と變らぬ性能を具有すると大獅子吼せられた。神と人との關係に於て人類と動物との關係に於て、その他種々なる關係に於て、幾重の牆壁を築き幾多の疑問に鎖されてゐた印度の思想界に向て、この大獅子吼は實に晴天の霹靂であつた。この大獅子吼こそは、これ實に敎義上に於ける禪の起原と云ふべきものであります。

禪宗相承の起原

而して、禪宗の傳はり來るに至りし起原はといへば、釋尊が大迦葉を得られて後の、所謂拈華微笑のところにあるのであります。

釋尊は成道以後四十九年の間、機に臨み變に應じて、橫說竪說せられて、一代の能事今は殆んど畢はらんとする時に、靈鷲山の大道場に八萬の弟子等を御集めになり、即ち佛敎徒大會を御開きになつて、愈々これから說法が始まるぞと一同が待ち設けてゐると、釋尊は徐ろに壇上におつきになり、八萬の大衆水を撒いたやうに靜まりかへつた。今日は空前の大會合である、定めし尊い佛法の奧義を說かるゝことであら

禪宗の起原と相承

教義上に於ける禪の起原

禪宗とは怎んなものかと云ふことを知るについて、私は先づ便宜上、禪宗は何時頃起つたものであるか、また何んな風にして起つたものであるかと云ふことから説明しやうと思ひます。

禪宗の起原は何時頃であらうか、これを學術的に詳しく話せば、大分面倒な事になつて來るのであるが、今解り易く極簡單に云ふならば、釋尊の御降誕が既に禪宗の起原になつてゐると云はれやうと思ふのである。釋尊が藍毘尼園の花咲き匂ふ四月八日、人界に呱々の聲を擧げ給ひし最初に當つて、一指は天を指し、一指は地を指し、周行七歩して、而して後に

天上天下唯我獨尊

と大獅子吼せられたところに、既に禪の起原が存するのであります。

更に十九出家、十二年苦行の後、御年三十の十二月八日の曉、天地人籟未だ動かさるの際、明星の

大智度論には此等の輩を『自法愛染』と云うて誡められてある。

古來禪宗は自力宗と云はれ聖道門と謂はれ、他力の宗門、易行の宗旨と相對相稱して說明せらるゝ事に成つてゐた樣であるが、禪の立脚地より云ふならば自力も他力もなく、易行も聖道もない。只だ佛敎の全體に普遍せる唯一の根本義を把捉し、驀直にこれを人前に提露して、人をして眞にこの活ける佛敎の大精神を徹見せしむるのが、禪宗の目的であります。故に古來禪宗自家の名稱としては却つて佛心宗と云うて禪宗とは云はないのである。更に承陽大師は佛心宗と云ふ名稱さへ偏執の恐ありとて斥けられた位である。

唐代以後、禪は五家七宗に分派し、吾國においても臨濟・黃檗・曹洞の三派ありて、多少その形式を異にして居るやうであるが、本來はかゝる區別のあるべきはずのものでない。眞個の禪は平等でなくてはなりません。眞個の禪は絕對でなくてはならないのです。

併し以上は根本精神より云うたのであるが、今これを歷史上より觀れば、禪宗てふ宗旨が確に一派の城壁を作して、他の眞言・日蓮・淨土等の諸宗と相對立して居ることは事實である。また日本現代の禪が曹洞・臨濟・黃檗の三派鼎立して各自多少の見識を異にして居る事も爭はれぬ事實である。中に就て曹洞宗が最も繁榮して居る。現在の統計表に依ると寺院が一萬四千餘ケ寺、僧侶が三萬餘、信徒は百萬戶を以て數ふと云ふ尨然たる大宗門であります。

り、若しくは其の根本義を忘却し、尚ほ甚しきに至りては、たとひ其の根本義に反しても自分の主張を貫くと云ふ様なことになるのみならず、宗派と宗派との連絡が段々と疎遠になりて、遂には全く絶縁してしまふほどに立ち到る様な大我見に陥いり、甲派と乙派とは全く別物のやうに成る。甚だしきは、同一佛敎の宗派でありながら互に相敵視して外道呼はり惡魔呼はりすると云ふ事も間々見聞するのであるが、これは愼しむべき事であつて、また大に注意を要する事であらうと思ふ。

現在の日本佛敎を見るに、日蓮宗にては題目を唱ふることを以て宗意安心の骨子となし、淨土宗にては稱名念佛を以つて極樂往生の要訣となし、更にまた、或は自力、或は他力、或は顯敎、或は密敎(乃至)聖道、易行と區々別々となり、一見何れが眞の佛敎なりやと迷ふ位になつてゐる。併しながら、其れは勿論火と水との相違の如きものではなく、いはゞ袷と單衣との違ひ位の程度のもので、つまり方法の上のみの相違であつて、これ等の間には、一樣の大精神、即ち眞の佛意が脈絡貫通して居る事を忘れてはならぬのです。

禪宗とは何ぞや

佛敎信者たるものは先づ右述ぶる所を知らなくてはならぬ。佛敎信者にして若し宗論宗義の枝末に拘りて、佛敎を一貫する根本精神を把捉する事を怠つたならば、せつかく信じても何の効能もない事になる。

八萬四千の法門ありといひ、五千七百の經卷ありと云つて、佛教は實に廣汎なるものでありますが、然し、其の中には必らず一貫せる目的と一貫せる眞理とが秘んで居るので、承陽大師は這の邊の消息を如來の在世には全く二教なく全く二師なしと觀破せられてあります。前に申す如く、宗旨宗派の數は多くあり、法門と經卷の數は夥しくあるのであるけれども、歸するところの目的と、說くところの根本義とは、何れも同一であるのです。併しながら、學問が時代の推移するに隨つて段々深くなると其の結果は益々分科するやうに、宗教も時の推移と共に其の外形方面が種々に發展分裂するのは自然の情勢であつて、何人もこれを止むる事は不可能であるのであります。

分派より起る弊

宗教が時代を經るに隨つて分派を生ずると云ふのは、それだけその宗教の繁榮を現はすのであるから、これは甚だ喜ぶべき現象であるが、物が餘りに盛んになると自然弊害の伴ふものであつて、一面に於ては甚だ喜ばしからざる現象をこゝに示すものである。分派も餘りに多端になると、遂には其の根本義に遠か

とあり、又、金剛經には

如來は如語者なり、實語者なり、不誑語者なり、不異語者なり

とある。是れ即ち佛が自ら佛教の一味なることを明かに證明せられたものと見るべきものであります。

方便教と眞實教

されば佛は、小乘教だとて決して夫を卑まれた譯ではない。只それを無上の樂地として、闇昧愚鈍の凡夫が小康偸安の夢を貪らんとするのを破斥せんために、時としては大乘を褒めて小乘を貶せられたこともあるのであります。故に小乘を學ぶ機根の人々には、小乘そのものが眞の佛教であり、大乘を學ぶ機根の人には、大乘が眞の佛教であるのであります。小學程度の子供には小學がよい學校であり、中學程度の子供には中學がよい學校である。小學がつまらなくて中學のみがよいといふことはいへない、小學校が誤りであるのでもなく方便であるのでもない、何れも眞實のものである。佛の教もその如く常に眞實である。佛は人を誑かすやうな事は決してない。方便と云ふ事をいふがそれは進んだ人が、既に自分が通つて來た路を回顧し追想した上より起るのである。佛は機根に相當したる眞實の佛教を説示せられて居るのである。ゆゑに世尊は誑語者でも異語者でもないのです。

これより講述しやうと思ふ禪と云ふ宗門も卽ち其の中の一宗派である。然かも禪といふ一宗派の中にまた色々の派をなし、夫々多少の特長があつて全然一致といふ譯にはいかぬ。併しながら禪の本來の旨趣から見れば、派を分つことは決して本義ではないのである。全體此の分派と云ふ事は、歷史的に發達する自然の相であるから、これを如何ともすることはできぬが、然しそれが餘り甚だしくなると、枝より枝を生じ葉より葉を生じ、遂には枝末にのみ拘泥して根本を忘失すると云ふ弊を釀すものであります。

現代の日本佛教の狀態を通觀するに、誠に宗義多端であつて、信者はその趨歸する所に迷ひ、何れが眞の佛意に合ふところのものなるかを疑ふ位である。これは一面からいへば佛教の發達と見る事も出來やうが、また現代の日本佛教に於ける一面の弊害であるともいふべきであります。

小乘教と大乘教

小乘教と云ひ大乘教と云うたところで、それは思想發達の上に現出せる區別であつて、決して大乘が眞の佛教であつて小乘は方便假說の教だと云ふべきものでない。同時にまた小乘が眞に佛金口の說法であつて大乘の如きは非佛說であるとしてこれを斥く可きだといふ譯のものでもありません。眞の佛意、卽ち佛教の根本義より觀るときに於ては、決して佛教は異義多樣のものではありません。されば法華經の中に唯一乘法のみありて、二もなく亦三もなし

禪の綱要

序言

現代の日本佛教

佛教と一言に云へば甚だ簡單であるが、これを地理的に區分致せば、南方佛教・北方佛教となる。南方佛教と云へば暹羅・錫崙等に行はれてゐる佛教であり、北方佛教と云へば、西藏・支那・朝鮮・日本等に行はれてゐる佛教を指すのである。南方佛教は大體に於て小乘佛教であり、北方佛教は主として大乘佛教であります。

南方佛教は暫く措き、北方佛教について觀察するに、大乘佛教が本當に行はれ居るのは、吾日本である。支那は勿論日本佛教よりいへば本家であるが、今日では殆ど其の半ばが變形して居る樣な狀態であります。日本佛教とても却々複雜であつて、今日の所では十三宗五十餘派と分れて居る。

誠に短い時日の講話であるから、至つて粗雜極まるものであつて御恥しい次第である。到底充分なことには行かぬが、然し、不完全ながらも多少の御參考になりましたなれば、之を手始めに、將來益〻禪の御研究を試みて下さる樣御願ひ致して置く次第である。

あらう、然るに一夜なりとも軒場の住居をした御蔭で、つく〴〵と佛様や祖師方の難行苦行の御辛勞も味ふことが出來た、これは全く如來様の御導きだと思へば、實に有難いことなるぞ』と仰せられた。すると主人は、壁を隔てゝ之れを聞いて大に前非を悔い、此れ必ず貴とき名僧ならんと思ひ、自から手を取つて内に請じ、非常に歡待してくれたので、上人は亦も大に喜び『これも亦た如來様の御引き合はせであらう』と云はれた。終宵の物語りに、主人夫婦は大信心を發して、遂に上人の弟子となつた。此の時

柿崎にしぶ〳〵宿をとりければあるじのこゝろ熟柿たりけり

といふ歌を讀まれて喜ばれたと云ふことである。斯くの如く心念力が強固であれば、如何なる事に出逢とも、泰然自若、却て益々安樂の境界に住し、勇み進んで大道を修行することが出來るのである。

要するに參禪は、此の如き大信心を以て勤め勵みなば、寒さにも暑さにも、順境にも逆境にも堪へられる。十二時中、只だ道を行ふを以て念と爲して、無限の安樂自づから胸中に湧出するのである。是れ正しく坐禪の大功德が事々物々上に放光說法したのである。而し坐禪と申しても、決して端坐するのみの謂ではなく、此の大安心を以てすれば、日用光中の左之右之、行住坐臥が皆な王三昧の境界で、一つとして坐禪ならざるものはなく、八萬の法門は常に脚跟下に現成するのである。されば今日吾々の日常は、常に此の如き禪的生活を以てしたいものである。此の生活が取りも直さず、上は一天萬乘の至聖に對し奉り、下は吾々六千餘萬の同胞に對しての孝順心慈悲心になるのである。

の日が暮れたの一行つて見ると、日が暮れたので洋燈をカン〳〵照し、一生懸命に勉強して居る。友達連は呆れながらも『どうだ君、もう一晩見物に行つては如何か』といふと、彼れは『いや、それ處ではない、以後三十年程はどこへも行かぬ覺悟だ、殊に今日から仕事の時間を二時間ふやした』と云うたから、友達連は『でも昨晩は非常に感心して見て居たではないか』と云ふと、彼は『あゝ非常に感じた、彼の役者どもを見たまへ、此の暑いのに袷や綿入れを三枚も四枚も重ねて、踊つたり跳ねたりして居るのみか、一時間の中に三度までも死んだ者さへあつた、僕もあの藝を見ては感心せずには居られぬ、そこで一層今よりは勉強して目的の達せられるまでは、斷然、芝居へもどこへも、見物などには行かぬと決心した』と云うたさうである。精神さへ堅固なれば、どんな處へ交つても誘惑されぬ。惡魔も却つて味方になるものである。

また親鸞上人が越後の濱邊を旅行して、柿崎の濱に着いた時、雨はしどろに降つて日將に暮なんとす。僅に一軒の茅屋を見附けて、宿を求めたが斷られたので、止むなく、二人の弟子と共に軒の下を借りて、石を枕に寢られたのである。處が風は吹く、雨は顔に降り掛かる、寢ることも叶はず、夜半の頃起きて、端坐して念佛を稱へ始められた。二人の弟子は御氣の毒に思うて、涙を流して御慰め申せし時、上人の仰せらるゝには『決して其の樣に心配をしてくれるな、私は今晩と云ふ今晩は實に有り難く感じて、限り無く喜んで居る、何故かと云ふに、若し今夜此の家で宿を借してくれたれば、今頃は快よく眠つて居るで

とある。實に然りで、艱難は我を玉にし逆境は我を鏡とするものである。凡そ世の中の事は

思ふこと一つかなへば又二つ三つ四つ五つ六つかしの世や

で、此の世の中の顚倒こそ却つて吾人修行の好資糧である。吾人の精神にして確固不動ならば、適くとして可ならざるなしである。順逆二境が直ちに菩薩修行の大道場となるのである。

安樂の法門

此の境界に達すれば、如何なる境遇に處するとも、泰然自若として深入禪定、即ち王三昧の境となる。是れ禪の妙境界であるから、承陽大師は坐禪儀の中に

所謂坐禪は習禪には非らず、唯だ此れ安樂之法門なり。

と仰せられてある。三業の紛亂を靜止して自己心の安寧を得ば、進んで安住不動如須彌山となりて、如何なる事物にも動ぜぬ樣になる。是の如くなる時は、前に述べたる如く、順境も、逆境も、皆な身心學道の因緣を助けてくれるものである。

或る所に一青年があつて、職務に勉强ばかりして他を顧みることが無い。そこで他の友人が、一つ彼を道樂仲間に入れてやらうと、一日、漸く勸めて芝居見物に誘ひ出した。生れて初めての見物であるから非常に感心して歸つた。そこで惡友どもは大いに喜び「彼は必ず芝居道樂になるであらう、明晩は必ず奴か

若經ともなりて、法華經ともなりて、展轉せられて居るのである。雲門大師は、塵々三昧の問に答へて『鉢裡飯桶裡水』といふたもこゝの意である。承陽大師は法華經と題して

この經のこゝろを得れば世の中のうりかふ聲も法をとくかな

と仰せられた。威儀即佛法作法是宗旨で、日用の七顚八倒する其の處に、立派な佛法が現はれて來るのである。

佛心とは大慈悲心是れなりであるが、心ばかりではない、此の身の全體が御慈悲の結晶體とならねばならぬ。承陽大師は典座教訓の中に、

一莖草を拈じて寶王刹を建て、微塵に入りて大法輪を轉ず云々

と示されてある。斯うなれば、一本の菜も、一粒の米も、皆な立派な佛國土、廣大なる菩提道場となるのである。斯くの如き功德を現前する樣に修養を積めば、順逆の二境も盡く一場の遊戲三昧となるので、佐藤一齋の語に

順境如レ春　出遊觀レ花　逆境如レ冬　高臥觀レ雪　春固可レ樂　冬亦不レ惡

とあるが、修養の力が進んで來れば、順逆二境共に吾人修養の增上緣となりて、無限の妙趣を供給してくれる。故に春固より樂しむべし、冬も亦た樂しむに堪ふるのである。菜根譚に

世路の風霜は吾人練心の境、世情の冷暖は吾人忍性の地、世事の顚倒は吾人修行の資

一行一切行

以上の如くなることを得ば、喫茶喫飯の上にも八萬の法門は備はるのである。是れ即ち一行一切行であつて、禪の功德莊嚴である。臺所の仕事などはつまらぬ事の樣に思ふものもあらうが、決してさうではない。菜を調へ味噌を摺る處にも亦た立派な佛法があるのである。されば吾人は、庖丁を持つ上にも、御飯を炊く上にも、大乘の佛法を轉じて行かねばならぬ。我が高祖承陽大師は示庫院文の中に『臺所の仕事を營むのは天上人間の佛法である、粥を呼ぶにも御粥といひ、朝粥とも申すべし、齋を呼ぶにも御齋といひ、齋時とも申す可し、舂で米を搗くをも米白め參らせよと申すべし、米つけと申すべからず、米をとぐことを淨米し參らせよと申すべし、米かせといふべからず』といふ風に御示しになつてある。萬事が此の心でゆけば、身心の全體が盡く佛法の威儀となる。世の人々が算盤を彈いたり、鍬鋤を持つて業務を勵む上にも、やはり同一の修行力を備ふることが肝要である。此の信念と行持とを以て、凡ての事に當りてこそ、米一粒の上にも佛法の功德が現はれ、佛陀廣大の慈悲が現はれるのであることを知らねばならぬ。

凡て人間生活の事々物々の上に、佛法の第一義諦が功德を現はすのが活佛法である。斯くの如く平生底の仕事にも、眞理の全體を盡し道德の光輝を放つ時には、一本の大根も一粒の胡麻も皆な佛となり、大般

作用を缺て居る。未だ維摩の叱斥と衲僧門下の三十棒を免かれぬ輩である。故に須らく、向上更に向上の事あるを知らねばならぬのである。

身心學道

佛法には身心學道といふことが大切である。日蓮上人は『口で法華經を讀むものはあるが、心で讀むものは少ない、此の日蓮は心で讀む、また心で讀む人は多少はあつても、身に讀む人は無い、此の日蓮は身に讀むぞ』と云はれたが、流石に有り難い語である。此の『心で佛教を讀み、身で佛教を讀む』のが、眞箇の佛教的修養で、身心共に大道の活動體となるのである。

膽は大ならんを要し．心は小ならんを要す。細かい處に佛教道德の修養が大切である。塵も積れば山となる、細かい道德が積聚して如山の佛德を成ず、此の心を以て平生底に用心を怠らざれば、凡ての行動が佛行菩薩行に契ふものである。吾人日常の行事が、自づから天地の大公案に一致する處に禪の妙機があるので、單に見識のみでは眞實の禪者とは許されぬ。そこで禪門では、道德的標準として戒法を尊重するのである。吾々が日々の行持に注意して、身・口・意の三業を調攝して、道德上の規律に隨順し去れば、其の動作が佛教の玄旨に契ひ、天地の眞理、宇宙の大道と一致するのである。

けられぬ。然るに太守は、耳を貴んで目を賤しむ樣に、後者の接待を嫌うて前者の應接を好まるゝにやと云はれた。是に於て李翺は語を改めて『道とは何んぞや』と問うた。時に藥山手を上下にして『會すや』解りましたかといはれた。李翺は『不會』何にが何にやらさつぱり解らぬ。時に藥山は『雲は青天にあり水は瓶にあり』と答へられた。即ち青天には雲ありて靆き水瓶には水ありて湛ゆ、是れ皆な大道の面目ぞとの御示しである。すると李翺は、言下に忽然として大悟し、偈を作つて呈せられた。其の偈に曰く

　鍊得身形似鶴形。千株松下兩函經。我來問道無餘說。雲在青天水在瓶。

絶學無爲の閑道人は、胸中淸白、閑雲野鶴と同參で、迷悟凡聖、一塵の止まる所がない。此の時、大道は宇宙に充滿圓通し、雲は青天に在り、水は瓶に在り、長者は長法身、短者は短法身である。之れ實に天地の大公案で、天地の大精神である。此の大公案に參究して、天地萬物總に是れ佛心の光明なることを悟了せば、玆に始めて確固不拔の大安心を得るのである。

　さればとて、世間超脫の處に住着しては、未だ以て天地の妙用を顯はし佛性の靈機を撥轉することは出來ぬ。故に禪門では、之を向上の死漢と云うて居る。そは何等の活動も無く、慈悲の淚も無く、順逆縱橫の分が無いからである。されば此の大無我大安樂の位地より大死一番大活現成して、身を差別界に躍らして大活動を演ずるのを、百尺竿頭進一步と云うて、禪門の最も要機とする處である。唯無我的修養の結果、宇宙の平等一色光中に止まつて居るのは、自己の解脫安樂は得たりとするも、衆生濟度の活

然らば縱令、趙州無字の公案を工夫するも、または主人公の公案に參ずるも、終には宇宙の大精神、天地の大公案に歸着して行かねばならぬ。蘇東坡の所謂『溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈淨淸身に非らさんや』で、自己に確實なる禪觀あれば、山川草木も皆是れ淸淨法身となり活佛教となるのである。法界は唯心造である。其の人の境界に依て世界觀が異なるものである。法華宗の人が、鶯の鳴く聲を聞くと『法々華經』と聞ゆる。眞宗の信者は『法を聞け』と聞く。是れ眞宗は聞法歡喜の緣を欣んで居るからである。一切の事は皆な是の如くである。然れば宇宙人生を、悲觀するも樂觀するも、穢土視するも淨土視するも、畢竟自心現である。唯だ正知見の人は實相を見ることが出來る。實相を證すれば萬法一如である。

昔、支那の有名なる、韓退之の高弟李翺と云へる大儒があつた。朗州に刺史たりし時、禪門にて有名なる藥山和尚に參じたが、其の前に、幾度か藥山の下へ使を遣つて招待したけれども、和尚は更に應ぜられぬから、遂に自ら出馬して謁せられた。すると藥山は、經卷を執りて更に顧みなんだので、李翺大に不滿を抱き『面を見るは名を聞くに如かず』評判は高いが遇うて見れば禮儀も知らぬ和尚だというた。時に藥山は『太守、何ぞ耳を貴んで目を賤しむことを得たる』凡そ人の待遇には、お世辭を言うて取扱ふ場合もあらうが、また默々として相接することもあらう、其の形式は異なりても、耳と目との如く輕重はつ

か』と尋ねた。すると巡禮は『關東の景色は雄大で、京都の風光は優美で、夫々特色がある、各國到る處其の國、其の場所に於て、各々特色を發揮して居る、何所へ行つても唯一無二の景色を有つて居る』と答へた。此の巡禮却々の風物論を吐いた。時に山寺の晩鐘がゴーンと一聲響いた。此の際、巡禮は『旦那樣、あの鐘の聲だけは何處に行つても同じであります』と云うた。唯だ此の一言を聞いて、道灌は忽然として省悟したと云ふことである。吾々お互も、從晝至夜に無間斷に工夫に努めなば、必ず一生參學の事を了することが出來るであらう。

次に坐禪は必ず、精神の動搖を靜止して身心脫落に至らねばならぬ。迷悟ともに放下することが眞に開悟する所以の道である。唯だ悟るが爲めの坐禪、即ち習禪では眞實の王三昧ではない。參禪者が與へられたる公案を工夫するのは、決して不是とはいはぬ。併し、坐禪と工夫とを混同して、工夫するが爲めの坐禪と思うてはならぬ。達磨大師は大悟徹底の御方であるが、九年の間常に面壁端坐せられたではないか。釋尊は一見明星開發悟道の後も、常に王三昧を起ちたまはなんだ。御說法の度毎には必ず坐禪入定して、而して後に說法せられた。故に工夫の爲めの坐禪と考へてはならぬ。尤も、坐禪三昧の當處が、そつくり活公案となるのである。坐禪を以て無工夫の大工夫ともいはれる。要するに、宇宙の大精神に向つて參究するのが、工夫の極處であり、また坐禪の妙處である。必ずしも佛祖の談片に依るのを公案といふ譯ではないのである。

宋の劉忠定が司馬溫公に向つて、心を盡し己れを行ふ上に於て、一生涯心得とすべき事を問はれた時、溫公答へて『其れ誠乎』と云はれた。卽ち、生涯の修養の標準は誠の一字であらうと云はれたのである。是れ卽ち道德の根底を盡して居るものであらう。此の至誠眞實の德を心に抱て修養怠らざる時は、一切の行爲は自づと道德の格則に適ふものである。さすれば誠の一字亦た是れ一種の公案である。劉忠定公は、進んで其の誠を養ふ方法を問はれた。溫公の答へは『妄語せざるより始めよ』と云ふのであつた。妄語をいふな、是れ誠を全うする所以の入り口である。固より學問に親切なる劉忠定公であるから、之れを聞いて、初めは最と易きことゝ思うたが、實際行うて見られると、偖て却々むつかしく言行矛盾する事が多い。常に心を正直に持つて居ても、いつの間にか破れが出る、遂に力行七年にして漸く成るとある。劉公は不妄語の三字を標準として、誠字の公案を實參實究せられたのであります。

更に進んで、道の本源、自己の堂奧に參する標準が禪の公案である。太田道灌は主人公の話に參じ、主人公の三字を以て公案としたのである。此の公案に對する工夫には非常に骨を折つた。路を步みながらも專一に主人公を硏究したのである。主人公とは人々の一心である。衆生の本心である。水を飮めば冷たい暖いと知る底の心は是れ何物であらう。惜い欲しい憎い可愛いといふ心の實體は如何なるものであらう、道灌は寐ても覺めても、此の主人公の公案に向つて工夫の全力を盡して居られた。或時、道中で一人の巡禮に逢うた。彼れの生國は京都である。其處で道灌は『關東と京都地方とは何方が景色に富んで居る

師家に依つては、臨機に公案を授けて工夫せしむることもある。此の看話禪と默照禪とに就いて、夫々優劣を判斷し得失を批評する向もあるが、兩方共に其の根源は一つであるから、其の應用は師家の活手段に待たねばならぬ。

設令、曹洞禪にしても、時ありては公案を授けても妨げはない。修業者の根機に應じて公案を授ける方が却て便宜の場合もある。諸君も眞に坐禪をしようとするなれば、初心の間は、此の公案に依つて工夫する方が開悟の早途である。而して禪定力が進んで來れば、遂には無我無心になつて、迷悟の外に超然として、格外の見知を開發するが宜しいと思ふ。要するに最初は看話禪より入り、後に默照禪に進むが實際上適切の樣に考へる。私は、常に雲水を接得するに此の順序で行つて居るが、之れが一番參禪者を誘引するに適當な樣である。

坐禪と工夫とを混同すべからず

然しながら、公案を工夫するのが坐禪の目的の全體であると思ふは大いなる間違ひである。此の工夫は、坐禪すると否とに係らず、初發心の當時より從晝至夜に爲すべきものであるから、吾人の行住坐臥習時も放過せず、道といへる大目的に向つて、常に研究的修養的態度を取て行くことが肝要である。凡そ世間求道の士でも、道に親しき者は必ず一種の公案を有したものである。

案より得たる一種の悟道であつて、一粒の米が工夫の標的となりて安心立命を得たのである。

達磨大師は、梁の武帝に對して不識と云はれた。此の不識の二字の如きも千古の公案である。此の不識の公案を工夫して悟りを開いたのが上杉謙信である。太田道灌は瑞巖主人公の話に參じて、主人公を以て公案として大悟した。されば理窟や分別で考へると單に學問となるから、寧ろ沒滋味なる不識とか主人公とかいふ、意味の解釋のつけられぬものに向つて工夫を下し、以て自己本來の面目を自知自得するのが禪の證悟である。故に公案は、參禪をして悟りを得る爲めの一大標準であるから、禪者たる人は始めから此の公案を提撕して、打成一片の修行をするのが非常に便宜である。つまり公案といふは、參禪研究の標準と見るべきである。

現代に於ける臨濟曹洞の禪風

然るに坐禪と公案とを混同して、公案を工夫するが爲めに坐禪をするのであると思うては、大なる誤解を生ずることがある。尤も臨濟禪の行り方は、所謂看話の禪と云うて、專ら坐禪の上で公案を工夫させる。即ち、參禪者に對して古則の斷片を授け、之れに依て自ら猛烈に工夫せしめ、一關を透れば更に一關を設け、漸々に堂奥を究めしむるのである。之れに相對して曹洞禪の方は、所謂默照禪の方である。之れは別に工夫の問題も授けず、公案も何にもなく、不思善不思惡無我無心に兀坐を打するのである。尤も、

つ、最早世の中に立つて何等の活動をなすべき見込も立たず、嗚呼生き甲斐もないことであると思つて、三度までも死を決した事がある。然るに或る時、御膳に向ひ食事中、御飯粒の膝に落ちたのを、手探りに拾うて戴いたが、其の瞬間に忽然と大に悟る所があつた。『萬物の靈長たる人間が、たつた一粒の米を頂くのであるが、何所に此の米の價値があるのであらう、思ふに此の一粒の米には幾多艱難の歴史を有つて居る、土用の暑い最中に燒くが如き沸え立つた水田の中に育ち、汚れた肥料を浴せられ、雨に打たれ、風に吹かれ、漸やく秋になつて僅かに實を結べば、鎌を以つて刈り取られ、臼にて搗かれ、また水の中で洗はれ、釜に入れられ、火にて焚かれ、最後に人間に食はれる、これが米の進化でありまた向上である、されば米の一生は實に獻身犧牲の生涯である、故に萬物の靈長たる人間にも斯くまで貴ばれるのである、さすれば吾も亦た、今こそ眼は無いにもせよ、幸に精神の在るあり、若し能く獻身犧牲の精神を以つてせば、必らず人生の目的を全うすることが出來るであらう、また人より尊敬される樣な行ひも出來るであらう』斯く省悟すると身心共に廓然として些の罣礙なきに至つた。後、終ひに村長となるに至りて、村の地主より米を貰ひ、盲乞食とまで云はれながら、遂に三千圓からの小作人保護金を積み立てゝ小作人を救助するの資金となし、村の行政に大改革を施し、村民の農業を奬勵したので、村内は忽ちに面目を一新し從前は其の村の米質が良からぬので、他所よりも一俵に就て三十錢位安値なりしが、今では他村より一俵の價格が五十錢位高くなつたと云ふことである。此等は固より禪宗の悟りとは違ふが、やはり一粒米の公

つて咀嚼し得ざるもの、即ち意味の容易に分り悪く、一寸判斷の付き難い語句を、公案として授けるのである。是れが爲人接衆の活作略である。本より研究の目的が、宇宙の眞源、佛性の靈機を直覺せしむるが爲めであるからである。

例へば有名なる趙州和尚無字の公案の類である。其の無と云ふ意味の公案に向つて、猛烈に工夫するのであるが、然し、此の無の字に理論上の解釋などを施せば、それは學問となり智解となりて無の三昧に入る事は出來ぬ。禪は直覺的であつて、工夫の結果、天地宇宙を空じて、徹底無の三昧になり切てしまはねばならぬ。靈雲和尚は曾つて桃花の開くのを見て悟つた。桃花は靈雲の公案であつた。また香嚴和尚は大學者で且つ雄辯家であつたが、どうしても眞箇の安心を得ること能はざりし爲め、獨り草庵に住して工夫を凝して居た。或る朝、箒を執つて前庭を掃除して居た時、小石が迸つて竹に當りカチンと音がした。其の響を聞いた途端に大悟したと云ふことがあるが、之れ皆な眞理を直覺したのである。參禪工夫の力猛烈なれば、山河大地一として好箇の公案ならざるは無い。

四國の愛媛縣松山在、餘土村の村長として、模範村長の名も高き森恒太郎と云ふ人は、日清戰爭の際、縣參事會員として縣民を代表して、廣島の大本營に天機を奉伺したが、圖らずも旅館に於て眼病に罹り、東京に來りて醫療を盡したるも其の効なく、終に三十何歲かで兩眼を失ひ、非常に煩悶して殆ど絕望の極に達した。二人の男女の小供あるも其の顏も見られず、母親が常に嘆かれるに就ても彌々苦悶を增し、且

の言行は、一言一句、一擧一動も皆な千秋不磨の敎訓にして、天下の修行者は萬世の後までも、之を模範として參究せねばならぬものであるから公案といふ。また佛祖の下されし宇宙の大問題であるからして公案と稱すとも見られ得る。

彼の孔子が門人に對しての、日常の敎訓、家庭的の談片が、一部の本に編輯せられて論語となつた。此の談片も亦た吾々の道德上一種の公案ともいふべきである。況んや釋尊一代の說法、祖師歷代の行持は、其の一擧手一投足が、やがて八萬四千の法門とも、一千七百則の公案ともなつて、吾々參禪者の依り所となり、また規範となつたのであるから、皆な是れ一大公案と謂つ可きである。其の他、吾人の研究の題目となり、また萬世不易の規範となる可きものは皆盡く是れ公案である。蘇東坡は『溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身』と詠じたが、此の時は眼前の溪聲も山色も、天地間一切の萬境が、總て是れ大公案であつたのである。縱令、吾々の如き一介の匹夫でも、其の說く所理を詮じて法に契へば、亦た以て百世の師範となすに足るべし。また縱ひ一言でも半句でも、能く法を現はし道を盡すことを得ば、必ずや天下の人の標準となるものである。

然し、普通禪門に於て授くる所の公案は、極めて沒滋味というて、趣味も無く理論も無い樣な文句を擇んで居る。元より佛の一擧手一投足、祖師の片言隻語、何にもかも取つて以つて公案とすることが出來るが、其の中に就て、最も吾々の工夫力を進め研究心を向上せしむるに便宜なる爲に、殊に通常の分別を以

公案は參禪の標的

禪門では、臨濟宗ばかりでは無い、曹洞宗でも多くの場合に公案の工夫を勸める。即ち公案なるものを授けて之れに向つて工夫せしむるのである。工夫と云ふことは研究の意味である。然し禪書の中には、工夫と云ふ字を修行と云ふ意味に用ひてある場合もある。殊に普勸坐禪儀の中に『專一工夫、正是辨道』とあるは、全く修行といふ意味になつて居る。併し、概して工夫といふ語は研究の意味と見るが宜い。然らば、其の工夫の標準となるものは何であるかと云ふに、即ち公案である。

公案とは全體如何なるものであるか。公案は公府の案牘と云ふ語から出たので、其の字義は、今日で云へば政府が議案を議會に提出し、議會は之れを審議して彌ゝ可決の上、陛下の御裁可を得、最早動かすべからざる案書となつて、之れを總理大臣の卓上に置かれたのが公案である。此の公案には絶對の權威があつて、國民全體が必ず服從しなければならぬものである。之れと同じく、佛を始め歷代の祖師及び聖賢方

て宗旨宗派の別はない。坐禪をするにも、此の信仰力に依つてこそ禪の價値が現はるゝので、此の信力に由つて日常の生活に無上の快樂を生じ、之に依つて無始劫來の罪障を消滅し、進んで度量も寛大となり、和顏愛語の德も現れる。また之に由て、將來に期する所の希望も遠大となり、又之に依つて

衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。

と云ふ永久無限の廣大なる誓願をも發するのである。故に吾人は、是非とも信仰を以て萬行の基となし、之に依つて佛德を修むることに努むべきである。

要するに、信仰は前述の如き功德あるを以て、道元功德の母とも申すのである。實に信仰は佛敎の生命であり、また禪の生命である。信仰なきの禪は死したる禪であつて、宗敎として人心を指導し、人生を濟度することは出來ぬ。故に諸君は、一層清淨無垢なる信仰を增進し、以て正しき禪道の修養を積み、此の身心に於て、明らかに佛の大慈悲大光明に浴せられんことを希望するのである。是れ禪に於ける念佛觀である。

面白いなどといふ人がある。一休和尚は非常なる高僧である。其の行動は普通人の測り知る所では無いが、此の關の地藏の話などは、全く後人の揑造であらうと思ふ。若しこんなことが禪門の機用であるなどと思うたならば、大間違である。彼の丹霞の木佛を燒き、南泉の猫兒を斬りしが如きも、其の人にして始めて成し得らるゝことで、未だ確實なる信念も無く、また着實なる參究力も無きものが、妄りに外形を眞似たならば無間獄の罪は免れぬ。禪病は澤山あるが、多くは知見に走つて信念と敬虔同情の德を失する處にある。

承陽大師の親訓

されば我が承陽大師は、正法眼藏生死の卷に

（前略）厭ふことなく、慕ふことなき、此の時、初めて佛の心に入る。但し心を以て計ること勿れ、言を以て云ふこと勿れ、唯だ我が身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛のかたよりおこなはれて、是れに從ひもて行く時、力をも入れず心をも費さずして、生死を離れ佛となる

と示されてあるは、まるで法然上人や蓮如上人の御文章を見る樣である。是れ正しく信仰上の格則であるからである。されば信仰が進んで其の極致に到れば、自づと己れと云ふものが泯じて、平生の一擧一動も皆な佛の光明の現はれとなり來る。此の時始めて念佛の功を奏したのである。佛敎は一揆である。決し

いふ音が出る樣なもので、撞木の自己と鐘の佛とが互に感應道交して、玆に始めて眞實の信仰が湧き立ち自己佛性の大功徳が現前するのである。

念佛の功は自他冥合の處にある

故に、念佛の極致は自他冥合の處にあるので、佛と我とが自然に融合しなければならぬ。眞言宗でも、我が功徳力と佛の加持力と相一致した處に法界力が現はるゝと云うてある。此の法界力といふが宇宙の大精神である。何れの宗旨でも、其の結局は玆に歸着せねばならぬ。而して其の根本は信仰である。故に佛に對して至心に信ずる感想が無かつたならば、如上の如き功徳は得られぬ。若し此の信念なかりせば宗敎信者として乾燥無味なるものである。

禪病といふのは禪の上に有りがちな弊習である。禪弊は知見を重んじて實行を輕んじ、機鋒に偏して敬虔に乏しきを致す。故に其の結果は剛愎なる氣質に陷いる。是の如きは其の信心が堅固ならざるより起る。一休和尚には色々の附會した說がある。伊勢の關と云ふ所で有名なる關の地藏の開眼を賴まれた時。和尚は

　汝是小畑山之石。今日有緣作地藏。我是空劫以前佛。曲耶地藏曲地藏。

と唱へ、直に進んで其の頂きに小便をしたといふ傳說がある。こんな話しを聞くと、如何にも禪的で頗る

然らば、禪は自力か他力かといふに、何れにも偏せぬ。普通に禪は自力であるとのみ斷ずるは皮相の見である。我が承陽大師は法轉我轉と云ふことを示されてある。法轉といふは、我れを制して無我となり、唯だ佛の法に此の身心を任せて了ふのである。此の時は法のみあつて我れといふものは無い、絶對の他力である。否、絶對であるから他力といふ名も無い。蓮如上人の御聞書の中にも

一心とは、彌陀をたのめば如來の佛心と一つになしたまふが故に一心といふなり

とある。此の時は佛と我れとが一如にして寸毫の隔ても無いが、又

佛法は無我にて候上は、人にまけて心をとるべきなり、利をさけて情を折るこそ佛の御慈悲なりと仰せられ候

ともある。佛法は無我主義であるに依て、自己を忘れ我見を投げ捨てゝ始めて眞信仰を得べきである。世の中の名聞利養等の凡情を捨てゝ、徹底沒我の境になつて唯だ〳〵一心に佛を信ずる、此處に至れば、我もなくまた佛もない、佛と我とが一致する。此の時始めて無我の大我が現はれる。卽ち自己本來の佛德が顯現する。これが我れ法を轉ずるといふ我轉の處である。絶對に法と一枚になつた時、始めて絶對なる大我が現はれて、八萬の法門も自己の手脚となつて自由に使はれるものである。

それゆゑに、自力と他力とは其の語は大に異なるも、其の極端に至れば共に相一致す可きもので、之を禪宗では感應道交と云ふのである。恰も、鐘と撞木とは別々であるが、兩方が互に一致した時、ゴーンと

故に我が禪門に於ては、唯心の淨土己身の彌陀とも云ひ、維摩經にも『心淨ければ佛土淨し』ともある。吾々の一心が眞に能く清淨であれば、此の世界も亦た自づから寂光淨土である。若し專心自己に向つて阿彌陀如來を念ずる時は、阿彌陀如來の光明は必ず吾が全體を覆うて入我々入し、遍法界の佛光は自己方寸の中に輝き渉る、是れが主觀的念佛である。

また佛を客觀的に立てゝ念ずるは、所謂指方立相である。西方を指して極樂の相を立つるといふは淨土門で用ふる語であるが、我が禪門に於ても、或は五佛を立て、又は塔婆にも東西南北に分ちて四智を配當したりするのは、畢竟指方立相である。是の如く客觀的に佛を置いて念佛をするのは、客觀的念佛であるのである。佛殿に佛を安じて禮拜供養するもの亦た客觀的念佛である。

また成佛道の主力を論ずるに、自力と他力との區別がある。言ふまでもなく、一應判斷する時に、主觀的念佛は自力で客觀的念佛は他力である。自力とは自己即佛なりと信じて、發心・修行・菩提・涅槃の準則に基づきて、自己の修證力に依て成佛を期するのである。恰も手習をするには手本を要するが、手本に依るの目的は自身が字を上手に書くにあるので、手本其の物は目的物ではない。手本を借りるのを手段として、自分の手で文字を立派に書く樣になるのが目的である。斯く自己の修行力に依つて成佛を期するのが自力である。之れに反して、飽くまで自力を沒却して、唯々佛の御慈悲に此の身心を打任せ、佛の御導きに縋がりて成佛するのが他力である。

も持てば錢勘定もする、朝から晩までには千萬無量に働くではないか。併し其の本體はと云へば、皆な大慈大悲の功德の現はれであるから、吾々にして徹底慈悲體になりきることを得ば、吾々も亦た千手千眼の觀音菩薩である。

とにかく、佛の對機應現の作用を拜するのは觀像念佛である。此の觀像と觀想とは相と用とに通ずるから、報身も應身も念ぜられる。而して、稱名念佛も相と用とであるが、其の妙處に至れば、無論、體相用の全體を該ねて居る故に、己れを捨て我を離れて一心に念佛を稱ふる時には、法報應の三身が一體となつて其の身に感應するのである。

唱ふれば佛もわれもなかりけり南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と云ふ處に達すれば、念佛も亦た人境不二の大理想境に到着したものである。

主觀的念佛と客觀的念佛

佛の功德には種々の方面があるからして、之に對する念佛にも亦た、宗派々々に依て色々な別がある。然し約して見れば、主觀的念佛と客觀的念佛との二種に分けることが出來る。我が禪門の如きは主として前者である。尤も、客觀的に佛に歸依することは勿論であるが、究竟の目的は直指人心見性成佛である。淨土宗眞宗等の如きは後者に屬する。

て居ても、其の精神が日常の行の上に現はれなければ何等の價値もない。故に佛教では、佛が三大阿僧祇と云ふ限り無き間の修養を積まれて得られた果報が、佛身の功德莊嚴であると說いてある。即ち、道德的習慣を作り上げた體が報身である。彼の阿彌陀如來の如きは報身佛であるからして、三十二相を具足したまふ處ではない、無數の相好と功德とを具へて居られる。頭上より脚下の爪先きに至るまで、一毛孔の上にも、吾々の想像し能はざるほど無量の功德を具へられて居られる。

此の無量の德相ある報身が、無量の衆生に無量の妙用を起し、機に應じて濟度せらるゝが應身である。是即ち三大の中の用である。恰も明鏡が大小長短その儘の形を映す樣に、佛は大慈悲誓願力を以て、一切衆生の根機に應じて、千變萬化、濟度の手段妙用を發現せらるるのである。

以上、法報應の三身と四種の念佛とを略說申したが、此の兩者を對照して見れば、法身の相を觀念するのが實相念佛、報身の相を觀念するのが觀想念佛、千萬無量の濟度の妙用を觀念するのが觀像念佛である。尤も木佛畫像には報身佛もあるなれども、眞の報身は筆に描かれるものではない。それから隨類三尺一丈六と云うて、應身にはまた無數の相がある。觀音菩薩の三十三身なども皆な應身佛である。

吾々は、千手千眼の觀音大士を拜すると、實に有り難い感じが起る。大士の應機利益の作用は、千手千眼であるが、其の本體は唯一大慈悲體である。吾々の手や眼もやはり千手千眼で、一日の中、一時の間にも、如何ほど澤山に手や眼を働かすか判からぬ。僅かに二本の手なれども、箸も持てば茶椀も持つ、算盤

取も直さず佛の經巻となりて、始終經文の讀み通しとなる譯である。斯くなりきるのが眞箇の實相念佛であるのである。

佛の三身

抑も念佛の主體たる佛には、三身というて三種の區別がある。即ち、法身・報身・應身の三身で、通途に法報應の三身と稱する。此の三身は、つまり體・相・用の三つに當てゝ見られる。法身は佛の體、報身は佛の相、應身は其の作用である。其の中、法身といふは、佛は眞理を以て身と爲し、法性を以て命となす、即ち宇宙絶對の大眞理に一致したのが佛である。法と云うても、遠方にのみ有るものと思うてはならぬ。教育勅語の中には、我が國民道德の根柢を示されて、終りに

斯ノ道ハ實ニ我ガ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、子孫臣民ノ倶ニ遵守スベキ所

と仰せ下されてある。『斯の道』といふが道德的行爲の標準たるべき法則である。斯く陛下の御示し下されたる、勅語の中に現はれたる道德の法則と、自己の境界とが一致するとき、其處に法身が現はれるのである。故に法身とは無形の佛である、無形の道德的生命である。

然しながら、此の無形の佛の大精神を、實際的に身心作用の上に現はすことは容易でない。況や社會國家の風俗の上に、此の大道德を實現するには、幾多の修養の力を積まねばならぬ。純潔無垢の精神を備へ

歩くにも、仕事をするにも、きつと念佛を唱へます』と鼻高々として云ふと、上人は『左様か、まあ結構ぢやが、今少しの修行である、それだけでは未だ充分ではない』と云はれた。すると彼は『私はもう是れで充分であらうと思うて居るが、此上の修行とは』と尋ねると、上人は『お前はまだ佛様を從者として居る、お前が何にかをすると、その後から佛名が出て來るので、お前が主人で、佛の方がお伴ぢや、同じことの様でも、念佛を唱へながら御飯を食べ、茶を喫み、仕事もするといふ様にならなくてはならぬ』と云はれたと云ふ話しがある。是れは何んでもない話しの様だが、此の中に頗る甚深の意味がある。吾人が絶對的信念を發する時は、我見も我慢も無い。天地間唯一佛光明である。此の時は何事も皆な信仰の中の仕事となるのである。此の時自づから實相念佛は現前するのであります。

また印度の祖師二十七祖般若多羅尊者と云ふは、達磨大師の御師匠である。或る時、東印度國王の大佛事に招かれたが、尊者は唯だ默坐のみをして、少しも經文を讀まれぬ。其處で國王が『何故看經せられぬか』と問はれた時に、尊者は『貧道、入息蘊界に居せず、出息衆縁に渉らず、常に如是經を轉すること百千萬億卷』と答へられた。卽ち、私は出る息も引く息も、皆な佛の大經卷であるから、十二時中、少しも間斷なく御經の讀み通しであるといふ答であつたのである。吾々お互も、出る息と引く息とに依つて生命が繫つて居る。此の息には間斷が無い。然るに凡夫は、出息入息ともに惡魔の住居となつて、日々の生命を煩惱の爲めに使役せられて居る。若し然らざれば、吐く息も吸ふ息も、盡く眞理の活動であるから

に居ります』和尚『今讀んで居るのは何んと云ふ御經かいな』、傳兵衛『大般若經で御座る』、和尚『妙な大般若ぢやが、それでも御利益があるかな』、傳兵衛『ヘエ、ありますとも〳〵私は若い時分から此の經を轉讀をして居りますが、其の功徳に依つて、立派に生計を立て妻子を養ひ、家も建てれば衣服をも調へる、萬事意の如くならぬことはありませぬ。それのみでなく、向三軒兩隣りは言ふまでも無し、廣く世の人々とも交際が出來、分に應じた慈善もする、此の功力によつて、子孫の末までも安心な生活をすることが出來ます。實はお寺にある大般若經よりも、却て功徳が廣大であるかも知れませぬ』、和尚之れを聽いて『成程面白い、それでは己れもこれから學ばうか』、傳兵衛『御止めなさい、御利益の多い代りには罰の當り方も却々酷う御座います、一寸一桁の間違ひでも罰は覿面です、油斷をすれば此の世ながらの地獄にも墮ちねばなりませぬ、それよりか、貴方は御自分の習ひ覺えし大般若をお讀みなされたが宜らう』、和尚は『今後は時々遊びに來るから御馳走をしてくれよ』、傳兵衛『ハイ宜しい、併し御土産は何を』、和尚『念佛といふ御土産を持つて來よう』と、これより二人は最とも親しき法の友だちとなつたと云ふことである。斯の如く佛教を全く自己の物とし、自己即遍法界、眞如平等即ち人々の渾身なりと證得するのが實相念佛である。

併し、稱名念佛でも、其の妙處に至れば、やはり自己と佛とが一體になる者である。或る念佛の信者が其の師僧たる上人に向つて『私は常恒念佛三昧になりました、そこで御飯の時にも、御茶の時にも、道を

法であるから、千差萬別で變々化々して住らぬ。然るに

　雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の水

と云ふその落つれば同一性であるといふのが、理體にして實相といふのである。此の實相を見來れば『落ちぬも同じ谷川の水』で、現象差別のまゝが一如平等である。してみれば、佛のみが佛ではない。今日の吾々も、此の身此の儘がそつくり本來成佛である。洞山守初禪師は、或る僧に『如何なるか是れ佛』と問はれて『麻三斤』と答へた。其の時、胡麻を量つて居られたさうである、その胡麻そのまゝが佛である實相であると答へられた。實相を證すれば佛は麻三斤である、麻三斤も佛である。吾々も亦た能く諸法の實相を觀破して、自己卽佛體なることを知らねばならぬ。

昔、京都に澤井知明と云ふ人があつた。學問もあり、また能書家であつたが、其の營業は兩替店で、家號を大黑屋といひ、俗名を傳兵衞と云うた。後に禪を學び頭を剃りて頗る得る處があつた。或時、歌の中山の清閑寺の智眞長老が、知明の人となりを聞いて訪ねた。すると、傳兵衞は帳場で算盤をはじいて帳合をして居た。突然、和尙が『お前が傳兵衞であるか』と云はれると、傳兵衞『ハイ左樣、貴方は何處の御僧ですか』と問うた。和尙『俺は歌の中山の清閑寺の智眞ぢや、お前は佛法三昧だと聞えたが、そんなに算盤をはじいて居て、やはりそれも佛法か』、傳兵衞『ハイこれは大切な佛法です、私は朝から晩まで佛法三昧で、佛法を離れませぬ』、和尙『何に、佛法の中に居るといふのか』、傳兵衞『へエ、而も大乘佛教の中

三千大千世界を覆ひたまふ、佛の御慈悲は天地に溢れ六合に漲つて居る、佛は無限の智慧と權威と神通力とを具へ給うて居る、此等を觀念するのである。佛の大慈悲功德力は實に廣大無邊なることを一心に念ずる時は、其の功德光明の一分が、自然と吾々の精神の上に大なる印象を與へ、吾々の精神が任運に佛慈に化せらるゝものである。華嚴經の中に『衆生心水淨ければ菩提の影中に現ず』と云ふ御文があるが、水淨らかに澄む時は、天邊の月影が自づと映つるが如く、吾が觀念の力で心の水が淨らかに澄みわたりて、妄念妄想が除き去られた時は、忽ち宇宙に遍滿せる佛陀大聖の無限絕對の妙功德が心の中に現映するものである。

第四は實相念佛、之れは無相の佛を念ずるのである。宇宙間は一佛體である。佛身は法界に充滿して大小長短の量を絕し、生死去來の相を離れたまうて居る。天地萬象は凡夫顚倒の眼より見れば、淨穢苦樂紛然相交はつて居る樣なれど、根本の理體を諦觀すれば、平等一理、即ち一大佛身である。鳥の囀る聲、山の聳ゆる姿、水の流れ、雲の動き、皆悉く宇宙の大精神を示し、春風に咲く花も、秋天に冴える月も、悉く宇宙の大眞理の現れたものである。蘇東坡居士は此の理體を徹見して

溪聲便是廣長舌。山色豈非淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧似人。

と詠じて居る。是れ即ち天地萬象其のまゝが佛體なることを徹見したからである

凡て物には實相と假相との二方面がある。假りに現はれたる所謂現象界の方より見る時は、因緣所生の

の慈愛を請求するが如く、佛の御濟度を仰ぐ心の切なるより、無邪氣に腹の底の信念が溢れて、佛菩薩の御名號を唱へ奉るのである。

第二は觀像念佛、佛滅後の今日では、面たり佛の御姿を見奉ることが出來ないから、佛の尊像を安置し之れに向つて深く觀念を凝らすのである。曾て、外人で我が帝國大學の講師をして居られたフイノロサ氏は、非常なる佛教信者で、常に觀世音菩薩を信じて居つた。先年、明治會堂で、呉道子の描いた觀音様の畫像を掛けて演說さへしたことがあつた。其の時『此の菩薩の像を一心に拜んで居ると、自然に情慾も瞋恚も妄念も消え去つて、大慈悲の念が我が胸に湧き出して來るものである』と云はれたことがあつた。お互にしても、山水の軸でも見て居ると、なにやら俗世間を離れて別天地に遊ぶ様な感じがするものである。況んや佛菩薩の御姿を觀じて、所謂面如滿月目如蓮と云ふ様な、柔和忍辱、慈愛の溢るゝ如き容貌を觀念して居る時は、其の觀念の力に依つて、諸君と雖も、必ずや一種の不可思議の暗示を受け、自づから佛陀の慈光に攝せられ、佛陀の光明に照らされるに相違ない。故に吾々は、常に佛像を觀念して益々其の信念をつよめ、以て清淨無垢なる修養をなすべきである。今日諸君の家庭に於て、佛壇を設けて佛像を安置し、朝夕之を拜せらるゝのも全く是れが爲めである。

第三は觀想念佛、是れは佛の實德、卽ち、内部に具はり外部に表現する無限の大智慧・大慈悲・大神通・大光明等を觀念するのである。佛の光明は盡法界を照したまふ、佛の舌は實に廣長舌であつて

佛教の信者としては、佛を念ずること、即ち佛の慈悲と智慧との偉大なるに歸順して、其の救助を仰ぎ其の指導を守ることが第一の條件であつて、正しく佛教的修養の基礎となるのである。佛の人格を自己の人格とするのが成佛である。其の成佛を遂げるには、當然、念佛が基とならねばならぬのである。而して、其の念佛なるものは、淨潔なる信仰が基本とならねばならぬものである。

眞宗や淨土宗は信心を以て本位として、信心爲本と談ずるが、淨土門ばかりには限らず、佛教一般が皆な信心爲本である。否、佛教のみに限らず、凡ての宗教に信仰を本とせさるものはない。單に宗教のみならず。凡そ、吾人が社會に立ちて事業をなすには、必ず一種不可動の確心がなければならぬものである。故に孔夫子も『人にして信なくんば其の可なるを知らず』といはれてある。さて一概に念佛と申しても其の佛の念じ方が宗旨宗派に依つて趣を異にして居る。眞宗の念佛と我が禪門の念佛とは、自づから樣子が異つて居ることはいふまでも無い。

四種の念佛

佛教には四通りの念佛が說いてある。原始佛教の時代には、此の四通とも行はれたものである。其の第一は稱名念佛である。即ち南無釋迦牟尼佛とか、又は南無大悲觀世音とか、南無阿彌陀佛とかいふ樣に、佛の御名號を口に稱へるのである。恰も子供が、晝も夜も、寒さにも暑さにも、父母の名を呼んで其

禪の念佛觀

念佛は佛敎的修養の基礎

本日は『禪の念佛觀』に就いて御話しを致すのであるが、全體、禪の念佛など申すと、一寸變な樣に聞ゆるであらうが、然し、念佛は佛敎の一大要素であつて、禪門に於ても、信仰上最も重きを置かねばならぬものである。

元來、念佛の起源は、佛弟子が釋尊の偉大なる人格に歸依し奉りて、其の敎へを絕對の指南として之を尊重し、從晝至夜、其の敎へを奉戴し、且つ其の慈悲力にすがり、以て佛敎的修養を爲すところにあるのである。信を佛陀に歸して佛の慈敎を信ずる者が、常に佛を念じて暫時も忘れまじきは當然のことである。如何に佛敎的知識が發達したればとて、有り難く佛を念じ奉る思想がなかつたならば、決して佛敎信者とは云はれない。今日は帝國大學あたりでも、精密に佛敎を硏究されて居るけれども、其等の人々を以て直ちに佛敎信者と云ふことは出來ない。それは佛敎の學者である故である。

い様になる。唯だ我が心の欲する處に從つて矩を踰えずと云ふ境界になるのである。
例へば、勤勉を好む人には休日が却つて面白くなく、勤勉の生徒諸君には日曜が減じて欲しい様になるもので、これが修養の稍や成功した人である。吾々が一度志を立てゝ道を行ひ、それが段々と薫習して道德が習慣性となれば、遂には其の道を行ふ上に無限の趣味を感じて來るものである。深草の元政上人が線香の詩に、

線頭亂緖白雲香　變態百興終不常　淸話濃時尺還短　安禪倦處寸猶長

というてあるが、面白い詩である。線香其のものは同一であるが、面白き話しでもして居るとぼりぼり方が早い。そして、退屈の時には非常に遲い。是れ吾人の心に長短があるのである。
要するに、此の大信念より出でたる道德的活動は、天地の大道を濶步し、宇宙の眞源に徹底し、三世の諸佛と同道同行である。故に吾人日常の造次顚沛も、そつくり佛心に契ひ倫常に順じ、知らず識らず世道人心を利益して行けるものである。此の任運無作の妙行が佛敎の道德であつて、取りも直さず我が禪門に於ける倫理の實行である。

といへる明治天皇の御製の如きは、實に信仰の最大龜鑑である。自己心中に一點の曇りもなき時、神佛の御心は自づと我が心に宿るものである。吾々は幸に佛敎の恩力に依つて見佛聞法の緣を結び、永遠の樂果を期して歡喜の間に日常の生活をして行けるのは、誠に佛の御慈悲であると信心渇仰して行く時には、此の五濁惡世の人生もさながら、清淨の佛國土の如く、日用光中、實に面白く有難く且つ愉快に其の職分を努めてゆくことが出來る。眞の極樂は、決して西方十萬億の先きにのみあるものではない。唯だ吾々に正しき信仰さへあれば、その信念の中に極樂淨土はある。縱令、身には人生の艱難辛苦を甞むるにもせよ、心は誠に無上の樂しみに浴するのである。母親が子供を育つるに其の身の艱難は如何ばかりであらう。けれども、心の樂しみは亦たそれに倍するものがある。佛の行持も亦た是の如く、娑婆往來八千返は佛心の樂事である。吾々も亦た人生に大活動して行きながら、心に無限の樂しみを感ずる樣にならねばならぬ。

凡べて人格には上・中・下の三等の別がある。下等の人は善を善として行ふ能はず、惡を惡として止むる能はざるものである。中等は務めて善を行ひ惡を去り、修養の力に依り非常なる勤勉と忍耐とを以て善道に入るのである。上等の人格は善を行うて善を忘れ、惡を去りて惡を忘ると云ふのである。吾々が一日の光陰も空しくすることなく、勉强努力して息まざる其の時には、修養の功成つて、自づから惡を去り自づから善を行ふやうになる。故に、惡を去りしといふ觀念もなく、善を修めても修めたといふ觀念もな

善神にも恥づるが如き心なく、一擧一動が佛の大道に合する樣に行ひもて行かねばならぬ。蓮如上人の敎にも、『佛法は無我にて候』と有て、『我れが』と云ふ此の我見我慢の勝手な了見があつては、決して佛の大道に一致して行くことが出來ぬ。獻身犧牲といふも畢竟無我的修養の結果である。吾々は日常喫茶喫飯の上にも、此の無我的修養を積んで行けば、決して人と無益の爭を起したり、或は不法の行爲を敢へてしたりする樣なことは無いはずである。

斯の如く無我的修養が佛敎道德の根本であるが、其の無我を實行するには、己れを忘れて專一に佛の敎を守り、其の大道に順じて行くのが無我の無我たる所以である。若し其の敎に背き道を枉ぐる心が生じた場合は、差措かず强固なる克己心を以て自から其の心を制し、且つ佛を以て慈父の想ひをなし、飽までも佛の敎へを有難し忝けなしと思ひ、常に佛の照覽を畏れ、佛の御濟度を喜ぶべきである。是れが信仰心の發現である。而して、信仰心には嘘があつてはならぬ。どこまでも誠心でなければならぬ。故に、明治天皇の御製にも

鬼神も泣かするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

と仰せられてある。誠の心は鬼神をも感動せしめ、神や佛にも感應するの力がある。我が大君の如き、御代々非常に御信仰深くましますことは、御製の上にも溢れて居る。

曇りなき人の心を千早振神はさやかに照し見るらむ

て、大丈夫永久の爲めになること、安心の源となることを施して行かなければならぬ。此の利行に背けば、縦ひ布施を行うても何の役にも立たぬことゝなる。

第四に同事とは、其の時の場合、其の人の境遇を見て、之に順應し同化して衆生の安寧幸福を計り、または其の智德を增進して行くことである。我が禪門の如き、未だ十分に盛大を見る能はざるは、此の同事方便の行に乏しい爲めではあるまいか。如何なる眞理でも經典でも、應用其の宜しきに適せざれば其の功を現はすことが出來ぬ。宗敎發展の如何も全く此の同事にあるものである。

吾々は能く、以上四種の願行を守つて行けば、人生に處して能く佛心を發動し、自然に道德を圓滿して他人より束縛せらるゝこともなく、身心共に安樂に大道の妙味を感じて行くことが出來るのである。されば吾々は此の願行を愈々實踐し、以て社會人道の爲めに盡さなければならぬ。而して、是れが全く佛性本具の慈悲心の顯現である。

無我と倫理

孝順心慈悲心は、全く吾人本具の妙法の德相であるから、之を實踐するには、我見我慢を捨てゝ天地の大道に隨順して行くの志が無ければならぬ。即ち、從前の凡夫根性を交へずに行くのを無我といふのである。其の方法は別ではない。唯だ誠心を以て佛菩薩の慈悲心を修學し、自から私の慾を捨てて、諸天

持ちや物知りでなければ出來ぬといふのではない。心施といふこともあるから、眞實、眞心を以て他に親切なるは、亦是れ布施の上乘なるものである。神佛に供養をするにも、供物や經文を讀むばかりが供養ではない。百人一首の中に、菅公が手向山八幡に參詣せられし折

　此のたびは幣もとり敢へず手向山もみぢのにしき神のまにまに

と歌はれたるが如きは、赤心を以て神に捧げられたのである。

第二に愛語と云ふは、佛教獨特の語で漢書にはない熟語のやうである。愛には優しいとか、叮嚀とか、親切とかいふ意味がある。他人に對して慈愛ある語、即ち優しい叮嚀な親切な語を使ふのが愛語である。徳あるは讃むべし、徳なきは憐れむべし、怨敵をも降伏し、大衆を和合せしむるの徳が愛語にはある。我が高祖承陽大師も、正法眼藏の中に

　愛語と云ふは衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、顧愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり云々

と仰せられた。とかく人の親切ほど人を感動せしむる力のあるものは無い。愛語はよく廻天の力ありとも示されてある。

第三に利行と云ふは、衆生に對して利益ある行ひを營むことで、他の爲めにする事は、常に永久にして堅實なる利益を與へんことを標準とせねばならぬ。何事を爲すにも、豫じめよく〳〵其の結果を豫想し

凡そ吾人が人類として生活し得らるゝのは、恩分的關係の賜である。君主の恩に依りて一身の幸福を享有し、父母の恩に依りて此の世に生れ且つ長養されたのである。また吾々の衣食住は勿論、凡ての事が、社會幾百萬人と云ふ人の經驗知識と勞力とが相集つて、之を自身に受用して居るのである。一粒の米も、一掬の水も、皆な衆生の恩惠に依らざるは無い。また吾人が生死の苦本たる迷妄執着を解脫して、無限絕大の安心を決定することを得るのは、是れ三寶の恩分に依るものである。されば吾々は、是等の大恩に對して報恩的觀念の生ずるのは自然であり、また當然のことで無ければならぬ。明治天皇の御重患の時の如きに於ても、國民全體が殆ど申し合せた樣に、誠を傾けて御平癒を祈り奉り、身を以て之に代り奉らんとまでに至誠を捧ぐるのも、全く本具の佛性より出でたる孝順心の發現にして、是れ皆な佛心の妙用である。

此の四種の願行は之れを四攝法とも云ひ得る。皆是れ慈悲心の顯現である。第一の布施とは、慈念を以て廣く施すことであつて、單に僧侶に對して報謝するのみを布施と云ふのではない。これに三通りある。卽ち財施と法施と無畏施とである。物質上の施しは財施で、精神を資益するものを施すのは法施である。人に安心を與へ、人をして畏るゝ所なきに至らしむるは無畏施である。前の二つは方法で、財なり法なりの施しを以て、遂には衆生をして心の平和を得せしめ、身心の苦惱を脫せしめ、結局、大安心を成就せしむるのが無畏施であるから、此の無畏施が布施の目的である。その財・法の二施とても、必ずしも物

しも私はない。而して、天地間の一切萬物は相依り相助けて、互に慈悲と孝順とを交換回互して居るものである。易經の中にも

天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火相射はず

とあるが如く、山澤雷風相幷び相助けて居る。之に依つて萬物が無限に發育して居るので、是れ宇宙の孝順心慈悲心の現はれである。

吾々お互は、本來に此の大德を具有して生じ來りたるものであるが、種々の妄想分別ありて、自づから其の德を覆ひ性德を昧まして居るのである。若し能く此の魔障の雲を離るれば、自づから本地の風光に浴することが出來る、是れ佛教本來の目的である。

此の佛性の光明を現はして孝順心の德を發揮したのが、報恩謝德であり、四恩報謝である。心地觀經の中に四種の大恩を說いてある。卽ち

父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩

で、これは今更私が一々說明するまでもなからう。印度の社會狀態よりしては、恩の前後を以て、父母の恩を第一としてあるけれども、我が國家道德の上からは、寧ろ國王の恩を第一に置く方が宜しい樣に思ふ。彼の小松內府重盛が、父淸盛を諫める言葉にも『凡そ世に四恩あり、皇恩を第一とす』とあるが如くである。

の倫理は本性論である。智・仁・勇の三德とか、仁義五常の道とかいふのも、畢竟、本性に具有する妙德の表示たることを知らねばならぬ。

佛性常住と孝順心慈悲心

是の如く、禪の道德は天地の大道、宇宙の大法に基づくのである。梵網經では『佛性常住の孝順心慈悲心』と說かれてある。佛性とは吾人の心性には佛德を具有するを以て佛性と名く。卽ち吾人の本心のことである。此の本心の上には如何なる德があるかといふに、孝順心慈悲心といふ德がある。吾々が、上、至尊陛下に對し奉り、または長上及び主人に對し、または父母及び祖先に對して、至誠に報恩謝德の行を勵むのは卽ち是れ孝順心で、他人を愛し窮乏を憐れみて濟度利益の行を營むのは卽ち是れ慈悲心である。

元來、天地の上には、吾々人間の如き意識があるとはいはれぬが、其の德は正しく孝順心慈悲心の發露に非ざるは無い。眼を放つて宇宙間に所有森羅萬象を大觀すれば、事々物々が皆な此の大精神の露現である。太陽は日に萬物を照し月は夜毎に影を百川に浮ぶ、雨は長へに物を濕し風は長へに新らしき空氣を送り、以て萬物を生々化育する、是れ宇宙の慈悲心である。春になれば百草共に春風に靡き、秋になれば千山盡く秋霜に染まる、是れ皆な孝順心の現はれである。四季の循環、日月の運行、其の理明々、少

はねばならぬ。明治天皇の御製にも

ともすればかきにごしけり山水のすませばすまむ人のこゝろを

と仰せあそばされてある樣に、理窟屋や學問才能のみでは、却々此の心を調御することが出來ぬものである。故に、吾々も大に玆に留意せねばならぬ。

白樂天も亦た賢者ではあるが、やはり眞箇の安心は決定して居らなんだと見える。そこで語を更めて『如何なるか是れ佛法の大意』と問うた。隨分大きな問題である。すると、和尚は『諸惡莫作、衆善奉行』と答へられた。實に明白な說明である。白樂天は呵々大笑して『三歲の孩兒も亦た恁麼に言ふ事を解す』其の樣なことが佛法なら三つ兒でも知つて居りますと云はれた。すると和尚は『三歲の孩兒も言ふことを解すと雖も、八十の老翁も之を行ふ事難し』と云はれた。誠に寸鐵人を斬る底の格言である。流石の白樂天も此の答へに感じて、其れより師資の禮を執りて參禪せられたと云ふことである。佛法の大意は全く止惡作善の大法を實行せしむるが根本である。

諸惡莫作の七佛通誡の偈に佛敎の眞生命が現はれて居る。佛敎の道德は平常心に在りて決して不思議はない。卽ち正法に不思議なしである。善を善とし惡を惡とするは轉迷開悟の本である。而して、能く善を作し能く惡を止めて行く處に佛道が圓通する。其の善とは本具佛性の孝順心慈悲心を開發するのであるから、禪の倫理は天地自然の法則であつて、決して人爲の私に出でたる一時的のものではない。故に禪

居られた。白樂天は思はずも『險なる哉、險なる哉』と叫んだ。すると、和尚は此の聲を聞いて目を覺し、同じく『險なる哉、險なる哉』と叫んだ。そこでまた白樂天『弟子、一州に鎭たり、而も今や大地に立つ、何んの險なることかこれあらん。然るに師は老松に坐して睡る、甚だ險なり、却つて我れを呼んで險なりといふ、其の故如何』と頗る小理窟を以て逼つた。和尚は平氣なもので『薪火相交る識情不停なり、險ならざるを得んや』と答へた。火は無常に喩へ、薪は身體及び位地に譬ふ。山ほど積んだ薪も、一點の火に觸るれば忽ちに烟となる、吾人の身體生命等も、若し無常なる火に觸ると、即座に空となることを思へば、誠に賴み少い者である、人生百年と云うても、今日にも死の運命に襲はるゝかも知れぬではないか、然るに、尊公は、杭州に知事として重要の位地に立つて、其の生命も位地も風前の燈にも似たるものである、然るに凡夫の悲しさは、自己の安心さへも容易に決定せず、識情暫くも停まらず、心念動もすれば迷ひ易し、身分の優れるほど、其の一擧一動は國民全體の苦樂消長に關すること多し、之を念へば、其の危險なることは實に一層甚しきものならずや、と云はれたのである。誠に尤もなる說破である。

今日堂々として天下の政治を掌らるゝ內閣大臣でも、又は名聲高き帝國の代議士と云はるゝ人でも、油斷をすれば其の道德上の行爲などに至つては、隨分、他をして寒心せしむる樣な御方も無いとは申されぬ。況んや田夫野人の如きに至つては、其の精神上の安住も出來ず、從つて其の行爲も誠に危險千萬とい

ではあるが歸する處は七佛通誡の偈といふ四言四句の中に收められる。此の偈は阿含經や涅槃經等に出て居る。卽ち

諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛敎

といふのである。凡そ三千の威儀、八萬の細行、其の他一切の經典論釋も、此の七佛通誡の偈の內容を示したものに過ぎないのであつて、諸〻の惡とは何ぞ、衆〻の善とは何ぞ、と仔細に硏究すれば、八萬四千の法門ともなるのである。而して、惡い事をするな、善い事をせよ、といふのが佛敎の第一義諦であつて、是れが戒法の根柢である。されば戒法は、我が宗門でも實に一大事因緣といふのである。

唐の白樂天は、有名な詩人であるからして、諸君も御承知であらうが、此の人の姓は白、諱は居易、樂天と號し、又は香山居士とも號した。其の死する時、端坐して西方に向ひ、念佛を稱へつゝ往生せられたと云ふ程の佛敎大信者であつて、禪學の修養にも富んで居られた。

嘗て杭州の牧、卽ち州知事に赴任した時、『誰が此の州に於て最も勝れた高僧なるか』と尋ねられた。すると、人々は答へて曰く、『山中に鳥窠道林禪師と云ふ禪僧がある、此の和尚は、寺の庭內にある松の大樹の木の股に、暇さへあれば端坐して居られる、ちやうど鳥の樣な和尚であるといふので、人は呼んで鵲巢和尚とも、また鳥窠和尚とも綽名して居るが、却々の大人物である』といふから、白樂天も一つ參得してみようと思ひ尋ねて見ると、和尚は相變らず老松の上に坐して、淸風に吹かれながら好い心持に睡つて

現今歐米各國に於て、宗教と學術との相衝突するのは、此の自律と他律との關係が主なる要點の一である。基督教の如く神意を道德の中心としてゆくは他律である。また吾人の良心を道德の基礎とする法は自律である。此の外、自律にも他律にも多くの說があるけれども、一番主なるものは、道德の中心を神に置くか良心に置くかといふ問題になるものである。是れ宗教と教育との矛盾する主題である。

然かるに、我が佛教には此の矛盾が無い。佛の戒法規律を守り信仰實踐し、以て道德の標準を確立して居るから、此の點よりいへば他律である。然し、其の佛の戒法、卽ち道德律なるものは、決して佛意を主として出來たものでなく、人々具有の佛性の德を基礎としてそれを表示せられ、其處に戒律を定められたのであるから、此の點から見れば自律主義である。故に佛が印度に出世して佛教を說かれずとも、佛の戒法は自然的に行はるべきものである。卽ち天地自然の法則である。只だ之れを具體的に示されたのが佛の法である。してみれば、國の東西、時の古今に論なく、苟も眞の人たるものは必ず戒法を持たざるを得ざるものである。されば佛教に於ては、他律卽自律といふことが出來るのである。

七　佛通誡偈

然らば、佛教の道德律は如何なるものであるかと云ふに、八萬四千の法門は皆な道德律の解釋ともいはれる。特に佛教には律宗というて、戒律一方で宗派が獨立して居る位であるから、非常に精密なるもの

問うたれば、彼れは『鐵砲が一番大切だ』と云うたさうである。『併し、汝には夫婦親子等もあるならん、それはどうか』と尋ねると、彼れは『成るほど親も子も婦も大切ではあるが、然し自分の生命を守る鐵砲には替へられぬ』と答へたさうであるが、無智の蠻人などには斯ういふのがある。若し佛や神の眼より御覽になつたならば、吾々の良心と云ひ居るものも隨分不良心であるかも知れぬ。自分では惡くは無いと思うても、それが甚だ不完全であるかも知れぬ。故に理論はとにかく、實際には古の聖經賢傳に依つて、實行の標準を査定するの必要があるのである。

要するに、知・情・意の三方面が完全に並行發達すれば、行爲にも萬々過ちは無いのである。佛の上からいへば智・斷・恩の三德である。併し此の三德を圓滿することは却々容易なことではない。若し此の三德が完全に發達すれば、最早佛の境界である。故に、完全なる動機より發したる行爲は、必然、完全なる結果があるべきもので、動機と結果とは決して矛盾はせぬ。聖人孔子も七十年來の修養に依つて『我れ七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず』との成績を收め得られたのである。されば修養を積まざる者は、其の善なりと考へらるゝ動機も、往々にして過ちを來すものであるから、先づ其の順序として、動機の根本なる德性の涵養に努めねばならぬ。

の藥が不良品であつた爲め、却つて病人の不爲めとなり、一層彼を苦ましむる樣な結果を生じたとすれば決して善行とはいはれぬ。また動機が惡であつて其の結果の善なることもある。例へば財産家があつて、名利の念のみあつて道德心等は少しもない。それが己れの虛名を博せんが爲め、金子を投じて人に與ふるが如きは、これ所謂僞善で、眞正の善とはいはれぬが、其の行爲に依つて、其の人が大に成功して社會にも好き影響を與へたとすれば、是れ亦た善といはねばならぬ。

動機論者と結果論者との學說は、何れも半面の理を得て居る。此の兩者を調和しやうとして折衷論者なるものが出た。或人は折衷主義で『個人的には動機論に重きを置くべし、公共的には結果論を主とすべし』というて居る。つまり動機と結果と兩々相俟つて、始めて完全に善惡が評されるものである。それに就いて倫理學上多數の學說が生じ、遂に今日の如き進步せる學說を產み出したのである。

然るに、佛敎の因果の大原則よりいへば、動機と結果とは決して相矛盾するものではない。例へば動機が善で結果が惡といふ場合の如き、其の動機なるものが決して完全の善では無いのである。智に於て缺點があるとか、情に於て偏執があるとか、何にか不完全の點があればこそ惡結果を生じたのである。

また良心というても完全なるものとは斷ぜられぬ。中には良心が萎靡して居るといふまでには行かずとも、敎育も未だ完全に備はらず、修養の力も一向になきものなどは、其の良心なるものも甚だ不完全であるに相違ない。或る布敎師が、臺灣の生蕃人に向つて『汝は世の中で何にが最も大切であると思ふか』と

である。宗旨とは禪といふことである。動靜語默共に矩を踰えず法に順ずれば、それが悟りの姿である。此の人を稱して悟道の人とも、また解行證の三者を完全に備へたる曹洞禪の眞の宗師家とも稱するのである。

故に、先づ吾々は佛の敎へに對して確固不拔なる信念を抱き、以て佛敎の如何なるものなるかを綿密に了解し、之を吾人日常の起居動作の身の上に實行せねばならぬ。吾人の日常が能く佛の戒法に契ひなば、之れ全く佛性の妙德の顯現であるから、眞に證道の人と謂ふべきである。されば此の信・解・行・證の四德が、共に我が身に備はつて行かば、その人こそは眞個の佛であり菩薩である。故に我が禪門に於て、倫理道德の實踐躬行を重んじ、佛弟子の生命となして居ることは、今更論を俟たないことである。

扨て世間一般の學說の上より、吾人の善惡行爲を判ずれば、動機と結果との二大標準に分かるゝのである。動機とは意志作用の原因にして、即ち意志を働かして之を成し遂げんと欲する慾望の觀念である。結果とは動機に依て現はれたる行爲の成績である。故に善惡の標準を、一は原因たる動機に依つて定め、他はその結果に依つて定むるの別がある。前者は善良なる動機より出たる行爲は善で、之に反して、其の動機の不善なるは惡だといふのである。

然し世の中の事は甚だ錯雜であるから、動機が善であつても其の結果の不善なるものがある。例へば人の病に苦しむを見て、之に藥を與へるが如きは、其の動機の善であることは勿論である。けれども、其

禪の倫理觀

動機と結果との一致

今日の御話しは『禪の倫理觀』である。我が禪門にては最も道德を重んじ、是を戒法と稱して微細に其の標準律が說いてある。然し倫理といふ文字は本よりない。即ち戒法または行持というて、實踐道德の軌範を示してある。此の戒法を守つて行くが即ち眞の佛弟子である。縱令、宗師家に就いて悟道の域に達し、立派なる印可證明を受けても、此の道德的軌範たる戒律を守らなければ、決して眞箇の禪僧と云ふことは出來ない。故に我が高祖大師も

威儀即佛法、作法即宗旨

と仰せられたのである。然れば此の戒法行持こそ倫理の標準であつて、取りも直さず我が曹洞禪の命脈であります。威儀即佛法とは、吾々平常の行住坐臥の行爲及び行動が、佛世尊の敎規に契ふ樣になれば、それが直ちに活佛法である。また日々の作法、即ち言語動作が、佛制に順じ佛風に倣ひなば、其の儘が宗旨

と認めて大に笑はれ、其の翌日溘然として寂せられたと云ふことである。上人は實に不動の大安心を獲得せられたから斯る美談をも遺されたものと思ふ。此の安心さへあれば、日常と雖も順境逆境の間に處して自由自在逍遙無碍の生活を爲し、且つ未來に對しては不可思議の佛光明を認め、そこに無限絶對の大信力が現はれて來るものである。

我が祖師洞山悟本大師は、御臨終の節、多くの弟子たちに向つて懇々と說法せられ、坐禪のまゝ眠るが如く入寂せられた。然るに座邊を圍繞せる多くの弟子たちは、歎き悲しみ聲を放つて慟哭すること、一と時餘りにして猶未だ息まなんだ。すると大師は、再び兩眼を開かれて一同を見廻はし『其の見苦しき有樣は何事であるか、是れは畢竟汝等が前生の習慣未だ消えやらずして、愚癡の爲めに覆はれて玆に至つたものであるから、今後七日間、此の愚癡の病を濟度しやるべし』と仰せられ、其の後七日間の愚癡齋といふを設けて晝夜敎化に努められ、其の後また睡るが如くに坐脫せられたと云ふことである。

要するに、吾々は人生第一の大問題たる生死の難關に對して、能く生死卽涅槃の妙理を究め、確固たる信念を持しなば、啻に一息切斷の際のみに非ず、平生如何なる場合と雖も、泰山の如くに不動の安心を獲得し、萬艱千苦の間に立つとも更に苦しみ惑ふ處はない。生や全機現、死や全機現、順逆の二境に對して却つて益々天眞の妙道を樂しみつゝ、自由に大願行を經營し大菩提を培養することが出來得るものである。

サア〳〵宿がへの御用心〳〵

豪潮書

とある。吾々は是の如き覺悟を以て生死の相に縛せられぬ工風が大切である。大安心を持つて居れば、縱ひ何時冥土の使が來ても驚く所はないのである。淨土宗近代の名僧にて、東京の芝增上寺より更に京都の知恩院に住せられて、明治二十一年四月二十五日、八十四歲を以て大往生を遂げられた行誡上人が、入滅の前日、淨土宗の例として、二十五菩薩來迎の軸を枕頭に掛けよと命ぜられたゆゑ、弟子の福田循誘師が大急ぎで軸物を持て來て掛けた處が、餘り急いだせゐか間違て閻魔王の軸を掛けた。そこで皆の者が大に驚き、早速之を掛け替へやうとせしに、上人は之れを御差し止めなされ、筆と紙とを求められて左の如く認められたのである。

閻浮提大日本國　行誡

八十四

右老病臨終の趣きに付點檢申候處御本願相應の行者と斷定候間御都合次第御來迎の御用意可然此段宜敷執奏可有之候

閻魔王府

西方世界　二十五菩薩御廳

は何歳までゞあるか遠慮なく申されよ」と問はれると、老人『出來得るなれば、もう五十年ほど御殖しを願ひたい』、上人『それでぎり〳〵決着か』、老人『いや、さうではありません、一層願はれるものなら三百歳までは如何でありませう』と思ひ切つて云うた。すると上人は『扨て〳〵汝は望みの少い人だ、鶴の千年に比ぶれば三分の一、龜の萬年に比ぶれば三十分の一にも足らないではないか、それよりも一層死なゝい御祈禱は如何だな』と云はれた。すると老人は驚いて『そんな御祈禱がありますか』、上人『抑も釋尊御一代の説法たる八萬四千の法門も、祖師の一千七百則の公案も、畢竟、不死の法門無量壽の祈禱であるぞ』というて、それより諄々として佛性常住なることを説き、老人の爲めに一大安心を與へ、生死卽涅槃の妙理を説破せられたと云ふことであるが、實に面白い御話しではないか。此の安心さへ決定し得らるれば、生死の岸頭に立つと雖も、少しも迷はず驚かず、悠々として涅槃門頭に逍遙することが出來るのである。

屋張の豪潮律師は、肥後の產で、非凡の高僧であつた。同國知多郡龜崎町乙川の正通寺に、律師の書かれた借宅證文と云ふものがある。其の文に

借宅證文の事

一、地水火風空作り家　一軒

右借用仕候處實證也御入用の節は何時にても差上可申候爲後日如件

今より七八十年前、越後國に良寛上人と稱する名僧があつた。禪僧であるが世人は呼んで上人といふた。此の人は書道が實に妙絶で、また詩歌にも精妙で、境涯は最も脫俗的の聖僧であつた。國上の山中に五合庵を建てゝ幽棲せられ、秋になつて落葉が庵を埋むる程たまつても、別に掃除もさせず

焚くほどは風がもてくる落葉かな

と詠じ樂しんで居た。春の末に筍が庵の緣を破つて生え出したこともあつたが、是れは天の與ふる福分なりというて喜んで居たといふ、隨分洒落なる境界であつた。

或時、八十歲許りの老人が來て、『私は此の頃八十の賀を祝するので、孫や子に賀の筵を開いて貰ひました、來賓は何れも、あなたの年まで生きたいと云うては交々私に祝杯をくれたが、かういはれると、私はなにやら壽命の行き止りに行つた樣な氣がして心細い、實は今少し生き長らへて、孫子の出世を見たいと思ひますから、何うぞ長壽の祈禱をして戴きたいと思うて參りました』と云うた。其處で上人は『それは如何にも承知したが、一體幾歲まで生きたいといふのか』と問はれると、老人は『百歲ぐらゐまで願ひたい』と答へた。上人『それは餘りに欲が少いではないか、百歲までゞ澤山なのか』老人『いや、澤山といふ譯ではありません、もつと生き得れば猶ほ結構です』と答へた。上人『然らば、ぎり〳〵決着の希望

明日こそは賊の大軍を迎へて、決死的大決戦を試みんとの決心より發した問題である。時に禪師は『兩頭倶に截斷して、一劍天に倚つて寒し』と答へられた。即ち、生とか死とか云ふ二ツの物を斬り捨てゝしまひさへすれば、自己本來の大智劍は天地に充塞して大光明を發するぞとの答話である。何人も此の生死の兩頭に迷ひ、之を別々に見るから安心が得られぬ。生是れ何物ぞ、死是れ何物ぞ、生と云ひ死と云ふ果して別物であらうか、春と云ひ、秋と云ひ、其の時節の上には暫く異れる相もあらうが、天地の本體より觀れば決して別々のものではない。春も一時の位、秋も一時の位、箇々獨立にして絶對である。生死亦た是の如く、生死畢竟無二無別である。

正成公また問うて『落處作麼生』と、其の安心落着の處は如何であらうか。其の時、禪師震威一喝せられたのである。此の一喝は實に尋常一樣の一喝ではない。所謂兩頭截斷底の大機用である。生死の兩頭を截斷し了れば更に何れの處にか落處を尋ね廻るべきや、若し左顧右眄して分別を弄せば、果然として生死の相に束縛せられ、永く出頭の分は無いぞといふ痛快なる接得である。其處で正成公も始めて大事を會得し、禮拜して恩を謝し、遂に湊川に於て花々しき奮闘を爲し、七生報國の誓を立てゝ見事に討死をせられたのである。生死畢竟涅槃である、佛性眞如海中の活波瀾であるといふことが徹證されゝば、生死の當相直に是れ佛性の光明と現れて來るものである。

いふのである。古歌にも

雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の水

とある。此の道理を諦めて此の世に處して行く時は、艱難苦樂紛然たる生死の巷に於て、涅槃寂靜の妙理を明らめ、堅固不動の安心を立て、益々大道に猛進して行くことが出來るのである。

我が這裏生死なし

臨濟宗妙心寺の開山、關山禪師無相大師は英邁の宗匠である。或る僧が生死透脱の法門を問ひし時、禪師は『我が這裏生死なし』、卽ち、我れが處には生だの死だのと云ふそんなものは無いぞ、生死畢竟是れ何物だ、開花落葉を見て天地の增減を論じ、日出月沈に依て萬物の生滅を疑ふは、愚人の妄見であるぞとの御答である。今此のコップに湛へて居る水も、飲めば忽ち無くなるが、而し、其の水は決して無くなつたのではない。唯だ形を變じたまでのことで、水性の上からいへば形も變じては居らぬ。變じて居る樣に思ふのは假相の上の所談である。此の變化生滅の其の儘が水の本性である。

彼の楠正成公が、愈々明日は湊川に於て、賊足利と戰うて討死せんと覺悟せられし時、廣嚴寺の明極楚俊禪師の下へ參じて『生死交謝の時如何』と問はれた。之れは生より死に移る場合の覺悟を問はれたのである。楠公の此の一問は當面の大問題である。今や綸命を奉じて湊川に來り、當地に陣を構へて、愈々

をもこめるのである。而して、其の國民の大赤心は必ず神明佛陀にも感應し、九重の雲深き處にまで通ずる者であると確信するのである。

吾々の心靈も亦た斷滅には歸さぬ。所謂業力相續に依りて未來永遠に其の果報を感ずるのである。されば吾々は此の理を確信して、生死の相に迷はず、永久不滅の心靈を認證し、以て盡未來際の大安心を決定せねばならぬ。此の宗敎的生命に依つて未來に活動して行かねばならぬのである。

元來、吾々が生れる死ぬると云ふことは、恰も春になつて花が唉き、秋になつて葉が散るのと同じことで、畢竟、天地の大道、宇宙の眞理の上の活動にして、恰も大海の波瀾の如きものである。大道眞理の大海には少しも變化增減のある可きものではない。されば生死卽涅槃と心得て、佛性常住の眞諦を明らめ、以て此の世に處して佛性の妙德を發揮して行く、是れが吾人の大安心である。恰も夜になれば萬物靜寂に歸し、晝になると萬物其の活動の相を現はす樣なものである。其の實相を究むれば、夜と晝とに依て毫も異つて居るのでなく、只だ一時的の隱顯の相に過ぎぬ。然れば、吾人が五十年乃至七十年の壽命の上に現はれたる生死の相は、唯是れ眞如佛性海の波動であります。故に法の本法を觀ずれば、生も生に非ず、死も亦た死に非ず、高祖大師の所謂

生も一時の位なり、死も一時の位なり

である。故に生は生で全機現、死は死で全機現である。卽ち生死其の儘が絶對である。是を生死卽涅槃と

といはれ孝子の鑑と云はれた。或は神に祠られ、或は後世の模範と稱せられ、數百年の後までも偉大なる感化を與ふるのは、其の生前に於ての善業力の然らしむる所で、其の善業力が一種の靈的作用を遺して、永久に道徳的生命として活きて居るのである。

宗教的生命

道徳的生命の外に宗教的生命といふがある。即ち吾々が佛となり菩薩となり、永遠に佛果菩提の樂果を圓滿するのが宗教的生命である。此の宗教的生命が無かつたならば、吾々は決して眞の宗教的信念は得られないのである。

先年、明治天皇が思ひがけない御大患に就かせられし折の如き、上、皇后に於かせられては、特に掌典を伊勢神宮に御派遣になりて、御代拜として祈りを捧げられ、下、吾々六千萬の國民は、晝夜熱誠を傾け神佛に祈願し、以て其の御平癒の一日一時もお早くあらせられんことを虔禱し奉つて居るのである。是等の御祈願とか御祭祀といふことを、單に物質的知識や實驗科學の上から見たならば、或は何等の意味も無い一種の妄想に過ぎないと評するかも知れぬが、是れ神靈佛陀の存在を認めることが出來ないからである。然し國民の赤心、人情最極の美は、決して科學上の知識を以て判斷せらるべきものではない。吾人は堅實なる宗教的信念に依つて、神靈の存在をも佛陀の大願力をも認めればこそ、斯かる一生懸命の祈願

となつて、子孫とか社會國家とかいふ關係のものは、皆な個性的果報を圍繞する各種の事情、または境遇となつて來るのであります。

昔、支那の國清寺に寒山・拾得といふ二人の奇人が居た。其の中の拾得は、寺で養うて居る多くの牛に對して、或時、何某々々と一々人間の樣な名前で呼ぶと、彼の牛は『モー』というて返事をする。人あり其の故を尋ねたれば、拾得は『此の牛の多くは前世に僧侶として此の寺に居たが、懈怠の因に依つて、今は牛となつて宿債を償うて居るのぢやから、前世の僧名を以て呼んだのである』と申したさうである。此等の事實の有無は別としても、因果の關係はやはりかういふ工合にならねばならぬ譯である。

されば、吾々が今日人間と生れて居るのは、夙世善業の結果であつて、外的內的の業力が相依つて、此の身と此の周圍の境遇とが現はれて來たのである。また此の現在に於て、若し原因なくして偶然惡友に苦められたり、社會より惡しざまに云はれたりすることあらば、それは皆な過去の業力に依るのであるから、吾人は天をも恨みず人をも怨みずして、今後の行爲を愼み、將來に於て再び斯かることのない樣に注意して、益々善業を營まねばならぬ。

而して此の善業は、やはり社會にも家庭にも其の勢力を認められて永久に滅しない。これが即ち道德的生命である。此の道德的生命なき者は、人としての價值のない者と申さねばならぬ。彼の楠公父子の如きにせよ、小松內大臣重盛の如きにせよ、其の他の仁人君子、忠臣孝子等は、皆な今日に至るまで忠臣の花

東京感化院に居る不良少年は、七八十名も居るさうだが、是等は重に中流以上の家庭に生れた者が多いさうである。其の中には惡友の爲めに邪道に陷つて、段々惡習慣をつけた者もあらうが、多くは家庭教育の如何に依て、不良者に列する樣になつた者であるとのことである。而し最も注目すべきは、此等の不良少年は、長男次男等には少くて末子に多いさうである。其の因緣由來は、東京へ地方より出て來て世帶を持ち、始めの中は夫婦共稼ぎで油斷なく働きもし、また世間の信用を失はぬ樣に謹愼もする所から、其の時代に生れ且つ育てられた子供には善良な者が多いさうである。おひ〱生活狀態が豐かになり、三十以上より四五十歲になり、末子の生れたり育つたりする頃には、親の方がだん〱退嬰主義になり、是れから少し樂をしやうといふので、少しの暑さにも寒さにも、どこかに出懸けて遊ぶとか、または酒色に耽つたりして、夫は妻を顧りみず、妻は夫に服しないといふ樣な狀態になつて、自然に家庭の規律も正しからぬ樣になる。此の時代に生育せられた子供の中に、此の感化院の御厄介にならねばならぬ樣な者が出るといふことである。かやうな鹽梅であるから、細かに吟味したならば、子孫の善惡には必ず一定の因果律が附き纏うて居るに相違ない。

次に個人的に相續する業力といふは、吾々が此の一生に於て惡業を造るときは、其の死後に至りて社會または子孫が其の惡感化を受けるの外、吾々個人其れ自身が、此の世に於て、其れに相應する惡果報を受けなければならぬのである。然らば個性的業力と他の業力との關係は如何かといふに、個性的因果が中心

本來平等であるとすれば、此の身は如何して、斯かる凡夫迷妄の相を現して居るかと云ふに、前に述べし如く、全く業力に依つて得る所の一時の幻影である。未來の狀態とても、現在一生涯の業力如何によつて一時の假相を現はすのである。此の業力相續の狀態を更らに說明すれば、業力を且らく內的と外的との二つに分けて見るが宜からうと思ふ。

外的とは吾々一生の行爲が、善にもせよ、惡にもせよ、必ずや社會國家の上に感化及影響を與へ、永久に涉つて滅せぬ者である。古語にも『一家仁なれば一國仁に興る、乃至、一人貪戾なれば一國亂を作す』と云うてある如く、只だ一人一家の善惡の行爲がともに一國全體の影響を來すものであるに依つて、吾々は一擧一動の上にも十分に注意を拂はねばならぬ。此の外的業力が未來際にまで相續するのである。

次に內的には、吾々一個の上に現はれるものと、吾々の子孫に遺傳して行くものと二つある。其の兩親の性質及行爲、並に肉體の健康不健康、美醜强弱までが子孫に分化し遺傳して行くものである。中には此の理に嵌らぬ樣な事實もあらうが、そは因果的關係が錯雜して居る爲め、常人には明らかなる判斷がつき惡いのである。諺に『瓜の蔓には茄子はならず』といふ如く、善人の子には善人が出來、惡人の子には惡人が出來る。これは疑ふべからざる事實である。中には善人の子に惡人のあることもあるが、それにはまた相當の因果關係があるのである。

小長短の量を絶して居ると見るのが、佛教の常談である。

されば、吾人の一心なるものは、天地の大精神の中の一部分を受けて自己を形造るといふものではなく、一多不二、色心一如の妙理に依つて幻出したるものである。故に、此の妙理を極むるときは、吾人の一心と云うても小なるに非ず、天地の大靈と云うても大なるものと謂ふべからず、換言すれば、吾々お互の方寸の中に、此の絶對の大靈が具有せられて居るのである。例へば、此のコップは小さいものではあるが、一多不二の妙理よりすれば、此の中に天地間の一切萬象は皆な攝せられてあるので、此の妙理を證し得されば、生死の問題は會得し難いのである。而して此の妙理を眞如法性とも云ふのである。されば佛教の根本問題は此の眞如法性を直覺するにあるのである。

道德的生命

然るに人生を觀ずるに、十人十色百人百色で、種々樣々なる形象を現はして居るが、其の差別の形象のまゝが絶對的眞如佛性と見るべきである。如何に大小長短、貧富苦樂の別あるとも、其の本體たる佛性は不生不滅、不增不減、不垢不淨である。

譬へば一心は明鏡の如きものである。緣に應じ境に對して種々の影像を映寫するけれども、其の影像のまゝ鏡體は不增不減不生不滅である。此の一心を究むるのが大圓鏡智と言ふのである。然らば、佛も我も

於ける果報の中心となるのである。個性の有るまゝが無我である。

近來西洋は勿論、我が日本でも、心理學の研究が益々盛んになつて、科學的に心體を研究し、タフリン心理研究會々員フール＝エタツペ氏の如きは『靈魂は精神分子より形造られ重量を有す、或る方法に依れば實驗が出來る、而して其の精神體は、正義、親切、同情等の諸德開展に向ひ、一寸息絕ゆれば其の靈魂は大氣中に混在すべし』とまでいうてをる。有名なる心理學者ヒスロツプ氏の如きは、「靈魂に實質ありとせば必ず重量があるであらう、若し科學が多年の後非常なる發達を爲さば、或は靈魂を物質の範疇の中に包含するに至るであらう』と論じて居る。此の說は個性としての業力相續を假定せるより生ぜし推理的研究であらうと思ふ。

併し佛敎では、靈魂といへる物質に類せる一塊物ありとは許さぬ。唯だ過去以來の業力が、靈魂とも稱せらるべき個性を幻出して居る。その幻出せる個性的心靈が、更に業力に推輓せられて、未來の果報の中心となるといふのである。中有といふも生有といふも皆なこれである。更に一步を進めて論ずれば、佛敎では色心不二と說いて、宇宙の間には偉大なる靈體があつて、天地萬象は此の大靈の中に孕まれて生滅變遷し、種々別々なる現象を顯はし居るので、吾人も亦た其の大靈中に生死して居るのである。否な、吾人の生死そのまゝが大靈の活動である。吾人の精神なるものは、宇宙の大靈に比すれば實に極小なるものゝ如くであるけれども、然し、其の本體を究むれば、宇宙の大靈と無二無別なるものであるから、元より大

あるのではなく、全く業の善悪如何に依るものである。

善業の極端は極樂を生み、惡業の極端は地獄を造る。地獄とは苦みの果報の極點に名けたのであつて、極樂とは樂みの善果の極點に名けたのである。人生に種々の階級があつて、苦樂、幸不幸が、無數に區別せられ居るが如く、未來の果報も亦た無數の階級あるべきは當然であるが、其の兩極端を取つて、或は地獄、或は極樂と云うたものである。而して、未來の果報を感ずるものは、實に此の善惡等の業力に依るものである。斯の如く吾人が未來の果報の上に現はれたる業力が、更に次の未來を生み出す、斯くして、因が果となり、果が因となり、綿々として斷ぜぬ。是れを業力相續といふのであります。

靈魂不滅論と佛敎

然らば佛敎に於ては、靈魂を如何に論ずるやと云ふに、元來我が佛敎に於ては、心常身滅と計するは是れ外道の見なりと稱して、靈魂なる一塊物が、肉體を離れて外にある者とは認めないのである。故に無我無自性と談ずる。併し、決して物質論者の如き說ではない。無我といふは死の時にのみいふのではなく、現に精神が活動して居るそのまゝが無我なのである。吾人の心靈なるものゝ本體は、宇宙の大靈と圓融して居るものであるから、大小長短の量を絕して居る。それが一精神となつて居るのは、やはり業力の作用である。此の業力は未來際を通じて盡滅することは無い。故に此の意味からいへば、吾々の個性が未來に

古の大問題であります。今、佛教上より之れを研究する時は如何であらうか。佛教では業力相續と云ふことを說く。

業とは卽ち作業で、吾々の身・口・意の上に於ける、一生涯の所有行爲行動を云うたのである。故に、昨日には昨日の業があり、今日には今日の業があり、また明日には明日の業がある。而して此の業は、善業と惡業と無記業との三種に區別せられます。卽ち、吾々が自己の職分を盡し、人倫の道を行ひ、且つ社會・人生の利益を與へて其の幸福を計るが如きは善業である。之れと反對に、職を怠り、道に悖り、社會・人生をして不利に陷らしむるが如き行爲は惡業である。また單に善心も惡心も無く、無意識に行ふ類は所謂無記で、善とも惡とも名けられない。されば、將來の運命を支配して行くもの、卽ち未來の果報を招くべきものは、主として善惡二業の勢力に依るものであるが、無記業と雖も、全然未來の結果に關係が無いとはいはれぬ。唯だ其の勢力が微弱であるのである。

例せば、夜中寢相の惡しき人が、無意識に手足を彼方此方に動かすが如き、善惡の二業には屬せぬけれども、其れが爲に他人の身體を蹴飛したりすれば、やはり一種の業勢力となるものである。併し善惡の二業は、充分に自己の意識を働かしての行爲であるから、其の業力は甚だ强いものである。現在に於て旣に、善心を以て善行を爲せば善人なりと云はれ其の德が現はれ、惡心を以て惡行を爲せば惡人と云はれ其の德を毀る。善惡の因果は明々白々である。吾々が未來の世を作るのも、別に作るべき我れと云ふ主體が

然しながら、三世通達の眼を開いて宇宙の眞源に徹底せられた佛の智見より觀られたならば、生死去來は大海の波濤の出沒にも似たものであらう。唯だ吾人は智眼に盲なる爲めに、此の世に生れながら生るゝ所以も知らず、また死に對しても其の歸する所も知らずといふ有樣であるから、人生の本分も永遠の目的も、一向に解らないのである。されば我が高祖大師は、其の修證義の卷頭にある如く、

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり、生死の中に佛あれば生死なし、但生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなし、是の時初めて生死を離るゝ分あり、唯一大事因緣と究盡すべし

と示されてあります。此の一語の中に、生死の何物なるかも、生死を解脫するの要義も說き盡されてある。故に吾々は、此の一語に參得して生死の問題が解決せられなば、始めて處世上の立脚地も定まるものである。而して、此の生死を明むるといふことは、何れの宗教からいうても、實に宗教的大安心を成就すべき問題であるのである。而して此の解決は、先づ死後の問題より明らむるのが捷徑であります。

業力の相續

然れば吾々は、死後には如何になるものであらう。此の未來觀に就ては、或は有といひ、或は無といひ、議論紛々、容易に解決のつかぬ大問題である。單に宗教の上のみならず、科學上からいうても亦た千

ぬ、誠に幼少よりの御恩を報いもせずして、先き立ちまする不孝の罪は幾重にも許して下されたし、猶ほ私を不憫と思し召さば、私の死したる後、追善と思し召されて、如何樣にもして、世の中の貧に惱み餓に泣いて居る吾々同胞の爲めに、慈善の行を施して戴きたい、且つ又願くは我が臨終の際、一度の法話が承りたうございます』と申した。如何な無信仰な親たちも、我が子の愛には腸も千切れる思ひを爲し、不憫さいやまして、直ちに或る和尙を請じて、枕邊にて一席の法話をして貰うた。其の時より非常に慈善心を起し、且つ宗教上の信念も非常に強くなつたと云ふことがある。單に日本のみならず、西洋にも之に類した例が澤山ある。人間の智力も經驗の力も及ばないものは、實に此の死生の問題である。生死到來の時は、人間の權勢も財寶も些少の效能だも無い。茲に至りては、唯だ宗教上の信念に依らなければ、到底、眞個の安心は出來ないのである。

臨濟宗の名僧大阪少林寺の匡道和尙は、其の檀家の醫士が其の最愛なる女子を失うた時に、悲みの餘り『私の子供は今何處に行つて居るか』と問はれた。和尙は經論を引いて說明する所ありしが、醫士に『禪門別に安心の法あるべし、其の旨如何』と問はれ、其の答へが出來なんだので大に慚愧心を發し、それより再び遍參の途に上り、此の一大事の安心の爲めに十三年間も研究して、遂に決擇眼を打開したと云ふことである。

吾々お互も、此の死生の問題に十分の解決が出來なければ、人生の歸趣は本當には解らないのである。

とが出來ないのである。それが爲めに或は未來の有無に迷ひ、現在の果報を疑ひ、其の結果迷悟苦樂の根源に昧く、徒らに一生を夢幻の間に送過するに至るのである。故に生死の二途は、古今の學者も齊しく皆な迷ふ所の一大懸案であります。古の佛祖は此の迷ひを憐れみたまひ、如何にしても之を濟はんものと苦心せられた。其の結果が三千餘卷の經典ともなつたのである。

生死を明らむるは佛家一大事の因緣

然しながら人情の常として、生を愛し死を憎み、生を喜び死を悲しむは普通である。人の死別に遇ふや、如何なる學者智者でも多くは一種の疑惑に包まれて終ふもので、平常は頗る元氣な快活な、且つ諦めの好い人も、一度自分または其の愛妻愛子等が死の惡魔に襲はるゝ時は、煩悶懊惱、實に名狀することの出來ない悲痛の淵に沈むものである。之れ平生吾人の目前に見る事實である。

曾て東海道の沼津の驛に大井庄造と云ふ人があつた。此の人は相當の資產家であつたらしいけれども、至つて慳貪な人で、宗敎上の信念などは藥にしたくも無いほどであつた。然るに、其の一人息子の庄太郎と云ふ者は、幼少の時より至つて慈悲心深く、宗敎上の談話等も誠に好きであるから、兩親も不思議に思ひ、常に其れを心配して居たのである。然るに運拙なくして、庄太郎は不治の病魔に犯され、最早や其の生命も朝夕に迫つて來たのである。或時、庄太郎は兩親に向ひ『私は最早や此の世の人とも思はれませ

さには刧波、此に時分と譯す。卽ち時間の義である。天地の始めて成立したる時代は成刧、天地の現に存在して居る時代は住刧、また此の天地は水火風の爲めに破壞するものと說いてゐる、其の破壞の時代が壞刧、而して、破壞し盡して全く空滅に歸し、一物の存することなき時代を空刧と云ふのである。

是の如く、之を小にしては人生の上には生・老・病・死の四苦あり、中にしては萬物の上に生・住・異・滅の四相あり、大にしては天地の上に成・住・壞・空の四刧あり、而して、是の如き變化ある所以は、盡く原因結果の法則に依りて生々化々するのである。其の實體は無始無終であるから、生じ〳〵て生の始め無く、滅し滅して滅の終りは無い。卽ち、生じては死し、成立しては破壞し空滅し、空滅しては更に復た成立し、生死循環して窮まりあること無し。恰も春風秋月開花落葉の其の時を過まらずして、年々歲々始まつては終り、終りては始まるが如く、遂に其の始めの始めを知ることなく、其の終りの終りを知ることなしと云ふのが、佛敎の所論である。然れば今日の吾々も、其の本體は無始無終にして生死のまゝが不生不滅である。其の生死の相を現はすのは全く因緣生の假相である。是の如き假相は何に依て現はるゝかといふに、原因結果の作用である。旣に是れ因緣因果の作用なるを以て、苦樂の果同じからず、淨穢の相亦た各〻異なるのである。

然しながら凡夫の悲しさには、過去または未來なるものが實驗することの出來ざる爲めに、唯だ電光石火の如き現在一世に依りて、種々の判斷を下すが故に、永久に涉りて窮りなき因果の理致を諦觀するこ

禪の死生觀

千古の懸案

昨日は『人生觀』に就いて御話致したが、此の人生觀は、元來『死生觀』の如何によつて定まるというても宜い位のものであるから、寧ろ此の『死生觀』が確實なる人生觀を作るべき先決問題である。

凡そ天地萬物を、或は無常變化と說き、或は苦樂昇沈ありと說くも、畢竟ずる所は、此の生死の二つに歸着するものである。而して、生といひ死といふことは、實に是れ天地間の一大事實である。今假りに人生の上よりいへば、佛教では生・老・病・死の四相と稱して、生に始まり死に終る、其の間に老病を加へて、其の變遷の有樣を說かれてある。また萬物の上で云へば、生・住・異・滅の四相と稱して、物の現起じたのは生で、其の暫く存在するのは住で、また其れが變化して移り變るのは異で、また物の現在が過ぎ去て過去となり、全く現相の無くなるのが卽ち滅である。結局は其の物が生より死に至るまでの有樣を說かれたものに過ぎぬ。また世界觀の上より云ふ時は、成・住・壞・空の四刧と說いてある。刧とは梵語、具

て大道の根源に復歸し、以て人生即淨土たるの眞價を發揮し、而して一切衆生を濟度し、益々佛國土を莊嚴して行くことを永遠の目的とせねばならぬ。

づ其の淨土の根源となるべき吾人の一心を薫錬開發して、佛陀の智德を植ゑ附けねばならぬ。單に物質的文明をのみ事とするは、砂上の樓閣と同じく甚だ頼み少ないものである。

一心薫錬の要機は坐禪に如くは無い。端坐三昧に住して諸〻の妄念亂想を截斷せば、天地微妙の風光に接觸することが出來る。溪間を傳ふ水聲にも宇宙の妙韻が聞かれる。雲間に聳ゆる山色にも佛陀の法身が拜まれる。善人の前には地獄なし、惡人の前には極樂なし、迷へば卽ち凡夫、悟れば卽ち佛である。吾が一心をして佛たらしむれば、天地は其の儘の佛土である。吾が境界をして佛法たらしむれば、山河大地も總てに佛法ならざるは無い。

維摩經には淨土の本を淸淨心に置き、其の理を説明して

淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに隨うて卽ち佛土淨し

とある。華嚴經にも

衆生心淨きが故に淸淨刹を見ることを得

とある。之れに反して、若し心不淨なる時は、縱ひ佛の傍に在りと雖も、決して淨土の樂味を感ずることは出來ぬものである。『人生卽淨土』是れ實に禪の目的である。

要するに人生に苦樂の別あるは、煩惱心の有無と、罪障の多少とに依るものである。人生其のものゝ實相は宇宙の大道の現成にして、其の儘絶對の佛土である。故に吾人は、煩惱を斷じ罪障を脫し

思召され、國民全體の罪を滅するを以て御目的となし給うた。されば、吾々も亦た天下國家を以て我が身とも心とも思ひ、萬般を不完全なる狀態より解脫せしめんと祈るこそ、眞の忠義といふもので、之が公共的懺悔である。また前に述べた斷惑の結果として、善を修するにも公共的に修善すべきである。即ち、其の人の分に應じて、或は敎育に力を盡して國民の知識を進め、或は社會事業に熱心して交通の便を計り、產業の發達を進むる等の事は皆公共的修善である。此の兩の者は、宇宙の實相、佛性の妙德を吾人の心身上に實現する所以である。斯くする時は、此の世に於て漸々に佛土を莊嚴することが出來る。

要するに、人生は一面に悲觀すべき事實の存するものありと雖も、他の一面には此の人生を發達向上せしめて天地の大德を現はし、悲觀を轉じて樂觀となす可きものである。是れ即ち我が禪門に於ける人生觀上の一大覺悟である。

淨土の建設

人生を向上せしむといふは、此の國土に於て佛の淨土を建設することである。淨土といふは煩惱の穢れなく、罪惡の濁りなく、智德の圓滿に莊嚴せられた國土の義である。換言すれば、理想的國家の最高最極に達したのが淨土である。此の淨土を建設するのが吾々國民の大目的である。之を建設するの方法は、先

も、決して天をも人をも恨むことは無い。彼の渡邊崋山先生の如きは、實に能く懺悔心の出來た人と思ふ。勤王誠忠の士にして常に逆境に立ち、遂には悲慘なる死を遂げたが、皆な是れ自己の罪業と諦めて少しも時勢を恨まず、懺悔的に我が身を觀念し、悠然として死に就かれた樣に思ふ。其の蟄居の身となりし時の歌にも

とりつみて身をすみ竈のけむたきはおのがたきそふ薪なりけり

と詠て居る。我が身の此の不幸を感じたのは、必ずしも幕府の罪でも時勢の所爲でもない。畢竟是れは自己のたらはぬ所より招きしものと諦められたものと見える。斯の如き非常なる逆境に處しても、尚且つ其の罪を自己に求め、而かも益々その精神を勵磨して、德を修め、道を行なひ、將來に向つて好箇の運命を開拓して行くべきである。獨り自身の爲めのみならず、若し此の世が不完全ならば、やはり共同業力の所感であると信じて、此の世の全體に向て罪障の消滅を期すべきである。是れ仁人君子の志である。

明治天皇が明治元年に、五事の御誓文を立てさせられし時の御宸翰中に

今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其の處を得ざる時は皆朕が罪なれば、朕自から心骨を勞し心志を苦しめ、艱難の先に立ち、古へ列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ、始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし

と仰せられてある。誠に恐れ入つた有り難い仰せではないか。陛下は國民全體の罪障を以て御自分の罪と

すれば何の疑ふ所も無い。また天を恨み世を怨む所も無い。此の罪障を消滅するの法は、衷心より懺悔して自から自己の罪根を消殞し、且佛陀不思議の冥助を被むるに在るのである。つまり煩惱と罪障の分量に依て、人生の苦樂が其の程度を異にするものと見ねばならぬ。

坐禪の如きは、斷惑の功あるのみならず、また自づから滅罪の力もある。如何となれば、三昧に入て精神の實力が健全になれば、自然に佛陀の慈悲力を感應して、罪障の魔力を制するの作用あるものであるからである。楠公の如きは、明極禪師に參じて生死の一大事を究め、大安心の下に忠死せられたのである。また佛菩薩には願生といふがある。卽ち、願力に依りて生死の作用を現ずるのである。釋尊の降誕も、觀音大士等の分身度生も、皆な願力の致す所ならざるは無い。楠公の如きも盡忠奉公の大願力を以て、自ら進んで難局に立たれたのであるから、普通の夙業說を以て斷ずることは出來ぬ。此等の事は今玆に委しく說明するの暇が無い。諸君は何卒十分の御硏究あらんことを希望する。

公共的懺悔と公共的修善

併し佛敎の目的は、自己一身の解脫を得るが爲めではない。故に進んで社會人類と共に其の罪惡を消滅し、世界同胞と共に苦惱を解脫して行く樣にせねばならぬ。それが公共的懺悔である。懺悔とは既往の罪過を悔い、將來の行爲を誡むるの謂である。徹底自己の罪障を覺知する時は、如何なる苦惱を被むると

見し、天地の大情を洞觀し、萬象の美德を開展するに過ぎぬ。つまり宇宙本然の德に復歸するのである。その復歸には自づから二通の法がある。之を佛教の方よりいへば斷惑と滅罪の二法である。

斷惑と滅罪との二門は入佛道の關鑰である。信仰心の發得と共に必然行ふべき要法である。斷惑といふは、吾人の妄見迷執を斷ずることであつて、三界生死の苦惱は皆な妄見と迷情とが根本をなして居る。衆生は此の妄見迷情の雲に蔽はれて、天地の妙法にも美德にも觸るゝことが出來ずに居る。此の妄惑が無始劫來の習慣性となりて、容易に斷ずることが出來ぬ。之を斷ずるの捷徑は坐禪に如くは無い。

併し、世には心正しく身齊ひ、迷情妄見の薄き者にして、猶ほ且つ種々の苦惱に縛せられて居る者が澤山ある。彼の顏回の如き大賢も、一生清貧の境遇に處して、而も不幸短命にして死んだ。善良の人にして不幸の淵に呻吟する者も甚だ多い。また人格高き人にして其の終りを全うすることの出來ない者もある。楠公が、自分の意見は行はれず、その謀は用ゐられずして、戰死せられたるが如きは、亦た不幸の終りを遂げられたものといはねばならぬ。世には善人にして亡び惡人にして榮ゆる樣な、顚倒した事實は珍らしくないのである。是れは前世の業力の然らしむる處であつて、之を罪障と名づくる。吾人は此の罪障の爲めに不幸なる運命に苦めらるゝのである。

若し此の三世因果的關係を知らざれば、顏回の如き、或は楠公の如き、其の他、聖人賢者、忠臣孝子等の却つて不幸に終られた事に就いては、其の原因を推究するに苦しむのである。併し、佛教の因果觀に通

なはり云々

と仰せられて、宇宙の實相は佛化の光明にして、實に玄々妙々なる功德を宣揚するものである。

然らば、何れによりて此の理を知るかと云ふに、宇宙を人格的に說明すれば、人間と同じく智・情・意の三大作用、眞・善・美の三大德用が備つて居るものと見るべきである。見よ、天地萬物は古今を一貫して、一定不動の規律の下に活動して居る。春來れば百花爛漫、秋來れば千山紅葉、古往今來、未だ曾て一絲毫も此の規律判斷を過まることはない。是れ天地の眞相にして、吾人人力の變更し能はざるものである。松は自づから直く、棘は自づから曲れり。此の當相には一點の私なく、一毫の昧ます所なし。皆是れ天地の大智能の大活動である。また天地萬物は萬法相關の理に依りて、互に相依り相助けて各々回互圓通して居る。吾々の身とても地・水・火・風の四大が相和し相助けて、此の靈妙なる活動を爲して居るのである。眞言宗では、地・水・火・風・空・識の六大周遍の理を說いて此の理趣を開示して居る。斯くの如く、天地萬物自然に調和して、互に相依り相資けて居る。是れ天地の大情の大活動である。而してその活動が、取りも直さず天地の大意力である。此の大意力の表現する所、柳は綠に花は紅に、山は突兀と高く海は漫々たり、誰も作らねども春は花の宮殿を聯らね、誰が織り爲すにあらねども秋は紅葉の錦を飾る。是れ卽ち天地の大德にして、此の內には自づから眞あり善あり且美德がある。

今日吾々が、敎育の力によつて人智を進め、感情を養ひ、意志を練るといふも、畢竟は宇宙の大智を發

見方が變る。何事でもさうであるから、昭憲皇太后の御詠にも

　持つ人の心によりて寶とも仇ともなるは黄金なりけり

と仰せられてある。斯く諸法の實相には、善惡苦樂の別は無いに依つて、人生の實相も亦た本來平等である。然れども、其の實相には萬古不變の妙理がある。その妙理を分解すれば絶對の眞、絶對の善、絶對の美である。故に、此の妙理に反する者は益々墮落し、之に順ずる者は自づから實相に歸す。然れば、妄想を離れ眞善美を發揮するに努むるは、自然の法則といはねばならぬ。此の自然法を開示したのが佛祖の敎訓である。

復歸の術に二種あり

然れば天地宇宙の實相妙理は無味乾燥のものではない。宇宙は實に純眞純善純美なる無限の德相を具へて居る。故に佛敎では宇宙全體を一佛體とも觀じ、十方世界を清淨なる佛國土とも觀る。宇宙萬物の無邊際に佛光明を放つて居ることを觀破せしむるのである。我が高祖大師の言にも

　十方世界の土地草木墻壁瓦礫みな佛事をなすをもて、そのおこす所の風水の利益に預る輩、みな甚妙不可思議の佛化に冥資せられて、ちかき悟りを現はす。この水火を受用するたぐひ、みな本證の佛化を周旋するゆゑに、これらのたぐひと共住し同語するもの、またことごとく無窮の佛德そ

心を以て不善業を爲す人ならば、一年中、一日でも不吉ならざる日は無い。されば、無限の時間は佛性活動の生命であつて、善惡苦樂等の對待を超絶したものである。世間で旅立でもする時には、吉日だとか惡日だとか云うて騷ぐけれども、其の吉凶はつまり人間が勝手に定めたもので、決して法の本體でも時間の眞相でもない。故に、善惡を作り禍福を現ずるは人爲の然らしむる所である。天地萬物、差別の幻相に對する判斷も皆さうである。

法は現象の諸法である。吾々の此の身體も法なり、此の机の上にあるコップも机も皆盡く法である。此の法ありて善惡苦樂を生ず、その善惡苦樂の主體は、時により心によりて變化して止むことは無い。法には、必ず善なりとも必ず惡なりとも定むべき自性は無いからである。吾人の身體とても四大所成にして、始より善惡苦樂の決定性あるのではない。心學の書にも『五指を握りて一拳となす、是れ善なるか惡なるか』といふ語があるが、元より善惡超脫である。唯だ其の用によりて或は善となり或は惡となる。此の拳を以て人の頭でも打てば忽ちにして惡となり、同じ拳を以て親の肩でも打てば、親孝行者だといはれて善となるのである。宇宙の實相は善惡苦樂を超絶すと雖も、人爲に依て善惡苦樂を幻出すること是を以て知るが宜い。

經には『一水四見』と云ふことがある。同一の水なれども、天人は之を瑠璃と見、人間は之を飲むべく使ふべき水と見、餓鬼は猛火と見、魚は宮殿と見るとある。其の業因と其の心想とによりて、千差萬別に

は、畢竟、吾人の心より造り出すものである。法の本體實相は苦樂超絶のものである。從つて眞の人生には苦樂と云ふものは無い。その無いのが永久の大安樂である。

妄に背きて眞に合す

されば苦樂は人爲の法にして、人生の實相ではない。高祖承陽大師も正法眼藏の中に

善惡は時なり、時は善惡にあらず、善惡は法なり、法は善惡にあらず、法等惡等なり、法等善等なり、云々

と仰せられたのである。即ち、時と云ふものがあつて、善惡苦樂は其の時に依て起つて來るけれども、時其のものは善惡苦樂を超絶して居るのである。また法によつて善惡の相は起るが、法其のものは善惡の自性は無いのである。畢竟、法等惡等法等善等で、其の本體は平等無差別であると云はれたのである。最も占相家や九星見などにも相當の理論があつて、一概に排斥すべからざる點も無いではないが、然し是等は幾分かの迷信もあり、且つ一時的の假相に對する判斷で、縱ひ多少の論據はあるとするも、決して根本的不變の眞理とはいはれぬ。故に文殊菩薩の言にも

善を行ふに凶日なし、惡を作すに良辰なし

と仰せられてある。純善無垢の境界に至る人には、一年中、一日も凶日はない、目出度い一方である。惡

無いのである。

昔、京都に加茂幸長と云ふ歌人があつて、其の人の知己に一人の公卿さんがあり、而も直き隣に住んで居つた。此の公卿さんは、頗るの御幣擔ぎで、或る年の正月元日に、福茶の禮を行はんとせられし時、御給仕人が過つて福茶の土瓶を割つて、中のお茶を皆こぼして了うた。公卿さんは大に怒つて、直ちに給仕人に放逐の命を下し、今年は福が割れたといふので、邸内中のものにまでも當り散らし、せつかくの元日も散々なことになつた。給仕人は大層心配して、幸長翁の許に行つて御詫びを賴んだ。翁は直ちに走せ來りしが、相變らず殿は怒つて居らるゝから、翁は之れをなだめて『今朝の出來事は却て御目出度き瑞相かと思ひます』と云ひつゝ、直ちに料紙を取り出して

元日にどん(鈍)とひん(貧)とを打ちわりてあとに殘るはかね(金)のつるなり

と讀んで呈した。すると、公卿さんは俄かに心を取り直し、大に喜んで『鈍と貧とが打ち破れたとは何より有り難い、今年は必ず幸福が來るであらう、それに就いては給仕人放逐は中止々々、却つて御祝儀を遣はすぞ』とて、一分の金を與へられた。そこで給仕人も亦た大に喜び、其の金子を二ツ分けとして、其の一半の二朱だけを幸長先生に差し上げた。先生、元來貧乏であるから、喜んで之を納め

元日によぎないことを賴まれて一首の歌が二首(朱)になりけり

と詠んだと云ふことである。斯の如く、苦樂の境というて別に定まつたものは無い。其の苦樂なるもの

くであるといふのである。一切の法は皆な夢の如くにして賴みとするに足らず、縱ひ之れを得ることあるも、終には泣きの涙の中に相離れねばならぬ。是れも實に掩ふべからざる事實である。併し、また同經に於て

我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり

とも仰せられてある。即ち、此の世界に將來滅亡の時が來りて、大火の爲めに燒かれ、大水に流さるゝことありとも、我が佛土は常に安全安穩にして、天人其の中に充滿して樂しみ窮りなしと示されたのである。我が佛土というても外の國ではない、人生そのものである。また維摩經の中には、佛弟子舍利弗が、此の世界が即ち佛國土であるといふ問題に疑を起して、螺髻梵王に問うて

我れ此の土の丘陵、坑坎、荊棘、砂礫、土石、諸山、穢惡の充滿するを見る

即ち、此の世界は衆多の穢れと罪惡とに包まれて居るではないかと質した時、梵王答へて

仁者心に高下あり、佛慧に依らざるが故に、此の土を見て不淨と爲すのみ

と云うた。即ち、此の世界を穢惡不淨と見るのは、汝の心に高下あるを以て、種々の差別あり優劣ありと思ふので、此の世界の實相を觀ずれば、本來清淨にして、苦樂悲喜の別あるものではないと示された。吾々も亦是の如く、同一世界に生れ、同一の境遇に居りながらも、其の感ずる所は皆別々であるから、悲觀する人もあり、また樂觀する人もあるのである。つまり唯心の所造であつて、外より我を制するものは

來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや

と示されてあつて、此の人間界ほど位地の尊貴なるものはないのである。三世の諸佛も皆な人界に於て御成功なされてある。されば吾々も、此の世に生を受けたる善果報を喜び、急ぎて眞理の頂巓たる佛の道を信仰し奉行して、早く永遠の大安心を決定せよとの御示しである。高祖大師は、此の意味に於て此の人生を、尊きもの、喜ぶべきもの、優れたるものと見て居らるゝのである。

凡そ人生の一面は慥かに苦痛なるもの悲觀すべきものであるけれども、此の苦痛とか悲哀とか云ふ事柄が、却て道を踏み法を行ふ增上緣となつて、吾人の修養力を增進するものである。

法に定相なし

斯の如く、人生の一面には悲觀すべき事實があると同時に、また一面には樂觀すべき價値がある。然らば、人生は果して何れを以て定義とすべきかといふに、畢竟、法には定まりのないのが定まりである。人生そのものゝ實體實相を達觀すれば、決して悲觀とも樂觀ともいふべきものでない。故に同一の經文中にも其說不定である。彼の諸法實相を說ける法華經に

三界は安きこと無し、猶ほ火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖畏すべし

とある。此の佛說に依れば、人生は甚だ苦痛なるもの、幸福も快樂もなきものにして、火宅に住するが如

及ばざるをのみ遺憾として、相共に手を取りて濟度の一方に熱血を注ぐは自然の勢である。尙ほ一步を進めて、上流社會、卽ち華族とか富豪とかいふ人々の、內部の狀態に立ち入て觀察すれば、さういふ社會にはまた其の社會に相應せる苦しみがあるものである。上流の人々の中には、却つて中流以下の生活狀態を羨やみつゝあるのがいくらもある。

先年死去された岩崎男爵の如きも、高輪に於て老後の靜養を成さんとし、園藝趣味に富める別邸を建てられたのに、其の建築は未だ全く出來上がらざるに、早くも黃泉の客となられたのである。別邸に移られたが、その庭園の散步だもせらるゝことが出來なんだと申すことであります。また東鄕大將夫人の御父親であつた海江田子爵の如きも、星ケ岡の茶寮に於て突然病を發し、其の時より人事不省に陷り、間も無く薨ぜられたが、其の臨終の折には看護婦などが色々と手當をするのをうるさがり『嗚呼そんなことをするよりも、せめて心經の一卷も讀んでくれゝば宜いに』と夢中で言はれたさうである。子爵薨去後、私が御悔みに參り、その話を聞き、枕頭に於て普門品と心經を讀んだことがある。其の時近親の人々は皆な泣て喜んで居られた。斯かる上流人でも、やはり苦しみに終り歎きに死せねばならぬ。是れが人生の常態である。

然しながら、樂觀の方面より見るときは、我が高祖大師も正法眼藏の中に

此の發菩提心、多くは南閻浮の人身に發心す可きなり、今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し

が、佛陀出家の動機であり、また畢生の御願望であつたのである。吾々と雖も、眞面目に人生を觀察して見たならば、果してどんな者であらう。人間世界の有様は苦樂相半ばして居るとは申しながら、不滿足の方が大部分を占めて居るではあるまいか。生・老・病・死の四大苦痛は變化の大なるものであるが、其の小變化を觀じ來れば、社會の大部分は苦の叫びである。

抑も、人間の始めと終りとを諦觀すれば、人の始めて生るゝや、人皆な之を喜ぶも、其の死するや相共に悲しまざるは無い。即ち、人間の一代は喜びに始まり悲しみに終るものである。加之、生と死との中間はどうかといふに、生活難の泣き聲は到る處に喧しく、吾人の四圍の事情は愍れむべき事柄に充されて居る。一度社會の中流以下の内部に立ち入つて見たならば、其の有様は却々に萬物の靈長などと云ふ様なことは言はれぬ程で、殆ど名狀することの出來ない様な苦境に呻吟して居る者が多いのである。或は貧苦の爲めに惱み、或は愛別離苦に縛られ、或は怨憎會苦に泣きて、寸時も心を安める時はない。まるで苦む爲めに生れて來たのではないかと疑はれる様な事實もある。

樂天などゝ云ふことは、中流以上の人、稍や幸福なる生活を爲す者の叫ぶ所で、下流社會の人で種々の苦しい事情に束縛せらるゝ者などの、夢にだも見らるゝ所ではない。敎育を受くるの力もなく、愉快を求めることも出來ず、只だ孜々役々として其の日を送るの道に勞して居る者には、とても樂天などゝいふことは出來ぬ。されば古今の仁人君子は、此の社會の狀態を見て同情の涙禁じ難く、唯だ其の救濟の力の

つの人生觀を合せ行ふ、即ち、悲觀に依りて佛教に入り、樂觀に依りて修行の目的を達する樣なことになつて居る。

佛教の所謂悲觀は、其の根據を無常觀に發して居る。無常といふことは、敢て悲しいことのみをいうたのではない、即ち人生に於ける變化の相を示したものである。凡そ天地間に於ける一切萬物は、瞬間も止まつては居らぬ、刹那々々に變化して居る。飛花落葉は言ふに及ばず、冬木立の春風に逢うて霞を帶ぶるも、新綠露を含んで萬木の欝蒼たるのも皆な變化の相である。小兒が大人になるのも、野蠻人が文明人となるのも亦た皆な無常の相である。併し、現在の人生は果して如何といふに、物質上から見ても缺陷が多い、道德上から眺むれば猶更のことであるから、決して滿足すべき狀態ではない。併し、こは人生その物の定相ではない、つまり吾々の業力の致す所である。故に現在世間の無常を觀ずる時は、先づ以て之を悲觀せざるを得ない、而して其の悲觀は吾人の業力の自覺である。

我が高祖大師の如きも、其の御幼少のをり、母君の薨去に逢はれ、其の枕邊に上る香煙の忽ちにして消え失せる樣を見られて、嗚呼人生は恰も香煙の如くであると、轉た其の無常なることを悟られ、遂に大菩提心を起されたものである。釋尊とても亦た斯の如く、其の身は何の不自由もなき一國の皇太子と生れたまひしも、生・老・病・死の四の苦みは、人力を以て之を免るゝこと能はざるを嘆かれ、如何にして此の四苦を解脱して大安心を得べきや、また如何にして一切衆生の苦惱を救濟することを得べきやと云ふの

人身受け難し今已に受く、佛法聞き難し今已に聞く、此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向つてか此の身を度せん云々

とある如く、吾人は一切の生物界中に於て、萬物の靈長と稱せらるゝ人間の身に生れたのは、稀有最勝の果報である。而かも古今東西に比類なき、佛の正法を聞き奉ることを得たるは、人間の中に於ても最大幸福の身といはねばならぬ。若し徒らに一生を過し、只だ無意味に人生を送らんとするが如きは、所謂醉生夢死の流輩であつて、せつかく貴重なる人身を受けても、何んのかひもないものであるから、吾々は此の身の勝果を喜び樂しむと同時に、生きがひのある者とならねばならぬ。

人生畢竟是れ何物ぞ

されば吾人はよく〳〵人生の何物たるやを知りて、其の目的を明らかにし、之れに向つて向上進歩すべきである。斯くありてこそ、天地間最尊最貴なる果報として自ら樂むことも出來るのである。是の如く此の人生は、其の半面よりは誠に苦痛もあり缺點もあるものであるけれども、此の世の中は只だ好いことばかりでは決して向上せぬものである。人生には種々なる苦痛と缺點とがあればこそ、吾人は發憤努力して此の不如意の境遇を脱れようともし、此の苦痛を免れようともして行くのであるから、苦痛や缺點が却つて、吾々をして向上進歩せしむべき修養上の好因緣となるのである。我が禪門に於ける修養は、此の二

禪の人生觀

人生觀の兩面

佛教は御承知の如く、八萬四千の法門にも分れて居る。釋尊一代の御敎化は、多くは對機の御說法であるから、其の衆生の機根に應じて種々の法門を開き、以て彼等が身心兩面に於ける煩惱苦惱を救はれたものである。故に其の說法の相も、時により處に應じて、固より一樣ではないと云ふことは、既に前に申し上げた如くである。然しながら、人生觀に對する御示しは、畢竟二の方面に大別して見ることが出來る。卽ち、厭世觀的說法と、樂天觀的說法とである。前者は、人生は悲しむべきもの、厭ふべきもの、苦痛なものと說き、專ら此の人生を解脫しなければ、到底安樂の境界に到ることは出來ないものと示されたのである。我が佛教の一面は、慥かに此の解脫的修養の方針を開示せられたものというても宜い。然して、後者の場合では、人生は決して厭ふべきものでも悲觀すべきものでもない。人生は其の儘の佛土である。卽ち娑婆卽寂光淨土であるから、寧ろ樂觀すべきものであると示された。禮讃文にも

使はれて、無心有心に偏せず空にも色にも黨せざる處、是れ全く禪の實現である。

要するに、一切の取捨憎愛、妄想分別等對待の二見を解脫して、生死の根本を截ち、煩惱の基本を枯らし、大死一番し去つて始めて大活現成し、天眞の性德を現はして來る樣になれば、一切萬境は盡く自己の淨土、色聲香味觸も大道の活用、宛轉自由、玉の盤上に在るが如く、此の人生を送過する事が出來るものである。是れ禪の禪たる所にして、所有修養の極則とも云ふ可き所である。

身心脫落

禪の目的は前述の如く、自己本性の悟達徹證に在るものであるから、其の究極に達したる狀態を身心脫落といふのである。脫とは解脫の意で、內外の障礙、一切の惡魔を遠離して、身心共に寂然泰然たる樣子をいふ。また落とは洒落で、水を以て身體の全部を洗ひ、諸の塵垢を淨め除きし樣子である。故に脫落というても、小乘に云ふ所の無餘涅槃の樣に、身心都滅の意ではない。換言すれば、自己に本來具有せる天眞の妙性が現れて、一切時一切處、內外共に少しの束縛をも被らざる唯我獨尊の境界である。此の境界に達すれば、緣に對し境に應じて自由自在で、手を擧ぐれば自づから智光を發し、足を動かせば自づから慈光を放ち、寢るも起きるも佛祖の身心の活動となるのである。

斯の如き境界に至れば、妄念執着は悉く截斷されて更に迷悟の相に迷はず、佛とか凡夫とかいふ名にも惑はされぬ。超然として平等法界の中に逍遙する。是れ則ち殺人刀である。吾々が座敷を掃除せんとするにも、一旦は、其の內にある物は、必要品も不必要品も一切取り出さなければ、眞の掃除は出來ない。吾々の心地上の大掃除も、一旦は善惡邪正共に放下して、一法の顏出しも許さぬ樣にするのが殺人刀の用きである。かくして掃除が出來上つた處で、此度は必要のものだけ整然と座敷に入れゝば、始めて一切の道具も皆な莊嚴の德を現はすものである。此れが則ち活人劍である。此の活人劍と殺人刀とが自由自在に

である。

現今世に行はるゝ腹式呼吸または靜坐法の如きも、禪に相似して居る様に思はれる。而し是等は寧ろ禪の調息法または調身法より出でたるものとも見られる。

古の平田篤胤翁の調息法の如き、また現今の二木博士の腹式呼吸の如きも、夜船閑話等に在る禪法の一種に類似して居ることは言ふまでも無い。また岡田式靜坐法の如きは殆ど坐禪の狀態と異る所がない。殊によく似て居て、つまり禪の初步であるというても宜しからう。併し、禪には根本の目的がある。卽ち、自己の本源佛性を徹見し、宇宙絕對の妙道に契合するのである。腹式呼吸や靜坐等は、唯だ身體を訓鍊して精神の健全を期するが爲めであつて、別に見性成佛とか、物我一體とか云ふ樣な、高尙なる目的を有しては居らぬ。然るに、禪は斯くの如き簡單なるものではなく、超凡越聖の靈機を發轉し、迷悟兩がら解脫し、所謂天眞にして妙なる境界に達して、自覺々他の妙德を開發するものである。

併し、腹式呼吸または靜坐法も、全く禪的修養の初步と見ることが出來るに依て、其の實行の時に當り、身心共に靜寂に歸したなら、更に一步を進めて、自己の問題を返照工夫し去らば、正眞の禪となることであらうと思ふ。今は詳細の說明は略して置くが、諸君は十分に双方を對照して、禪の眞面目を了解して貰ひたいことである。

る、今までは何れの處にか在りしぞと仔細に穿鑿して見よ、然らば必ず大無我の境界を得て、解脱の樂しみに住するであらうぞ」と云はれた。是れ亦た返照の一法である。吾々は尋常に此の返照の功を積む時は、自づから自己本來の佛陀に相見し、行住坐臥に禪定三昧に住し、天地の大道と我が身心と自然に一致することが出來るのである。

禪と催眠術等

世間には、禪と催眠術とが一致して居るものゝ如くに考へて居る人があるけれども、是れは禪の何物たるやを知らないから起る謬見である。催眠術は凡ての自發的活動力を停止して、滅盡狀態にして、其の精神內部の空虛になつた處へ、施術者が暗示を授くる。是れに依つて種々奇態なる動作を現はすものである。或る意味に於ては、禪と多少似よつた所がある樣に思はれるが、禪なるものは、決して催眠の如く我が精神を空虛にするに非らずして、其の反對に精神の大氣力を充實し、肚裡一切の執着を打破して、天眞の本性を顯現し、以て智德の根基を作り、自利々他の大行を活動するのである。されば禪と催眠術とは、其の目的に於て天地の差があるばかりでなく、其の實行の狀態も全然別々である。即ち、催眠は意識の活動を停止するので、禪は本性の活動を開發するのである。催眠は精神を空虛にし、禪は精神を充實す。催眠は暗示に依て作用を起し、禪は萬法の中に在りて不動の三昧に住す。此等の異點は算ふるに遑なきこと

れたさうである。是れ即ち退歩内觀の力に依て、鐵を轉じて金と爲したのである。萬事の事が其の人の觀念一つで、我を嫌ひ我を惡みし者も、却つて我を勵し我を利導する善智識となるものである。我が禪門の工夫は之れと事柄は違ふけれども、其の外境に對して妄分別を發さず、却て自己に返照して本性を研磨する趣きは同型である。

昔、印度の跋陀婆羅菩薩は入浴中に開悟した。即ち水因三昧を悟られた。洗ふ水も洗はれる身も元と空寂である。汚す物も洗ふ物も同一性である。汚れたる煩惱も淨らかなる菩提も、迷も悟も本性は一如であつて、法界平等無差別圓通の眞理を發見したのである。是れも亦た回光返照の退歩より得たる悟りである。吾々も亦是の如く、事々物々上に返照し去れば、其の物其の處が直下に本來の面目、即ち實相の妙理に觸着することが得られ、東坡の所謂、溪聲便是廣長舌、山色豈非淸淨身と云ふ本地の風光に接するのである。

臨濟宗の高僧正眼國師の下に、一日、一信者が來りて相見を求め『私は生來短氣であつて誠に困つて居ります、願くは禪師の御德に依つて治して戴きたい』と云うた。すると國師は『それは厄介な物を持て生れて來なされた、如何にも治して進ぜようから、今茲でちよつと其の短氣を起して見せなさい』、彼れはもぢ〱して『どうも只今は起りません』と答へた。國師は『だが生れつき持つて居るなれば、どこかに居るに相違ない、然らば此の後に起り來りし時は、先づ第一に其の出處を取調べて、汝何れの處より來

を起すべきである。總ての道德的觀念法は、皆な之れに準ずるが宜い。況や禪定の上に於ては、萬境を遂うて善惡苦樂の情に馳せず、常に歩を回して自己の本心を照し、以て自己本性の無垢なる光明を發揮するのが回光返照である。

江戸幕末の頃、奧州郡山の人に、安積艮齋と稱する大儒があつた。此の人は生れつき甚だ見苦しい容貌であつたに、其の上、不幸にも無類の惡性なる天然痘に罹り、非常に醜い顏となつた。父母は之を憐み、生長を待て妻を娶りしに、其の婚禮の夜、花嫁は夫たる艮齋の顏を一見して、其の晩の中に逃げだしてしまつた。また第二の妻を娶りしに、是も逃げてしまうた。普通の者なら其の花嫁を恨むであらうが、流石に彼れはそれを恨まぬ。自ら鏡に向つて我が顏を照し『成程、これでは嫁の逃げ出すのも無理はない。予は是の如き顏に生れたのは今更致し方がない、此の上は心を磨くの外はない』と決心し、それより大に感奮して江戸に出で、佐藤一齋先生の門に投じ大に學問を勵んだ。學友が散歩に出懸けても、うつかり外に出でて人に笑はるゝよりは、内に居て勉學せんには如かず、と思うて修業したので、普通の人の二倍も三倍も學問が出來た。そこで自ら喜んで『天、幸にして我れに此の容貌を與へ、我をして勉學せしむ』と稱して、毫も其の不幸を悲しまなんだ。其の功空しからずして、佐藤門下の白眉といはるゝ程の人物となり、當時の聖堂の敎師と成つた。晩年に至り、書齋の床に花嫁の畫像を掛けて居つたが、人に語りて『今日の我れあるは、此の花嫁が我を嫌ひくれたる恩力の賜なり、此の恩報ぜずんばあるべからず』と申さ

須らく言を尋ね、語を逐ふの解行を休すべし、須らく回光返照の退歩を學すべし、身心自然に脱落して、本來の面目現前せん

と示されてある。吾々の心光は常に萬境を照して、朝より暮に至るまで、千差萬別の境界に對して、種々の妄念妄想を起すのである。然るに、此の心光を制止して、却つて内省内觀し、思量の根柢たる一心の本源に工夫を下すのである。此の内省の修養は、普通心操を調ふる上にも必要である。永嘉大師の證道歌には

惡言は是れ功德なりと觀ずれば、是れ卽ち我が善智識となる

と示されてあつて、人より惡口を云はれた場合の如き、唯だ惡口に對して腹を立てるといふ様なことをせず、先づ退いて我が心に省み、是れは何故に惡口せられたのであるかと返照して見れば、自然に腹を立つることも無いのである。凡そ佛敎の根本原理は、因緣主義に基くのであるから、何等の過失も無くして、漫りに人より惡口雜言せらるゝは、是れ過去世に於ける罪業の然らしむる所であらうと觀ずれば、益々自ら慚愧して德を養ふ様になる。または煙の有る處には必ず火あるが如く、我が身には惡口を招くだけの缺點があるならんと觀ずれば、彌々平生の過失ある行爲を改めて行く様になる。さすれば、惡言の爲めに却て修養力を増進するに依て、惡言が寧ろ我に取りては善道に進歩せしむるの善智識となるのである。故に、彼に向つて咎むることなく恨むことなく、何處までも退いて自己を内觀内照して、罪障消滅の大願行

識を泯滅し枯木の如くになれと云ふのではない。妄念妄想を遠離すれば、念々思量する其の當體に於て眞の解脱を得るのである。心の欲する所に從つて其のまゝ不染汚無罣礙となり、終日念起するも其の念起が少しも邪魔にならず、念々無執着である。恰かも身體の壯健な人なれば、如何に勞力を爲すも少しも疲勞を感ぜぬから、手を使うて手を忘れ、足を働かして足を忘れて居ると同樣である。また道を行くことの極達者な人は、如何程遠い道を行つても、少しも疲れを感じないから、足にも體にも些少の束縛苦痛が無い。即ち其の儘に解脱を得て居るのである。今日吾人が念々思量のまゝが、矩を踰えず、至道に隨順し、毫も妄念妄想の爲めに束縛せられず、結局は、知行合一、物我一體となり、天然の妙用純潔の行持となり、觸處不染汚無爲無漏の功德を莊嚴し、大解脱を得るのである。こゝを法華經には、

安住不動須彌山の如し

とも云うてある。一心寂靜、迷悟の情想に拘はらず、此の當體即ち是れ菩提の境界である。

回光返照の退歩

斯くの如き境界に至らんとするには、回光返照の退歩を學得せねばならぬ。光とは萬境に對して思量する能照の心である。此の能照の心光たる思量を回らして自己を返照するの工夫を退歩といふのである。坐禪儀にも、

身相既に調へて欠氣一息し左右に搖振して兀々として坐定せよ

とあるが、調身宜しきを得ざれば、坐相も心念も中庸を得る事は出來ない。調身宜しきに契へば、身心共に兀々不動にして自然に法式に契ひ來るものである。深呼吸とか腹式呼吸とか云ふ説明を別に致さんでも、任運に呼吸が調うて來るものである。

次には調心である。調身よりも、調息よりも、心を調へるといふことが一番大切である。また一番難かしいのである。如何となれば、心さへ能く調へば、調身・調息は自然と成功するものである。併し、調身と調息とが、やがて調心の要術であるから、敢て必ずしも輕重を別つべきではない。此の調心にして成功すれば、即ち坐禪の目的が達せられたと云うても宜い。然らば如何に調心すべきかと云ふに、承陽大師は坐禪儀に於て

箇の不思量底を思量せよ、不思量底如何んが思量せん、非思量、是れ即ち坐禪の要術なり

と御示し下されてある。即ち思ふことも量ることも出來ざるものを、思量し研究せねばならぬ。然らば如何やうに研究すべきかといふに、非思量であるといふのである。是れぞ眞の坐禪の調心法である。思量とは、人の水を飲んで冷暖自知するが如く、その冷暖を自知する底のものが思量である。惜い欲い憎い可愛いといふのも思量である。此の思量する底のものは何物ぞと參究するが宜い。參じ盡し究め盡せば、遂に無我の根柢に到達して、自然に妄想の窠窟を打破し、徹底非思量となるのである。非思量というても、意

右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩の大拇指面で相ひ拄ふ

かやうに足を組み手を組むこと法の如くなれば、身儀は自づと整ふのである。また口と目は坐禪儀に

舌は上の腭に掛けて脣齒相着け、眼は須らく常に開く可し、鼻息微かに通じ云々

とあつて、口は堅く閉ぢて呼吸は鼻よりし、目は程よく開くがよい。時には瞑目するも必ずしも妨げは無い。而し、是等は皆な禪心を發するに便宜なるべき手段方法であるから、其の人に依りて多少の變則はある。即ち身體の工合で、鼻息の困難なる場合は、少しく口を開いて息をすることも絕對に否認はせぬ。また目を閉づると昏睡に陷るの恐れがあるから、半眼に開かしむるのであるが、場合によりては瞑目も妨げぬ。

婦人方や歐米の方々などで、禪的に坐ることの出來ぬ方があるが、さういふ方は普通の坐り方で下腹部に力を入れ、脊梁骨を竪立して禪に入る。予は是を平坐式と稱して居る。併し、練修に慣れたならば正式の坐法を修められたい。歐米人にて絕對に靜坐不可能なる向は、椅子に靠りて腰部以上を坐禪式とせば、亦以て調身し得るであらう。

息を調ふの法に就いては、格別嚴しい規定はない。唯だ十分に心を落ち着け姿勢を端正にし、下腹部にウンと力を入れ、下腹を前面へ突き出す樣な心持ちにして、全身を引き締めて坐さねばならぬ。かく精神を安靜にすれば、自然に息が調うて來るものである。坐禪儀に、

になつて、今では止められぬ」と云うて居られた。されば、準備と云うても、諸君が尋常に行ふには、別に特殊なる方法を設ける程のこともない。唯だ熱心に參禪する心があれば、何處で坐つても、自から深山幽谷に住する樣な心持がするであらう。

調身・調息・調心の三法

次ぎに、愈々坐禪に取り掛つてからの要心として大切なるは調身法である。調身とは身體を調整することで、即ち坐り方である。これに結跏趺坐及び半跏趺坐の二法がある。前者は普通の坐禪の仕方である。坐禪儀に

　結跏趺坐は、先づ右の足を以て左の䏶の上に安じ、左の足を以て右の䏶の上に安ず

とある。併し、馴れぬ人や婦人方などには、足が痛んだりして思ふ樣に坐れぬ人もあるので、簡易な方法として半跏趺坐と云ふがある。即ち坐禪儀に

　半跏趺坐は、たゞ左の足を以て右の䏶を壓すなり

これならば誰れにでも出來る。併し、始は半跏をしても、後には結跏をする樣にせられたいものである。また坐久しうして疲勞せし場合は、結跏も半跏も、右足と左足とを交換しても差支へは無い。是れ天童如淨禪師の親訓である。手の組方は坐禪儀に

坐禪の準備

然らば諸君が坐禪を實行するには、如何なる方法に依るかと云へば、先づ準備に對する心得が大切である。此のことは我が承陽大師の普勸坐禪儀、及び常濟大師の坐禪用心記等に示されてある。即ち坐禪儀には、

夫れ參禪は靜室宜しく飲食節あり、諸緣を放捨し萬事を休息し云々

と御示しになつてある。坐禪をするには、場處は靜かな處を擇び、食物に注意して暴飲暴食を愼しまねばならぬ。また坐禪中は一切の仕事を打ち捨てねばならぬ。此の外、衣服を着けることも成る可くゆるやかにせねばならぬ。僧堂または禪堂と云ふ專門の場處で坐禪すれば申し分は無いが、諸君はめつたに僧堂詰も出來まいから、先づ佛壇の前とか、若しくは机に向つてしても宜い。また壁に向つてするのも宜い。而して、精神を禪定に傾注するには、達磨大師とか瀟洒なる觀音大士の像とかを寫した軸物を懸けるも妙である。または線香をたてることなども心を靜むるに適當である。また或は寢る時とか起る時とかに布團の上で坐るもよい。

東京の鈴木充美と云ふ方は坐禪に熱心であるが『毎朝四時より五時ぐらゐまでの間、寢床の上にてする、其の後にまた寢ることもあるが、大概時間を極めてする、其のせゐか身體も壯健になり、精神も爽快

唯だ汝が自家の屋裏に向つて打點す可し

と答へられた。即ち、道を知らんと欲せば汝が方寸に向つて體得せよ、また汝が修むる儒教の上に就て會得し去れ、敎外別傳の旨は自ら其の中に在るぞと云はれた。尙ほ彼は儒者であるからして、祖心禪師は又も語を轉じて、孔子も

朝に道を聞いて夕に死すとも可なり

と云はれた。顏回も、孔子の讃語にもあるが如く、一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在つて曾つて其の志を改めなかつたとあるではないか。顏回は大賢であつたが頗る貧乏で、今日で申せば、先づ下等の生活をして居たのである。けれども其の道を樂しみ、其の道に依つて生活して居たから、王侯も尙ほ及ばざる樂みがあつたのである。さあ其の道とは何物ぞと工夫して見よ。一篇の論語は皆な此の道の註釋であるが、其の道を究むることは文字の穿鑿のみでは出來ぬと示された。

されば吾々は生々世々を盡して、此の道の本源と大用とを參究せねばならぬ。苟くも參究して倦まざれば、必ずや禪門の關鑰を踏破して、悟道開發の域に達することが出來やうと思ふ。然し、萬難を排し千辛を忍びて勇猛精進する底の志氣がなければ、一生涯を通じても到底駄目である。是れ坐禪といへる實修法の必要なる所以である。

大學の道は明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り。

とある。至善とは圓滿なる道德を稱したものである。大道を實踐して其の德を自得するのが至善に止まるのである。

禪門の悟りといふも亦た唯だ此の大道を極め、之れを實踐躬行して行くのが目的である。その目的を達するには人間界が最も好機會であるのである。禮讃文にも有る如く、吾々は幸ひにして此の受け難い人身を受けて居るのである。而して逢ひ難き佛法に遇うて居るでは無いか。此の生に於て是非此の大道に徹底せんと誓はなければ、他に好機會は無いのである。されば如何に多忙な人でも、此の大道を參究しようと云ふ眞實の志があれば、必らず禪の實行は出來るものである。而して、苟も道に志ざすものは、宜しく勇猛精進して、必らず其の極處に到達せんとの氣概が無ければならぬ。承陽大師も

夫れ學道は志を專らにして眞實なる可し、眞實なれば道卽ち徹す

と仰せられたではないか。元來、道は世間・出世間を通じたものであつて、其の道の本體には別に異ることはない。世間と出世間とは唯だ道の觀察と應用とに深淺があるのみである。儒敎でも、佛敎でも、其の他何の敎義でも、道と云ふ根本問題に至つては、共に一致す可き點が無ければならぬ。

昔、周茂叔と云へる支那の大儒は、晦堂祖心禪師に相見して敎外別傳の道を問うたことがある。卽ち『佛の道は文字言句に依るのでないと云ふが、此の別傳の旨意如何』と問うたのである。すると禪師は

を起さなければならぬ。即ち、求道の大精神を發揮して、飽くまで之れが實行を期することが必要である。

前にも述べた通り、自己の本性を覺知し宇宙本來の大道を開發して行くのが禪の本領である。然らば、其の道とは一體如何なるものであるか、明治天皇の教育の御勅語の初めにも『克ク忠ニ克ク孝ニ』と標示せられ、此の忠孝二道を全うする所以の道を、更に孝友和信等の十五點に開いて、斯道を實踐すべき標準を示されてある。是れは道の德相である、道の表象である。更に一歩を進めて此の道の本體を體得するのが禪である。道の本體というても別物ではない。自己の本體本性が即ち道の本體本性である。道の本性に通曉して、始めて能く其の妙用を發揮し其の德相を實現するものである。

吾人が人としての眞價値は、此の道の有無によつて定まるものである。縱ひ、學、古今に通じ、才、東西を該ね、凡ての方面に活動すべき如何なる才能を有すればとて、若し道の本體を體得して其の德相を實現することなかりせば、徒らに枝葉に流れ形式に偏して、眞實、道を以つて自己たらしむることは出來ぬ。今日、教育の上より見ても、知識の日に進むは誠に結構であるが、眞に能く人物を養成するといふことになると、未だ感服し能はざることが多い。されば教育家も行政家も、此の人物教育に就いては非常に苦心して居られる様に思ふ。彼の儒教に於ける大學の教へは、やはり人物教育が本位であるから、大學には

禪の實踐

勇猛精進なるべし

本日は『禪の實踐』に就いての御話しであるが、之れを專門的に委しく御話しすれば、頗る複雜なる說明を要する點があり、また多少特殊の儀式をも敍べねばならぬから、到底此の一席位で盡すことは不可能のことであるに依つて、專門的の御話しは御預りにして、只だ普通坐禪の仕方、卽ち、誰れにでも出來る程度の實行方面に就て御話しを致さうと思ふのである。

何事によらず、事を爲すに當りて、志を立てんと欲せば、先づ以て確實なる信念を作ることが必要である。特に宗教に於ては最も此の信念が大切である。世間のことにしても、思ひ立つて直ちに成功を見るといふことは不可能なことであるから、先づ其の爲さんと欲する事柄に對して、充分堅實なる信念を持つて實行に取り掛からねば、一生を通じて不成功に終るものである。況や自己の本性を開發して、永久的大安心を得ようといふ坐禪の如きは、第一に必らず自己一生の一大事として、誓つて成功しやうといふ信念

人に瞞せられず、即ち空手にして鄕に還る、所以に一毫も佛法なし』と云はれた。眞箇の佛法は法界に充滿し山河大地齊く大光明を放つ。別に迷悟とか佛法とかの名相の附すべきは無い。卽ち、山は突兀と高く海は漫々として廣し、烏は黑く鷺は白し、此れ以外に別に佛法ありと思ふべからず。故に我は空手で鄕に還れりといはれた。是れ無佛法の佛法である。

されば佛法は他に求むべからず。天地の妙理、佛性の光明を知らんと要せば、人々眼橫鼻直である。眼橫鼻直なる自己を見得すれば、喫茶喫飯も皆な大菩提の活動である。一切衆生皆な如來の智慧德相を具すと雖も、妄想執着の爲めに證得しないのである。若し妄想執着を脫すれば、如來の大光明は燦然として現はれて來るものである。

要するに、禪の本領は自己の本性を顯現し、自己をして眞の自己たらしむるにあるのである。大乘小乘一切の經卷を手脚として進み、人生に處しながら安住不動の王三昧に體達すと云ふにあるのである。然らば、如何にして此の王三昧を修養し、以て現在に於て此の境界に至り得るか、といふことは以後項を追うて述ぶる積りである。

尊なることを識得すれば、自己以外、何物にも執着せぬ様になる。佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺す、是れ卽ち眞の解脫、眞の涅槃、眞の佛境界である。殺すといふことは其の名と相とを超越することである。換言すれば大無我である。此の大無我の境界に至つてこそ、始めて達磨大師の廓然無聖の端的に觸着するのである。之れが正しく人々の自己を明らかに證悟し說明し得た所である。卽ち自己の本分を會得した時である。

一度此の境界に達すれば、祖師何人ぞ、吾れ何人ぞ、佛祖と我れと第二面は無い。碧巖錄の中に、雪竇和尙は我が座下の大衆に向つて『這裡に達磨は居らざるか、居るならば喚び來れ、老僧が爲めに脚を洗はしめん』と云はれた。雲門和尙は佛降誕會の上堂に、『吾れ若し佛誕生の時其の席に在らば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん』と云はれて居る。是れ等は畢竟殺佛の靈機を撥轉せられたのである。廓然無聖の端的には迷悟凡聖の封疆を拂ひ去るを以て、衆生とか佛祖とかいふ異相も無い。此の處に至れば、我と達磨大師とは一體平等であるに依て、我が手は是れ達磨の手、我が足は是れ達磨の足である。朝より暮に至るまで達磨を自由に使うて行くのである。卽ち活達磨の現成である。而して是れは大道の本面目である。

されば高祖承陽大師も、宋より歸朝せられて山城の宇治に興聖寺を創し、始めて曹洞の禪風を御發表の時に、『山僧叢林を歷ること多からず、只是れ等閑に天童先師に見え、當下に眼横鼻直なることを認得して

ある。國家社會の名を重んじ其の利益を計るに於ては、自づから佛菩薩の大願大行となるものである。唯だ名譽や利益を以て目的とするからいかぬ。名利は德を養ひ道を行ふ上に現はれた報酬であるのである。凡夫は私慾私情に縛ばられて居るため、唯だ名利のみを求めて、眞の名利の依て生ずる根本の修養を等閑にするからいかぬのである。此の私慾私情を放下して天眞の妙理に契合する時、始めて眞個の大神通を得、眞個の佛行菩薩行が爲し得らるゝものである。

大解脱境の妙趣

吾々凡夫は、無始劫の昔より今日まで、常に妄念妄想の奴隷となつて自ら其の己れを苦め、抂げて三界流轉の身となつて居たけれども、彼の菅原の道眞公が

病追衰老到　愁逐謫居來　此賊逃無路　觀音念一回。

と云はれた如く、従前の迷想を慚愧して精神上の苦悶を解脱せんとする時に於て、仰ぎ見る可きものは慈智圓滿光明遍照なる佛陀あるのみである。此の佛の大願力と大導力とによつて無限絶大なる大菩提を求むるのは、正に是れ宗教的生命の根本である。恰も乞食が己が生命を繋ぐべき一個の破椀を放さない様なものである。

然るに禪に於ては、佛見法見をも離却すること乞食が飯椀を打破すやうなものである。自己の唯我獨

何物も無いのが第一義の法門だと云はれた。帝は驚いて『朕に對する者は誰ぞ』佛も聖人も無いといはるるが、一體、朕に對應して居る貴僧は佛法を傳へんが爲めに西來したる佛弟子に非ずや。其の時、大師は『不識』の一言を以て答へられた。誰れだか識らぬと謂はれたのである。我に在る三昧我亦知らず、お前は誰ぢや、識らぬ。吾れ我を知らず、佛法安心の妙處は玆にある。武帝は何處までも妄想本位である、名聞利養の寶がほしうてならぬ。佛なり菩薩なり何か有り難さうな一物を珍重して、永久の快樂幸福を期して居られた。大師はそれを一言下に打ち破られたのである。惜しい哉、武帝は大師徹悃の慈悲に氣付かなかつた。大師は止むを得ず、機未だ熟せずと思はれて、坐を起ち梁を辭し、江を渡つて魏に至り、嵩山の少林寺に入られたのである。

惟ふに、佛教の最極最妙に至れば全く廓然無聖である。佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝ時は佛見法見すら尙ほ立せず、況や俗情の思慮分別をや、是れ廓然の境である。吾々も一度は此の廓然の境に至らなければならぬ。故に、禪の修養は佛に成らんが爲と思ふべからず、超凡越聖の端的に禪の極處は現はるゝのである。また此の時は成佛と云ふも既に第二第三である。本來成佛の時更に成佛を求むるの要は無いのである。

されぱと云うて、名聞利養の如き人間の希望を絶對に排斥するのが佛教と思うてはならぬ。唯だ其の希望をして法性に隨順せしむることが大切である。吾々が單に自己一身の名を貪り利を計るから惡るいので

能く眞の悟りを開くことを得ば、順逆兩境、共に大悟の中の活動範圍に入り來るものである。然るに、心中一點の迷想があれば、却々此の境地に達することは出來ぬ。卽ち、名聞利養の妄念に束縛されて居る樣では、念々に煩惱が生じ、事々物々が苦痛の本となるから、大解脫も大活動も現はれぬ。

支那の梁の武帝は、南天の大比丘達磨大師が廣州灣に上陸せらるゝや、使を遣はして之れを迎へ、相見の初めに當り、誇り顏に問うて曰く『朕、甞て寺塔を造營し經論を書寫し大に僧尼を度し且つ供養せり、必ずや無邊の功德が有るだらう』と云はれた。すると、大師は平然として曰く『無功德』と。帝は大に驚いて『何故に功德なきか』と問はれると、大師答へて『是れは是れ人天の小果有漏の因で、畢竟妄想より發したる小佛事である、影の形に隨ふが如くで、有りと雖も其の實なし』と云はれた。そこでまた帝は問うた『如何なるか是れ眞の功德』と。大師答へて『淨智圓妙體自ら空寂である、是の如き功德は世に於て求む可からず、卽ち無我より發したる大佛事で無ければ、眞の成佛は期せられぬ』と云はれたのである。要するに、武帝の禮拜供養は吾人本具の佛性より流出する德用ではなくて、つまり一種の利己的思想より生じたる行爲であるから、有限的小功德である。是れ恰も虛空に向つて石を投ずるが如くで、勢力が盡きれば直ちに地上に落下する。畢竟一時的の功德である。佛法の目的は決してそんなものではない。

然るに武帝は、また大師に向つて『如何なるか是れ聖諦第一義』、然らば佛法最上の法門は何であるかと問うた。大師答へて『廓然無聖』卽ち、からりとして天地法界一如平等、凡夫も無い、賢聖も無い、卽ち

が如く、禪定の力を以て能く一切の煩惱を抑へて行くのである。羅什三藏は『石山を以て流れを絶つが如し』と云はれてある。故に今日世に行はるゝ靜坐法の如きも、亦た一種の定力を發して煩惱を靜める効力があるのである。慧とは智慧で、智力を以て迷妄の源を究め、根本的に煩惱を滅するのである。

斯くの如く三學は相互に助け合うて、煩惱を斷じて菩提に趣向するものなれば、吾人が只管打坐の正當時、能く妄想分別を打ち破つて自己本來の面目を現前すれば、自づから三學を兼ね修めて、始て禪の目的に契合すべきである。故に三學は、一禪定力より現はれたる効績を、三方面より見たものといふことが出來る。而して、眞に能く禪を究むれば其の行は自と戒律に契ひ、其の心は自と定力を具へ且つ慧光を發するから、つまり三學は禪の作用であります。

大解脱の下に大神通あり

抑も、禪は煩惱の窠窟を截斷して大解脱を得べきものである。吾人が精神上及肉體上に於て、一切の束縛を脱するのが大解脱で、是れ卽ち禪の目的である。而して、此の大解脱の人にして始めて大神通があり、大活動があるのである。古人の『神通及妙用、運水又搬柴』と云はれし如く、吾人日常の上に於て自己佛性の眞面目が現はれて、一擧一動、自づから天地の大道に通じ宇宙の眞理に合するでなければ、本有佛性の德が發揮されたものとは云はれぬ。而して此の境界は大解脱者にあらざれは得られぬ。吾々にして

佛教を研究し修學するには、戒・定・慧の三學と云うて、三大科目に分たれてある。戒とは防非止惡の義で、佛教の規律を正しく守りて、身・口・意三業に於ける所有不善業を制すること、定とは心を靜め、散亂の念を斂め、常に不動地に安住すること、慧とは眞理を究め邪見を離れ、遂に煩惱の根本を截斷して大菩提を證得することである。此の三大科目は、禪を修するものゝ如きは猶更修めなければならないことである。普通は、此の中の定學といふのが禪に當るのであるけれども、今御話しする禪門の禪は、自己の本源妙性を徹見して萬法の實相を明らめ、佛性の功德を顯現する所以の法であるから、單に定力のみではない。故に此の禪の內には、三學が皆な含まれて居るのである。我が太祖常濟大師の御言葉にも

　坐禪は戒定慧にかゝはるにあらざるも、而も此の三學を兼ねたり

と仰せられて、禪の中に戒あり定あり慧ありて、道として備はらざるはなく德として收まらざるものはない。

　東晉の羅什三藏も、面白く三學の關係を評釋して居る。卽ち『戒は佛教の規律を以て煩惱を抑へて行くのである』と。如何なる人でも、凡てのことを規律的にのみせられては、却つて眞の自由を失ふことゝもなるが、亂暴人や野心家が、或る點に於ては、嚴重なる規則の下に制伏せられるが如く、煩惱厚き凡夫も、此の戒力に依て自然に行が改まり志も正しくなるものである。また定とは、散亂騷動の煩惱を、禪定力を以て堅固に防ぐことである。恰も草の萠え出でんとするを、其の上に大石を置いて之を防止する

る。されば、煩悩に苦められるからと云うて、煩悩を全然悪いものにして、まるつきり枯木の様になつてはならぬ。『盗人を捕へて見れば我子なり』である。

然らば如何に修養するかといふに、煩悩心を制裁し訓練して教育するが宜い。我が子が悪るければ、之を教育して善良ならしむべきである。是れ煩悩を憐れむの法である。我が高祖承陽大師の御言葉にも

名利をおもくせば名利をあはれむべし、名利をあはれむといふは佛祖となりぬべき身命を名利にまかせてやぶらしめざるなり

と仰せられてある。名利といふは煩悩の代表的欲望の事である。恰も我子の悪るい時には憎まずして却て不便を加へ、彌々益々之を教育すれば、悪しき子も善良な者になる様なものである。故に吾々は、常に此の煩悩心を憐みて、制裁を加へ、訓誡を施し、漸々に改良して行くが宜い。斯くすれば、追々に悪見悪念を離れ、身心の煩悶苦痛を脱して参るものである。さすれば、今日までの欲望が却つて精神上の大活力となり、毒も却て薬となり、欲望の其の儘が作用を變じて、道に進むの大希望となつて活動して行く、即ち煩悩即菩提である。されば、欲望を放擲して枯木の様になるのは眞の禪ではない。煩悩を訓育して菩提の徳を現はして行く處、是れが正しく禪の本領である。

戒定慧の三學は禪の手脚なり

して、悟りを開いたと云うて安心をきめ込んで居る人で、存外、精神の動亂し易き者が往々ある。また非常に佛陀の慈悲を喜んで確信を有して居る人にも、非常に癇癪持ちの者もある。此等は皆な情的煩惱のなす處であるから決して眞の悟りではない。元來、吾人の此の身は、無始劫來、煩惱に包まれて居るのであるから、縦令道德者とか君子とかいはれる人でも、佛や神の御目より見れば、知らず識らず迷ふことのある者であつて、實に憐む可き衆生悲しむべき凡夫と云ふべきである。

煩惱即菩提

此の二煩惱を解脱して、自己に本來具有せる佛性の眞光を顯現したる處、是れ即ち菩提である。吾人の肉體を捨てゝ後に佛に成るといふ者ではない。併し、菩提煩惱もと別體あるに非ず、此の妄想分別の煩惱を究盡すれば、其の儘そつくり菩提となる。今日までは煩惱の塊りであつた此の身が、一念回光返照して自己の心光に觸れさへすれば、此の儘が即ち菩提の身となるのである。面山和尚の歌に

惡しきとてたゞ一すぢに捨つるなよ澁柿を見よ甘乾となる

とある如く、澁柿は喰べられぬと云うて之れを捨てては、本も子も無くなつて了ふ。さればとて澁の儘では喰べられぬ。唯だ適當の修養を施しさへすれば、澁柿の全體がそつくり甘乾柿と成るのである。故に、吾々の身に五尺の煩惱があれば五尺の菩提がある。八萬四千の煩惱があれば八萬四千の菩提があるのであ

は妨害の意味である。俗に云ふ邪魔物である。此の悪魔を降伏するのが佛教に於ける第一の目的である。而して悪魔を内魔・外魔の二つに分類することができる。色聲香味觸等が外界より吾人の精神を誘惑するのは外魔で、内心より種々の妄想を描き出すのは内魔である。明治天皇の御製にも

我れとわが心折々かへりみよ知らず〳〵も迷ふことあり

と仰せ下されてあるが如きは、正しく内魔を調伏すべきことを御示しあそばされたのである。佛教で之れを煩惱と稱するは、今日の言葉では煩悶とか、または精神上の苦痛とか云ふ意味であらう。身體の苦患も亦た一種の煩惱である。

煩惱といふ名は、其の結果の上から名付けたもので、其の原因たるべき主體は心の迷である。此の迷を大別すれば二つになる。即ち迷理の惑と迷事の惑とである。前者は、正當な道理を明らかに見る事が出來ずに、種々の邪見を起すのであるから智に屬す。後者は、見聞聲色等の上に起る迷であるから情に屬す。前者は分別起の煩惱と云うて、主として後天的迷想である。後者は倶生起の煩惱と云うて先天的に具へて居る。即ち夙世よりの習性である。是等の煩惱の事は、詳細に之を説明すれば殆ど限りはないが、要するに、此等の煩惱の爲めに昧却せられて遂に自己の佛性の光輝は現はれぬ。

多くの人の思うて居る悟りといふは、此の煩惱の中、迷理の惑を離却するをいふのであるから、是れは唯だ見惑を脱したる智的分際に屬する悟である。故に、まだ完全なる悟りとは許されぬ。世間參禪の士に

然らば此の佛性なるものは、如何なるものであるかといふに、人々具足個々圓成で、一人として佛性を有せざるは無い。而して、此の佛性の本體は天地間に充滿して、大小長短の尺量を絶して居るが、その絶對のまゝが、吾々お互の頭上にも脚下にも、無間斷に大光明を放つて居るものである。故に達磨大師は

直指人心、見性成佛

と云はれた。吾々は自家方寸の間に遍法界の光明聚あることを體得せねばならぬ。是れが禪の本領である。

吾人お互の胸中には取捨憎愛の念が湧出して居る。此の念想は影法師の樣なる一時の現象であつて、本體ではないのである。併し、影は形に依て顯はる。其の影法師を究盡すれば、其の奥には光明赫々たる佛性の妙體が輝いて居るのである。此の佛性の光輝に觸れさへすれば、此の身此の儘が直指人心見性成佛と云はれるのである。而して其の佛性なるものは、有無斷常の見を以て測ることは出來ぬ。科學的知識の及ぶ所でもない。實に是れ宇宙間第一の妙法といはねばならぬ。

先づ惡魔の障礙を去れ

是の如く人々具足せる佛性が、なぜに現前せぬかといふに、そは煩惱妄想なる惡魔の所爲である。魔と

在するもので、一息截斷すれば更に精神の認むべきは無い。思へば夢幻の如きものである。故に、畢竟じて是れこそ我れであると執すべきものはない。故に佛教では元より無我と説いてあつて、永久に我れというて其の實體を捕捉し得べきものはない。

盥から盥に移る五十年

空より生れて空に歸る、裸體で生れて裸體で死ぬ、是れが人生の常相である。然らば、全然我れなるものはなく、單に空寂なるものかと云ふと、さうではない。單空なれば現在の假相の顯はるゝ譯は無い。然らば、吾人の身心は何が其の根據でありませう。唯だ現在の精神が、四大假和合なる肉體の上に無意味に現はれた樣なものでなく、其の奥には、身心の根據となるべき實體が無ければならぬ。之を自己とも心性とも眞如とも佛性ともいふのである。

されば、無我であるからとて、徒らに幻の如きものとして輕視してはならぬ。また佛教に於ては、吾人の身心を別々な物として分けては說かぬけれども、此の身心を通じて其の本體あることを說示するのである。之を心ともいふ。此の心は身心の根本である。根本というても枝末の外にあるのではない。遍法界の體である。此の心を究むるが禪の目的である。是れを究め盡したのを眞の自覺といふのである。

るから、誠に結構ではあるが、唯だ此等の學問の力のみでは悟りを得ると云ふことは出來ない。何故ならば、學問としての心理は、所謂心象の研究であつて佛性の修得では無い。殊に佛敎に所謂心とは、憎いとか可愛いとか云ふ分別心ではない、從つて之を以て自己と云ふのではない。なぜならば、吾々の常に認めて居る心も身も畢竟無常變遷の法にして自性は無いからである。

引寄せて結べば柴の庵なり解くれば元の野原なりけり

此の身は地・水・火・風の四大の集合體にして、本來これが我が身であると執すべきものがあるのではない。故に其の四大が時々に變化して、終には分散して元の野原となつて了ふ。今日の學說に依れば、吾人の身體は無數の細胞の集合したものである。或る學士の說に『其の細胞の數は凡そ四百萬億より成る、之を一秒毎に一箇の細胞を數へるときは、一千三百年もかゝらねば數へきる事が出來ない』と云ふ。是れ等の多くのものが集合して、一時我れなるものが現はれて居るが、時節到來して集團分散すれば、既に我れと云ふものはないものである。然らば心とは如何、心は身體の機關に依て其の作用を現すものであつて、其の本體は果して何物ぞというて、一々點檢し將ち來れば、やはり無自性不可得である。我が高祖承陽大師も

心意識知壽命に繫がる、出入の一息畢竟如何ん、所以に我に非ず

と仰せられし如く、吾人の精神なるものは、諸機關の機能によつて其の作用を現はし、呼吸の間に假に存

で、遍法界の佛心を覺悟して天地の眞理を自己の心中に諦觀する。是れ即ち自己を覺知すると云ふので、禪の目的は全く此處にある。

故に太祖大師も坐禪用心記に、

夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ

と仰せられてある。此の言葉で禪の目的は充分盡きて居るのである。畢竟、吾人の一心を諦めて本分の處を得るにあるのである。坐禪をすると云ふも、戒品を修行すると云ふも、別に變つた事柄を求むるのではなくて、畢竟、心地を開明し性徳を發揮することにあるのである。禮讃文にも

人身受け難し今已に受く、佛法聞き難し今已に聞く、此の身今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向つてか此の身を度せん、大衆諸共に至心に三寶に歸依し奉るべし。

とあるが、此の身を度するとは成佛することで、成佛といふは本來の佛性を顯はすことである。故に宗教殊に佛教では、或る意味に於ては、成佛を未來に求めしむる場合もあるけれども、現在といひ未來といひ時間的に差別を立てるのは本意でない。何れにしても、畢竟する處は自己を覺知するにあるのである。自己を覺知すると云ふのが佛教に於ける第一義の問題である。

然らば自己とは何ぞや、是れ實に千古の大問題である。世間には心理學等の科學があつて、心理の研究を爲すに於て日々に新らしき知識が啓かれてある。併し、是れは一種の學問として心理を研究するのであ

は劍の如しと答へ、或は大繩の如しと答ふ。是れ象の一部分を以て說明したのであるから、遂に全象を知ることが出來なんだ。佛教の一部分を捉へて其の名相に拘泥する者も亦た是の如くである。佛教に多くの法門あるは、皆な衆生の病に對しての投藥であるから、其の手段も名相も本より一樣ではない。併し、其の御精神に至つては元一である。

然らば、佛教の大精神とは如何なるものかといふに、人々具有する絶體の眞理を離れたものではない。故に是れを外に求めずして吾人の內心に向つて究盡すべきである。佛教の眞理を自己の生命として活動するに非ざれば死佛法である。昔、葉公というて葉の國王が龍を愛し、之を畫に描き木に刻みて珍重して居つた。天龍之を見て活物を示さんとし、公の面前に姿を現はせしに、葉公大に弱りて逃げ出でしが、その後は非常に龍を嫌うたとある。今も佛教を求むるに、言句の上に尋ね文字の上に覓め、徒らに之を遠きに眺むるは眞龍を怪みたる葉公の類である。

佛教は元來自家の寶藏である。佛陀の一切の經教は、畢竟、心と云ふ一字の註釋である。佛教の目的は轉迷開悟と云ひ、離苦得樂と云ひ、または止惡作善と云ふも、皆な一心を根本としての說明であるから、何れにしても一心を離れての法は無い。大聖釋尊は、無始劫來、本心を昧却しつゝある妄想分別の本源を諦めて、天地の大道、宇宙の眞理を大覺し、本心の妙德を顯得せられたものである。豈に唯だ佛のみならんや、吾人も亦た妄想の窠窟を脫して天地の大道、本源の自性を究盡する時は、所謂草木國土悉皆成佛

徳自づから此の中に圓滿して缺くる所は無い。其の妙趣は佛陀の神力を以てするも語り盡すことは出來ぬ。大乘の妙法も甘露の白法も皆な此の間に在る。此れ以外に、別に何等の説くべき法はないぞ、と云ふ向上の轉法輪である。然るに、八萬と數へる大衆は、呆然として其の意に通曉し得られなんだとある。唯だ一人迦葉尊者のみあつて、其の眞相を達觀して、につこりと破顏微笑せられたのである。是れ即ち以心傳心の妙致であつて、釋尊の大精神と迦葉尊者の悟道とが互に相合體して、言外の妙味を感得せられたので、是れ唯佛與佛乃能究盡餘人所不見の處である。茲に於て釋尊は『吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり、摩訶迦葉に附囑す』と云はれたのである。

されば、佛一代の化門には、種々樣々の法門ありと雖も、其の時により、其の根機に應じて、隨機説法せられたに外ならないのである。故に吾が高祖承陽大師も普勸坐禪儀の結文に、

> 冀くは其れ參學の高流、久しく模象に習うて眞龍を怪しむこと勿れ、直指端的の道に精進し絶學無爲の人を尊貴し、佛々の菩提に合沓し祖々の三昧を嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを爲さば須く是れ恁麼なるべし、寶藏自ら開けて受用如意ならん。

と示されてある。此の祖訓は、啻に禪の目的を明示せられたばかりでなく、佛教の大精神をも詮顯せられたのである。昔、鏡面大王と稱するあり、或時、盲人をして象を摸でしめた時、盲人は其の觸るゝ處のものを以て象を説明して、即ち、尾を摸でし者は象は箒の如しといひ、耳を摸でし者は箕の如しといふ。或

き說法を致さるゝのは、所謂鑒機三昧より發する大機大用であるから、如何に大小乘を異にし、權實趣を同うせざるとも、結極する所は、其の得られたる大自覺の眞理が、根本となつて現はれ居るものである。故に法門敎理の數は實に多種多樣であるけれども、其の歸する處の佛敎の大精神は皆同一である。故に此の佛敎の大精神、佛陀の大自覺を把捉して、吾人の日用光中の上に應用實現して行くのが、正しく禪の本領である。之れが取りも直さず宇宙間唯一無二の妙法、換言すれば宇宙の眞理である。

禪の目的は自己を覺知するに在り

却說、此の宇宙の眞理とは如何なるものであるかといふに、自己の本性がそれである。されば宇宙の眞理を覺知するの法は、卽ち自己を覺知することにあるのである。

往昔、靈山會上に於て、釋尊が八萬の大衆の前で、大法輪を轉ぜられんとして陞座せられたことがある。大衆は、今日は果して如何なる一大說法があらせられるかと、皆な固唾を飲んで待ち構へて居た。やがて釋尊は一枝の金波羅華を拈じて、たゞ瞬目せられたのみであつた。これは如何なる思召であらう。卽ち、成道の初めより今日まで、四十九年の其の間、或は華嚴を說き、或は阿含を說き、乃至、般若法華等を說きしは、唯自己本具の佛性、宇宙天眞の妙理を示さんが爲めである。而して其の妙理を知らんと欲せば、乞ふ、此の一枝の花を見よ、爛漫たる一朶の玉葩は、實に宇宙の妙趣を語り盡して居る。眞善美の妙

異つた說相を以てせらるゝのは當然のことであるが、其の根柢に到つては、本より差別のあらうはずは無い、卽ち同一眞理である。釋尊の敎を垂れたまふや、必ずしも學術的に組織系統を立てゝ說明せられたものは少ない。所謂應病與藥主義で、其の時、其の場所とに於て、目前の衆生を敎導し救濟せられたのであるからして、縱令敎義上または歷史上に於て、大小乘と別れ、或は天台・眞言、或は禪・淨・律宗と分れたればとて、畢竟其の本懷に到つては、毫も異る所はないのである。

例へば、此處に一人の病者がありとせんに、之れを救はんには先づ其の苦痛を癒すべく適當なる藥を與ふ可きである。其の藥は如何なるものであるとか、また其の病氣は病理學上、生理學上、如何なるものであるかといふ說明を試みて居る暇は無い。直ちに其の病に應じて、水なり藥なりを與ふ可きである。若しも治療を後にして、先づ其の說明に時間を取らるゝやうでは、見すく病人を見殺しにするやうなもので、治療上何等の効能もない譯である。佛說の法も亦た斯くの如く、彼等衆生の妄想分別に惱める顚倒の病を治し、涅槃寂靜の大安樂を得させるのが其の目的であるから、時としては學術的說明を度外にして居る樣な場合もある。また例へば一人の子供を養育するに就ても、其の父や母が、或る時は勉强せよと云ひ、また或る時は運動せよと云ふが如き、命ずる所は異なるとも、眞實の目的は唯だ其の子を立派に敎養しようとするの外は無い。

されば、唯だ御一人の釋尊が、同一の時代に於て、其の根機の如何に依りては、殆ど水火相反するが如

と云ふ文字に就てゞなくて、其の內容の大體を說明致さうとするのである。

凡そ世界の各宗教に於て、我が佛教ほど法門の數の多いのは無からうと思ふ。先づ一口に、八萬四千の法門と云ひ、五千七百餘卷の經卷と云ふのであるが、今之れを地理的に區分せば、南方佛教・北方佛教となつて、南方佛教と云へば、印度・暹羅・錫蘭等であり、北方佛教と云へば、西藏・支那・朝鮮・日本等の佛教を指すのである。而して、南方佛教は多く小乘教であるが、北方佛教は多く大乘教である。南方佛教は今暫く措き、唯だ此の北方佛教に就て觀察するに、眞個、大乘佛教が行はれて居るのは吾が日本であつて、支那の如きは、勿論、日本佛教の本家ではあるが、今日では殆んど衰頽を極めた有樣である。吾が日本佛教とても却々複雜であつて、今日の所では十三宗五十餘派と分かれて居る。

我が禪宗の如きも、勿論、其の中の一宗派であるが、而かも、此の禪宗の中でも、或は臨濟となり、或は曹洞となり、又は黃檗となつて、夫々多少の特長があり、全然一致すると云ふ譯には行かない。併しながら、禪本來の旨趣から見れば、こは決して本義ではない。何となれば、元來唯有一乘法であるからである。全體此の分派と云ふことは、歷史的に發達する自然の結果であるから、何人も之れを否認することは素より不可能なことであるが、其れが餘り甚だしく成ると、枝より枝を生じ、葉より葉を生じて、遂には枝末にのみ拘泥して、根本を失する樣になることの多いのは、誠に遺憾なことである。

元來佛教は、唯一人の釋尊が、其の時により其の人に應じて、臨機に說法せられたものであるから、種々

禪學大意

禪の本領

序論

私は此の度、此の講習會の御招きに預つて、禪學に關する御話しをして、諸君と共に禪の何んたるやを研究致さうと思ふのである。元より學才辯才共に淺薄なるものであるからして、到底、諸君に御滿足を得らるゝ樣に御話しは出來ないが、平素、私の研究致して居る處を諸君に御紹介して、諸君の將來御研究せらるゝ御參考に資せようと思ふのである。尙ほ短時間中であるからして、充分なることは出來ないから、若しも、不明瞭な處や疑問の點でもあつたならば、御遠慮なく私の宿所まで御來問下さる樣、前以て御注意致して置く次第である。

扨て、本日は『禪の本領は如何なるものであるか』と云ふことに就て御話ししやうと思ふが、是れも禪

禪學要義篇

◎禪の要綱……一二五

禪學要義篇

目次

牢關橫鐵壁不許
假鶴窺直下推排
去三杉疊翠奇

總持石禪叟

新井石禪全集

